六月一日發行

女學世界

第十巻
第八號

明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可（毎月一回廿六日印刷納本）明治四十三年五月廿六日印刷納本



博文館

女子技藝研究會長
梶山彬先生著

梶山先生が一代の大著述たる女子技藝叢書は全國高等女學校及び同程度女學校は勿論一般獨習者より女子技藝書中第一の優良なる指南書なりと許せらるゝはその內容が他の參考書の如く空理空論など無く多年の經驗に基き學理と實際とを調和せしめ實際に適せる方法を明にせるが故なり、
されば女學校教員及び生徒は勿論獨習者は云ふまでもなく學校及一般家庭に本叢書を備ふるときは趣味ある技藝の蘊奧と經濟的智識と有益なる副產物を得らるべし。

しみぬき染色洗濯法新書

（新刊）　大和綴菊版頗美本金五十錢送料八錢

◎今ま衣類の汚れ易き夏季に際して
しみぬき染色洗濯法新書を公にせらる、世間には洗濯せるが故に高貴なる綾羅を褪色せしめ、或は「しみ」の出來て晴衣とすること出來ざるものを營業者の手にて修飾せしむるため地質を弱むること多く又褪色せる衣類もその利用法を知らざるが故にやたら廢物に歸せしむるを常とす、本書は此の缺陷を補はんの趣意により絹布綿布毛布其他あらゆる衣類の「しみぬき法」「染色法」「洗濯法」を叮嚀に說き容易に應用の出來る方法を明にせるものなり。

○此書の內二册以上御注文の方は送費を要せず○

裁縫新書
大和綴菊版頗美本
積り方仕立方說明圖百餘挿入全一册
金五十錢送料八錢

編物新書
大和綴菊版頗美本
圖案及雛形圖百二十餘挿入　全一册
金五十錢送料八錢

造花術新書
大和綴菊版頗美本
花葉形切圖二百餘圖挿入　全一册
金五十錢送料八錢

刺繡術新書
大和綴菊版頗美本
圖案及雛形案百五十餘挿入　全一册
金五十錢送料八錢

花たば新書
大和綴菊版頗美本
花葉形切圖百餘たばね方書九枚挿入
金五十錢送料八錢

摘み製作新書
大和綴菊版頗美本
切形及配置圖百三十四箇挿入全一册
金五十錢送料八錢

袋物製作新書
大和綴菊版頗美本
圖案及說明圖百六十餘挿入　全一册
金五十錢送料八錢

發行所　東京市京橋區南槇町十八番地　廣文堂書店　振替東京四六八四

夏季を彩れる流行中形

氣が利いて振ひつき相な最新柄の陳列

弊店儀、例により

來る六月一日より中形浴衣地新柄陳列會

を相開き本年流行の中形を始め夏物一切を陳列致し候。尚ほ

懸賞募集により染上げたる浴衣地の陳列販賣

をも致し候間、御來觀被下度奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

地方より御注文の便法有之候御一報次第『注文の栞』進呈仕候

女學世界第拾



卷第八號目次



一品一効

!!純無鉛!!

御料たつた白粉

●一品多能の望なきを主張する
吾製造各種の化粧料は常に

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

●如斯美人を試金石とし着實に
善良の効果を收めつゝあり

御料あらいこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼

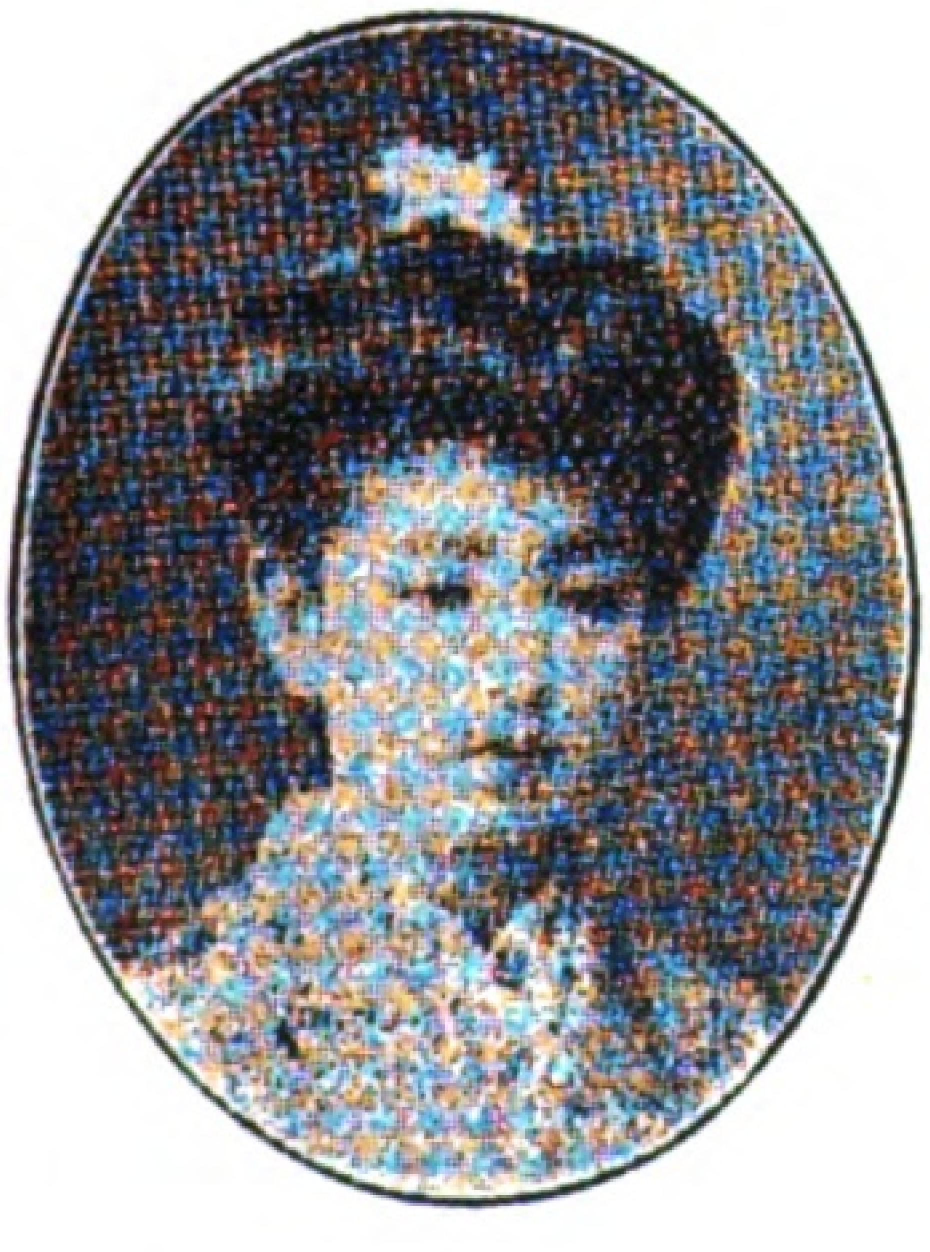


▲一さじの御料あらひ粉▼

「歐羅巴宮殿式」

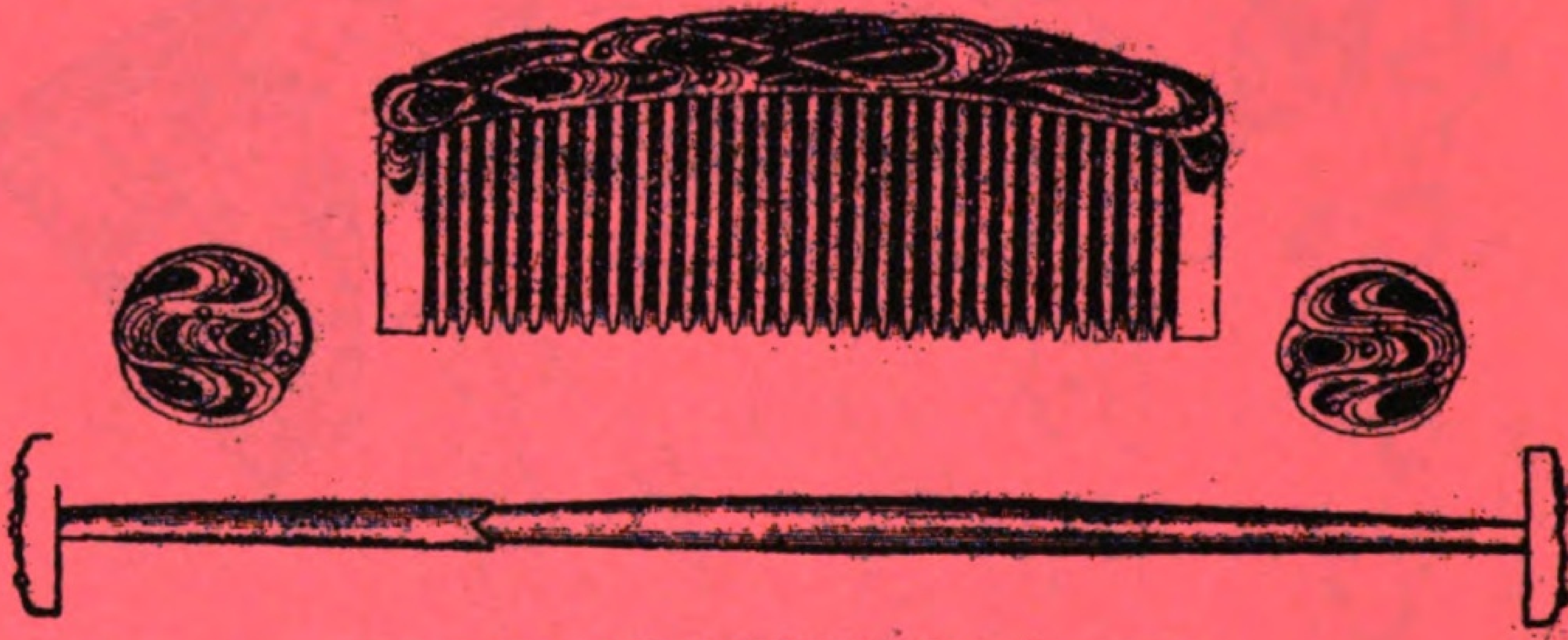
御料クリーム

▲グリスリンにもあらず▼



▲アブラぶんにもあらず▼

「化粧界婦美御」




精製香油
本舗
井筒屋香油店


於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醤油
宮內省御用達
千葉縣
田中玄蕃釀造
銚子港

女（いの二）

ぬりもの

美術蒔絵物

常陳列縦覧御随意

東京日本橋通室町

木屋漆器店

電話本局 五百九拾七番
長 千七百拾番

店内改造紀念大賣出し

今たび店内を改造したるは主として顧客の御便利を計らむが爲の業なれば。之に伴ひて營業振をも大に刷新いたし時々の流行に魁けて新案品を發賣するは勿論品質を精選して苟且にも粗製濫造の物品を鬻ぐが如き不德の行ひを爲さず常に誠心誠意を以て營業に從事いたすべければ彌增の御引立を以て御用命あらんことを希ふ就ては改造紀念として來六月一日より三日間御買上金高に應じ美景を進呈いたし聊か平素の御恩顧に酬いまゐらす存念にさ候らへば當日は賑々しく御光來の程を待ち奉るになむ

追白　地方御注文にかぎり本月中は郵送無料及び來店同樣美景呈上仕候

期日　六月一日二日三日　三日間

當日　美景呈上仕候

營業日錄
送費 四錢

東京市神田區鍋冶町

白牡丹中西

電話本局二〇四〇番
振替口座一五二二四番

(女 いの三)

毛の赤い方
髪のぬけた方は
スミレ黒香油
を用い給へ

▲白髪や赤毛も此スミレ黒香油を常に用ゆれば自然に艶よき黒き毛髪となる。

▲病後産後にぬけた毛髪は此スミレ黒香油をお使ひになれば早く毛生いたします。

▲本品を使用するも襟其他生際、生地、手などが汚れません、

一瓶三十錢



東京市日本橋區横山町三

パール煉香油
スミレ香水　本舗
菊の露白粉

平尾銑也

電話浪花百十番
振替東京百十番

眸



婦人一生中に最も心配な事實

政治上實業上に外交の繁き良夫を持つ夫人と日々多數の顧客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難産と流産と不姙症は必ず來るべし

婦人は身體の構造上梅毒痳病に對し病毒の發源地となりて他人に感染せしめ又病毒の蕃殖地となりて自己の膣子宮を害し血の道、癪に苦むは婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感せば婦人は冷へ込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の惱むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寶なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を内用する故遂に長引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の蕃殖するは當前にて結婚の機會に病菌侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に惱み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の衰れるは實際惡き土地の田畑に滿足の農産なき道理なり婦人科學上婦人病の療法は局部の治療を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は益急を告るに至る余は藥劑師にて衞生の天職上豈に傍觀するに忍びず積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨乙伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥効を發揮すべく可要球(座藥にて内用藥にあらず)を調劑し幾多の婦人科醫に之が實驗を請めたるに子宮内膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み子宮糜爛して痛み、子宮出血して襌を汚染し、厭な處に惡臭ありて他に嫌れ又は燃へ立つ搔痒を起し搔ば痛む症、月經時の疼痛と月經過多に惱み或は痳毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何も其の効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり「可要球」は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふる如き直接に其の藥効を顯すを以て婦人の姙娠すべき局部と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の疑ある婦人は速に唯一丸を内用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治療す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、拾八球入壹圓、四拾球入貳圓

「唯一丸」定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓(いづれも内地遞送無料)

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上

藥劑師 中西莊吉

振替貯金口座東京千五百番

敎(ろの一一)

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最稱賞…効能確保…有効無害…
●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物



其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必す流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉**肥滿病新藥**（米國新輸入）



子供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶと／＼肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと／＼ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は窈窕たる艶白となり瞽て**美顏**美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

藥價		
一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢	送料
二劑二圓九十錢	四劑五圓半	十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 **小宮愛生堂**

衛生化粧 最新美髮法

本書の內容
◎しらが、赤毛染の話
◎ちゞれ毛くせ毛直しの話
◎拔毛どめ、ふけとりの話
◎毛のなき所に毛の生へる話
◎毛髮の洗ひやうの話
◎毛髮營養の話
其他毛髮化粧に關する秘訣

本書御入用の方は郵劵二錢封入御申込あれば無代進呈す

發行所 東京本所區外手町八十七番地 **深澤國華堂**

最新輸入高等染髮料

しらが赤毛 そめへーヤダイ

大壜金貳圓五十錢　中壜金壹圓　小壜金五十錢

大壜は小壜の六倍ありて染髮用器具を添へあり當分、大壜三割引、中壜二割引、小壜定價通り

☞詳細は前記美髮法に記載しあれば必ず一讀あれ

女（ろの二）

女(ろの三)


千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令孃に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢
東京市馬喰町
山岸三之助
電話浪花 三七九三


純白浮きスワン石鹼
純良なる家庭用浮石鹼
▲定價 二個纏（壹本） 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
特約大販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助

秋牡丹、草夾竹桃





産科婦人科專門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

☛無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次（婦人病の總論⊙血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法⊙神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法⊙しらちながちの病理及其根治法⊙月經時の手當月經諸病の療法⊙姙娠の原理、受胎すべき塲合姙婦の攝生、つわりの養生法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳説せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番） 笹岡省三

女（けの一）

宮内省御用達

天下一品

最上醬油

釀造元　千葉縣野田町　茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

根治確證　わきが　新治療藥ラビヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を排泄し惡臭を驅逐し根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

毛のはへる　毛髪生液　原名ヘグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をヘグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

有力なる最新液にて早く毛をはやしたき人

試みられよ●ぬけ毛落毛を止め●はへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髪增生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品　色の白くなる　ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に皮膚を漂白する（全身欠點に）を以て白色艶美となり男女交際上最も必用の品なりし

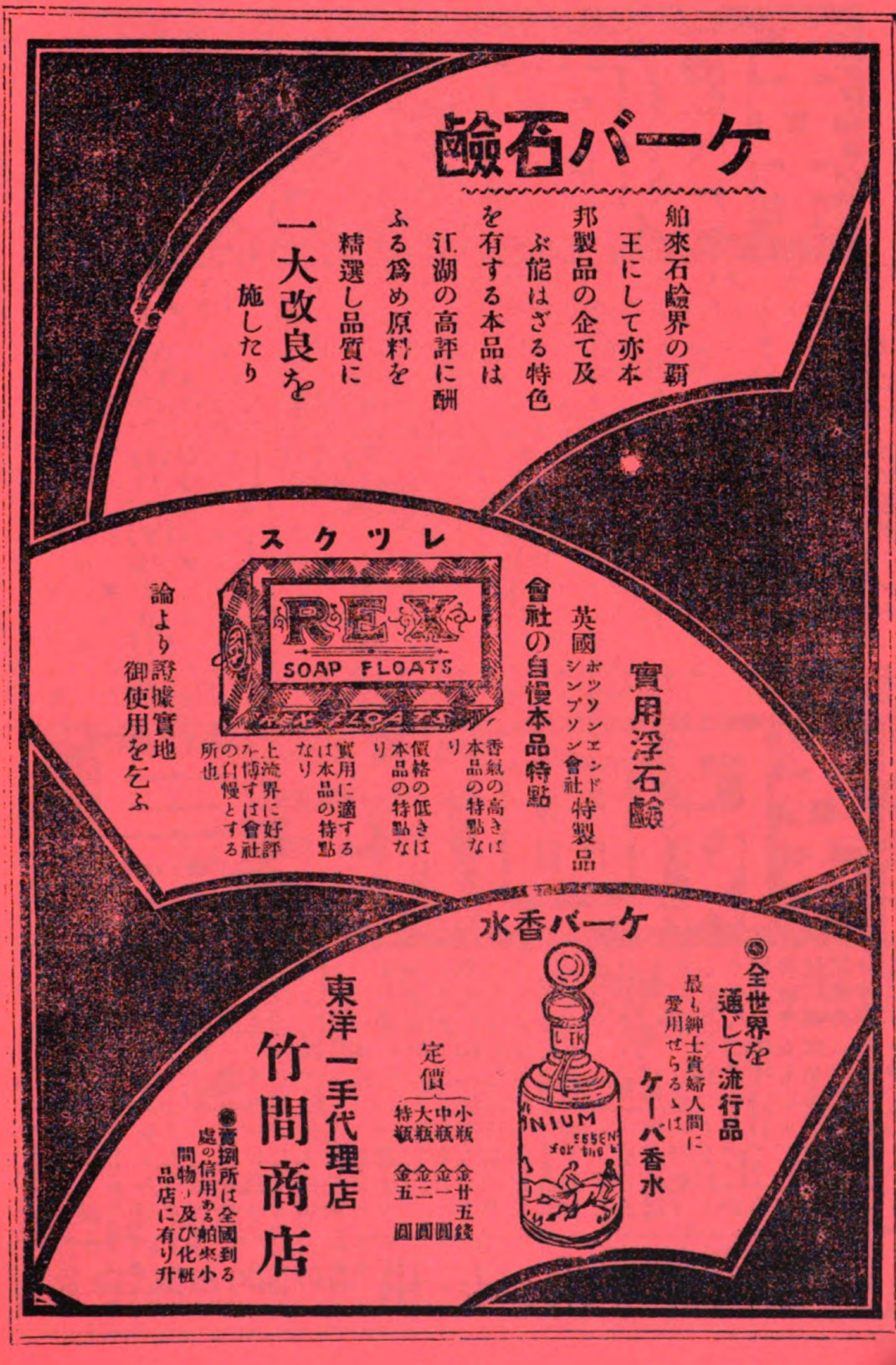
月やくおろし

メリルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は妙劑にて烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る血の道を全治し子宮の古血を一掃す 價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢送料拾貳錢

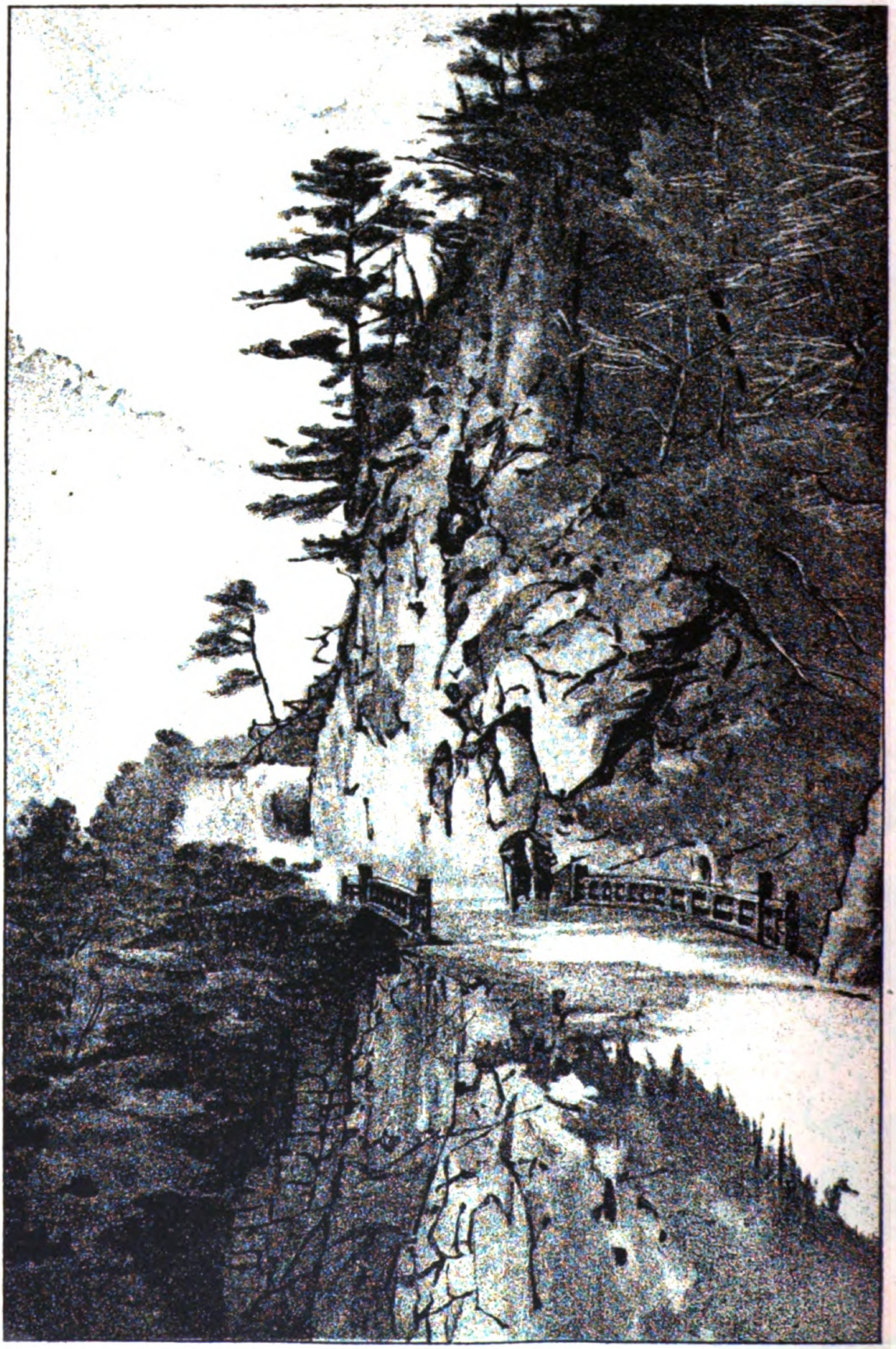
專賣　東京神田區小川町東明館前　オリエンタル藥舘

女（はの二）

女(はの三)


ケーバー石鹼
舶來石鹼界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり
レツクス
REX
SOAP FLOATS
實用浮石鹼
英國ボッソンエンドシンプソン會社特製品
會社の自慢本品特點
香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也
論より證據實地御使用を乞ふ
ケーバー香水
◎全世界を通じて流行品
最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水
定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓
東洋一手代理店
竹間商店
◎賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物、及び化粧品店に有り升

鹽原の新綠



神中糸子筆



宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

第貳巻第六號・六月一日發行・定價一册廿錢 郵税一錢五厘

婦人界

▽活動を旨とする我家庭の實際…目賀田男爵夫人
▽家庭に於ける婦人の仕事が漸時奪はれつゝある實例…三輪田元道
▽我れ若し女性ならば是の如く良人を選ばん…宮田修
▽女子を育てたる經驗…新保一村
▽文士の觀たる女性…中島孤島
▽妾が乳母から受けた忘れられぬ感化…江崎牧子
▽如何なる家庭に如何なる婦人を要するか…岩崎狙堂

▲▲▲一筆啓上 文學士 小谷栗村▼▼▼

▽墮落せる婦人を救濟せし實驗…山室軍平
▽初夏の子供と婦人衛生…鷲山彌生子
▽虚榮心から恐べき大罪を犯す令孃貴夫人 かをる女
▽北米漫遊中の所感と日本人の服裝…久保田金僊
▽人魚と獸人…會田理學士
▽如何にせば色が白くなるか…武藤一更
▽引越道樂を良人に持つた妾の苦心…某文士の妻

東京日本橋區本町三丁目 金港堂書籍株式會社 振替貯金東京八八一五番

女(にの二)



大英國皇室
撰技御用品
HONI SOIT QUI MAL Y PENSE
DIEU ET MON DROIT
美貌たらんとせば
ヴィノオリヤア
石鹸を愛用せよ
ヴィノオリヤア
製品は總て
、品質優良なり
全國到る處
高等化粧品
商舖に販賣
ヴィノオリヤア歯磨粉
ヴィノオリヤアクリーム
ヴィノオリヤア白粉
ヴィノオリヤア香水
日本代理店
クローザー商會
ヴィノオリヤア會社
倫敦 巴里 紐育
VESTAL
VINOLIA

女(にの三)

悪筆は一生の損



速に入會して頗る能書家となるべし

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる悪筆にても最も短日にて上達すること全く機械的なり

▽本會書者兼講師

稲川雲谿先生
玉木愛石先生
小野鵞堂先生
外講師大家數拾名

▲見本 詳細會則無代進呈

帝國習字速成學會

東京本郷區大學正門前
電話下谷 三〇一一番
電話下谷 三貳一〇番

女(にの四)

若鮎



平福画伯筆

撫子



跡見先生筆



女（ほの一）

肥滿病の人◎やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●酒ぶとり●便秘凡て

ふとりすぎて御困りの方 やせて中肉 美容とゝる奇藥二錢切手送れば詳報す

東京市小石川區第六天町十七番 池田製藥部

●小兒五かん驚風●蟲おさへ

登録商標 (八)

本方 小兒蟲一切妙藥 奇應丸

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢 (遠國送料金貳錢)

東京市京橋區銀座三丁目

發賣本舗 (八) 松澤商店

賣捌は全國諸々藥舗賣藥店に特約あり (電新五三四)

男ちゞれ 女くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵劵封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

國民寶典

實用家庭百科全書

見本申込次第
進呈製本既成

東京 精美堂

◎產婦人科
◎小兒科

病室並ニ產室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

宅診 午前
往診 午後

院長 女醫 鷲山彌生

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院 電話番町(二二五七)

わきが

患者にて醫療賣藥有らゆる手を盡しても全治せざるの士女は獨逸醫學界の泰斗たるノート博士の最近發見のわきが根治劑「フレード」を用いて速に其苦痛を脱せられよ○藥價は輕症用八十錢重症用壹圓五十錢蔓性頑固用特製三圓送費十錢郵劵代用必ず二割増代金引換小包は一切謝斷

◉發賣元 電話下谷二五六九番 振替口座東京二〇七四三番

東京市本郷區東片町十五番地 市原製劑部

女(ほの三)


大學は
最高の學府也
大學白粉は
最上の化粧
料なり
若し博識を得んとせば
最高の學府に學び
美人たらんと欲せば宜しく
「大學白粉」を愛用せられよ
學術の淵叢たる大學の大家に因つ
て製煉せられたる「大學白粉」は眞
の婦人美を發揮する純正の無鉛白
粉にして、毫も鉛毒の恐なく他の
無鉛白粉の如く肌を荒らすことな
く良く伸びて乗りよくお召物の
衿に着ず、芳香頗る高尚なり

女(ほの四)







右圖 徳川公爵夫人泰子（故近衛公爵の令妹）
中圖 伏見宮博恭王第一姫君恭子女王殿下
左圖 有馬伯爵世嗣夫人貞子（北白川宮第一姫君）

歐米に留學せし二令孃





右圖は目下英國倫敦に留學中の岩下清周氏令孃花子、左圖は曩に數年間米國に留學し昨年歸朝せし男爵高橋是清氏令孃和喜子

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇效ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奧なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸說を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎはまゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツボい、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增のこと

●●●取次所ハ毎月ノ廣告ニアリ
●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

振替口座東京貳三壹壹
電話刈谷三拾貳番

三河國碧海郡刈谷町
醫科大學卒業藥劑士
本舖 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市本郷六丁目赤門前	瓜生藥局
麴町區紀尾井町三	齋藤藥局
日本橋檜物町十八	龜田藥局
京橋區八官町八	野田藥局
神田淡路町二の四	森田藥局
芝田町四の一二	加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二	岩本支店
赤坂田町四の一	竹内藥局
同青山北町五	西井藥局
本所吉岡町廿五	小島藥局
四ツ谷大傳馬町二	永野藥局
神田旅籠町一ノ二	瓜生支店
堺市大寺南門東入	一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角	
京都市下京區五條通り富小路行當り	
大阪市平野町二	丹平商會
丸龜市本町	櫻井藥局
名古屋京町三丁目	飯田藤七
同 同	荒川長太郎
高松市片原町	新明藥局
神戸元町一丁目	西村關更局
廣島市橋本町	萬代藥堂
神奈川青木七軒町	水崎藥店
仙臺市新傳馬町	櫻井藥局
岡山市橋本町	加藤藥店
弘前市下土手町角	菊地藥店
大津市菱屋町	磯崎藥局
福知	藥局
安江洋	反物店



毛髮くせ直し 男女 美髮水

一瓶貳拾錢 ◎地方送料二瓶拾參錢

▲美髮水の特効は毛髮の癖を直し其色艶を佳くす故に
▲之を用ふれば如何なる硬き髮でも柔かになり升から
▲島田でも丸髷でも束髮でもお湯で揉ずに結はれ升
▲特に油氣なしのお孃さん方のお下髮には最も妙です
▲要するに癖の有無に拘らず男女とも必要の品で有升

製造 東京市麴町區一番町五番地
發賣元 （五番町電車停留場前） 萬歲堂

●診察時間朝七時より夜九時迄●

梅毒りんぢ病疾わき°が 生殖器病 神經衰弱症 皮膚病あざほくろ

東京淺草瓦町廿八
淺草橋通瓦町
電車停留場横

東京 中央醫院

生殖器病 神經衰弱

記憶力減衰萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

梅毒 横根 下疳・りん病・わきが・ぢ 皮膚諸病

▲各自病狀を記し郵便切手六錢を封送せば其病症を速に全治せしめ得る特効新藥の說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

報知新聞記者平山武者所著▲亞米利加の黒人女郎巣

再版 **艶艸紙**

報者と持て囃る軍人哈爾賓の百鬼暗行等艶ぽい書 價廿五錢

發賣 東京神田美土代町二の一 振替口座東京二〇四一六

博文書院

▲新宮藥館五大賣藥

天下一品 美身術

養容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て消肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる有効保證藥なり

●定價(一週)七十錢 (二週)一圓五十錢 (三週)二圓 (五週)三圓廿錢 送費八錢



◀にせ物あり乞御注意▶

男女 **生殖器科**

●東京淺草七軒町二●

明治療院

●梅毒 麻毒 生殖器障害 神經衰弱 ●婦人科一般 ヒステリー 月經障害 ●診察 午前 午後 ●入院隨時●

中風 全治保証藥 ヘミプレギー丸

此藥は大學院各博士が協力發明の方劑にして効驗拔群禮狀山の如き一大保證藥也

價(一分)●十五日分一圓廿錢●卅日分二圓廿五錢●六十日分四圓廿錢●百日分七圓五十錢●小包送料八錢

らい病 根治新藥 レプラ丸

本劑は獨逸國醫學博士ポルマルセイ氏が癩病の病源より探究し多年の辛苦と數萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる靈藥にして如何なる難症と雖も本劑に依て全治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ

價一劑廿五日用三圓二劑五圓五十錢四劑十圓小包料八錢

毛のはへる藥

多年實施の毛生劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●二圓半●濃厚二圓半●三圓 ▲送料八錢

にせもの注意

肺病根治劑

本劑は肺の特効藥にして世上諸病殊に**肺結核**の雜多の肺病藥と其類を異にし專賣の大奇藥なり輕症卅日以內數年の大患も五十日分にて必ず全治を確信す

●價二週一圓卅日二圓五十日三圓送料八錢

女(への三)

(全快禮狀店内に保存す) **新宮藥館** (東京本郷三丁目 振替一二五八四)

電話下谷二二一九番


ネッスル
コンデンス・ミルク
ミルク・フード
育児に
必要なる
最良滋養品

名家の令孃







三井男爵令孃慶子
後藤男爵(遞相)令孃愛子
相馬永胤氏令孃鈴子

令嬢かゝみ

右側上より(1)芝　宮下あさ子、(2)神田坂井ふみ子、(3)牛込關　花子、中央四谷杉原りき子















左側上より(1)麹町園田とき子、(2)芝　山本とし子、(3)麹町松尾友子

婦人世界

六月一日發行　五卷七號　一冊十五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓五錢　一年分郵税共二圓五錢

内親王殿下に御教授申上げた當時……坂正臣

▽地方よりの上京者には斯かる不心得の人あり……女子高師校長 中川謙次郎

◎糠を食して脚氣全快せし私の實驗……弦齋夫人

▽洋行歸りの私が剃髪して佛教に入りし實歷……園輝子

◎母親の注意すべき小兒の初夏の衞生……醫學博士 加藤照磨

私が拜謁した故英國皇帝陛下……伯爵 林董

◎輕症の痔疾は坐藥にて治する法あり……村井弦齋

▽露艦に襲はれ良人が常陸丸の甲板上にて戰死した當時……須知千勢子

◎千里眼を持つ不思議な婦人と語る……文學博士 福來友吉

▽私が書生時代に世話になつた親切な米國人の家庭……ドクトル 志村誠麿

婦人の芝居見物は利益多きか弊害多きか　村井弦齋

(その三)

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　(郵便振替口座三三六番)　賣捌 全國書店



貴族御用化粧品
クラブ
クラブ白粉
未曾有の逸品
クラブ洗粉
素顔の美を発揮
唯一無二の
クラブ歯磨
欧米の歯磨よりも
遥に優越せる
理想的現實の
華寵児として
萬象の愛顧愈々
集注す

クラスメート





女子美術學校の遠足







女子美術學校生徒は杜鵑花咲く初夏の一日、關東名園の譽高き館林公園躑躅岡へと遠足會を催ふしぬ、此日天氣晴朗にして沿道の新緑滴る如く、雲井に高く雲雀の囀り長閑なりき 上圖は躑躅岡公園、中圖は館林停車場、下圖は公園内の休憩

化粧香水 プラチナ

八方美人の香水…

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さへ持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微溫湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顏を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髮に塗抹すれば毛髮を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髮のくせを直し赤毛白髮を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割增遞送無料

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 天野源七

電話浪花八六三番 振替口座五九三三番





女(その二)

ムーレー及ランマン製
フロリダウオーター

Murray & Lanman's
FLORIDA WATER

世界的流行の高尚香水

沐浴・洗手・髯を剃りたる後・疲勞せし時及び運動せし後皮膚に擦用すれば精神を快活ならしむ其他一般の化粧用



極上無比にして最も廣く愛用せらるヽ化粧用香水なることは毫も疑なし貴賤高卑を問はす又如何なる場合に使用せらるヽも神氣を爽快ならしめ恰も蘇生せしむるの快樂を得べし

登錄 TRADE MARK Lanman & Kemp 商標

御購求の際は此の登錄商標を御注意あれ
偽造品を以て瞞着せらるヽこと勿れ

北米合衆國紐育市
製造元　ランマン及キヤンプ

LANMAN & KEMP, New York
Proprietors and Sole Manufacturers

日本總代理店・横濱・支那及日本貿易商會

女、ちの二

禿、脫毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

●新案特許一〇三六二號 衛生的な改良かもじ發賣●

•丸髷十五錢より七十五錢迄•島田髷 三十錢より壹圓五拾錢迄•銀杏髷廿錢より六十錢迄•送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップを装置せるにより舊式のもの、如く硬からず膚ざわり軟かなり 二 皮膚を摩擦すること少なきゆゑ頭のはげる憂なし 三 頭痛癖ある婦人に用ひて爽快を覺えしむ 四 二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髪の傳染病を媒介するの憂なし

●諸かもじ製造販賣 東京市神田區豐島町十七番地（振替口座東京一八一八八番）田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹、本郷兼康、淺草駒形百助、淺草駒形紅勘、神田須田町三井屋、日本橋通二柳屋 外到處の小間物化粧品店に有

造花原料

東京九段坂

吉住商店

特長電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番

◎營業目錄御入用ノ方ハ二錢切手ト此切取テ添ヘ東京九段吉住商店宛申込マルベシ

（女學世界六月號）

女（ちの四）

京華女學校の開校式と裁縫女學校の卒業生





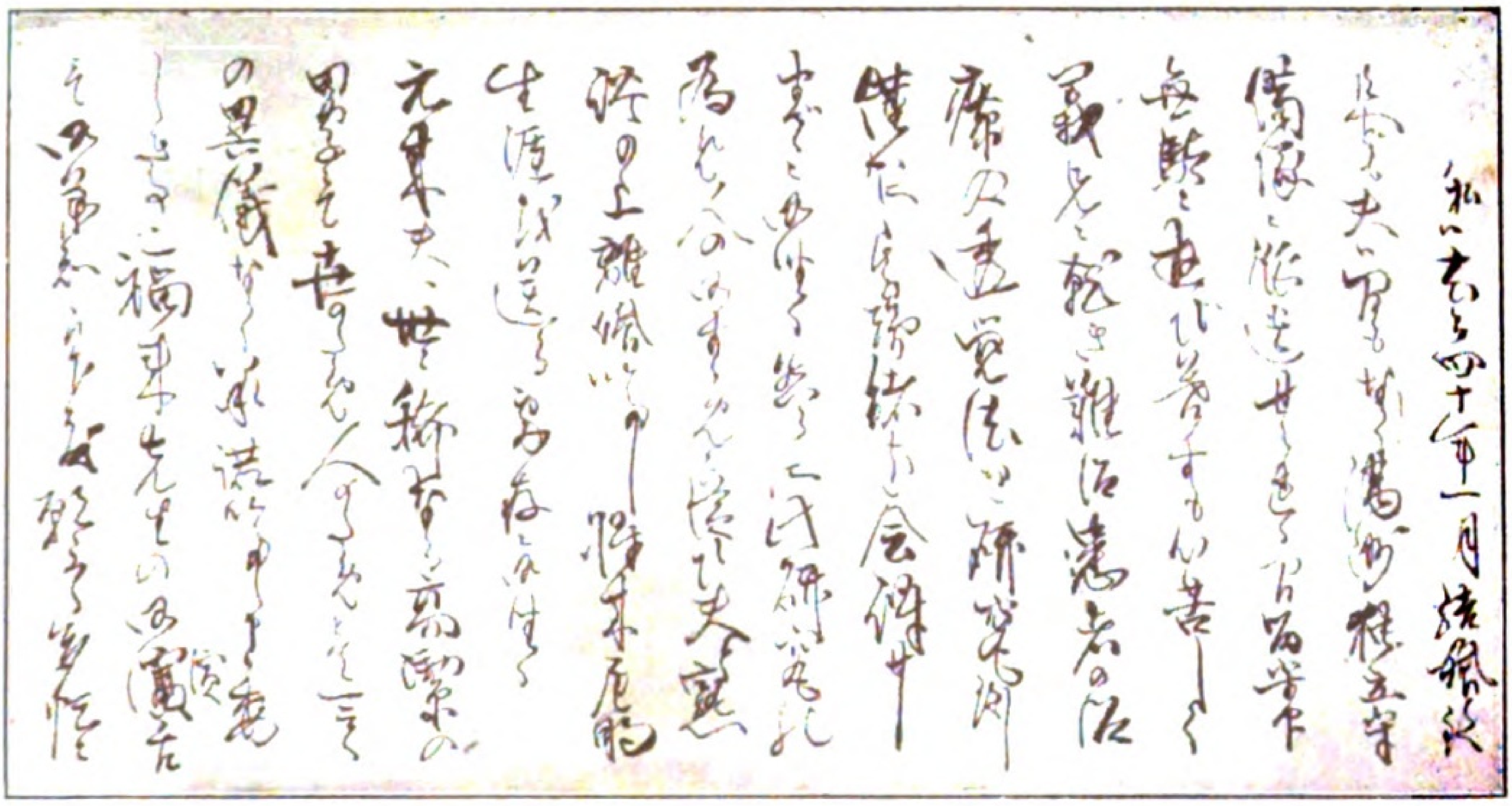






今年始めて新學期を開始する本郷原町なる京華女學校は四月下旬を以てその開校式を擧行せり右方上圖は當日大隈伯演説の光景同下圖は校舍の左側面左方上圖は當日勅語奉讀の光景同下圖は校舍の右側面也又中央の圖は日本橋濱町なる裁縫女學校第七回卒業生也

千里眼婦人清原千鶴子と其筆蹟

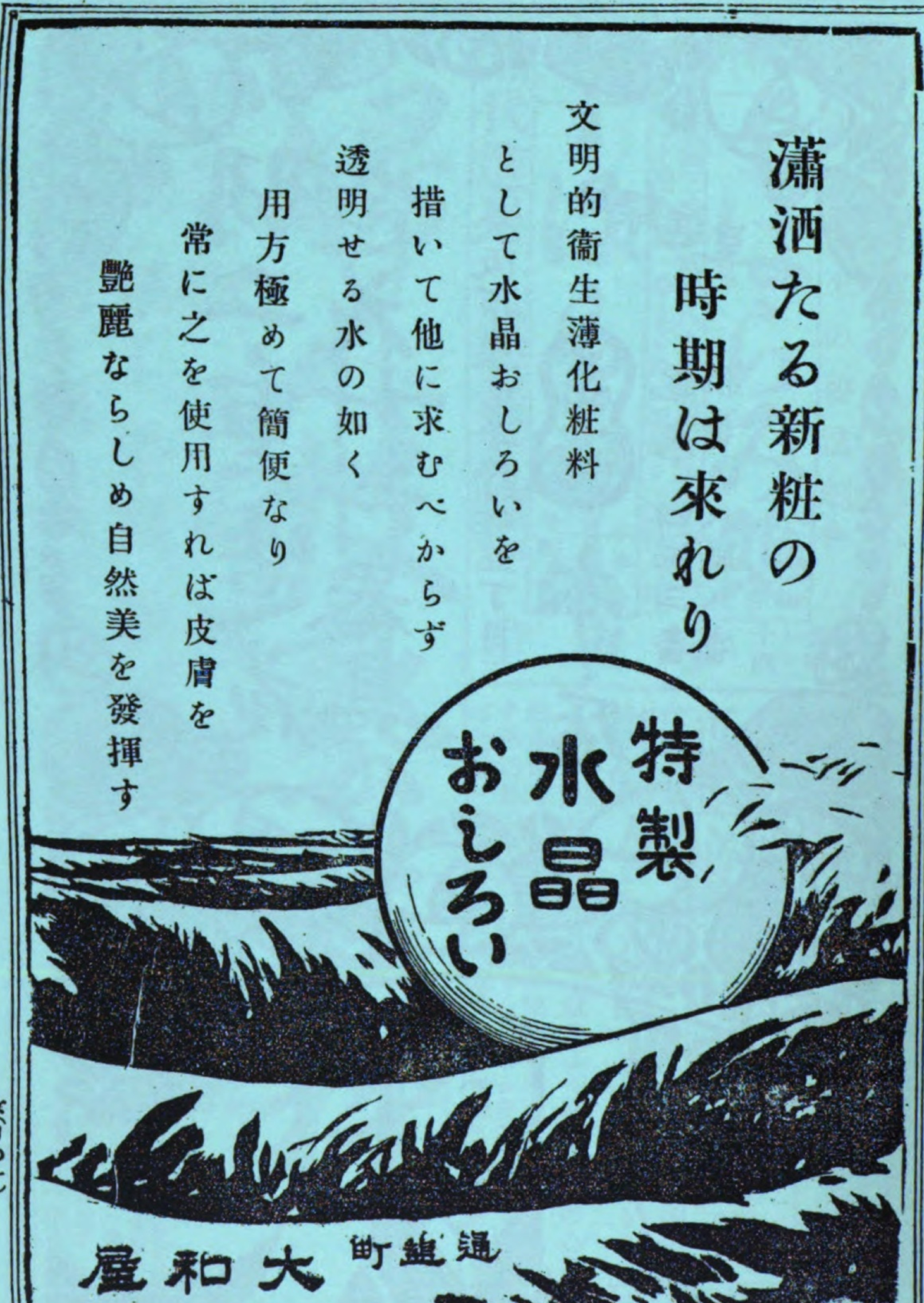


この筆蹟は千鶴子が研究の爲め夫と離婚するに至りし事情を或方へ言送りし手紙なり





千鶴子物體透視の圖


瀟洒たる新粧の
時期は來れり
文明的衛生薄化粧料
として水晶おしろいを
措いて他に求むべからず
透明せる水の如く
用方極めて簡便なり
常に之を使用すれば皮膚を
艶麗ならしめ自然美を發揮す
特製
水晶おしろい
通鹽町
大和屋

女(りの一)


羽二重造花
造花材料器具
大阪市東區平野町五丁目
花十三
本店
電東 四五三番
振替阪 八三八番
目録進呈

女學世界

六月號

第拾巻第八號





婦人の外出に必要なもの

峯　香巒女史

▲顏の小楯

私共がよい年をしてさへ電車の中なぞであまり氣近く見たり見られたりするのは、室内とちがひ一寸氣の落つかぬものでございます。況して妙齢の孃樣方があの雜居の中で平氣で居なければならぬと云ふのは、どうも或點から申すと好ましいことではございません。さうかと申して全然目隱しをするやうに顏面を隱した方がよいと申のでは無論ないのでございます。野原で戰爭をすると、細い立木一本でも大層小楯になつて體が扱ひ宜いと申すことを昔の武士も云はれてありますが、畢竟それと同樣な心持で婦人が外出の時も何か一寸した小楯が欲いと存じるのでございます。學校通ひの孃樣方が電車の中なぞで男子に顏を見られるのを恥かしがつて居られる内は未だしほらしうございますけれども、追々慣れて平氣になりいつしか看られたいと云ふ心が起るやうにおなりですと、學校の往復にいつも乘合す學生の公達も多いことですから、自然派小説の材料を作る動機とならぬとも限りません。甚しいのになりますと姬御前にあられもなく公達に揶揄の態度をほのめかし或は電車中の觀察を土臺として學びの窓に公達の噂とり〳〵なぞと云ふのもあるさうでございます。尤もこれらは極端の例でせうが兎に角婦人、特に外出多き女學生方には顏面の小楯が必要でありませう。又風の日に西洋婦人が一糸亂れず悠々と歩いて居るのと、日本の婦人が髷はほこりをあび、鬢はほつれて難儀さうに歩いて居るのとを較べますと、主人と家來ほどの差が見え、日本でも昔から色々の被り物が

あるのに何に遠慮して裸頭で表を歩かなければならないのかと熟々殘念に存じるのでございます。

▲外國婦人の被り物

大陸では何世紀の婦人も帽子を被つて居るやうでございます。就中昔風の土耳其婦人などは、當今の寫眞を見ましても被衣で大方隠して居りますし、印度は綺麗な薄物で顔を覆ふて居り、朝鮮も御承知の通りでございます。歐洲諸國を廻りますと物賣女や給仕女なぞが一寸した切地や木綿のレースなぞを好い恰好に束ねてのせて居るのが何とも云へぬ趣があつて意氣に見えるさうで、獨乙の田舎のチロル人なぞは各自思ひ／＼の帽や前掛をつけて居るのが一寸京都の大原女めいた處もあつて却々程がよく、彼地の貴婦人の中にはこの田舎婦人の眞似をして見るのがあるさうでございます日本の被衣も淵源はやはり大陸の風俗から來たのではございますまいが。兎に角女子が外出の時は頭から顔へかけて何か覆ふと云ふことは世界が大方一致して居るやうに思はれ、而して誠に奥ゆかしい好い風俗だと存じます。

▲被り物の變遷

西洋婦人の帽子は風俗上よく發達したものでございます。日本の婦人も昔から優雅な帽子があつたやうですが何頃から廢れたのでせうか。彼壺装束蟲の垂絹はずつと古い藤原鎌倉時代の畫巻に見えて居りますが、降つて江戸時代寛永、寛文、延寶、元祿頃の風俗畫を見ましても、塗笠、編笠、綿帽子、きまゝ頭巾、ふきかけ手拭なぞとり／＼でございます。あの被衣はずつと古くから明暦の頃まで行はれましたのが萬治の頃塗笠、編笠、或は日傘が流行出したためか被衣は廢り氣味になり元祿の頃から又昔にかへつて町人でも家柄の女房は年禮なぞに被衣を着たさうでございます。近世風俗史を見ますと、安永の末頃町人に被衣を着ることを禁じられたとございますが、いくらか華美に傾いたので、その當時の例の御趣意などから出たのでござい

ませう。こんな風に變遷は様々でございましたが兎に角女の被り物は長い歴史のあつたもので、而して女の自衛と飾りとになつて居りましたのに、文物一變明治になりまして男子の烏帽子は帽子と入り代りましたが女のつむりにはトント覆ふものがなくなりました。尤も私が子供の頃（明治廿年前後）まで十歳以下の女兒は饅頭笠に赤い紐を結んで歩くのを見受ました。それからお高祖頭巾だけは絶々ながら今も命脈をつないで居るやうでございます。



昔の髪は笄や簪が長く突出て居りまして頭巾の切と髪とのゆとりがとれましたからお高祖頭巾も良かつたのでございますが、當節のやうに笄も簪も短くなりましては切が直に髷や鬢を強くおさへまして折角の髪形をだいなしにいたしますから大概の寒氣にも皆さんがお用ゐにならぬやうになりました。併しお高祖頭巾は寒氣や塵埃をさけ顔容を美しく見せる點に於て却却良いものでございますから何か下簪とでも申すやうな髪形を保護する便利なさし物を考へてこれを用ゐましたら如何かとも考へて居ります。

▲被方

被りもの丶ことについて風俗畫報で名の聞えた東陽堂の老婦人にお話しいたしましたら、參考にならうからとて御所持の被衣を見せて下さいました。それは町方で用ゐたもので絹地を紺に染て、例の中腰から袖半分一文字に山水の模樣を淡泊と表はし、裏には黑繻子がついて居りました。高貴なお方は薄色をお用ゐになつたさうでございます。元祿時代の書物にも、(下女ひとり連る身はもはや被衣ぞあらまほし)なぞとかいてございますが、御所にお勤め遊ばして京都の邊鄙な處に御隱居なさつてお出の方なぞは隨分近頃まで被衣をお用ゐになつたさうでございます。被衣を着て歩む姿は誠に良いものでございますが衿の處に鯨を張つて用ゐますから端で見るよりずつと場席をとりまして迚も電車用なぞにはなりませず、輕便を貴ぶ當今の實用向には例令改良して見ても不適當であらうと存じます。

▲三越のブエールとスカーフ

この被り物については御同感のお方がおありになると見えまして三越のベエールやスカーフを用ゐられるお方をポツ／＼お見受申します。御承知の通りブエールは西洋婦人が平常の歩行用で帽子及びボンネットの上から被る四角形な網、スカーフは帽子無の時、例令ば夜會晩餐などの途次に用ゐる長い薄絹でございます(散歩などにも用ゐる人があります)三越のは兩方とも京都製で舶來品よりずつと廉價(一圓五六拾錢からあります)でございますが品質も色合も却々宜しうございまして、貴婦人方が日本服でスカーフを用ゐて居られるのを見ますと丁度天衣のやうで誠に高雅でございます。これらの被り物はお馬車や自働車なぞにめす時其他普通車上等には無論何の不便もないばかりでなく、むき出しよりは萬事に宜しうございまして二十世紀式の被り物には至極適當の品でございませう。但私共が歩行や電車に乗る際の被物としては少し不便な點

もございますが、元より實用簡便を旨として案出した物ではございますまいから、これは先づ他所行の時として平常用か何か欲しいものでございます。

▲自用の被り物

私が七年ほど前から用ゐて居りますのは目の粗い黒の絹網で、二尺ばかりのものを顎からかけて頭を包み、髷の邊で帽子留で止て置きます。洋服を召す方は御經驗でございませうが、この網を用ゐますと風の日にも顔へ風がつよく當りませんから歸つても皮膚の氣持が宜しうございますし、髮に着く塵埃をよけ毛も亂れませんので大層都合が宜しうございます。人力車に乘て向風の折なぞは風を切て進むのですから呼吸器を害すやうに存じますが、この網を用ゐますと餘程よい工合でございます。處にもよりませうが先達てボストンでお孃さんをお生になつて歸つていらしつた方が、彼地では嬰兒や幼兒を外に出す時はボンネットの上から必ず網を被せたものですから、歸つて參つても外出の時は幼兒が網々と催促するといふお話をなさいました。始終そ



んな癖をつけてもいけないと云ふ說も出ませうが、東京名物の空風が吹く日に子供は加減なしにあの塵を吸ひますからそんな時の御用心にもならうかと存じます昔の人が網の目で風を除けるとか申しましたが本當に網の目で風を除られるものでございます。私の用ゐます網は舶來品ではございますが廉價なもの（八木屋、關口、三枝どこにでもございます。）で四五十錢位からございますし、未だ日本製のがありませんからこれを用ゐて居ります。若し需用が殖てまゐりましたら日本製が出來ることゝ存じます。私は目立ぬやうにと存じて黒を用ゐて居りますが、賣店には白、淺黄 或は白網に黒の點が粗らに着たのなぞ樣々なのがございます。

▲訪問の時

女學生方も唯今の處お召替の時には矢張スカーフかブエールが宜しいと存じますが、平常御通學の折は衛生と質素とを兼て先づこの網でもお用ゐになつたら如何かと存じます。但差當り西洋婦人のやうに帽子やボンネットの上からでありませんから、網が顏へ直に當つてうるさい氣味があるかも知れません。それで前申上げましたお高祖頭巾同樣、寧ろ共通の下簪が是非必要になつて參りませうが。先づそんなことでもいたして居ります內に人の目も慣てまゐりませば、これに限らず何かな若い方々の新案のものを御自分からおつむりに乗せられるやうにおなりかと存じます。而して今一つの註文はこの簡便な被り物が出來ましたとしても一時間や二時間の訪問時には脫らないでも失禮でないことに定たいと存じます。何處の玄關にも鏡のある家は多くございませんから西洋のボンネットと同樣ぬきはぎをしないに限ります。

▲創作力

良いと信じて居ても人目に慣れぬ內は一寸工合の惡いもので、私が顏をベイルで包んで步いて居りますと咳嗽拂位は折々耳に入りますが、實際いくらかハイカラか風變りに見えませう。併しこのために小楯が出來

て心が落付き、歸宅後皮肉の氣持もよく、且夜目遠目傘の內で露出しより多少體裁が良いと云ふ重寶な點から當分の內何と云れても用ゐつゞけて居ります。先達て懇意な三越店員とベールやスカーフの話が出ました時、店員が『今度こんな被り物が出來ましたから是非お用ゐ下さい、弊店の方から御客樣方に御勸め申上て見た處で、一般の御方によく似合ふか如何か分りませんから只今の處皆樣の御見識に御依賴いたすより他ございません。畢竟頬被りでも姉さんかぶりでも人々の仕方によつて釣合ふものですから、如何しても御自身の御風采や御召物又は洋傘などとの調和をお考への上お撰びになるか或は御新案の御註文を受けて作つて見たいと存じて居ります』と申して居りました。又婦人方の新案帽を作るに巧みな麴町にお住ひのミセスコップランと云ふ未亡人から、彼地の婦人はよく經木眞田を衣服や顏色に釣合ふ隨意な色に染め自由に帽子の恰好を考へ出して製造者に註文すると云ふお話を伺ひました。日本でも昔の婦人は角かくしとか頭巾とか樣々な被りものゝ形を工風して釣合を取つたところを見ますと却つて只今ほど流行の渦に卷込れないで創作の勇氣があつたかと存じられます。

▲良風俗は女學生方から

今も昔もかはりはありますまいが流行の魁は主に花柳界からで、三越ベイルボロショールなども花柳界では遠に先鞭を着て居るやうでございます。凡て素人は良と存じたことでも流行してまゐらぬ內は一寸遠慮勝になりますので彼等に魁されるのでございませう。併し花やか一方のことは花柳界に魁されても致方はありませんが、何から何まで風俗の魁を花柳界に占められるのは面白くございませんから質素で實用向で優雅を兼ねた良風俗は新教育を受つゝある女學生方から奮撥して始めていたゞきたいものと存じます。



才色雙絕の江木博士夫人

婦人記者

煙のやうな小糠雨が靑柳を罩めて、淡紅の落英が蛇の目傘に散點するの日、才色雙絕、多藝多能の名聲高き江木博士夫人榮子女史を神田淡路町の邸にお尋ね致しました。取次の方が『奧さんは今入浴中ですから二十分ほどお待ち下さい』とて東洋美術史だの寫眞帖だのを持つて來られた。暫く拜見して居るうちにサラ〳〵と衣摺れの音がして一間隔てた洋風應接間の襖が左右に開かれて『こちらへ』と記者を迎へられたのは申す迄もなく夫人榮子女史でした。夫人は中肉で丈高く濡鴉のやうなお髮を前髮と髷の思ひ切つて出た腰高の丸髷に結ばれ、蝶貝入りの櫛、鼈甲兩天の中ざし、光琳菊の長い後ざしと云ふ古風な髮飾り、一絲亂れぬ頸脚の美しさ、明眸は則ち芙蓉秋水に開き、秀眉は則ち遠山春霞に聳え、朱唇鶴然皓齒燦然、美人としての資格に於て毫末の遺憾なく葡萄縮緬の縫紋の被布をゆつたり風通お召の小袖長長と着流し流暢な調子で話し始められました。

▲樂燒

皆樣が御贔屓分にいろ〳〵とお書き下さいますけれども、實際何一つ纏つたことも出來ませんのでお恥かしうございます。あの樂燒でございますか、これも一寸道樂にやつて見ましたが、宅が險呑性で火傷でもしてはならぬと心配致しますから控へて居ります。併しなか〳〵興味のある仕事でございますから、其内に土を取り寄せて手づくねでも拵へて見やうと考へて居り

ます。

▲篆刻

篆刻はフトした動機から習ひ初めたのでございますが、唯今では何よりも一番これが面白くつて、どうしても止められません。不思議な事には、未熟な私へお頼み下さる方が大分ございまして、毎日平均三顆位づつ缺かさず彫つて居ります。口の惡い亭は『頼まれると善い氣になつて自惚れて居るが、彫つて貰つた人達は嘸迷惑してるだらう』なぞと冷かして居りますが、全く下手の横好と申すのでございませう。亭のも三顆ばかり彫りましたが、私が冗談半分に篆刻料だと申していろ／＼ねだりましたので、亭が『大家へ頼んだつて恁んな高い篆刻料はありやしない』と申して果は大笑ひになつたのでございます。

▲賑やかな夜の家庭

私共へ夜分お出での方は、騒ぎの豪いのに驚いて居らつしやいます。能の師匠が參つて稽古が始まる、謡曲をなさるお客様がある、鼓が鳴る、詩作に興がる方繪筆を舐める方、皆樣獨得の藝を遊ばす、御相手を覺束ないながら私が勤めますが、時としてはお羽織を脱いで私に亭へ何か一つと仰しやる方がございますと、私は直に誤魔化しものを認めて下手の可笑味が御愛嬌になる事もございます。而して亭は獨りで按摩に採ませながら默つて騒ぎを見物して時々皮肉る容子が滑稽だと仰しやつてお客様は大笑ひなさいますし、それはそれは賑かでございます。先達ても貴女と御同業の御婦人が面白い／＼と仰しやつてトウ／＼十二時頃まで見物なさいました。

▲たゞつ子式主婦

私は子供が一人もございませんが、子のない女は本當の人間のお仲間入が出來ないと歎息して居ります。併し亭は『手前がたゞつ子で厄介なのに此上子供があられちや大變だ』と惡口を申して居ります。私はたゞ

つ子と言はれても何でも家庭を賑やかにして、子供の代りをしたいと存じて居りますから、毎日ガチャ／＼悪戯を致して叱られたり笑はれたり致して居ります。本當に私はだゝつ子式主婦でございます。

▲今が式部時代

先達てやまと新聞のお方が私の式部時代を話せと仰しやつて下さいましたが、私の式部時代を明白に申し上げますと一方ならず恩になり又生母よりも私が敬慕して居る養母に對して氣の毒な事情がございますので、どうも申し上げ兼ねて居ります。私は普通ならば逆境に育つべき身の上でありましたのに、養母の慈愛に頼つて幸福に生ひ立ち、どうかかうか人様とお話が出來るだけの教育を施して貰ひましたのは、誠に有り難い事と存じて居ります。加之良人衷は御承知の通り私の參るまでは有名な遊び手でございましたが、仕合に私が參つてから其方の心配は少しも掛けなくなりました。イエ私の働ちやございません、全く私が運の善いのでございます。それで前申し上げる



通りだゝつ子のやうな所作をしても、習ひたい事を習つても、宿が許して居て呉れますから、本當に唯今が式部時代と申しても可い位でございます。

▲良人は氣の毒な人

私共では小勢の割に可なり用事の多い方ですが、召使は皆古く居る者ばかりで宅の子供同様でございますから安心で、家事なぞは却つて私より巧者な位でございます。それで私も好きな稽古事も出來、誠に仕合な境遇でございますが、宿は誠に氣の毒な人でございます。酒や煙草は勿論、御飯も麵麭もいたゞかれず、魚肉類と申したところで肝心な砂糖が禁物ですから旨しい風味の料理を口にすることは出來ません。鰻なぞでも店屋から取寄せたのにはお醤油に砂糖が割つてありますので、うつかり食べられないと云ふやうな次第で公私の會に幾ら結構なお料理が出ましても一箸も付けることは出來ず、不便は申すまでもなく、人間快樂の大半を失ふて居るのでございます。宿の食物に就いては、隨分私も苦心しては居りますが、なか〳〵滿足させる料理も出來ませんけれども、宅の食物より外一切食べられぬ身體だと諦らめて居ることを察しますと實に氣の毒で〳〵で堪りません。

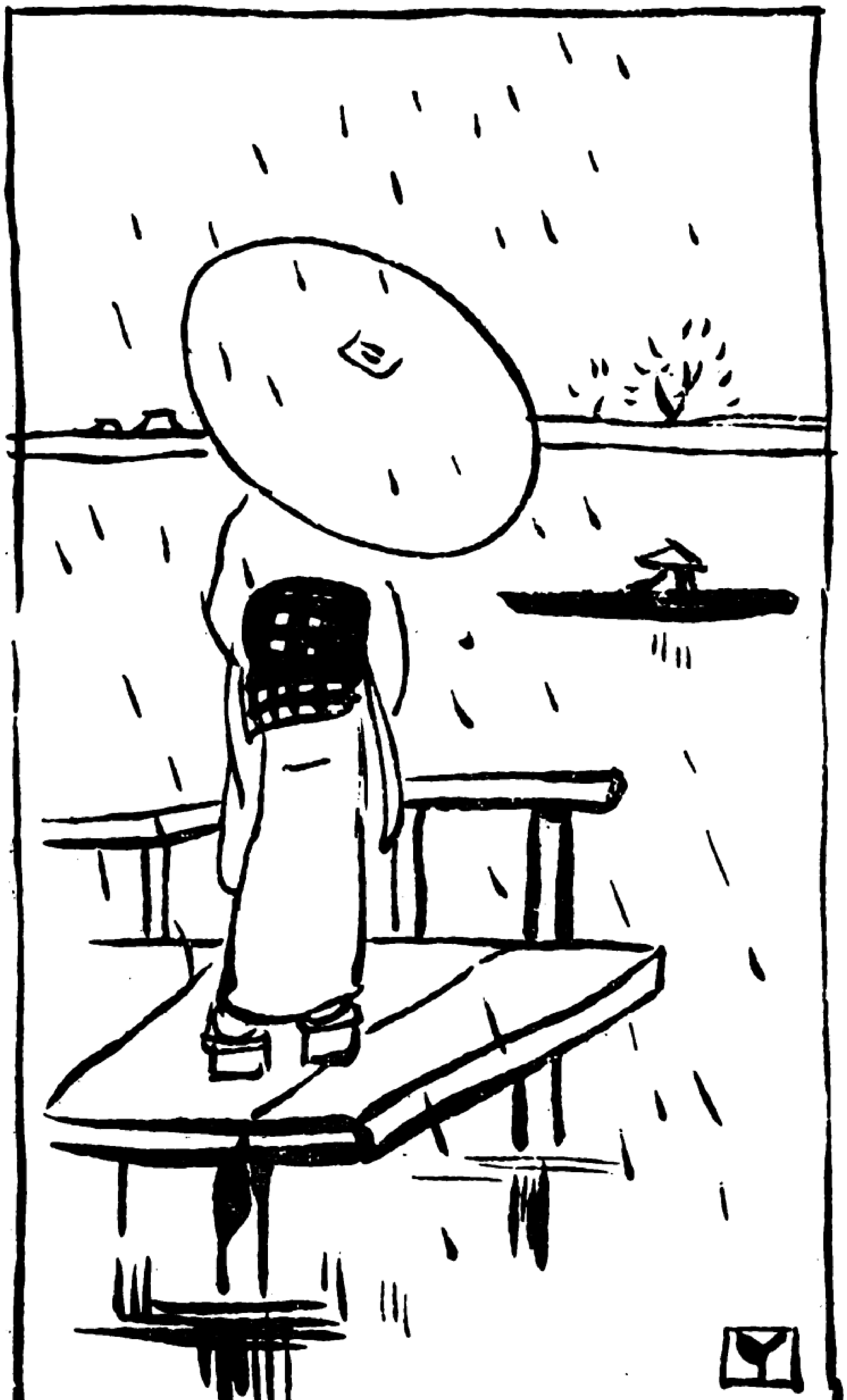
▲糖尿病初期の徴候

初期の徴候でございますか、これはうつかりして居ると、ちよつと判らぬのでございますが、何だか根氣が減つて氣短かになりイラ〳〵と疳を起すと云ふのが始りでこの患者は隨分多いのださうですが、格別の苦痛もなく寢るほどの事でもありませんから、世間には隨分この病氣を氣付ずに居られる方が澤山おありだらうと存じます。宿なども大學で精細な診察を受けて本當の病源が判り飲食物を嚴重に注意し始めました。尾籠なお話でございますが、尿は始終大學へ持たせて遣り試驗して貰ふのですが、澱粉や糖分を一口食べても覿面直ぐ尿に現はれますので、實にミヂメなものです。ハイ發病してから七年ほどになりますが、其間

に一度危篤に陷り、新聞に黒框付の記事が出たことさへございました。それでも好い塩梅に危いところも凌ぎ、當節では餘程快復しまして、最少しで全快の運びにならうかと喜んで居ります。

▲良人慰藉法

可なり氣骨も折れる職業を執りながら、晩餐に一日の疲勞を擲ふことさへ出來難い衷の事を考へますと、暢氣な私も心を痛めずには居られません。自分に出來るだけの事ならば、どんな眞似でもして慰藉したいと存じて居ります。自分の好きな道とは申しながら、今日まで能もやる謡曲もやる鼓も鳴らす、茶の湯、活花・書畫、投扇和歌、俳句女だてらの生意氣な篆刻、詩作にまで首を突込んで、來年が厄と云ふ唯今でもだゝつ子のやうな滑稽を演じて居ますのも、畢竟どうしたら少しでも衷を慰藉することが出來やうかと云ふ苦心の結果に外ならぬのです、私がこんなことを申すと



言譯をするとか貞女振るとか、冷笑されるかも知れませんが、幾ら笑はれても誤解されても頓着いたしません。唯だもう家庭を賑やかにして、盡したいと思ふ目的の一分が達しられゝば可いと胸を定めて居ります。

▲主婦の藝は巣立の内

皆様が江木さんは「多藝多能だ」と仰しやつて下さいますが、成程私は多藝でございませう。又これに伴ふ樂みもあります。併し天才も何もない私があちこち手を出すのですから何一つ上達しやう譯もありませずよし少し位上達したところで、男子と云ふものは眼も耳も自然肥えて居りますから、妻の藝に感心して樂みを得ると云ふ次第に參りません。一般ではありますまいが、先づ女は何をいたしても腦力が男子に及ばぬものだと存じます。ですから一家の主婦が良人慰藉の爲めに藝をやつて見る際には未だ巣立の内に良人から澤山アラを拾はれるのが花だと諦らめなければなりません。尤もこれは私だけの實感でございませうが、私が能にしろ謡曲にしろ未熟でトンチンカンをやつて居る頃は、亭も物珍らしいのと滑稽の容子とで興がつて居りましたが、私が少し進歩して參る頃は最早飽きた樣子が見えます。亭が飽きる樣子が見えると、又他の藝を始めると云ふ風にいたすので、自然七色藝をやるやうになつたのです。何の藝にいたしてもサンザ苦んで今一息と云ふ處、神氣自から凝つた際に止めて了ふのは實に殘念なもので、其時には不平も起りますが、自分の爲めに習ふのではなかつたと諦めて了ひます。眼や耳の肥えて居る亭が感心するほどの手際を見せてやらうなどゝ大それた考を起して見た處で、迚も及びませんのみならず、却つて興を殺いで了ひます。私の偏見かは知れませんが、立派な技能を有つて居らるゝ奥様が往々家庭の不和に泣かるゝことのありますのは、この邊の呼吸がありはせぬかと考へられます。

▲どうしても女は家庭の者

特別な境遇、特別な天の使命を受けた御婦人の外は

良人に従つて家庭の爲めに盡すのが女の道であると云ふことは、私が幼少の頃からの理想でございます。但し一度嫁したら二度嫁ぐ必要はありませんが、一度は必ず主婦の圏内に入るべきものと存じます。一度この天職に服せば假令寡婦となつて身體は不幸に陥つもて人生の眞相が解り、女子の本分なる忍耐とか常識とか云ふ修養が出來て獨身の方の迚も持ち得ない價値が備はると思ひます。私の兩人の妹は、高等教育を受けましたために一時非婚主義に傾いて居りましたので、私は熱心に其考へ違ひを說いて兩人とも結婚させて了いました。



▲私には怖い人が澤山あります

夫は私と餘程年が違つて居りますのに、サンザ道樂をして酸いも甘いも知り拔いて居り、而して宅では極無口で時々急所をグッと衝きますから、私は本當に怖いのでございます。それに私の伯父が極昔氣質な厳格な

人で、「女は味噌一貫目御貸被下べく候と書けさへすれば澤山だ。汝のやうに書齋だの漢書だのつて女の癖に生意氣千萬な」と申して叱り付けます。まだ〳〵私には怖い人が幾らも在つて頭を抑へられるのでございますが、これが私の修業の爲めに餘程益になると存じます。

▲生變弱な交際をやるな

私は不思議なことに男の方に澤山お近付がございます。而してそれが御老人に多いのでございます。畫では亡くなられた雅邦先生、書の方は齋藤先生と申す風に、皆師と賴む方ばかりで、先樣でも私を非常に愛して下さいます。漢學の或先生は七十餘の白髯翁ですが江木さん〳〵と私の宅へ足繁くお出でになるのを、未だお近付のない六十餘の奥樣が不思議に思召して、或時宅へお出でになり、お目にかゝつた私を見て吃驚遊ばし「餘り江木さん〳〵と申すので、茶呑友達でも出來たのではないかと心配いたしました」と滑稽を仰しやつた位でございます。それから婦人記者の方も大分お出でになりますし、お蔭樣で宅に引込んで居つても種々の事を承はる便宜はございますが、交際社會へは少しも出ませんから、この方は眞暗闇でございます。宿に「交際社會へ出るならシッカリやれ、生變弱なブマをやつて乃公に恥をかゝしちや困るぞ」と念を推されますと、修養の出來ない內は怖くて足踏みが出來ません。芝居でございますか、據ない御交際の外に參つたことはございません。芝居は見て歸つてから話して樂むと云ふほどの深い趣味がないやうな氣がいたしますが、畢竟能に趣味を持つて居る故でございませう。新刊の小說なぞも面白くないことはございませんが、丁度芝居と同じで一向氣が乘りません。どうも私には漢書を讀んで見る方が何時まで繰返しても味ふ價値があるやうに思はれるのでございます。イヱ旅行は餘りいたさぬ方で、輕井澤の別莊へ參る位なものでございます。滯在中は每日知己の方々と詩會ばかり催しますので、可なり忙しく日を暮します。

▲服装と髪

衣裳の撰擇なんてお尋ねになりましたつて、私はこの方は不粋でございますよ、却つて裏の方が巧者なんで何時も見繕つて呉れる位のものでございます。皆様がよく化粧料には何を使ふなぞと御尋ねになりますが私は新聞雜誌で仰山な化粧品廣告を見て、可笑しくて堪らぬ位ですもの選り好みなぞ少しもないのでございます。唯だ髪だけは裏が八釜しう御座いますから、亂さぬやうに氣を付けて居ります。イヱ束髪にも結びますが、不精者には丸髷の方が世話がないので、主に斯うやつて居るのです。仰しやる通り日本の服装は優美ではありますが、外國婦人と立ち列ぶ夜會なぞにはどうも見劣りが致すやうです。もう餘程以前のことですが、外務大臣の夜會の際つく〴〵此感を起しました令嬢方は立て矢の字にシゴキと云ふ色も形も引き立つたお支度が出來ますが、奥様方はマサカ突飛な服装も成さりにくいので、品質には充分價値があつても、くすんだ色の配合で、まばゆい服装の外國婦人と立ち列ばれると、幾ら贔屓目に見ても殘念でございました。實際言ふべくして行はれない考へか知りませんが、彼様な夜會の折だけは、徳川時代貴婦人の服装、あの丸袖に總模様（裲襠は餘り不便でせうが）なぞから參酌した華美なものを工夫になつたら如何かと存じました。尤もこれは私なぞが氣焔を吐くのは、烏滸がましい次第でございますが、唯だお話が出ましたから考へ通りを申し上げたのでございます。

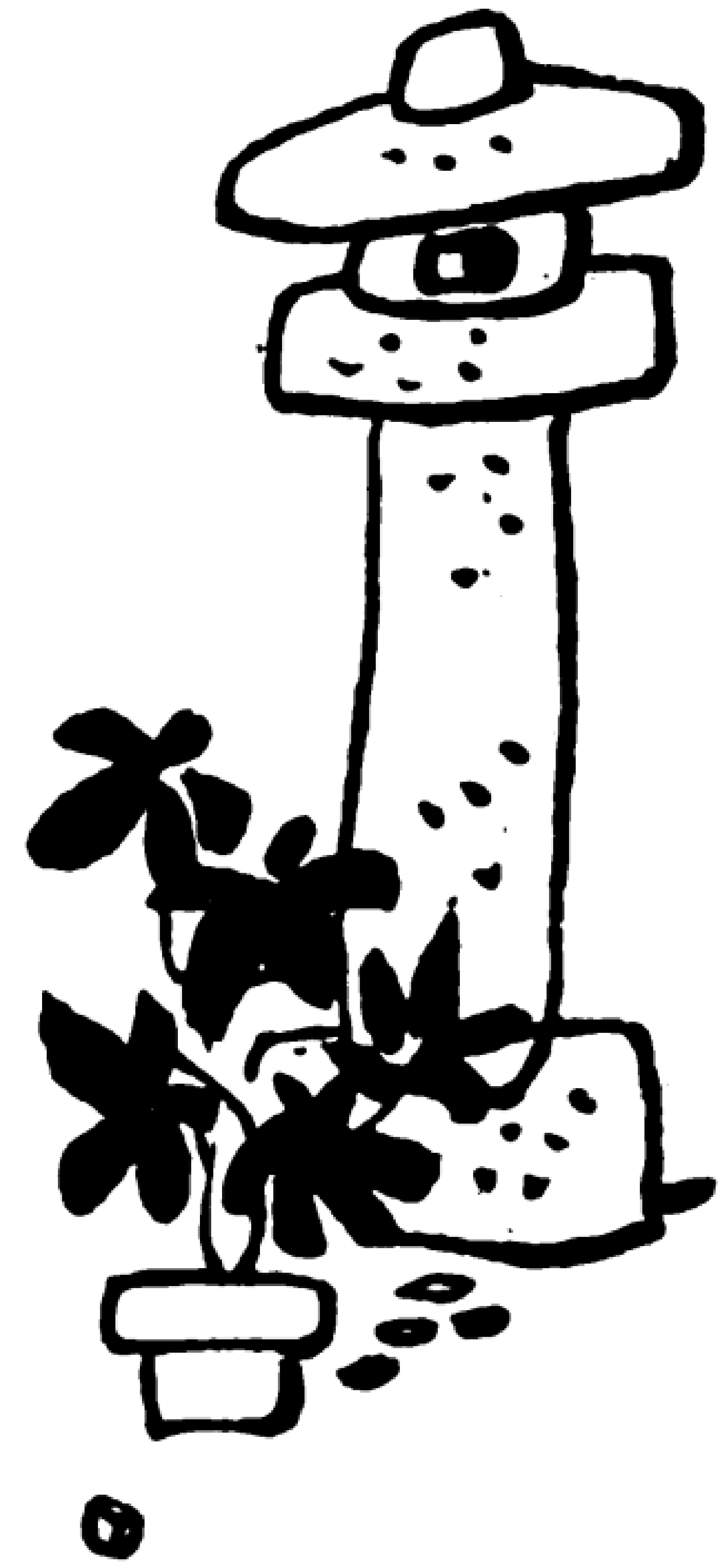
▲美人は鼻につきやすい

美女だの佳人だのと人が騒ぐのも、水の出花の僅かの間で、年を取つてしまへば、十把一からげだと存じます。若い内少々醜くつても、身體が壯健で精神の確乎とした婦人は、晩年になるほど氣高く優美になるやうではございませんか。奥様には選りぬきの美人をと騒がれる殿方でも、自分の持ち物となつて了へば、御満足は新婚當時だけで、明けても暮れても同型の顔が

側を離れずに居たら飽きが來るでせう。殊に美味でも鼻につき易いと同じ譯で美色も鼻につき易い。併し鼻についたからと云つて棄てる譯にも行かぬから、時々新婚の夢を繰返して愛を繋ぐと云ふ位のものかと思ひます、ですから私は知己のお方へ奥樣をお世話するのに、側へ寄られてもぞつとする程の醜い方でさへなければ、容色より身體や頭腦の良い方を選んで居ります衷は『手前が世話をする嫁はヘナチヨコばかりだ』なぞと惡口を申しますが、實際私の世話した方は年を經るほど折合が宜くなり、お子さんが乾度出來ますのでこればかりは私が大威張りでございます。

料理や菓子のお土產

今日に至つても依然として、お土產料理が世に行はれて居りますが、此お土產料理は禮式の上から云つても、甚だ失禮なことになります。散々箸を付けた殘物を、折に詰め込んで、お土產になさいと云ふのは、一方から言へば貴方の食べ殘りだからお持ちなさいと云ふ意味にもなつて、決して上長の人に對し出來る事ではありません、賓客自らが、誠に結構な御料理故頂戴をいたしたい。左樣なればお持ち下さい、差上げますと云ふ順序なら宜いが、在來の習慣の如きは甚だ禮を失つた譯で、何うして斯う云ふ習慣が養はれたものか、私は實に厭な風であると思ひます、彼の菓子包などもさうです、お客さへ見れば何時であらうが頓着なく菓子を必ず包んで出しますが、これもお料理の御土產と同じ事になります、菓子と云ふものは茶を喫んで缺ければ食べる厭なら食べないでも宜いのです、然るに待遇を丁寧にする大切なお客樣になればなる程、菓子の包みが料理の附物になる、是れは何うも實に失禮な話で、矢張り貴方の食べ殘りは汚ないからお持なさいと云ふ理窟になつて了ひます、其證據には菓子包みを出すときは必ず「お邪魔でございませうが」とか「恐れ入りますが」とかと云ひます、好く考へれば實に矛盾した可笑な話です、斯う云ふことは經濟上から云つても、風俗上から云つても、社會が共同して斷然改めたいと思ひます、(小笠原淸務氏)



雜記帳

與謝野晶子

×

「お孃さんは何にお成りなさいます」斯う宅の女中が聞くと、五歳になる××さんの末のお孃さんは得意相に「わたし、大きくなつたら澤山張物をして、死ぬるの」と仰つた。女中は「あらまあお孃さんの仰いますこと」と云つて思はず吹出した。わたしも微笑まずには居られなかつた。宅の幼い兒供等はお孃さんの答の意味が腑に落ちないと見えて皆けゝんな顏附をして見成つて居ました。

××さんは東京市の市參事會員である。中流以上の生活をして居る人である。其人の可愛い末娘であるお孃さんが、まだ五歳や其處等で着物の洗張をして死ぬるのが目的だなどゝ云はれるのは意外である。大方お家の女中達の言つた言葉を聞き嚙つて云はれるのか、で無くば阿母樣か大きい姉樣かの何かの場合のお話を小耳に挾んで居て、何の意味とも知らずに云はれるのでせうが、併し此お孃さんの短い言葉には、日本の女の大多數が抱いて居る心持を適切に示して居ります。又、家政を女子教育の主要科目とし、二宮金次郎のさもしい消極主義を尋常小學の生徒に奬勵して、益々兒童の心を物質的に偏らせ、女子の境遇を高等下女の位置に安んぜしめようとする文部省の理想をも、此言葉がよく說明して居ると思ひます。

笑ひ事では無い。五歳になる無邪氣な娘の口から、斯樣な慘な言葉が容易く出ると云ふ事は寒心すべき事である。

×

木村貞子さんと云ふ御婦人の教育者がある。以前は華族女學校に奉職して居られた方の樣に覺えて居ます。其木村さんのお話を二度許何かの雜誌で拜見しましたが、二度とも「貧乏な公卿華族の娘は吝々して善くないが、大名華族の令孃になると、一圓よりも十錢の方が多いでせうと問はれる樣な、錢勘定を御承知の無い、大樣な所があつて御上品である」と云ふ意味の事が云つてある。私は可笑しく思ひました。錢勘定を知らぬと云ふ事は愚かな事である。然う云ふ愚かな事を上品だとか結構だとか考へたのは前代の事である。又大名華族の令孃が既に多い少いを云はれる以上全く錢勘定を知られないのでは無く、只數の位取の名が圓と十と顚倒して居る丈の事である。而して圓と十とを間違へるなど丶云ふ事は白痴の質では無いでせうか。

私は其樣な愚かな姫君が今の大名華族にあらうとは想はない。之は木村貞子さんが富貴に媚びる穢しい性情を示された拙いお世辭だと思ひました。

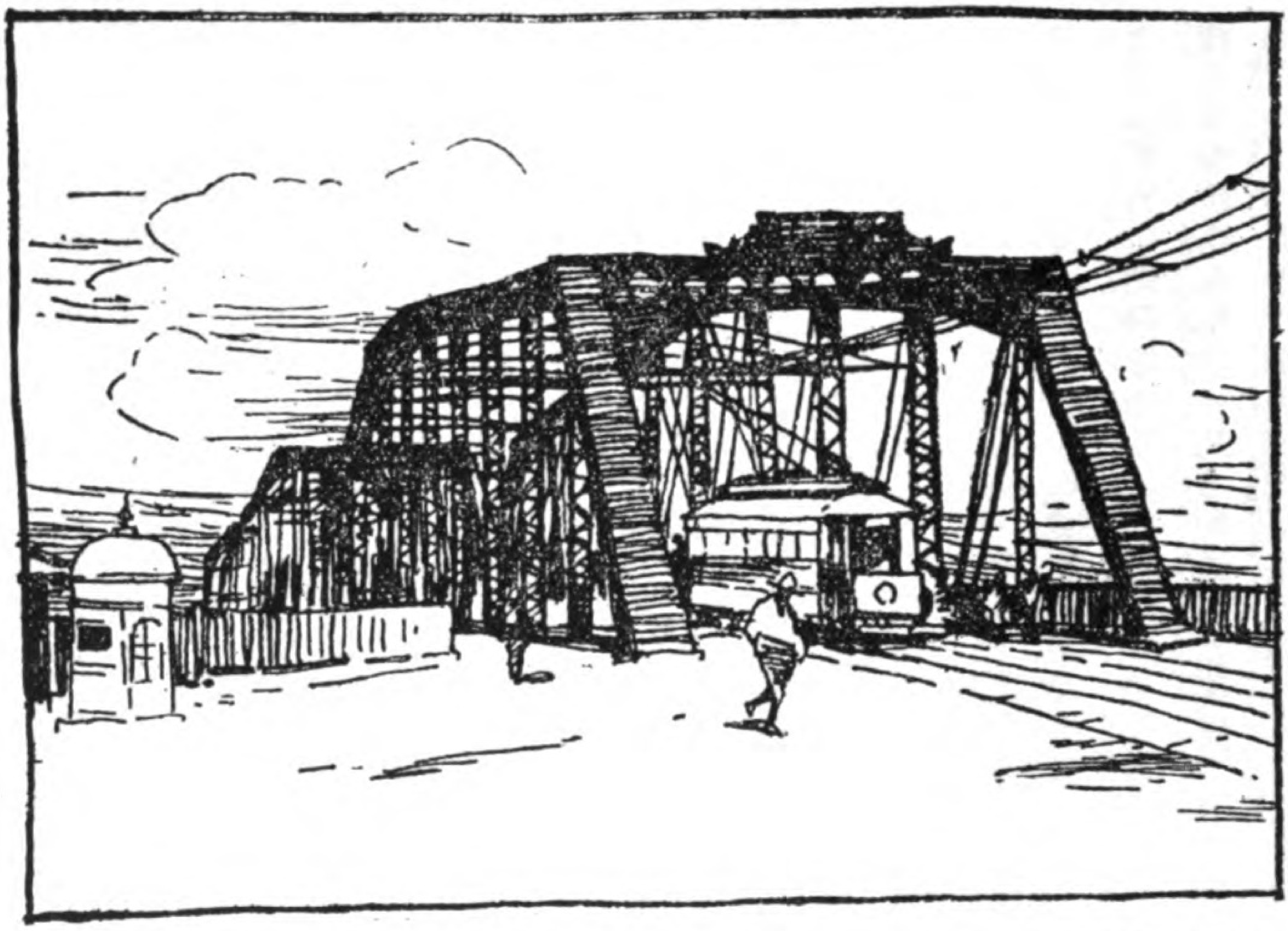
錢勘定を知らないで賢母良妻になれ。錢勘定を知らないで勤儉貯蓄をせよ。知名の教育家が云ふ所は常に斯う云ふ滑稽が多い。

×

成女學校の學監宮田修先生も近頃滑稽な事を仰せられました。『女學校の男教員には或意味に於て未婚者が適する』と云はれ、其理由として『私ども永年の實驗上、既婚者は婦人に戯る事を苦とせざる者多く、女學生に向て彼等の赤面する樣な戯談を發する者は必ず既婚者である』と云はれましたが、多年の實驗とあるからは既婚者たる宮田氏自身の懺悔だとも見られます。

私は既婚とか未婚とか云ふ形式のみを見て今日の男女の性行を批判するのは間違だと考へて居ますし、又宮田氏と反對に、既婚者の方が表面丈でも婦人に對して斟酌があつて、無暗に赤面する樣な言葉や行爲を用ゐない人が多い樣に考へて居ますから、未婚の若い男

永代橋



子よりも既婚の若い男子を女學校の敎員に用ゐる事を望んで居る次第ですが、果して既婚者の方が其樣に野卑なものであるならば、宮田氏は第一に女子敎育界より引退せらるべきである。氏が恬として敎育界に居られるのは可笑しな矛盾では無いでせうか。

氏は『自分に限つて然う云ふ疚しい所は無い』と云ふ積りかも知れぬ。其れならば誠に結構な次第ですから、氏が多年の實驗の中で、他人の事は兎も角、最も重んずべき其自家の經驗を基礎として議論を立てられたら善かつたでせう。即ち『女學校の男敎員は自分の如く謹嚴なる既婚者に限る』と云ふ丈の自信が有り相なものだと思ふのです。文部省の方針に盲從したり、新聞雜誌や父兄の顔色に氣兼をしたりする浮萍の樣な敎育者の多いのには呆れて居るのですから。

×

男でも女でも戯談一つ云ひ合はない樣では人間の情味が解つた人ではありますまい。然う云ふ變人が幸ひ

澤山居ないから善い樣な者の、今の文部大臣の方針は然う云ふ變人を澤山拵へようとして居られるのでは無からうか。女學校で文學書を禁じたり、家政とか育兒とか貯金とかを専ら奬勵して早く女子を老いしめようとするのは殘酷である情味の無い事である。

　變人や狂人で無い限り、人には種々の感情がある。欲がある。智性や意志ばかりの人と云ふ者は無い筈である。感情の中でも戀愛の勢力の熾なる事は云ふまでも無い。之あるが爲に人生に温味がある。人が生々繁殖をする。偉大なる文學美術も成立つ。然るに女學校の教育では人には戀愛などの有るもので無い樣な風に敎へる。人生に必要な性情を矯めて背理僞善の人たらしめようとする。

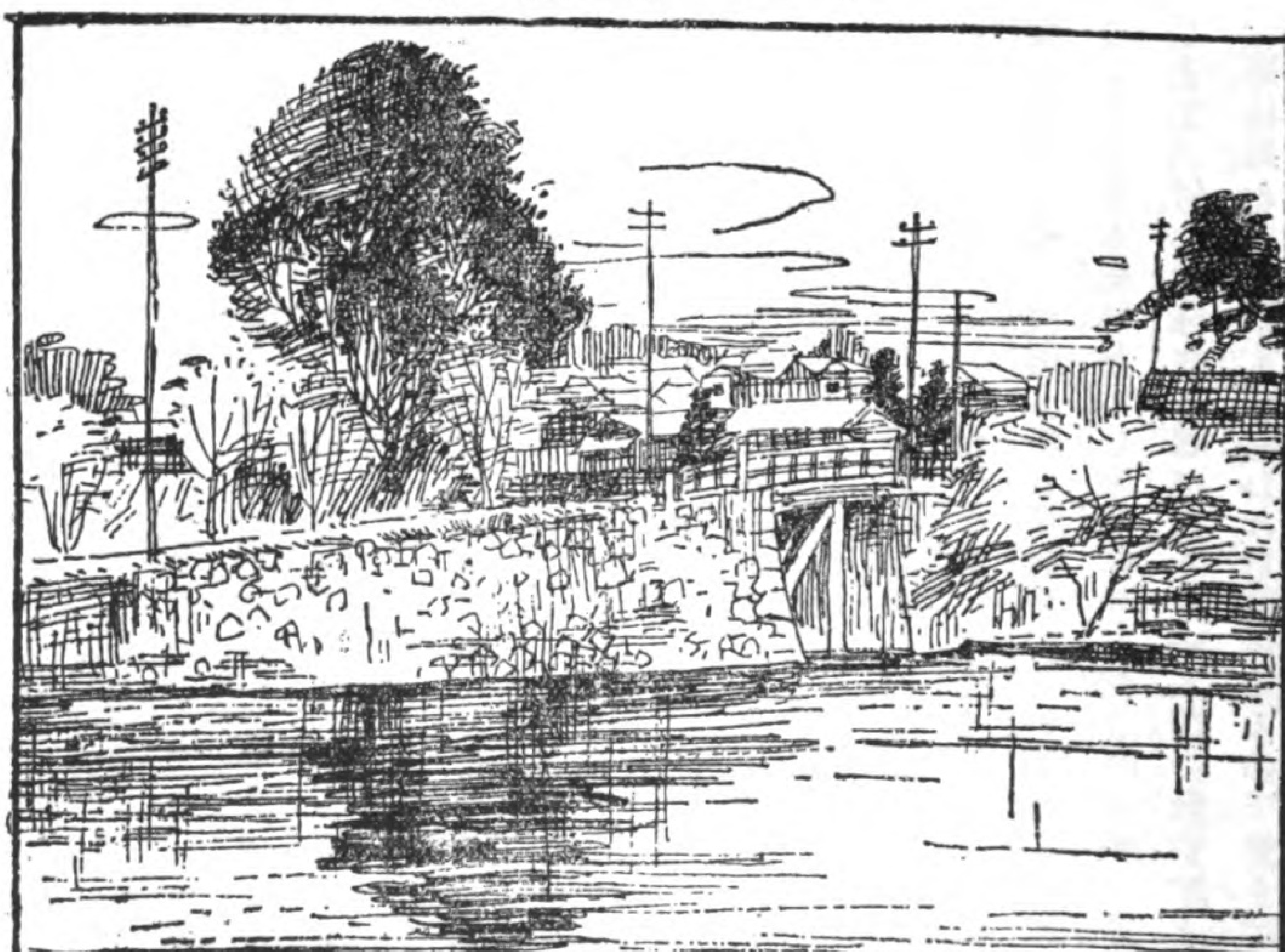
　併し其れは無駄です。不自然の壓抑を加れば却て本能の力は劇しく其れを反撥する、女學生の墮落するのは然う云ふ敎育の結果である。其證據には都會で毎日新聞種になる墮落女學生は凡て地方の女學校で壓抑を受けて來た女である。都會の女學生は學校の壓抑を忍ぶ程魯鈍で無いし、又家庭の方が學校よりも自由な空氣が行き亘つて居て芝居とか物見遊山とかで娛樂を取る事も出來るし、又自由に氣の向いた書物を讀む便宜もあるから、諸種の感情が都合よく緩和し調攝せられて、強ち一方に偏する危險が少い。地方の女學生は家庭も學校も窮屈で、年頃の娘に感情を平行に發達せしむる事を考へず、却て人の自然の感情から云つて餘り尊い事とも熱中すべき事とも思つて居ない割烹とか家政とか云ふ事に精力を費す樣に仕向ける。學校に在る間は屈從もして居るが、一たび都會の自由に觸れると恐るべき反動が生じ、一寸した男子の誘惑にも自制し切れずして墮落の一歩を作る樣な事になる。

×

　人は決して修身書にある樣な美くしい心許り持つて居る者で無い。噓を吐く心もある。他人の物が欲しい心もある。腹が立てば殺したいと思ふ心もある。名も欲しい。富も欲しい。飽くまで自己を發揮したい。斯

う云ふ心が一方に偏して發展すれば、監獄へも行かねばならぬ。世間から見捨てられて孤立し餓死もせねばならぬ。併し大抵の人は然う云ふ不利益であり不愉快である生活を望みませんから、他の種々の美くしい心と、此あさましい心とを取合せ、相剋し相調攝せしめて、どの性情をも平均に發達させ、何れも生活を面白くし豐富にする所の有用な材料に驅使する。即ち嘘を吐く心が他の性情と調和すれば藝術の創作ともなり、外交や商業の上の驅引ともなります。窃盜をする心も國家の利益の上に調攝せらるれば占領となり分捕品となつて立派な事の樣に云はれる結果を來します。又戰爭で人を殺すのは個人の殺人犯と違ひ却て名譽の樣に云はれる、其等の是非は姑く措いて、兎に角何人にも溫良恭儉の心と共に放辟邪恣の心のあるのは事實で、露骨に云へば人は何時でも墮落する素質を一面に備へて居る。唯生甲斐のある、面白い、深い意味の籠つた生活を營まうとする心掛の人は、自己を飽くまで尊重し、高く構へて、各の性情を善用の出來る樣平均

市ケ谷見附



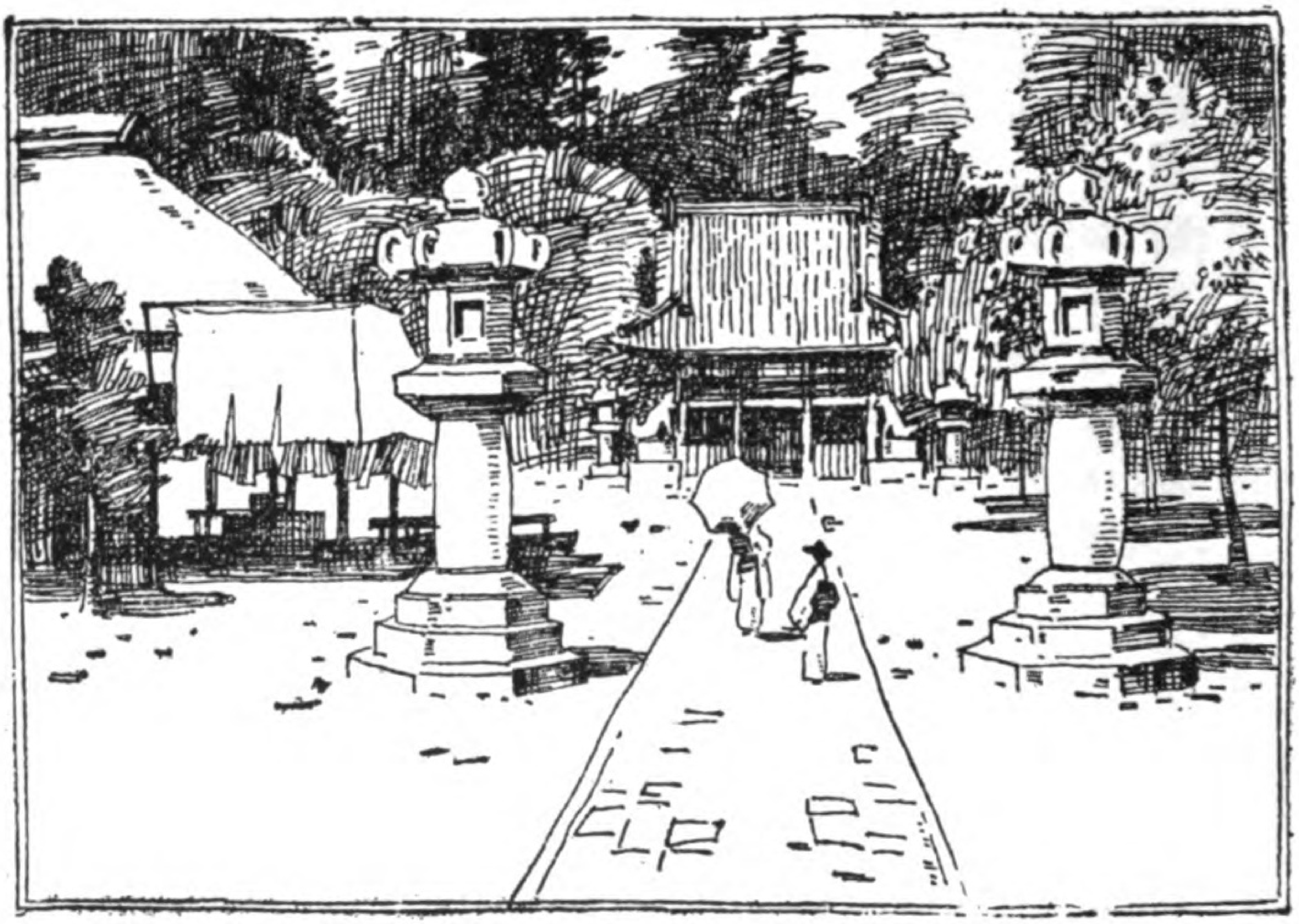
に陶冶する事を知つて其れを實行するのです。かう云ふ全人格の完成と云ふ事を土臺にする教育で無ければ、大學を出た乞食、女子大學を出た醜業婦乃至下女を養成する樣な結果を生ずるに至るでせう。

×

良妻賢母を作る前に立派な娘を作れ、立派な娘を作る前に立派な人を作れ、とは二三年前から自分の述べて居る所ですが、五月八日の『毎日電報』を見ますと、知名の女子教育家が期せずして何れも同じ樣な事を述べられたのは善い所にお氣が附かれたのを喜ばねばなりません。先づ學習院女學部長松本源太郎氏は『熟ら考へると良妻賢母主義は枝葉である。先づ人と成れ、女子も人間なりと教ふるが教育の根本である』と云ふ意味を述べられ、女子英學塾 長の津田梅子先生は『頭腦のある女子、即ち人間としての本務を盡し得る女子を作るのが私共の主義です』と述べられ、女子高等師範の下田次郎氏は『境遇と腦力の許す女子は宜しく高等教育を受けて健全な頭腦を發達さす事。今後の女子は「眞の我」を知らねばならぬ』と、述べられ、次には良妻賢母主義と家政科とを以て富豪の父兄に媚びて居つた女子大學長の成瀨氏、常に僞善の假面を被つてゝしら〳〵しい道德家の口吻を絶たない三輪田元道氏までが『女子教育を根本に歸せよと叫ばざるを得ない。素より日常家政の智識を捨てよと云ふのでないが、先づ其れよりも婦人を人間として教育し、婦人自ら人間の趣味を解し得る樣、眞に生命ある人格教育、第一義教育を施さねばならぬ。（成瀨）

『標榜して來た良妻賢母主義は何うしても物足りない。女子は生涯を通じて女子の眞面目を發揮させ婦人の本能を盡さしめ、女子の一生を最も有効に暮して貰はねばならぬ。』（三輪田）と述べて居られる。斯樣に賢母良妻主義が沒落して女子教育の方針が根本的にならうとする兆候を示して來たのは何よりも嬉しく感じます。併し諸先生の述べらるゝ『人間の教育』と云ふ事は果して何れ丈徹底した意義があるのでせう。

目黒不動



諸先生が一時の場當りを云はるゝので無くて、之を實際に行はれる自信があるのか何うか。果して之を實行せらるゝものとすれば、日本の女子教育は明治四十三年を以て一大變革の端を啓く譯になるのですから、勿論其れを私は喜ぶ一人ですけれど、同時に大層不安に堪へないのは、何人が其變革の釆配を振られるか在來の女子教育家諸先生の中では外から見た所で『人間』をよく理解して居られ相な人格の人に甚だ乏しい氣がして成りません。

×

わたしは成瀨女子大學校長が學校でせられた修身科の筆記を人から送つて貰つて讀んで見た。氏は其中で自己を吹聴して、哲學書を大抵讀み破つた積りだが一向に詰らない。古今の宗教も研究し盡したが矢張同樣である。文學書に至つては東西共に男女の痴情を綺麗なる言葉に綴れるに過ぎない』と云つて大層得意相に見受けられる一節があつた。氏を以て多數の女子教育

家の人格を推斷するのは失禮ですが、氏の如き淺薄なる頭腦の俗人が要路を占めて居られるのを見ると、女子教育の改革は學制の變更よりも先づ教育者側の人物から取替へねばならないであらうと云ふ事を染々と感じました。

×

潜航艇が沈んで死者を出した。女優學校から墮胎犯の婦人と男爵澁澤氏の妾とを出した。犧牲と云ふ點に於て私は此二つの事象を同樣に見て哀み且つ惜む。

×

わが見るは、人の身なれば
死の夢を。砂漠の中の
青びれし月の如くに。
又見るは、女にしあれば
消し難き世の中の夢。

×

しちめんだうな主の宿を
忘れて二人囃しごと、
ひやろ、ひやろ、と囃しごと。
お氣に入らずはお主樣
お叱りなされと囃しごと。

×

尋常小學の二年生である長男が、何時の程にか漢字を三百字近くも知つて居るのに氣が付いた。或るむつかしい字などを母よりも善く知つて居るのに驚く。わざ〳〵教へたのでは無く、兩親の机の側へ來て目に附いた字を問うたり、假名附の雜誌を拾ひ讀みしたり、訪ねて來られる學生達に教へて貰つたりして覺えたのである。小兒の頭へ樂に漢字の這入つて行く事は世の教育者が心配する樣な者で無い。新しい文部省の讀本にもまだ〳〵漢字が足りない樣に思ふ。

×

わたしは五歳になる雙子の娘を持つて居る。妹の方は勝手に唱歌の様な物やお伽話の様な物を作つて姉に聞かせる。姉は少しも作る事が出來ない代りに、妹の作つた物を、其處が變だとか何處が面白いとか批評する事が巧い。聞いて居ると其批評が中々當つて居る。文學で云ふ作家とか批評家と云ふのも之と同じ様に天性に由つて定る事であらう。併し何うも創作的な妹の方が豪い様である。姉の方は作る事が出來ないので止むを得す意地になつて妹の缺點を探す位地へ廻つた様な氣がする。大抵の場合批評家は弱者である。

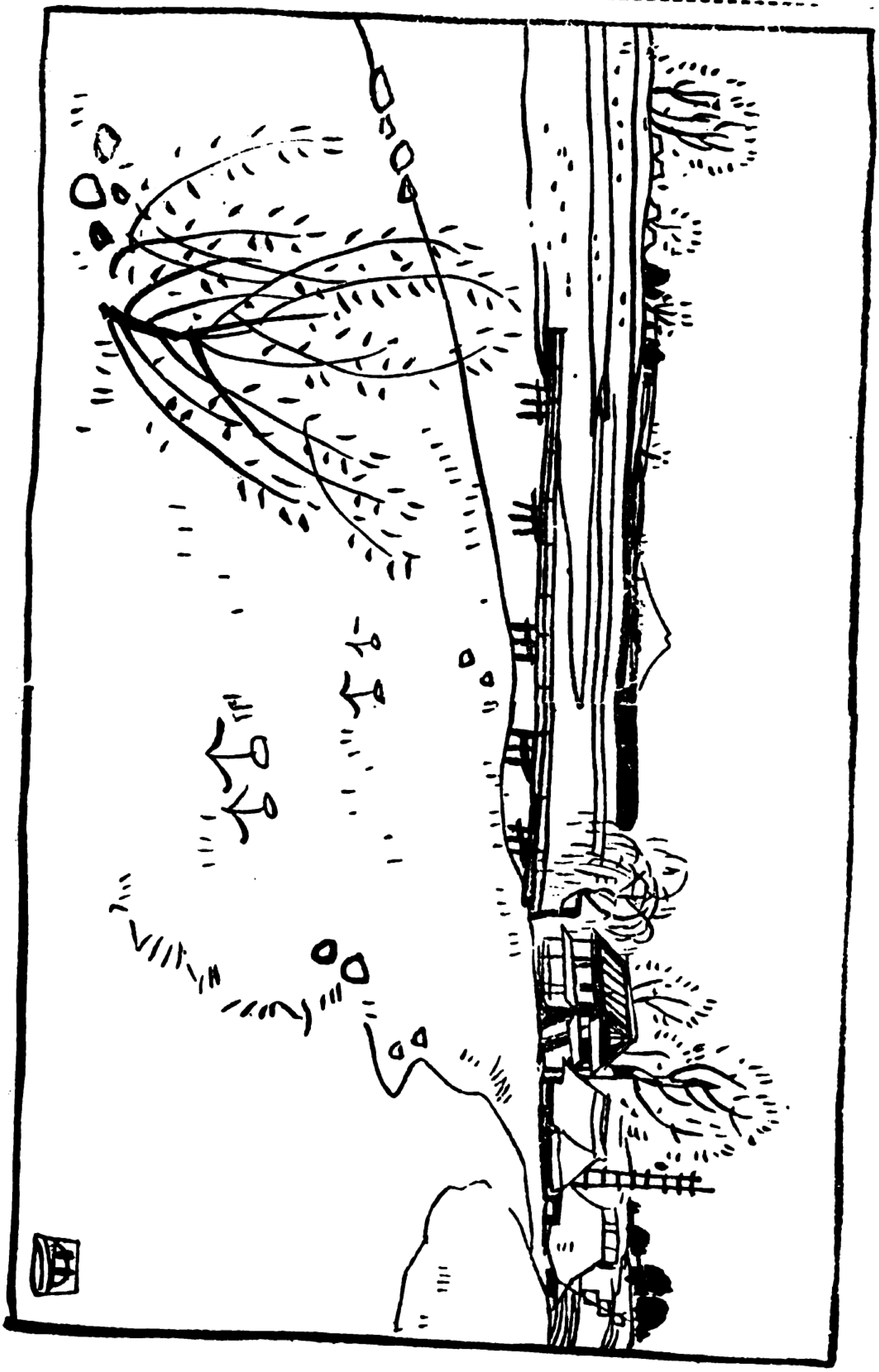
ネパール國の奇習

◎ネパールと云へば印度の極北に位し、ヒマラヤの南麓に沿うて、西藏と境域を接する人口二百萬位の一小邦なるが、この國にては今日猶ほ文明國人の思議する能はざる面白き習慣存在せり、過般同國王は王妃の病氣快復を祝する爲め、其體量と同量の黄金を配下の貧民に配與したる由なるが、元來貧困にして生活の程度低き同國民は、之が爲め當分の間飽食暖衣するを得たりと云ふ。

◎ネパール王は從來王室の慶事、例へば國王自身の病氣快復の際、或は王儲出産の場合等には、其慶事に最も關係ある者の體量と同量の黄金を汎く國民に分配して祝意を表するの例なりしが、一時危篤に陷りし王妃の重病快癒を祝せんが爲め、扨てこそ今回の擧に出でしものなりと、而して王はこの惠與を企つるに最も意を用ひ、王妃の床拂ひせし後直ちに之を擧行せずして、其の充分に健康を増し體量を加へし時を待ちたり、是れ成る可く惠物の人民に厚からんことを軫念せしに由る。

◎この黄金を惠與するには古來の儀式あり、ネパール國王妃は容姿典雅なる小柄の方にて、皮膚も左まで黑からざるが、縫箔したる絹袍に燦爛たる寶石を飾れる王妃は、先づこれが爲め特に保存せられたる天秤の一方に玉體を下さるれば、天秤の他方には王妃の體量と等しく平行するに至るまで金貨は山積せらるゝなり。

◎かくして量られたる王妃の體量は、結局百五十封度にして、之と同量の金貨を我が貨幣に換算すれば、八萬三千八百餘圓に相當すこの金貨は國王及び王妃直接の支配の下に貧民に分配せられたるが、其貧民はネパール國の各地よりこの儀式に參集せる者にして、貧人民等は何れも金貨を惠與せられし外に、夫れ〳〵饗應を受け、且つ服地をも賜はりたり、左れば國王王妃兩陛下に對する感謝の聲は實に天地を震動せんばかりなりしといふ。





世態の觀察

若き女の友

河岡潮風

▲熱海は曾遊の地なり。一度淹留したしと願ひしが、圖らざりき病骨を持して、濤聲を聞く身とならんとは、四月十一日早稻田の大場秦雄君と伴ふて、京の春に背きて豆南の村に去る。春風 春水 歡を呼ばず、三十里ゆられ〳〵て、青木館の客となる。暮雲、細雨を齎らして、一灣の風光 傷心の色あり。わづかにビールを酌んで疲を慰す。

　二人して湯治に罷る花曇り

　子は花に草紙を干すや西日さす（十一日）

▲脚を病みたれば階下に室を占めたれど、裏の障子あくれば崖。眼下に淺野侯別邸の櫻を見越して熱海の海の碧見ゆ。大島は右の方魚見崎のはづれに僅かに覗き、初島は眞正面。日の出は左の方横磯の方角に現はる。緑樹と紅花とは山の眺めよし。白波と青松は海の趣をあらはす。快晴の日など特に氣ものび〳〵して歩して見ばやともおもふ。奇勝、社寺、物うる店みな方十町のうちに收められたるを（十三日）

▲湯にはあまり浴せず。徒然を語學研究に費す。オットーの獨逸語教科書、原口氏の清國官話、山口氏の佛蘭西語獨習などトランクに入れられたるもの也。大場君は蘭語を知れりとて教ゆ。獨英の雜種語の如し。日本にて蘭語知るもの二十人に滿たず、辭書など求むるは先づ不可能の位なりと。蘭語入りの俳句（寧ろ怪句）を試む。（十四日）

　ブリーフ（手紙）に温泉の花封じけり

　麗らかやメスエ（小娘）の歌ふ岩の鼻

▲かねて買ひつけの某店より繪はがきを取りよせて頻りに文を認む。海岸にある松を俗にお高の松といふとかや。金色夜叉の貫一が恨のあと也。一月十七日の

月が曇るか曇らぬかそれは知らねど、熱海に此小說の評判はステキにて下女も下男も讀めり。三軒の貸本屋金色夜叉だけはいつも翼がはへて飛んであるいてゐるといふ。傳ふる處によれば、當時富山は熱海ホテルに、お宮母子は富士屋に泊しゐたりなど。さても〳〵（十五日）

▲室はたゞ八疊のみ、故に方丈日課といふ——午前五時眠ざむ、緣に出でゝ深呼吸。日ごとに衰えゆく春をあはれむ。朝暾躍つて浪より出づ。ミルク入れ紅茶とパンにて朝飯、讀書、執筆、作歌。九時國府津行きの汽船見ゆる頃、東京より新聞、郵便物着す。

正午晝食、折々ビール小壜を倒す。

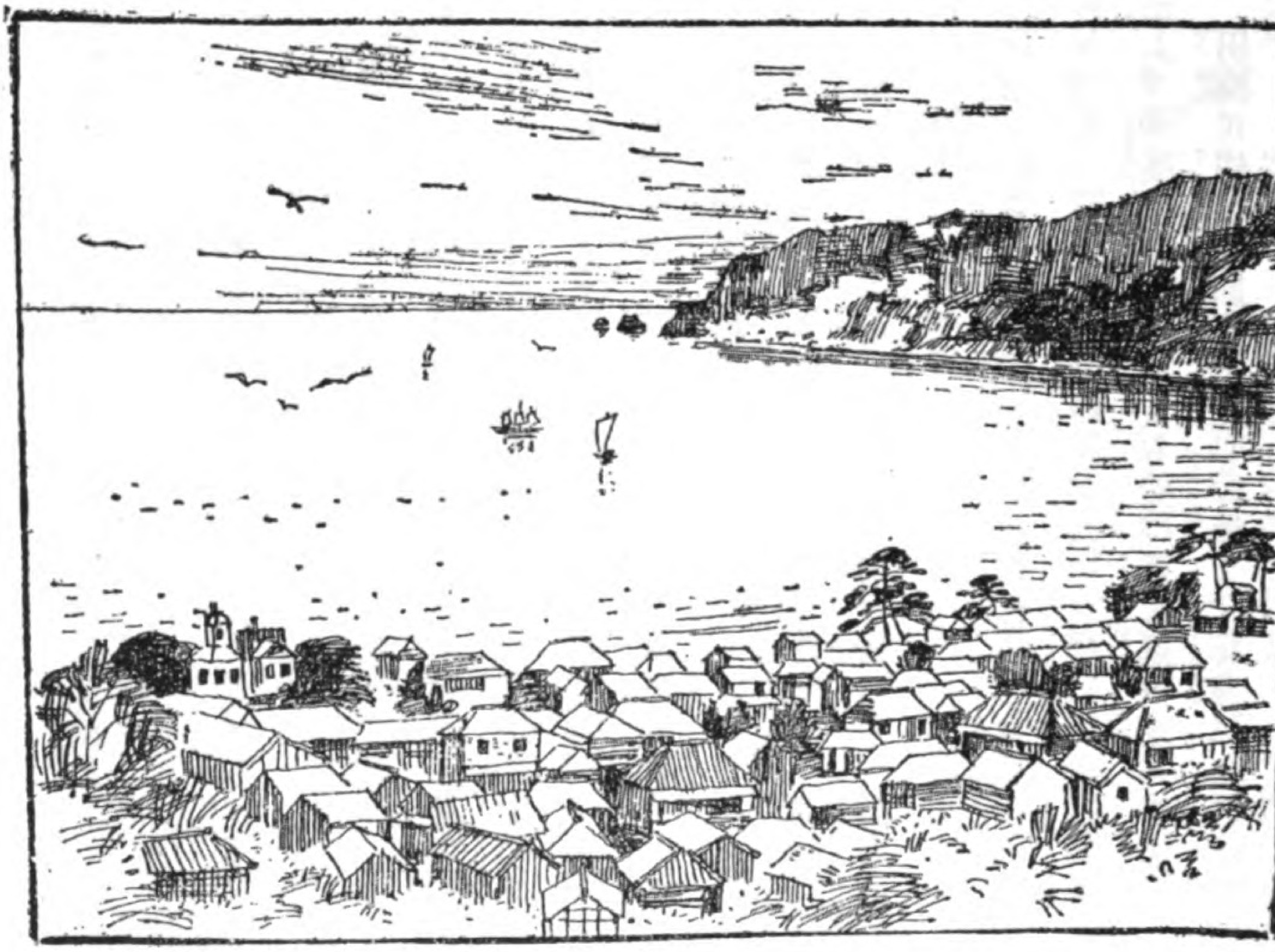
午後、讀書、執筆、詩吟、晝寢。四時すぎ、關西地方の郵便到る。六時夜食、心地よき夕ぐれ、磯に寄る波ひらり白し。歌俳などつくる、蛙頻りに鳴く。

夜、專ら執筆、戶外は薄月夜。みゝずの歌と、流しゆく三味の音波と、濤聲と松籟と。

十時、下男に助けられて入浴、これで身の皮一枚剝いだ心地。明日の日課を考へおきて快眠。夢は四方にかけめぐる。更たけて夜航船の汽笛斷續するを聞けば何となく淋し。（十六日）

▲新柳紅花、海潮の碧を壓して窓外を飾る僅かに旬日。一夜春風地を捲いておこり、紅謝し、稚綠老いてまた前日の眺めなし。海ひとり依然、悠々と空飛ぶ雲を浮べ不斷の樂を奏す。人は須らくこの姿を學ぶべき也。花の盛時短かく、新柳の色忽ち褪め、秋を待たで搖落するに似る勿れ。偉人達人は海也。美人才人は花也、柳也。少ない哉世上、海に倣はんとするの人（十七日）

▲夜深うして樓上絃歌しきりにおくる。十一人組の若者藝妓をあげて騷ぐなりとぞ。嬌喉蠻聲交つて浪音を壓す。古人が金の逃げる音と云ひけむもうべなる哉。三味線ひく手のあたりより、四方八方へ、銀貨、銅貨、白銅貨の飛散せる漫畫かゝばおもしろかるべしとおもふ。人生春に臨まば享樂する又た可也。彼等は農事の最も閑なる時を利して、この保養を爲せるのみ。寛大



病める潮風の朝夕嘯く熱海の浦

に見てやるべし。われは寧ろ遊ぶ時に遊ぶ彼等を愛す（十八日）

▲隣室にあるは脊髓病の十歳の少女と、その母と弟なり。同病の誼を以て、溢るゝばかりなる同情を注げり。夜更くれば兒、頻りにうなされてたわいもなく泣き、朝となれば母に倚りて上圊す。

「カーチヤン、モーイヽヨウ！」

「澤山おしなさい」

「カミチヨーダイ！」

この問答は遠慮なく、歌おもふわが頭を亂す。人はみな小時かゝる問答をなしたる也。來往途上、紳士淑女を見てその外貌の美に打たるゝ勿れ、彼等のモーイヽヨ時代は如何なりとするぞ。

うべなり。小時よりのあらゆる性癖弱點を知れる父母の眼には、英雄も美人も、依然としてモーイヽヨ時代の小男小女のみ。豫言者が郷に尊まれざるも、郷黨の父老にモーイヽヨ時代を知られてゐるからなり。（十九日）

▲温泉の町の熱海。工業的製作物なき熱海。アテにならぬ人の財布をアテにせる熱海。氣候よき熱海。眠れる熱海。平和なる熱海。不具病者、見え坊の集る熱海――一語につくせば「お目出度き熱海」

學校は小學一つのみ。それ以上は他郷に出づ。中學を卒へしもの幾人。女學校卒へしもの幾人。高等教育を享けしもの、過去に於て唯一人。現在三四を算す。

巡査八人によりて町の安寧は立派に保れつゝあり。時々エハガキ屋の店に立見して油を賣る集配人によりて、郵便は配達されつゝあり。

一般の娯樂場は一寄席あるのみ。名物は「嬶天下に西の風」明けても暮れても浪の音。健にして賢なる者には、單調豈たゆべけんや。

村娘も野童も少し氣の利いた者はみな東京の天を望めり。女は歌舞伎座の銀燭を慕い、男は丸の内の大を想ふ。一度出鄕したるものは復た還り來らずと。

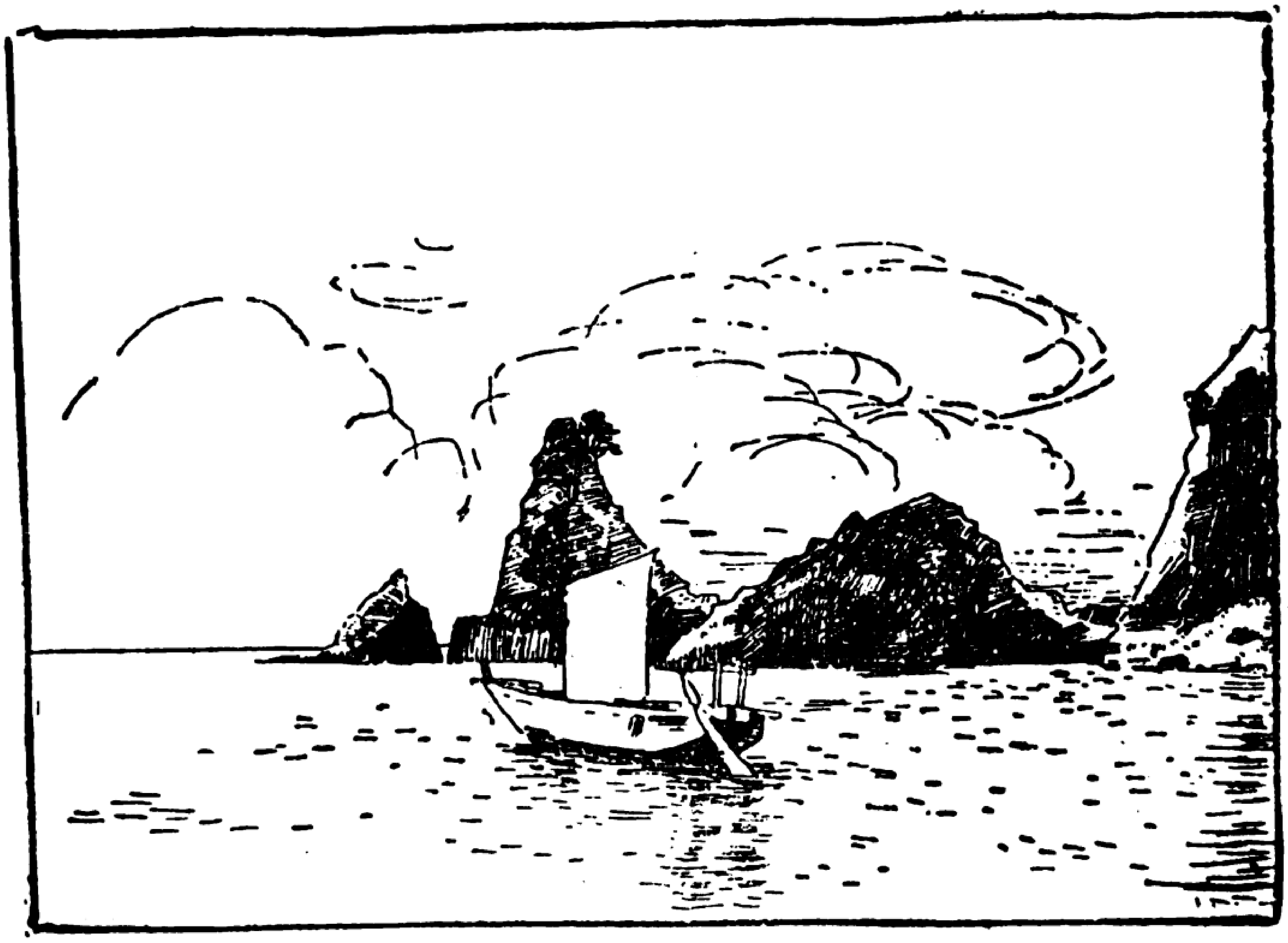
田園に住めば肉に生きし心地す。都會にあれば靈の甦へりし感あり。僕の如き想界の住人は、矢張渦く紅塵中に、嚙みつく如き電車の鈴と、自働車のガソリン爆發の音響の中に息つき、成長し、娶り、働き、子をもほけ、老、病、死、而して一片の墓標となるべき運命を有せる也。（十九日）

▲六號潛水艇引き上げられ、その職に殉じたる顚末、佐久間艇長の手記によつて分明となる。迫り來る死の神と鼻つき合せて、筆をとりたる沈勇は日本武士道の精神を發揮して餘なし。而して余は其文の必ず名文なるべきを想ふ。いまはの際に臨み、限りある時間に書き殘されたる文は、辭簡にして意永く、言外に情趣躍動するものあらん。不治の病にとりつかれし文士の筆、惻々人を動かすも同じ道理なり。かの文句のみ華かなる女學校卒業式の答辭とは失禮ながら大分趣が違つてゐる也。（廿日）

▲隣室の主婦三十二三。デブ〳〵と太りたり。ピッコの幼女の病を護して來れる也。よく辯じよく笑ひ、快活らしくして實は大の迷信家也。加持祈禱を以て子の病ひを癒さんとて、毎日の様に異なる怪しき術士

を伴ひ來る。狐樣のお告に三年前孕みし鼠を殺せしが祟りしとあり。その拂ひをすべければ、腹の大きな鼠を書きて給はれと、僕を困らせしは一昨々日也。護摩を燒きて祈禱せしは昨日也。今日はまた二里山越して新らしき人を迎へ、痛がる子の足を引つぱつたり、揉んだりして泣かした揚句、その男に、貴女は七十二歳の十二月二十三日まで生きるなど、タハイもなき託聞かされて大喜び也。僕はかの幼女の不幸を憐まざるを得ず。淨瑠璃の累の文句の所謂「お情すぎて情ない」とは此の種の親の情に對する言葉也。(二十一日)

▲給仕に罷かりし宿の婢とらへて、熱海の事何くれとなく問へば、よく色々お尋ねなさいます事と驚きていふ。眞事、記者眼を以て見んとするは僕の習癖なり。珍とすべきにあらず。企業家は旅行すれば、景色もろ〱に見ずして、その地に何等かの新事業の餘地なきやと、鵜の目鷹の眼、蚤とり眼をなすを常とす。人おのおの天職あり。詩人は花鳥を謳へ。畫工は青山碧海を寫せ。僕は活動せる熱海そのものゝ本體を知らむとす。



熱海の魚見崎

僕は一生記者的眼光を以て世態を觀るべき權利と義務あるをおもふ。(二十四日)

▲わが宿、少女に富む。曰く「ろく女」十四歳。曰く「たき女」十一歳。曰く「きく女」九歳。みな可憐の子等也。朝は學校にゆくまで、午後は三時頃より、枕頭に嬉戲す。時に草花を摘みて齎らし、或は歌うたひなどす。予に材をとりし我流の三十一文字、毎日の日記にのぼらざる日なし。

　新聞を持ちて來し子をよびとめて
　　壺の櫻をかざしてやりぬ

病み臥してすでに百日娘らの
　　摘み來し草をつくづくと嗅ぐ

小娘と都がたりをしてあれば
　　おぼろの月は海に出でけり

隣室に男の子あり。七歳これもお友達の一人

よく船の笛の眞似する子をよびて
　　冒險譚を聞かす湯の宿

熱海小學校に通ふ小男小女、名は知らねどもよく馴れたり

　手風琴ひけば崖下ゆく子らも
　　歌うたうなり春雨の窓

老人は家庭にあつて道具の一つ。主人は大黒柱。主婦は床の間の置物。兒女はピアノ。オルガンの代用するものなりなどおもひ見つ。(二十五日)

▲喜怒哀樂の七情も、極度に達しては左までに感せぬものなり。あまり嬉し過ぎてポーッとするは聊か物足らねど『あまりの事に腹も立たぬ』とか『泣くに涙も出でざるべし』などいふ文句もあり。勝利の悲哀といふもこゝの消息に過ぎざるべし。病氣なども一ねたり、ねたられたり、恨んだり、泣いたりするは最初の事。その度重なり、痛苦加はるに於ては別に大して不幸とも感せず、何とか理窟をつけて自ら安んじ、狹少なる範圍に相應の樂みを求むる樣になるものは自然の數のみ。世の中はよく出來たもの。神は人に絕體の快樂を與へざるとゝもに絕體の苦痛を與へず。(二十六日)

▲欄外は畑あり。大麥の浪、桑園の幾うねり。蝶舞

霞ヶ関の御用邸



ひ、名知らぬ鳥遊び、仔細に見來れば、こゝにも宇宙の一部の動けるを知る。今日は快晴、五十に近き農夫一人、朝より夕に至るまで鋤を捨てず、時に赭黒の額をあげて、靑山を望み、また兀々とその手を働かす。怠惰なる都人士がノラクラする時も、彼等の手は憩はず。營々として稼ぎ、而して得る處幾干ぞ『誰か知らん盤中の食。粒々みな辛苦――』あゝ感謝せざらめやは、肥料の臭にだも眉を顰むる輩。遊食の徒。恥ぢざらめやは。(廿七日)

▲人生到る處悲劇あり。喜劇あり。悲劇のみ眼底に映ずる者は、その落寞傷神の光景にたへかねて極端の厭世家となり、喜劇のみを網膜にうつる輩は、その歡快放心の事毎に魂とろけて、皮想の樂天家となる事比々みな然り。何んぞ知らんや。世態複雜・悲劇の裡に喜劇あり。喜劇の裏に悲劇あり。悲喜まじる人生の大ドラマ。泣かんにはあまり多くの滑稽あり。笑はんにはあまり少なからぬ哀傷あり。こゝを以て達人は達觀す。達觀すれば喜劇も悲劇も夢の世の夢のみ。厭

世の樂天のと旗幟を樹つるに及ばざるべし。見よ月は永へに澄む。古歌にいふ「かくすともかくされたりと思はずに、月は雲より上に澄みけり」

この超越せる態度ありて人は始めて偉大なるを得。世名を求めんや。富を求めんや。死生貧富、一の如し。吾は永へに吾なるを。(二十八日)

▲給仕の女に新着の女學世界貸して飯くふに、目次の近所の廣告を一目見るや

「アレあの「いやな御令孃」が!」

話を聞けばかうなりき。

去る三月末より四月初めへかけて約一ヶ月、此宿の向い側鈴木旅館に噂の種となる娘ありけり。年は十七か八か。近うよれば、眼の少し變なのに氣がつけども、遠目には立派な今樣美人。それが每朝二階の廊下に鏡臺持ち出して化粧するなり。籠より出すわ〳〵白粉、香水、化粧水なんど七八本と取り出して塗つたり剝がしたり、兩肌おしぬいでの大所作事、約一時間。あちこちの宿より書生などがのぞくも心にかけず、悠然として身じまいを終り、品よきマガレットこれ見よとばかり、紫勝つた被布きて、白きショールをかけ、緣の籐子に腰打ちかけ、天下の男子をこの眼で殺さんと澄し給へるには、アッとばかりにてものが云へず。しかも驚きはこれに止まらず。

孃樣にはおつきとては下女一人。たゞさへ呑氣なる湯の宿を、こわいものなき二人の氣樂さ、朝つぱらから二人して姉妹の樣にふざけるを、佐賀縣人の書生數人して、手ん手に鏡を以て日光を反射さすれば、姫御前のあられもなう

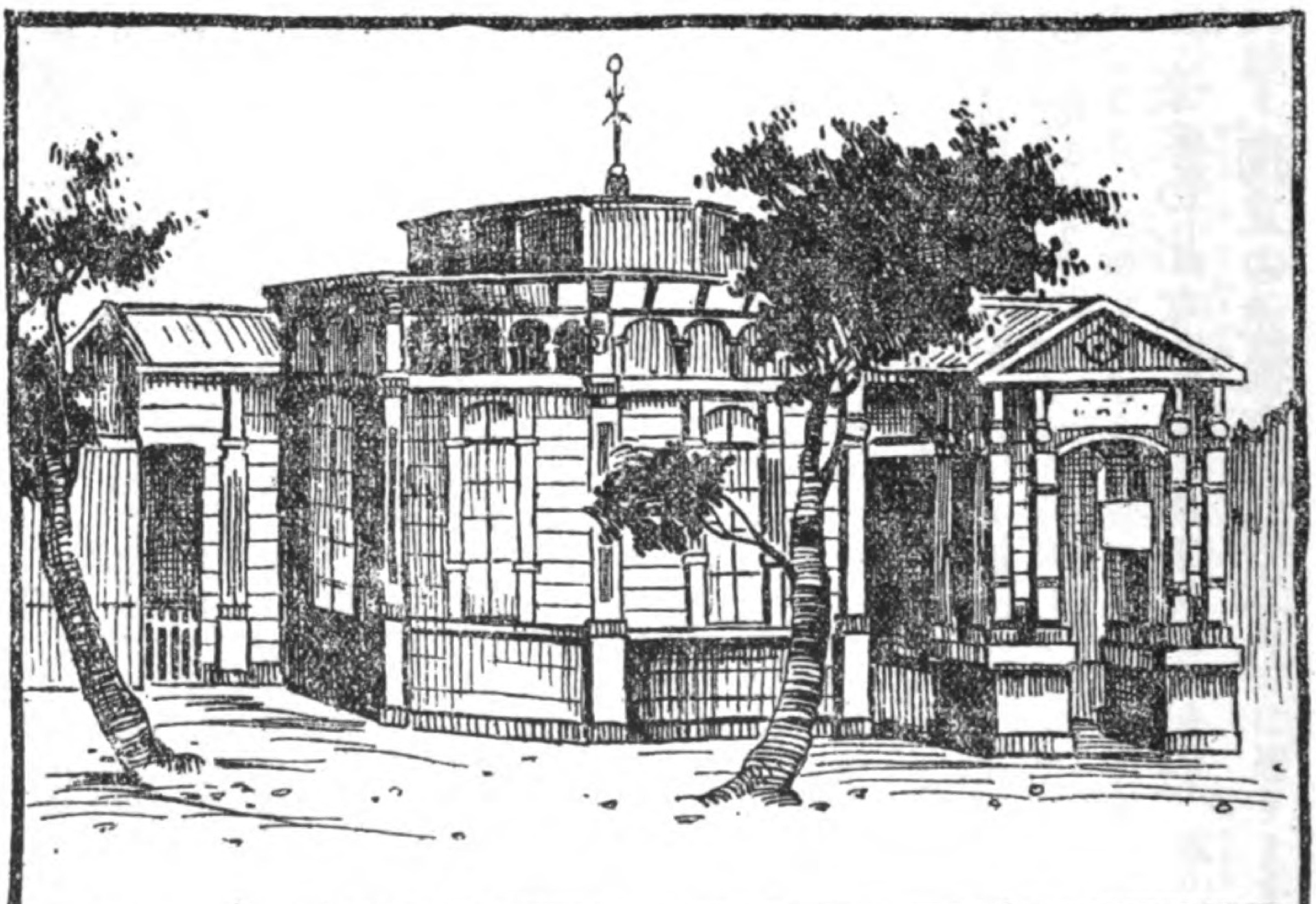
「いゝ事よ、おぼえておいで!」

夕されば、かなたの部屋に西日やさすめり。今度は二人して鏡を取り出して男の部屋に復讐するなり。その大膽さ、この邊の人みな呆れて、仇名を「いやな御令孃」と申上げゝるとて語る。

僕は笑つて語らざりき。かくの如きは明治令孃鑑のうちにも多きを、何ぞ今めづらしがるべきや。この父、何とか武藏と云ひけむ劍客と同姓にて神田あたりの醫

師なる由。これだけ錄して、天下かゝる令孃の嫌ひな男等に間違つて嫁にとらぬ樣注意しおく、(二十九日)

▲ギリシヤの哲學者、エピキユラス曰く『吾に麵麭と水とを與へなば、享樂、天帝にゆづらざるべし』と、余はこの語法を借りて言はん『吾れに書籍とペンとあらしめなば、歡樂、王侯にゆづらざるべし』と、余や病めるも頭と手は健也。平生空しく積みおきし藏書に朱を入れ、書かんとして能はざりしものを草するは、賜として感謝おかざる所、一年半年かくてありともいかで倦怠をおぼえんや。余は多忙也。永き日の春の日が短かくてならざる也。花咲くも月照るも鳥歌ふも、風薰るも何羨ましからん。花鳥風月は明年もまた今年の如くなるべし。たゞ惜むは青年刻苦すべきの時、空しく暮れて夏となりぬる事是也。徒らに儘ならぬ身を思ひ惱まんより書を開かん哉、ペンを執らん哉、書中不斷の花月あり美はしとも美はし、筆端よく煮世に物いひ、風雲を捲かん。余は幸なり。余は樂めり。天、この病を余に下して、余が志を成さしむ(四月三十日)



深川の圖書館

女子の高等教育の効果を立證すべき私の感心したる二婦人

森村組頭取　森村市左衛門

女子に、高等の教育を受けさすることは不必要である、女子には高等の教育はいらぬと論ずる方もあります。これはどの邊から割り出した見解か、私は實に了解に苦みます。世界人類の發達進歩は、男子女子に拘はらず、一に教育にありといふて差支なからうと私は信じます。教育は、人らしい人を造るの仕事でありまして、近來歐米ともに其の改良に熱心し、都ての學校教育の面目を新にして來ましたのは、世界の人々が、教育の結果の空しからぬを證認した事實でありませう

女子も近來は、殊に、人類としての天職を盡さなければならぬ時勢となって來ましたが、或る人などは、唯漠然と賢母良妻主義に限ると申し、其の實、臺所の事、裁縫、家事から、舅姑に事へ、夫に貞操に、子女を良く教育する樣にと望みながら、實際其の設備の無い學校位を卒業したゞけで、それが完全な賢妻良母になれることゝ思ふて居るのは、甚だ不安心でありますまいか。女子が、人となりまして後ち、子女を家庭で教育するにも、又家庭を整理するにも、事々物々、相當の判斷力が發達してませんければ不可能のことであります。これは只書物にばかり依賴しましたのではだめであります、どうしても良先生について、直接に其の教を受け、其の薰陶感化を受けるでなければ、人らしい人となることはできませぬ。この事を仔細に述べますと、議論に渡りますから見合せますが、實際教育の効果と見るべき、女子大學出身の二人の例證を申して見ませう。

豪家の出ながら、雇人をも使はず、獨立の志操堅き新夫人

その一人は、三井一門の娘さんであります。何の何某令孃何子さんと姓名を明らかに名乘つてもよいですが、譽められる事にお名前の出るのは却つて御迷惑だとおもつてわざとさし控へました。年頃になりましたので、方々の豪家紳士から縁談が有りました。處がこの孃さんは、女子には有り勝な虚榮浮華を好みませんで、「私は、只、名門大家といふだけを望んで嫁入りますのは嫌であります。我が家の爲め、國の爲めになる人でさへありますならば、一書生でも喜んで參ります」と言はれて居りました。其の心がけが、世間普通の豪家の令孃とは違ひますので、老人側の人でも感心いたして居りましたが、こゝに、ある會社の社員、目下は小給者でありますが、後日見込のある人物で、後來必ず其の會社中の必要人物となるに相違無からうといふ青年が有りましたので、これならばと見立てゝ——試に縁談を始めました處が、終にそれが成り立ちまして、新夫婦ができました。

此の社員は、結婚後、米國支店づめとなりまして、夫婦ともあちらに赴きました。こちらに居りますとは違ひ、萬事不自由勝の外國生活であります。私の店の者なども、夫婦であちらに勤めて居りますものが、數人ありますが、何れも皆下女又は下男を雇ひまして、家事を助けさせて居ります。然るにこの嫁さんは、夫の薄給の爲めに、下女をおかず、肉類、野菜、何を買ひますにも、日々自身でバスケットを肩にかけて買ひ出しに出で、家ではコックもやり洗濯もやり、一切身一つで汗を流してをります。たとひ夫が小給でも里へいふてやりましたならば、數人の下女をおきましても仔細ないのでありますが、自分だちは自分の汗で生活すべきもの、兩親の脛をかぢるは大きな恥と覺悟し、賢婦の模範となつてをります。これが女子大學で、眞の教育を受けられた結果と信じます。

家屋を買つてやらうといふを辭して、學校に寄附した廉潔な新夫人。

今一人は、矢張東京の人で。位置有り信用有る方の令嬢であります神戸の或る會社員——下宿生活をして居りました會社員の處に片付くことになりました。元々、可なり相當の處へ嫁入のできます身分でありますのに、それを顧みず、此の小給もの〻處へ嫁いたのであります。初めから、「財産の如何は問ひません、男が正直で品行よく、職務に忠實でさへ有れば、望む所であります、財産は、



二人でかせぎさへすれば必ず出來ます」と申して居り、其の爲めにからだ一つの男へ片付いたのであります。

この新郎の母は、地方に居りましたので、結婚の爲めに態々神戸に出て來ました。そして、婚禮の濟み次第歸國いたす積りでありましたから、數日の後に歸りやうとしますと、嫁の申しますに、「何分若い者ばかりでは、家事不慣で困りますから、どうか御一緒に居つて、家庭萬

端のことを数へて頂きたうございます、又私一人では、日中さびしくも有りますから」と、衷心から勧めますので、老人も至極喜び、其まゝ同居して居りました。

世間の若い者が、舅姑と折合の善くありませんのは、大抵、新夫婦の間の愛情ほど、舅姑に愛情を盡しませんのや、善い教育を受けた人と今日の教育を受けた人と、思想上の相違等ありまして、それを闘はせますより起るのが多くあります。それを此の嫁さんが、舊思想の姑を愛し、姑を敬し、引き留めて家事上の師といたさうと申すのでありますから、普通の姑ならば、喜んで世話をしてくれ、家庭の圓満にいきますのは、當り前のことであります。

其の後、この嫁さんに、一子が生れましたが、倘下女をおかず、精の續くだけ働いて、一切の家事育兒のことを行つて居ります。

其の心掛けが、誠に美しくありますので、其の親類の者が感心いたし、家を買つて上げやうから、家を一軒持ちなさいと相談し勧めました。然るに、有りがたうございますが、私共兩人がかせぎまして、今に家を持ちますから、御心配御無用に願ひますといふて、ことわりました。が、其の親類が、たつて勧めますと、私の心掛がよいと仰有りますが、若し幾らでもよろしい點が有りますならば、それは母校のお陰でありますから、其のお金を女子大學に寄附して頂きたうございますといひました。其の親類の方は、愈其の心掛に感じ、初めに家を買はうとしました金額へ、猶多少の金を増し、金五千圓寄附しましたのが、終先日のことでありました。

これ等は、ほんの一例を申しましたゞけで、此の外にも同じ様な婦人が、私の親類にもあります、一々擧げるも煩はしいから申しませんが、此等は、皆、高等の誠の教育を受けました効果と信じます。女子に高等教育は不必要と言ひますのは、私には了解できません。

見合の爲めに二十五年辛抱する西班牙の風俗

前西班牙駐在　某外交官夫人

△悠長閑雅な國柄

西班牙といふ國は、今日歐洲の諸强國に比べて大分時勢に後れてゐる丈けそれ丈けその風俗は萬事悠長でありまして、私どもがあちらに居ります時は、何となく我が奈良朝時代といふのは、まアこの樣な工合で有つたらうかと、思はれました位であります。その中でも、男女の結婚が、世界に類ひ無い珍らしい方法で行はれ最もおかしくも有り、又殿方に少々氣の毒でもある樣な感じがいたしました。で、私の見聞いたしました結婚法の一通りを申し上げて見ませう。

△家庭の監督は嚴重

西班牙の首府マドリッドでは、娘さんに對して、父母の監督が中々嚴重でありますから、年頃の娘さんを獨りで戸外に出しますやうなことは、絶て有りません。又年若い男女間で、隨意に交際をいたす樣なことも勿論有りません、處で、青年男女の結婚は、どんな工合に成り立ちますかと申しますのに、先づ男子の方で、氣に叶つた娘さんを見付け、それに結婚を申し込みそれから短かくて二三年長ければ二三十年間も見合の爲めに空しく歳月を費し、その上で結婚式を上げるのが、一般の習慣であります。

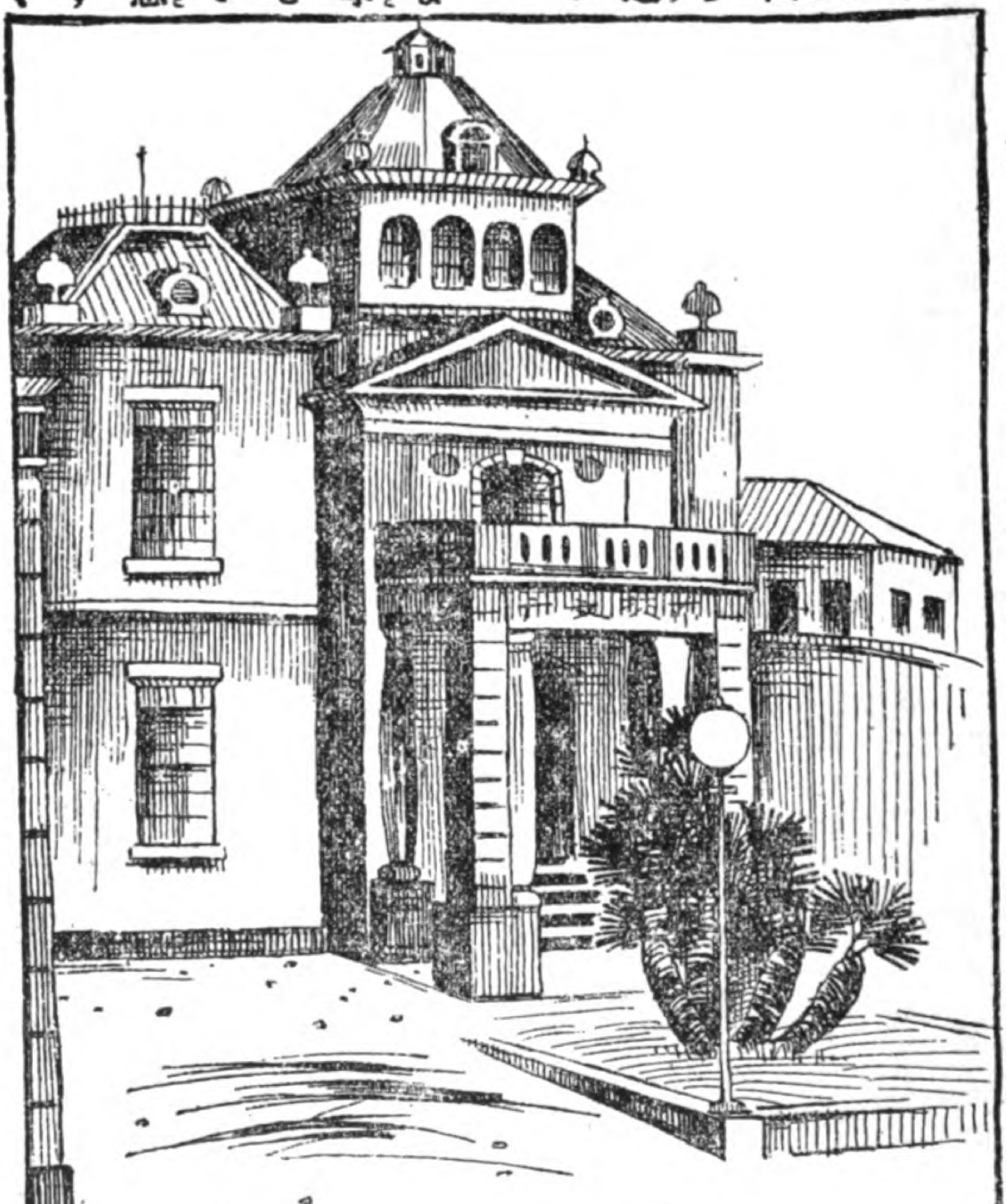
最初に、結婚を申し込みます時は、面識の有る無しに拘はらず、先づ其處の下婢などを手なづけまして、其の手から手紙を届けて貰ひますのが普通であります。これからが、噴き出しさうなのであります。冗談ではありません、實際の風俗であります。

△見合ひはいつも窓の内外、

手紙を受けました娘さんが、それに應ずる氣が有り

ませんならば、返事も出しませんから、それきりになつてしまひますが、多少氣が有ります時は、『午後の何時ごろに窓の下へお出でなさいといふ、意味の紋切形の返事をやります。この時間は、午後五六時から十時位までの間を選んで申してやるのであります。

此の返事を受けますと、男子は、何事をおいても、時間を誤らずに往き始めて意中の娘さんと、窓の内外で話をいたすのであります、併し、まだ〳〵婚約が成り立つのでは有りません、それからといふものは、照つても降つても、暑い寒いに論なく、其の時間を違へず、屹度窓下に往き、娘さんに逢はなければなりません、毎日のとでありますから、お話の種も盡きさうに思はれますが、盡きませんものと見えます。三四十分間話ました上で、娘さんの手の甲にキス位して歸るのであります。この窓下に通ひますこと、短くて三四年間、長い方では二十五六年も通つて居るのがありますが、それでもまだ婚約が成り立



南葵文庫

たないなどいふのも聞きました。

△第二期の見合は屋内にて

斯樣に、三年でも五年でも通ひまして、娘さんの方に、氣がありまするど、父母の許しを受けて、今度は家の中に入れます、これも矢張訪問の時間が定つてをりまして、窓の内外で逢ふと同じく、三四十分間づゝ面會いたします。尤もこの面會中は、父母のどちらかが、必ず其の席に一緒に居ります、男女直接に逢ふ樣なことは斷じて有りません。

この室内面會まで漕ぎつけました男子は、六七分まで成功したのであります。この行――私は之を行と申します――を、又半年なり一年なり勤め上げますと、双方とも賢愚善惡强弱其他のこと、明になりますから、いよ〳〵以て宜しいとなりまして、双方の兩親の許可を受け始めて結婚となるのでありますが、其の氣の永いこと、永いこと、お話になりません。

△窓の候補者と接見

私の居りました三軒ばかりさきに、小綺麗な娘さんの居る家がありましたが、毎日六時ころになりますと、そこの窓下に來て家にひッつき、上の方を見てゐる憲兵大尉の服を着けた男が有りました最初は、私共はそんなことは知りませんから、毎日々々何の爲めにお出になるのかと怪しく思つて居りましたが、後で分りました、夕方など町を歩きますと、あちらにもこちらにも、この窓の内外でお話をしたり、娘さんが二階三階に住居つてますと、上から下へ糸を下して、手紙をやりとりしますやら、双方手まねで話をしますのなどを、幾組々々も見かけましたがそれが、又國風ですから、怪しく思ふ方もありません。

娘さんによつては、六時には誰、八時には誰と定め、時間の衝突しません樣に、二三人に面會する方もありますが、男子の方でも亦、二人の處へ通つて居るのもあります、只、一旦娘さんの方から時間の通知を受け

ましたら最後、毎日參らなければならず、一日でも休む樣のことが有れば、それはもう破談であります。

△二十五年間一日も休まず見合に通つた陸軍大尉

その男がその娘さんの父母の友人でありますならば、直接に其の家を訪問しまして、時には其の娘さんとお話をいたすとも自由でありますが、娘さんの友人としては、女子を除くの外は、皆父母の居ります前でだけ逢ふのであります、私の夫の親しくして居りました家にも、娘さんが有りまして、そこへ三年半ばかり日參してゐた男の方が有りました。辛抱の結果、家に入りますまでに成りましたが、お氣の毒なとには病氣にかゝりまして、お亡くなりになりました。かういふ時には、又感心にその娘さんは夫の亡くなりましたと同樣に、定めの喪服を着けて居られたと、夫が申して居りました、その喪が明きましたならば、又第二



大橋圖書館

の候補者と、窓で逢ふのでありませう。
私の聞きました中で、一番永いのが二十五年といふのでありました、小野小町に通ふた深艸の少將などはおろかな事です男の方は四十八とかの陸軍大尉で、女の方も、四十を幾つか出て居るさうでありました兎も角も、二十五年の間、一日も休みなしに、窓の下へ通ふ方も、又通はせる方も辛抱の好いとであります。

△結婚は男子の大役

西班牙では、結婚をいたしますと、直ぐ新夫婦で新らしい一家を持つのでありますが女の方から持參金や何かといふことは、夢にも有りませんで、着のみ着のまゝで往くのが常であります。ですから細君の衣服諸道具から、臺處道具まで、すべて男が新調せんければなりません。で、實は、男の方から言ひますと、結婚いたしますには、相當の準備がいるのであります。縁談のまとまりますまでに、幾年とかゝりますのは、この準備期なのでありませう、又國風が斯樣な習慣でありますから、大抵、幾年延びるものと見ておけばよいと、初めから見込を立て、假令ば三十位で結婚しやうと思ふ者も、二十歳なり二十四五からなり、そろ／＼窓下の日參を始めますのであります。
此の結婚の一事で、國人の氣風の悠長で、大樣で、そして至極太平な一般が明らかに知れますが、住みましては誠に心持のよい國であります、其の代り今日世界の大勢に後れつゝあるのは、實に已を得ぬことであります。



私が日々行ふてゐる衣服の整理方

棚橋絢子

△着物に就ての注意

衣服に關する注意の中には、衣服の裁ち方縫ひ方もございますし、着方取扱ひ方もございますし、其他仕舞ひ方、洗濯、洗張、斑點拔の致し方もございます。此等の事を殘らず心掛けますことは、容易のことではないやうですが、已に婦人と生れた者は、幼い頃から見慣れ、聞き慣れ、仕慣れて、衣服の事といへば、何事にも後を取らぬやうにするのが、婦人の本分の一だらうと思ひまして、私共も衣服の事には、特別な趣味を持つて居るのでございます。

其の中特に之が仕舞ひ方即ち如何にせば永く保存し得べきかを申しますれば、畢竟衣服は、丁寧に取扱ひ、巧に整理し置くといふことが肝要です。私共は、どんなに忙しくとも、衣服は、ちやんと整理して置きます。

△疊み方と衣紋掛の可否

衣服は、どんなものでも、脱いだら、ちやんと疊んで置きます。晴着、ちよい／＼着の區別なく、外出に用ゐるものは、殊更丁寧に疊んで仕舞つて置きますし、不斷着であつても、ひどく垢の塗れないものは、夜寢ます時に、きちんと疊んで置きます。此の中、毎日着用しないものは、順序よく簞笥などに仕舞つて置きますし、又ちよい／＼着などは、別に、さう仕舞はずして、茣座とか疊紙とかに包んで片付けて置く事もあります。衣紋掛に掛ける方もありますが、私は斯る姑息の片付け方は嫌ひな方で、止むを得ぬ時には袖疊にでもしてちやんと仕舞つて置きます。若し偶々衣紋掛に掛けるやうな事があれば、きちんと上り下りのないやうにして掛けて置きます。掛け方がだらしないと非常に衣服を損め、且つ不體裁でございます。

△衣服の能く損むわけ

衣服を疊むには、皺を伸ばしたり、格好をする爲めに、火熨斗を掛けたり、霧を吹く事もございますが、御承知の通り、火が強いと地を損めますし、霧を吹き過ますと斑點を生じますし、種々の害がございますから、私共は脱いだら必ず直に疊むことにして居ります。さうすると、體溫の爲に、軟かになつて居りますから、思ふやうに疊むことが出來て、餘り手數が入りません。此の少しの手數を惜んで、時を經て疊みますと、前に申しましたやうな害を生じます。そして衣服を疊む時、特に注意しなければならぬのは、縫目に注意して、折目正しくすることとです。此の際、可い加減にして置きますと、今度着る時に大層醜いのみでなく、容易にそれが直らないものでございます。私共は毎日着て居る衣服でもちやんと疊んで夜具の下に敷いて置きますが、さうすると、翌朝大變心地好く着られます。これは古い方法ですが、最も宜しいやうでございます。

△簞笥に入れる時の注意

衣服を仕舞ふには、普通簞笥に入れますが、此の仕舞ひ方には、仲々規律と秩序が必要であります。即ち絹物は絹物、木綿物は木綿物、綿入は綿入、單衣は單衣といふ風に重ね合はせて置くことは、保存上にも宜しく、又便利でもあります。此のやうに部類分けをして高低もなく長短もないやうに揃へて置くのです。固い物と軟い物と重り合つたり、短い物と長い物と重り合つたりして居ると、第一出入の拍子に衣服が損みますし、體裁も惡うございます。そして曳出の側の方が少し透いて居れば、其處へは、帶上とか、帶止とか、腰帶とかいふやうな細かい物を入れ、大分廣く明いて居れば、普通の帶などを入れます。

申す迄もなく好い衣服は、風呂敷などに包んで仕舞ひ、少しく汚れかゝつたものは別にして置きますし、甚しく汚れたものは簞笥の中へは仕舞ひません。

新輸入美容料
肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑

價並製壹圓廿錢 特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

飲んで色白くなる特効新藥
サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効
ペーアス石鹸

壹個代價送料共入拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の眞品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を眩着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

血塊流下
通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速安全に**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にて、もキレーに流下す又特別製分を連用せば中年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず完全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續續怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**すること確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥**專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまずいぼは拾日目に必ず美麗に除去す痕跡を殘さずること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其效力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を遂す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨乙醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の禿、はつぼうはげの禿、やけどの禿、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼蒼と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特效藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇效を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして、淑女は窈窕たり▲聲麗しくして、男子は威嚴あり▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

滋腎回春記憶增進丸

本劑は獨逸大醫スクリーポルト氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること嘗て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

以上六藥專賣元

東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

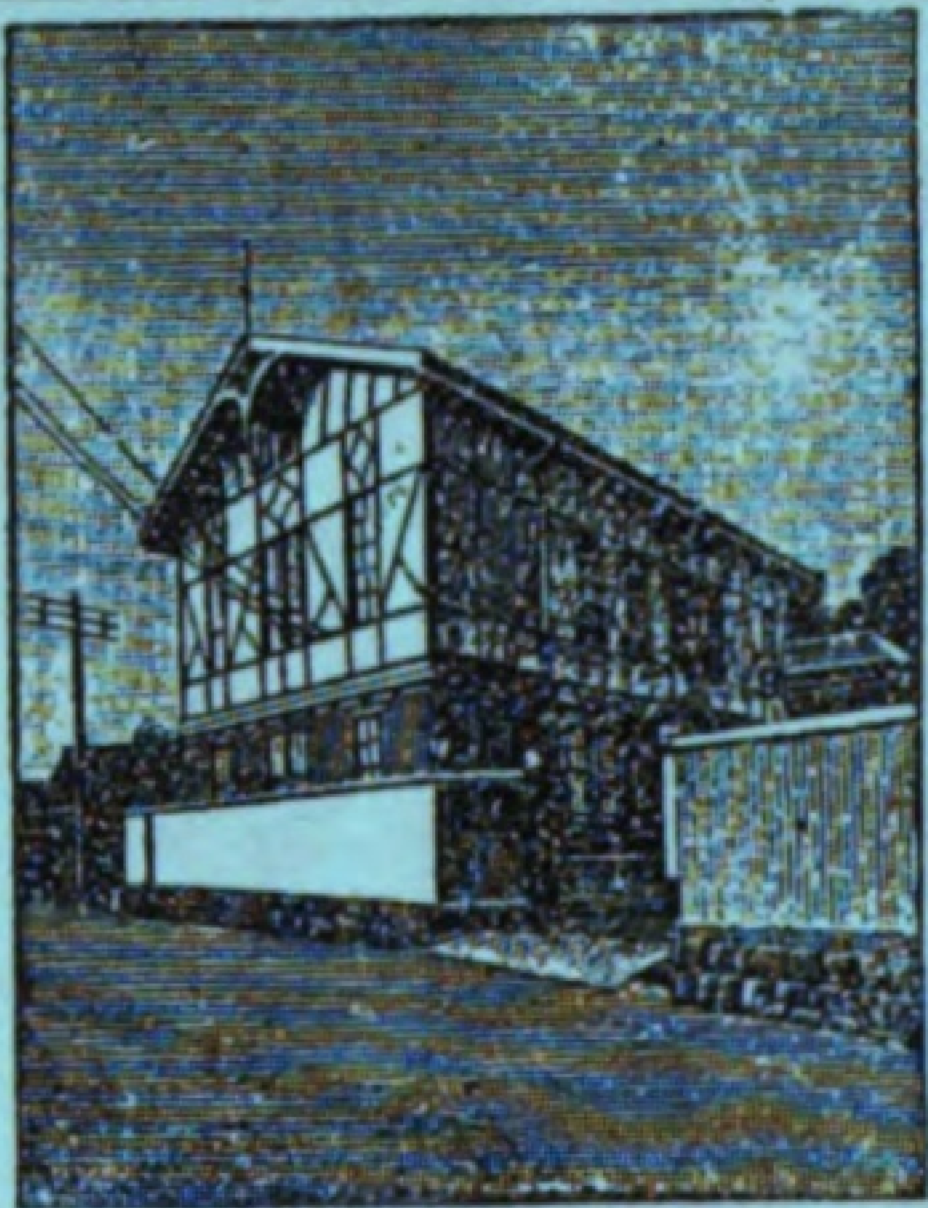


●佛國土產の最新白色新劑

色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院獨得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して敎ゆ

愛隣藥院

東京大森停車場上山王



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

生徒募集

本科、特別科、及夏期音樂講習會八月一日より三週間

ピアノ、オルガン、バイオリン、唱歌其他樂器及理論

入學志願者は直接本校へ照會あれ

●本法は

女髮結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛 毛はへうけあい

二大奇方劑

●東京市麴町區三番町六十七

多年の實驗を經たる證明の秘劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

濟世園

蹄鐵印 シャターリヨン 白赤葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり

●至る處に取次店あり

本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒を輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱贊あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目 電本局長一四三五

鈴木洋酒店

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

隆鼻術（はなたかくするほう）

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

女（ぬの五）

女(ぬの六)

婦人界唯一の理想的講義 第三回新學期開始

女子大學講義

▲講義は最も平易挿畫多く全部假名つき子女も難解の憂なきを確信す

▲講師は日本女子大學校教授にて親しく教授するが如く叮嚀に說きたり

▲會員には月刊雜誌『家庭』を無代にて毎月配布進呈すべし

講義科目

科目	講師
實踐倫理	成瀨仁藏
教育學	石田新太郎
心理學	福來友吉
應用兒童研究	高島平三郎
家庭物理	後藤牧太
生物學	渡瀨庄三郎
生理學	大澤謙二
衞生學	三宅秀
經濟學	中隈敬藏
法制大要	奥田義人
應用社會學	浮田和民
文學研究	鹽井正男
農藝	佐々木祐太郎
和歌	三宅龍子
家事	櫻楓會家事研究部
料理	櫻楓會料理研究部
裁縫	櫻楓會裁縫研究部
日本童話傳話	芳賀矢一
社會意志	松本亦太郎
英文學の面影	松浦政泰

會員募集

見本無代進呈

編輯所 東京市目白臺日本女子大學校櫻楓會

發行所 東京小石川 精美堂

東京市京橋區
大鋸町十三番地

女子文壇社出版

（振替口座東京
第壹七貳九番）



二巻第六號

六月一日發刊

▲定價金拾錢 郵税壹錢 半年分六拾三錢

雜誌 少女

每月一日發行 百餘頁美麗書五頁

六巻第八號

六月一日發刊

每月一日發行 百六十頁口書十頁

女學雜誌 女子文壇

▲定價拾五錢 送壹錢半 半年 増刊共 壹圓參拾四錢

少女の讀物には此『少女』が一等よい評判

女子の讀物には此『女子文壇』が一等よい

賣捌店は全國到る處にあり

最寄書店品切の節は直接出版元へ御申込あれば初號より取揃ます

▲百聞一見に如かず
此二大雜誌の內容を知らぬ諸孃達は速に試讀あれ論より證據なり

女(わのせ)

女(ぬの八)

△一目でぼろが見える

衣服は身分境遇に應じて着るもので、若い者が年より染みたり、年よりが若い者染みたり、貧乏人が金持の眞似をしたり、下女がお姫様を倣ふの類は固より美ではありません。立派だとか、立派でないとかは、其の身分境遇に應じての話であります。而も衣服は、垢の附かない、折目の正しい、破損の見えないのを主眼と致します。假へどんな衣服を着て居ても、その主眼にさへ適つて身分相應にして居りさへすれば、恥しいことではございません。所が私共が多くの方に接して見ますに、お化粧は上手でも、錦繍を纏はれて居ても、



どこかに衣服の綻びが見えたりする方が尠くありません。實に見苦しいものですが、殊に襦袢の不潔なのはひどく其の人の價値を落すものでございます又襟肩、袖裏など兎角垢のつき易い物で、此處は人には容易に分らぬと思召めしても、お辭儀をなさると後の襟裏は能く見えますし又一寸手をお上げになると直ぐ袖裏が見えます。此の時に、其處に垢が附いて居りますと人に不快の感を與へ、又隨分醜いものです。又衣服の袖口が切れかけたり、裾綿の出て居るのは、極めて不體裁なものです。袴の折目正しからぬのも、見好くありません。婦人にして、自ら斯るふしだらを恥ぢず、又良人をして此等の不體裁をさせる方は、必ずしみつたれでございます。

青年男女の戒むべき倫理上の過失
女子の自衛策

ドクトルメヂチーネ　杉山源作

婦人衛生と倫理について着實な考を持つて居らるゝ杉山博士を訪ふて左のお話しを伺ひました。

▲憐むべき實例の原因

人間が生れ出でゝ親の懐に居る間は天地間に父母ほど慕はしいものはないと思つて居るのですが、獨立獨歩が出來るやうになり、それから追々自分が子孫を養ふべき時期が來ると異性を相慕ふと云ふ心が起る。この時期が人間の身體の尤も成熟したる時期でありますが（尤も世間には身體が本當に成熟せぬ内からこの期に入る男女もあるやうだが、これは例外で先づ病的と云ふてもよい）でこの成熟期に達すると同時に結婚が滯りなく出來れば青年男女の苦痛煩悶もなし、從つて非倫を行ふものもないのですが、地位財産の關係でスキートホームを無造作に組成し得らるゝものもあり、得られないものもあり、特に虚榮に馳せる世の潮流につれて生活難は益烈しくなり結婚は益困難となつて來るから人生自然の時期は束縛されて了ふのです。而して一方には係累者の關渉のために青年男女は相愛する配偶の自由を妨げられて儘ならぬ浮世を歎ち遂に非を知りつゝ過失の淵に沈むものが出來るので、憐むべき實例が何の位あるか知れぬ、試に一例を擧て見ませう。

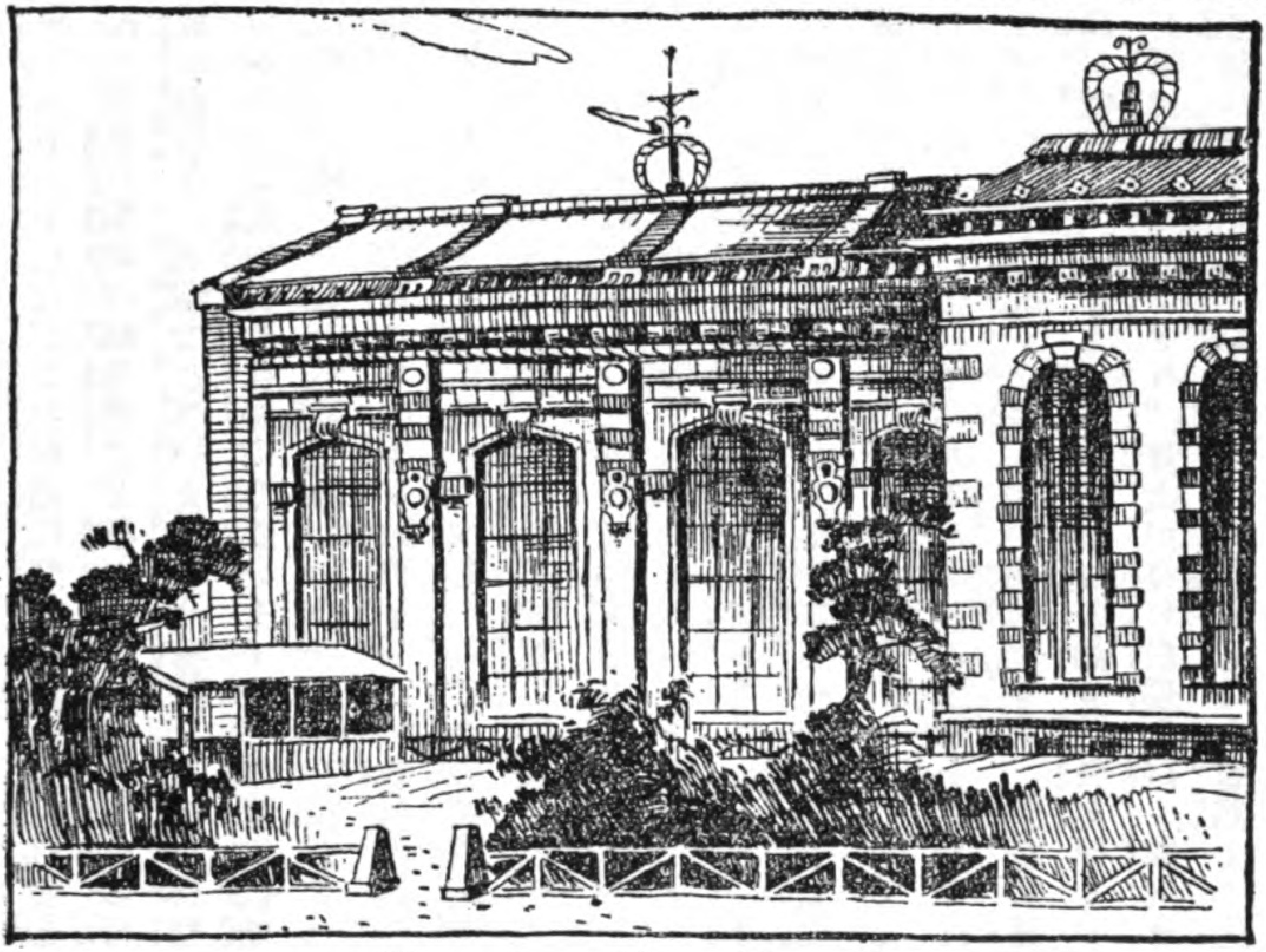
▲倫理學の女教師

或學校の倫理を受持て居る女教師が胃病だと云て診察を受に來たが、一應診察した處が嘔吐及び其他の經過の模樣と照し合せて確に姙娠の初期と斷定したのです。するとこの女教師は面色土の如くなつて遂に寢臺の下に泣伏て了つた。暫らくして恥ぢたる顏を擧てから云つた。「私には卒業を待て結婚する約束を爲た某大

學生がありましたがこの結婚は父母が許してくれませんので互に煩悶の結果克己を破り事こゝに至つたのは誠に面目ない次第でございます。今後職を失い世に捨らるゝのは私の自業自得でございますが、郷里の親達に肩身を狭くするのが實につらいのです。これより一層切ないのは苟且にも高等な教育を受けて教導の職に就き、倫理を教壇に說きつゝある私のこの秘密が世間に發表されますれば大切な女子教育の價値を私一人のために失ふにいたることでございます。どうか私一人を助けると思召て密かに手段をお執り下さい」と泣き縋たが「貴女の苦衷は萬々御同情するけれども法律の罪人となることは如何しても出來ませぬ」と斷つた。婦人は萬事休すと云ふ容子で決心の色が見えた。そこで左の如く諭しました。「人間が倫理の講釋をよく守れる位なら倫理を說く必要もない次第ですが、倫理の講釋が世間に入用と云ふのは貴女の如き過失をやるのが澤山ある證據でせう。貴女が毎日白墨を以て倫理を生徒に書き示し、口を酸して講釋をしても自然より生ずる生徒の戀愛を止め得ることは出來ますまい。一體倫理があつて人間が出來たのではなくつて人間があつて倫理が出來たのであるから倫理を以て人間自然の精神作用を左右し盡すと云ふことは難しいのであります。貴女のこの度のことも自然の戀愛のために思慮を失ふたと云ふだけで惡意を以て人を欺き人を陷れたと云ふ次第ではない、倫理の側からは罪人と見るであらうが、自然の眼から觀ればホンの一時の蹉跌と云ふでせう。然るに若し貴女が法律の罪を犯し私までも巻込うとする日になると却つて神の咎を受る道理でせう」と云ひ聞せて歸しましたが、こんな實例に出遇ふ度に同情の念を禁じ得られぬと同時にその救濟策の必要を切に感ずるのであります。

△轉ばぬ先の杖と轉んだ後の手當

前にも申す通り青年男女の過失は極端に云ば社會の不平均が原因の本をなして居といつても差支ないと思



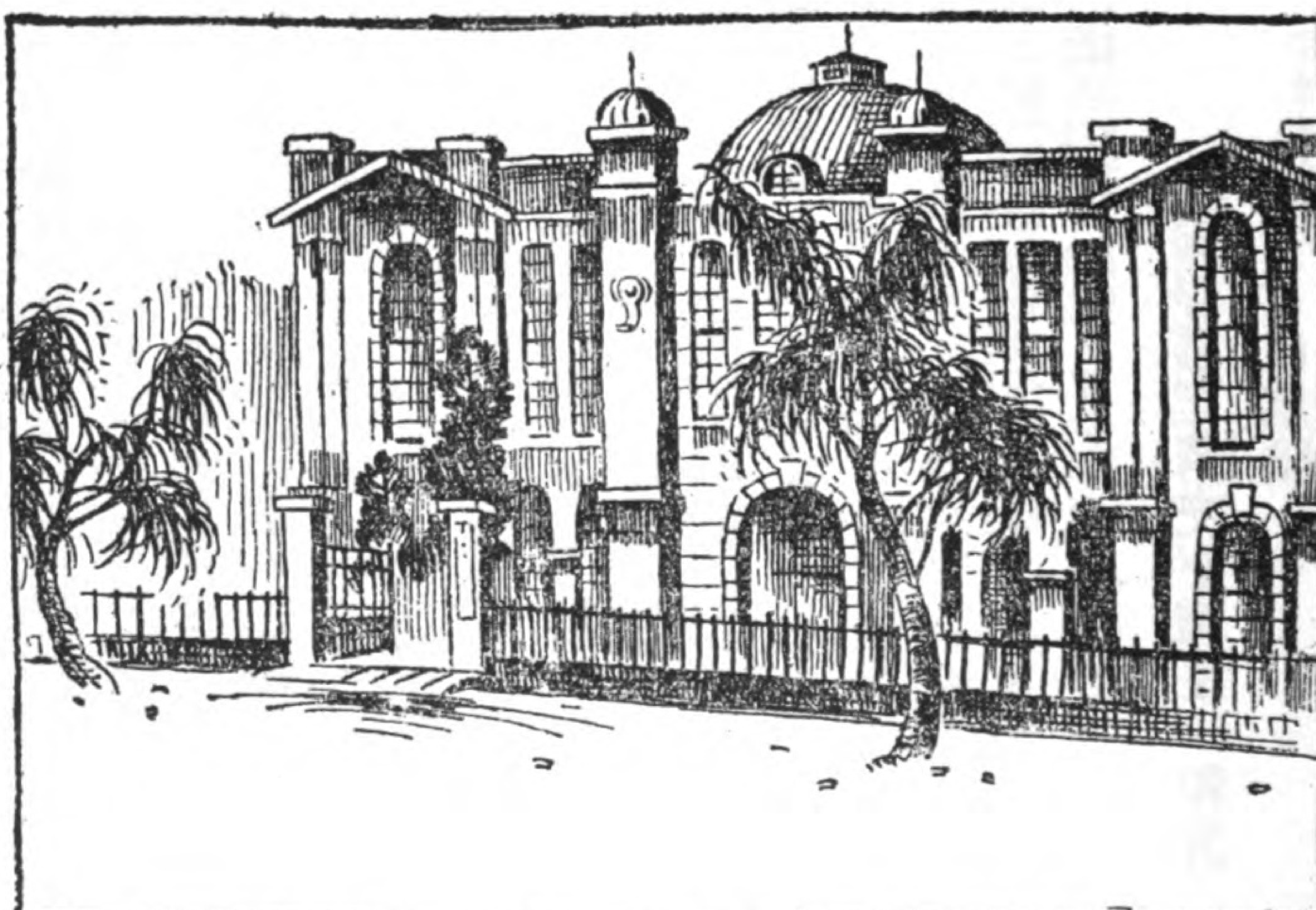
帝國圖書館

ふ。かう云ふと倫理學者は目を怒らして『青年男女の墮落を勸誘し、非倫者の提燈持をする不埒な奴』と攻擊するであらうが、私は墮落を歎ずるが故に社會の不平均を嘆ずるのである、而して杓子定規の倫理が青年男女を感化する力の乏しいことを嘆ずるのである。私は青年男女の過失を防ぐためには云ひ難いことをも具體的に述べて注意を促さうと考へて居るのです。それは身體機能を基として後に申上るつもりであるが、精神的の方法は所謂克己が必要であるし、親同胞の監督も必要でありませう、兎に角轉ばぬ先の杖は何より大切ではありますが、杖があつても轉んだ時はどうしたら宜いか。轉ぶのは本人の罪だと云つて怪我をした場合に勝手にしろと突放すのは無慈悲でありませう。青年男女の過失を未然に防ぐのは倫理家の慈悲であるが萬一過失に陷つた場合にこれを救ふのも倫理家の慈悲ではありますまいか。唯倫理を楯としてこれを嚴責し、或は職を褫ぎ、發展の道を斷ち、遂に身を殺すにいたらしめて顧みないやうでは餘り殘酷ではありますまい

か。殊に筆を以て秘密をあばく連中は他の好奇を買ふために針小棒大にかき立て彼等をして天地に身の置處なきまでに至らせるのは實に憐むべきこゝと思ひます世間の裏面には化物屋敷が多い、青年男女の風俗を取締る當局者がより以上の非倫を實行して居る例もある、世人の唾棄さるゝ女囚の中にも同情すべき者が少くないのです。私は日本より結婚の關渉の少ない西洋諸國に或救濟のために設けられた育兒院孤兒院のあるのを見て感心したことがありました。

▲獨英の青年男女

英國では青年男女が宗教上の修養に依て自からを守る力があると云ふので交際を自由にしてあるし、獨逸では思想の幼稚なものを自由に接近させるのは宜くないと云ふところから嚴重にしてある。各國風俗習慣に依て多少の相違はあるが兎に角結婚の撰擇は日本ほどの干渉はないのです。この干渉から生ずる過失も却々多いと思ひます。



日比谷圖書館

▲戀愛神聖論の危險

杓子定規の倫理が人間の自然を壓制する反動で一方には戀愛は神聖なりと云ふ論を唱ふるものが出來る。成程戀愛がなければ夫婦の關係も有名無實で子孫繁殖の道が絶えるのであるから神聖には相違ない。併し靑年男女が戀愛を神聖視して淸き情交を續けやうとする場合には往々不測の過失に陷るのであります。私共は如何に脫俗な理想を持ち如何に立派な議論を唱へても餓れば食を取らぬ次第にゆかぬと云ふことを考へて見れば單に情交のみを以て滿足することの出來惡いのが分りませう。であるから過失を豫防するの策は父兄が或程度まで結婚についての干涉を寬にすると同時に各自單獨に接近することを避けさせなければならぬ。而して一方特に女子に對して左の如きことを忠告して置きたいと思ふのです。

▲自動的と受動的

男子は精神肉體二つながら自動的の性を持て居り、女子は受動的の性を持て居るのです。而して男女間の性慾に於ても男子は望を逹するまでは顧慮逡巡することなく猛進するが一度望を逹すれば熱度が割合に低下すると云ふ性がある。女子は克く慾を抑制し又顧慮逡巡する代りに後は熱度を增し益々執着すると云ふ性があると思ひます。甚だ可笑い例ではあるが彼雄猫が雌猫に對する媚は實に有ゆる限りを盡すけれども後は逃て了つて一向顧みない。雌猫は尙其跡を慕ふと云ふ例を見ても大凡は自然性の相違が分るのです。女子が男子に玩弄されてその無情に泣くのも敢て男子の惡意に依るばかりではない、この身體機能自然の傾向から起るのであらうと思ひます。（神聖なる夫婦の關係は別であるが）世の若い女子は餘程この邊を考へて禍を未然に防ぐ注意が肝腎である。

▲安心して情交を深くするは危險

前に申す通り男子は自働性であるから男女間の過失は大抵男子の方から誘ふのである。一般女子の方が誘惑の力を有て居るやうに云ふが、これは精神的からの話で、身體的の過失を誘ふのは如何しても男子に多い。否男子ばかりと云ても宜い。(尤も變則なる關係或は病的女子は別問題)これは身體機能上から確證することが出來るのです、然るに無經驗の乙女は女子自身の性情通りに男子を解釋し、戀愛は神聖である、互の情操が潔白でさへあれば相愛する男子と相携へて人なき林間を歩まうが密室に對談しやうが決して疚しいことはないと安心して居る内にいつしか蹉跌して了ふのです。大抵の女子は唯異性を戀る自然の情から接近を喜ぶのであるけれども男子は接近するに從ひ追々自働性に驅れて盲斷を敢てすると云ふのが多いのです。假令男女互に高潔な志を抱いて居にせよ、霞を食らひ雲を着て生て居らぬ以上は兩々接近の場合が頻繁となる間に不測の過失を作らぬ次第にはゆかぬでせう。世の若い女子は深くこの邊を鑑みて危に近寄らぬ用心が肝要であります。

▲倫理教室で生理衛生の講義

獨逸の大學あたりでは倫理の講義室で教師が生理衛生を男女學生に說いて聞せるのですが、特に婦人に關することは隨分立入た講義を憚らずにやつて居ます。婦人的生理特に生殖機能の話を直に卑猥なりとして倫理の敵の如く看做て居る者の眼には、かくの如く若い男女の居列ぶ前で憚らず講義するのを異樣に感ぜられるのですが、健全の精神は健全の身體に宿ると云ふ土臺から割出て、個人のため子孫のために飽まで精細な身體的注意を與へ私德の實行を促がすのであるから、杓子定規の倫理講義より却つて實際の役にも立ち、而して生殖的のことでも教師が誠意をこめて話すために若い男女學生に陋劣の感を起させないのです。私は大に望みます、日本の教育家も唯箱詰のやうな迂遠な倫理ばかりに拘泥しないで、もつと裏面を深く考へ實際に生ずる痛手を救つてもらひたい。而して世の攻擊を



堀切小高園

恐れて上滑のする講釋ばかりせずに、若い男女には言ひ惡いことまでも言聞せて不幸を未然に防ぐと云ふ誠心と勇氣とを振り起してもらひたいのであります。

△恐るべき花柳病の實例

男子の花柳病が花の如き新妻を屠り、若くは天使の如き愛兒を殪すと云ふことは今更私が喋々するまでもないが、職掌上屢々實例に接すると一層寒心の度を高めるのです。私が洋行する前のことでしたが、或病院へ入院して居た某貴族の令孃の病源がどうしても名ある國手達に分らなかつた。その内令孃は死亡して了つたが、解剖の結果遺傳的脳の梅毒と略々分つたさうです而してその禍因は誰も想像し得ないところにあつたのに一同驚いたと云ふことでした。又私の取扱つた田舍の子供に三歳で肛門の邊へ梅毒性腫物を生じたのがあつた。これは該病の父親が自分の鼻をかんだ紙で子供の兩便を始末しつゝあつたのが傳染の媒となつたのでした。この外健全であつた婦人が良人から傳染して

不具な身體となり、或は流産する等悲惨な實例は枚擧に遑なきほどであります。で私は男子に反省を求めると同時に婦人自身もこれに對する豫防法を注告することが必要であらうと思ひます。

▲婦人の自衛

恐るべき病源を辨へて居る男子が往々危險の衢に足を入るのは如何云ふ次第か。男子だつて始から毒を買たくつて出掛るものは、一人もありやアしない。一寸一時の興に乘じて洒落て見るのであるが、その興が度重なるに從つて傷けられて了ふのです。男子の遊蕩を防ぐの策は陰に陽に妻君の努力すべきであるが、若し良人が傷付いた場合に妻君が「郎君の病氣は自業自得です。私まで御相伴して堪るものですか」と云ふ險幕で自衛策を執つて居れば一家の風波を醸し良人をして益自暴自棄に陷らせるのです。然らば郎君が風引きやア共難儀と諦らめ甘じて感染して了ふのがよいかと云ふに、妻君自身の不幸は扨置き子々孫々に禍を傳へ、國家に不具者を增さしむることになる。爰に於てどうしても婦人自衛策の必要が起つて來るのです。私はこれについて他日少しく述るつもりであります。それから一般の婦人に月經時の衞生思想を與へたいと思ふのです。衞生論の發達した今日にあつても生殖機に關することは不潔だとか、卑猥だとか云て明らさまに說くことを避ける風習があるために、月經時の注意なぞもその母親とか友達とかに聞いた方法を眞似するだけで本當の處置を執るものが少い。この先輩が衞生智識のあるものであれば良が、中には無茶なのがある、實際無茶が多いから危險であります。幸ひにして今日では脫脂綿ガーゼ等が擴まつたので禍の一端を救ふて居るが未だ却々不完全でこのために樣々の不幸を招く婦人が實驗上多いのであります。で妙齡の婦人を敎育さるゝ先生方は彼獨逸大學式の如く明白に衞生注意を敎へて置かれたいものであるし、女子各自も秘密を等閑に附せずに注意し合ふやうにありたいと思ひます。

（文責在記者）

腸チブスの豫防

◎チブスの諸系統元來　チブスは其豫防方法が頗る困難であつて其局に當る者の苦心は一通りではない、何故かと云ふと(一)病氣が甚だ永い、即ち一度此病氣に罹るが最期通常四週間から二箇月位までも病床に呻吟せねばならぬから自然病院の病室の方にも恐慌を來す事になるのである何となれば赤痢の如く比較的早く結末附くものであつて見れば病人の新陳代謝が十分に行はれて病室の運用か手際好く行くけれども此病氣のやうに永い時間を要するものでは中々夫が首尾よく行かない避病院は常に滿員である者だ、此結果多數は自宅治療を許さなければならない殘念な事になつて了ふ(二)傳染が色々の方面から來る是はコロンビヤの流行に就て千九百七年、八年九年の三ケ年に調査した結果を見ると判る即ち其結果として示されたのは(イ)牛乳からの傳染(ロ)接觸(患者より直接)(ハ)イロ以外の系統不明なるもの等である、牛乳から來る原因は多く外國人は生牛乳を用ゐるからで日本人は通常煮沸して飲用するから此の患者は割合に少なからう次に接觸から來るものは一番危險であつて患者から知らず〱の間に傳染さるゝ虞が有るのである多く患者の持つて居るチブス菌は大便尿、唾液、食器、湯桶等に媒介されて入つて來るものである

◎チブス徴候　此外日本では共同井戸、豆腐屋、八百屋、肴屋等の媒介によつて傳染するのが多い、而して豫防方法としては個人衞生が第一であるから凡ての食物は煮て喰べる事、食器・蒸氣消毒をする事を怠つてはならぬ、此病氣は子供や女に多いもので其徴候としては發熱、倦怠、食慾減少、多少の下痢等であるが中には下痢をしない人もあるから要するに少しも早く診察を求めるのが肝要である

◎下水が大事　私は特に希望する事がある夫は東京市中殊に邊鄙な場末の井戸及び下水の事である、御承知の通り場末へ行と井戸の傍に下水溜が有つたり又は全然下水の排泄方法が缺けて居る處もある是は何と云ふ危險な事だらう此樣な不完全な設備をして置き乍ら一度チブスが流行り出すとヤレ掃除ヤレ消毒と騷ぎ立てるが根本の手段を措いては迚も十分な豫防は出來る筈があるまい、獨逸では邸宅を作るには五間とか七間とか一定の道路を設け且つ之に伴ふ下水の排口まで必ず作らしめる規定になつて居るが東京は勝手に何處へでも家が建てられるから不完全極まる市街がズン〱と擴がつて行くのである、洵に寒心すべき事ではあるまいか豫防の急務は自己衞生と此施設との二つに過ぎない（志賀博士)

疱瘡の新治療法

◎東京市では毎年四月から六月にかけて種痘を施行する事になつて居るが、元來歐洲等では此の疾病の流行を以て國家の恥辱として居る程で街上を通行しても痘痕の殘れる人々に會する事は出來ぬ位に豫防法が行き屆いて居る、然し一度此の病氣に罹つた時は如何にして全治せしむる乎といふに、近來赤色光線療法と云ふものが盛んに行はれて來た、

◎之れは數年前に沒した丁抹の大醫フインセン博士の發明したもので、方法は極めて簡單である、即ち疱瘡の發して居る皮膚を赤色光線に曝すのであつて、博士が此方法の有効な事を發見したのは殆んど偶然の結果であつた、夫れは赤色硝子と青色硝子の張り合せてある箱の中に蛞蝓を入れて置いた處が此の蛞蝓は不思議にも青光線の下に集中した、此の事實に一種の興味をもつた博士は種々研究の結果膿瘡、疱瘡等の病氣が赤色光線に曝して、全治する事を發見したのである、

スタンホード大學の女學生と寄宿舍生活

須原とく子

△生活状態

當校に居る女生徒は目下三百人程あります、而して各々倶樂部（日本で稱する寄宿舍）を建て、同じ地の者のみ集まつて樂しく生活を致して居ります、其宿舍の内に一人の Manager と云ふもの（日本で云ふ取締人）を撰んで其家に關する一切のこと即ち金錢の出入物品の買入れ其外凡てのことを司つて居ります、尤も日本の寄宿舍とは異つて各々一ケ月の費用卅五弗づゝ出して居るのですから各自生徒が勝手元の仕事は更に手出しは致しません、勝手元のことは料理人を置いて其任に當らせます、此のマネージアなるものは上級で他の學生よりも多少優れて居るもので、日本で云ふ組長の様な者です、仲々權利が强い、否なマネージアばかりではなく、一般の學生も上級のものは幅が利く、或る場合には下級生との間が主從の如きこともあります、然し決して下級生は不平を云はぬ、何せかと云ふに他日自身等も上級生となつて、下級生を扱ふ様になるからです、下級生と來ると實に憐れの者で、食堂へ入つても隅の方にやられ、朝は早く起きて種々の拭き掃除を致し、其他の用事も學課以外に致さねばなりません、その癖上級生などは十時頃でなくては起きません、此の様なことは日本では見られない風です、毎年八月の新學期には三四人づゝ一倶樂部に新入生があります、彼等はフレッシマン（新入生）と稱して誠に肩身が狹ひ、此のフレッシマンの内には我儘育ちの御孃さん達も随分あります、從つて初めの内は上級生の云ふことを聞かない、すると其制裁？は留學生の手を借りて或る時はバッスルーム（湯室）へ衣類の儘入れたり、又は婦人としては Hard（困難）の用事を命ずる、随分面白ひ事もあります、然し兎に角各々團結心が强くてよく助け合ひ、他の寄宿舍に負けぬ様優等の譽れを得

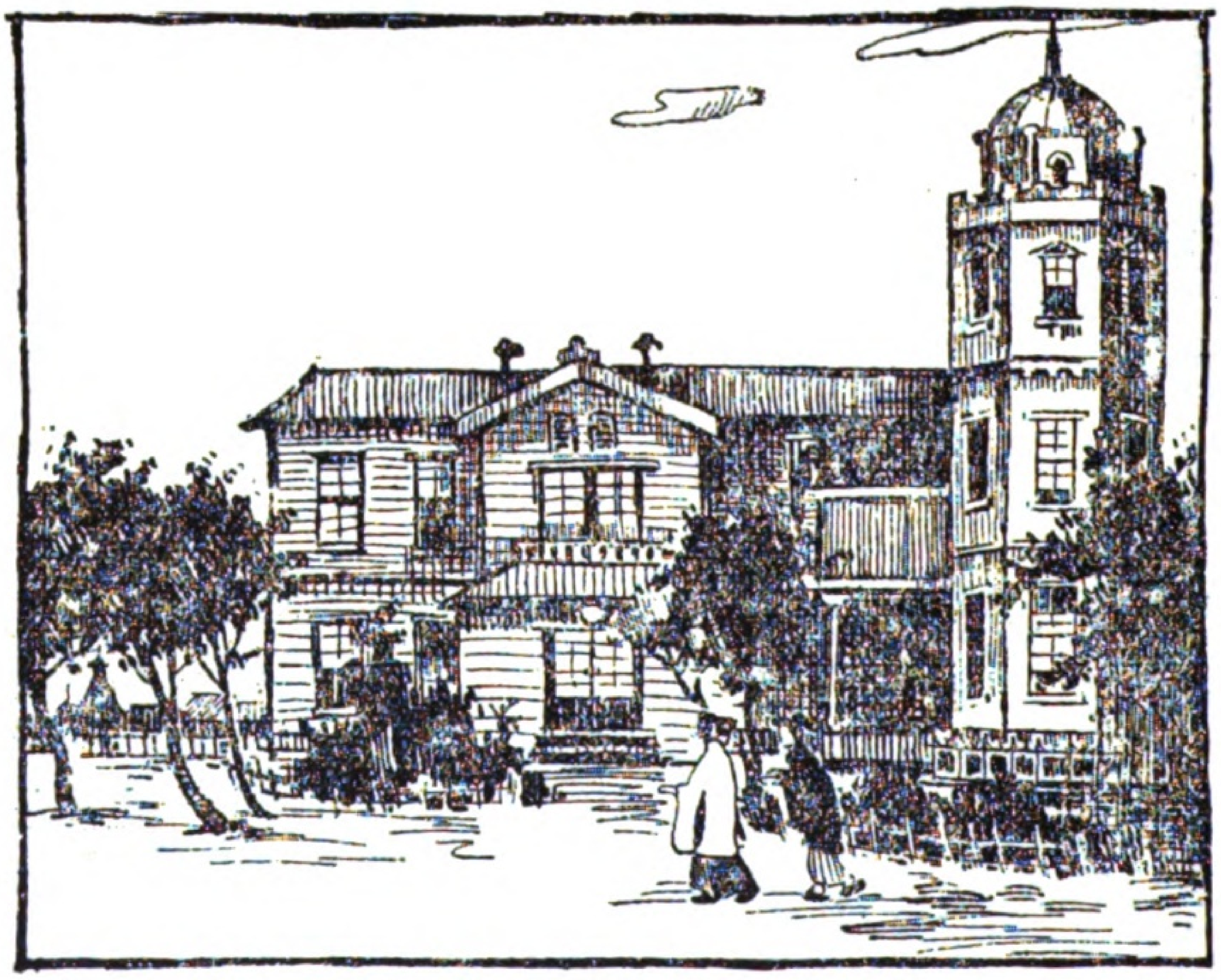
る様勉強を致します。日本の女學生を見ますと、外面は常に遊んで居る様に見せ、内部では勉強をして、己れは毎日遊んで居るが、斯程よく出來ると云ふ様に見せたがるものですが、此國では左様のことはありません、尤も此國の風かも知れませんが、一般に勉強は致しません、先づ遊び半分、勉強半分と云ふ位です、殊に男學生の方では遊びが専科で勉強は随意科と云ふ有様です、從つてピヤノの樂奏テニスの稽古は仲々盛んで又其内には乘馬自轉車の曲乘り等も見受けます。

△寄宿生の品行

日本では男女の交際が餘り行はれて居りません様です、(尤も裏面は如何が) 從つて其寄宿舍などに男學生を招くとか、又訪ねるなどゝ云ふことはありません、此地では其んなことは差支なく自由に往復して居ります、と云ふのは御承知の通り女尊男卑の國で、男子の方からは一口でも餘計なことは婦人に對して申されません、或る場合には男子は奴隷の如きことがあります誠に此國では男子は持てません。

私は東京に居る時分から新聞雜誌又は此地を經由せられた方の御話しを聞きましたが何れも異口同音に男女の關係のことに付ひて賞めて居られましたがそれは外面だけのことで内部に入つて見ますと實に驚く程の有様です随分不品行の者がありますが、斯の如きことは餘り人々が口に出さない、又新聞紙なども日本とは異つて決して人身攻擊などは致しませんから、つまり一寸見ては誠に能いやうに思はれます、此に一例を御話し致すことにしませう、尤も此の様なのは餘り例外ではありますが本學期に顯はれたことであります、先づ其大部を知ることが出來ると思はれます、本年卒業する某倶樂部に居つた婦人は非常な美人で、何れの夜會、ダンシングにも此婦人を見ないことはないと云ふ程ピヤノの名手で、殊に其歌の能いことは先づ婦人には少ない、從つて何れでも大持てゝす、此婦人はローサンゼルスの百姓の娘で、家庭は餘り豐かではありません、然るに在校一ケ年後には立派なリング最新

式のスーツ其他何れも派手な風をして人々を羨ませつつあつたのです。初めの内は何人も其原因を知りませんでした、否な卒業するまで四年間解らなかつたのです、然るに此婦人の計に引掛つた男子より漸く其品行が解りました、此婦人は天性の美顔を利用して各方面の男學生を操つて其の方から金を出來得るだけ出させ、自分の虛榮を滿足させつゝ卒業の上は云々と愛嬌を振りまいて置きながら、去る廿日デプロマ(卒業證)を貰ふや否や東部に逃げて行つたさうです、其眞意は何れにあるかは知れませんが何と驚くではありませんか、此外にも色々あります



愛宕山上の東京ホテル

が、兎に角柳腰？、の美人と來ては流石虛榮心の元祖だけあつて學問などは門外として唯だ出來得るだけの身に飾りをして大道狹しと横行濶歩すると云ふ有樣です、然し一方昔から才色兼備の婦人は稀で優等の成績を得るものは美人が少ない、此の樣な婦人は初めから獨立の出來得る樣な學科に入つて、世の男子を度外視して居ります、而して此の怨みを學科の方に注ぐ益益勉強をすると云ふ工合です、此の賣口の少ないオールドミスも大分居ります、日本人の某孃も此仲間で本年目出度マスター、オブ・レタレーチユアーの稱號を貰ひました。

子供の眼に關する注意

東京眼科病院長　山口醫學博士

△子供が生れた時の心得

子供の眼病を防ぐには、おぎあと生れ出た時から注意しなければなりません。母親に子宮内膜炎があつたり、淋毒があつたりすると、子供の眼は生れる時に幾分かその害毒を受けるものであるし、又さうでなくても出產の時には、子供の眼は兎角不潔物に侵され易いものであるから、お產の時には、產婆は硝酸銀を生兒の眼に注すとか、色々注意がいるのですが、不親切な產婆になると、此の大切なことを忘るゝことがあつて其のために子供が膿漏性結膜炎などに罹る事が往々あります。又親が子供の眼を不潔にして置くために、種々の眼の病に罹るといふことも屢々あります。それ故子供が生れた時には、勿論前記の注意を怠つてはならないし、又若し子供の眼より脂とか膿とか出ることを發見したならば、怠らず相當の醫療を加ふることが大切であります。

△先天的の眼病

子供の眼病に就て一寸述べて見ると、第一醫學上で色素性網膜炎と稱へて居るのがあります。これは子供が母の胎内に居る時から侵されたもので、眼の力が極めて弱いのです。遠眼が利かぬので、强度の近視眼ともいふべきものであります。これは眼鏡の力を借りても殆ど効がなく、そして段々惡くなると終には盲目になつて了ひますから、子供の眼にかゝる兆があつたならば、早速醫療を加へなければなりません。

△恐るべき白內症

又子供が生れた時から、眼の黒みの處が次第に白くなる病があります。これは白內症と稱へて、これも段々盲目となる恐るべき病であります。これは實に難治の病ではあるが、若し早く醫療を施せば治らぬ事はありません。

△眼球の飛び出る病

或は生れつき眼の球が大きくて、恰度飛び出たやうになつて居る子供があります。これは先天性のグラロームと稱して居ります。これもなかなか治療のむづかしい病氣で、その儘にして置けば、益々眼球がせり出して、終には生命をも奪ふことがあるから、成るべく速に醫療を加へなければなりません。

△角膜に雲のかゝるもの

其他嬰兒には角膜に雲のかゝる眼病があります。これは角膜實質炎と言つて、次第に白眼になるのです。この病は主に兩親の梅毒から起ります。これは眼が左程痛まずして、たどころ〱して居るだけですから、

やゝもするとうつかりして過す事があります。總じて嬰兒の眼の病は、子供自身は餘り苦痛を感じないもので、質の悪いのになると、些とも痛まずして眼が潰れる事があるから 側に居る人は餘程注意しなければなりません。

△他の病より來る眼病

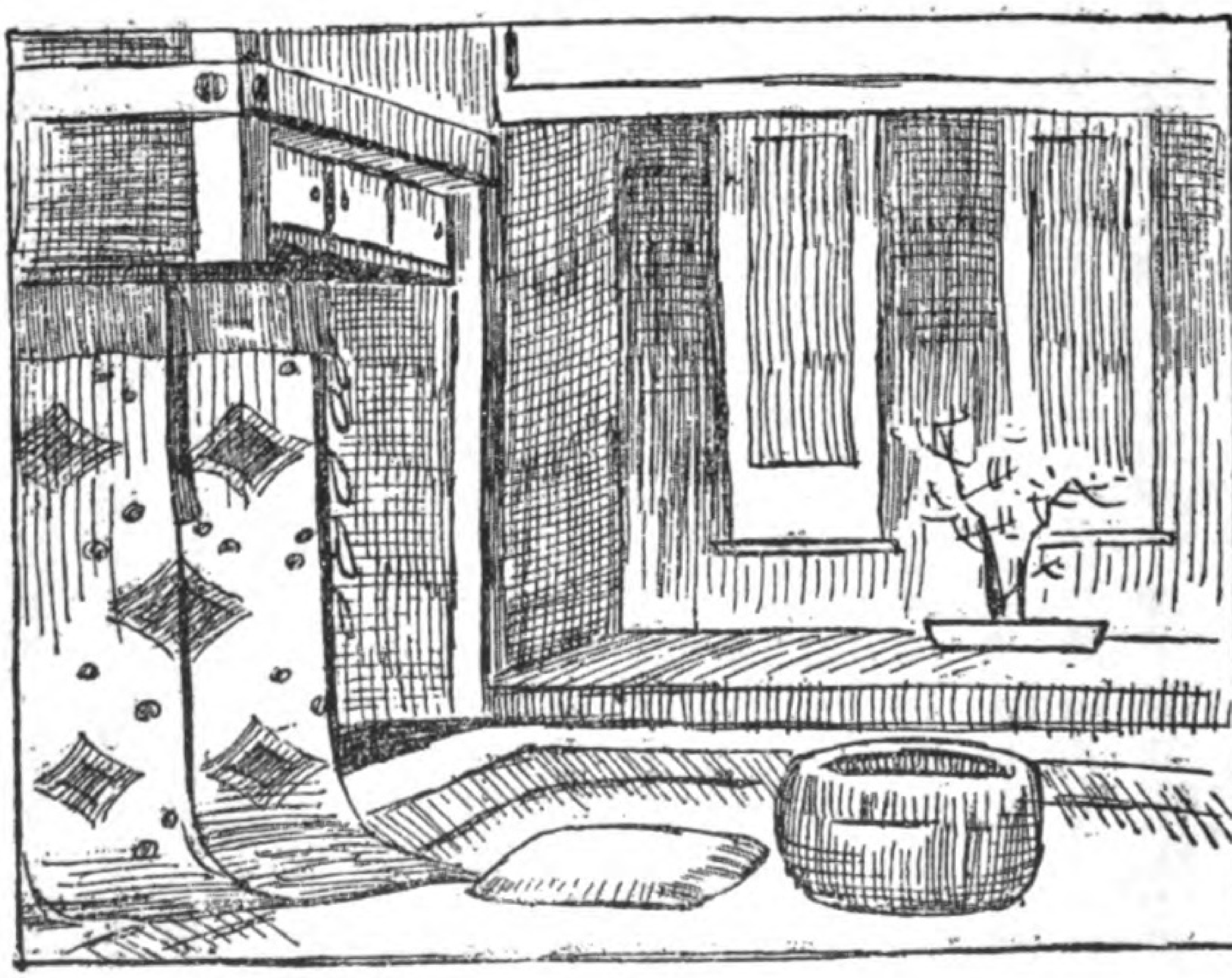
その他眼の病は他の病氣に關聯しても起るもので、子供にはヂフテリヤ性の結膜炎もあり、インフルエンザより來る結膜炎もあり、或は疱瘡から起る疾もあります。又二三歳までの子供には、膿漏性結膜炎が多く、五六歳以上になると、かの傳染し易いトラホームなどが多くあります。

△眼病に罹らせぬ法

子供を眼病に罹らせぬ爲には常に子供の營養に氣をつけ、眼を清潔にし、手拭、洗面器、衣服、夜具、其他病毒傳染の媒介をする物を別にするやうに勤めることが大切です そして子供の眼から脂が出るとか、膿が出るとか、或は赤くなつたり、痒がつたり、又は視力が弱いといふやうな異狀を發見した時には、速かに治療を施されねばなりません。

△俗稱鳥眼の療法

子供にはよく夜盲といつて、恰度鳥の眼の如うに、夜になると眼が見えなくなる疾がありますが、これは榮養不足又は脂肪不足から起るものであるから、さういふ場合には、成るべく滋養物殊に脂肪に富める物を食はせることが肝腎です。八目鰻などを食べさせることも夜盲に對する一種の養生法といつて宜いのです。この眼病も隨分危險なものであるから、榮養を十分にすると共に又醫療を懈つてはなりません。



大倉夫人の書齋

倫敦の母親學校

◎英國倫敦セントパンクラスの貧民窟チャルトンストリートに母の學校と云へる私立の一學校あり、其創立は千九百七年六月にして、現在の校長はミスコールスとて極めて德望高き婦人なるが、學校の資金は全部慈善により、毎週水木の二回貧民の母を集めて育兒法より料理法までも教授し居るも、生徒は月謝を要せざるのみか、教授摘にて要する材料は總て學校より支給され居り、毎回六十名程の貧兒の母が登校し左の科目に就て教授を受け居れり。

（水曜日）　編物、裁縫、育兒法、看護法。

（木曜日）　貧民の家庭に應用すべき料理法。

而して授業時間は午後二時より同四時までの間にして、尙木曜日の夜間を利用して貧兒の父を集め、産婦の取扱、賃錢を浪費せざる事、子供を虐待せざること等總て道德に關する講話を爲し居れるが、成績極てよく、附近の貧民は、太くコールス孃の德を慕ひ居れり。

◎同校の生徒たるべき母は、多くは教育なき年老いたる者のみなれば、教科書の如きも、なるべく簡易を旨とし、殆んど繪說き話の如きものとしあり、例へば「赤ん坊に過食させるな」と云へる表題の下に實物大の嬰兒の胃袋を描き、一ヶ月より六ヶ月、一ヶ年目迄に區別し、傍らに一のコップを描き、一ヶ月の小兒ならば一線、二ヶ月の小兒ならば二線、一ヶ年の小兒には凡そコップに一杯與へても差閊へなしと云へるが如く、何程無教育なる貧兒の母にも會得し得るやうになしあり。

◎或は美味にして最も安き料理は如何にして造り得るかと云へる問題の下に、實地の料理を講習する事あり、貧民に斯かることを教ゆるは、左迄必要なきが如きも、貧民は賃金を比較的多く得たる時は、副食物などに浪費するもの多き故、前述の如き問題の下に、なるべく費用を節して味よき調料を得さしむる事としたるなり、此外嬰兒を寢かすに寢臺のなき爲め、多く不潔なる板の間に寢かし居る由なれば、學校にては麥酒の空函の如きものを壞して、四本の足を附け、寢臺の製法を教授し、學校にても之れを製作し、五十錢位にて貧民に販賣し居れり。

◎母學校にては嬰兒ある家、若くは産婦ある家へは、時々看護婦を巡廻せしめ、適當なる注意を與へ、又毎週火曜金曜の兩日に母が小兒を連れて登校する際、校醫は簡易に小兒を診察し、病兒ある時は相當なる醫師の診斷を受けしむるやう注意し居るが、彼等の食事は極めて粗末なれば營養不良のもの多く、ために産前三ヶ月、産後三ヶ月のものには、學校より日本の十四錢位に値ひする立派なる燒肉新鮮なる野菜等を供し居れりと云ふ。（新歸朝者田中太郎氏）



杜鵑に對する趣味

物集梧水

▲ホト、ギスなれば名乘る也

◎ほと〻ぎすー　その名を聞いてさへ既に一種悲愴な感に打たれます。況て五月雨の頃、その哀切なる鳴く音を聴き、八千八聲鳴きあかした後はばつさり地に落ちて死んで了ふことを思ひますと、誠に心細く、哀れで、腸を斷つの思ひが致します。

◎されば昔から詩にも、歌にも、又俳句にも、この鳥を詠じたことは實に數限りもございませぬ。支那に於ても無論、西洋に於ても此の鳥を歌つた詩は實に多うございます。言換へれば詩歌俳句の題として恐くはこの鳥の右に出る鳥はございますまい。

◎それならば抑もこの鳥の形は如何いふのかと云ふに、實際よく其れを知つてる人は幾干もございますまい。大概は其の鳴く音と歌とに依つて多分斯んな鳥だらうと想像してゐるのに過ぎないので御座いませう。

◎一寸その形を申せば、恰も雀鷹の如く、背は薄黒くお腹ト翅に白い斑があつて、口の中は紅く、頭部に竪の毛が生へ、脚部は稍々青ばんで居るので御座います斯く申せば其の形からして既に陽氣な色をして居らず陰氣臭い鳥なことが充分現れてるので御座います。

◎「ほと〻ぎす」とは元と梵語「別都頓宜壽」から來たものださうで御座いますが、別都頓宜壽と云ふのも、此の鳥の鳴く音を其のま〻に鳥の名に致したのださうで御座います。故に杜鵑がホト、ギスと言ひながら空を飛ぶ譯になりますので、古來和歌などでは杜鵑の鳴くことを特に名乘ると申して居ります。

◎序に一寸申して置きますに、郭公をばほと〻ぎすと同じやうに思つてゐるのは誤りで、郭公とは日本のか

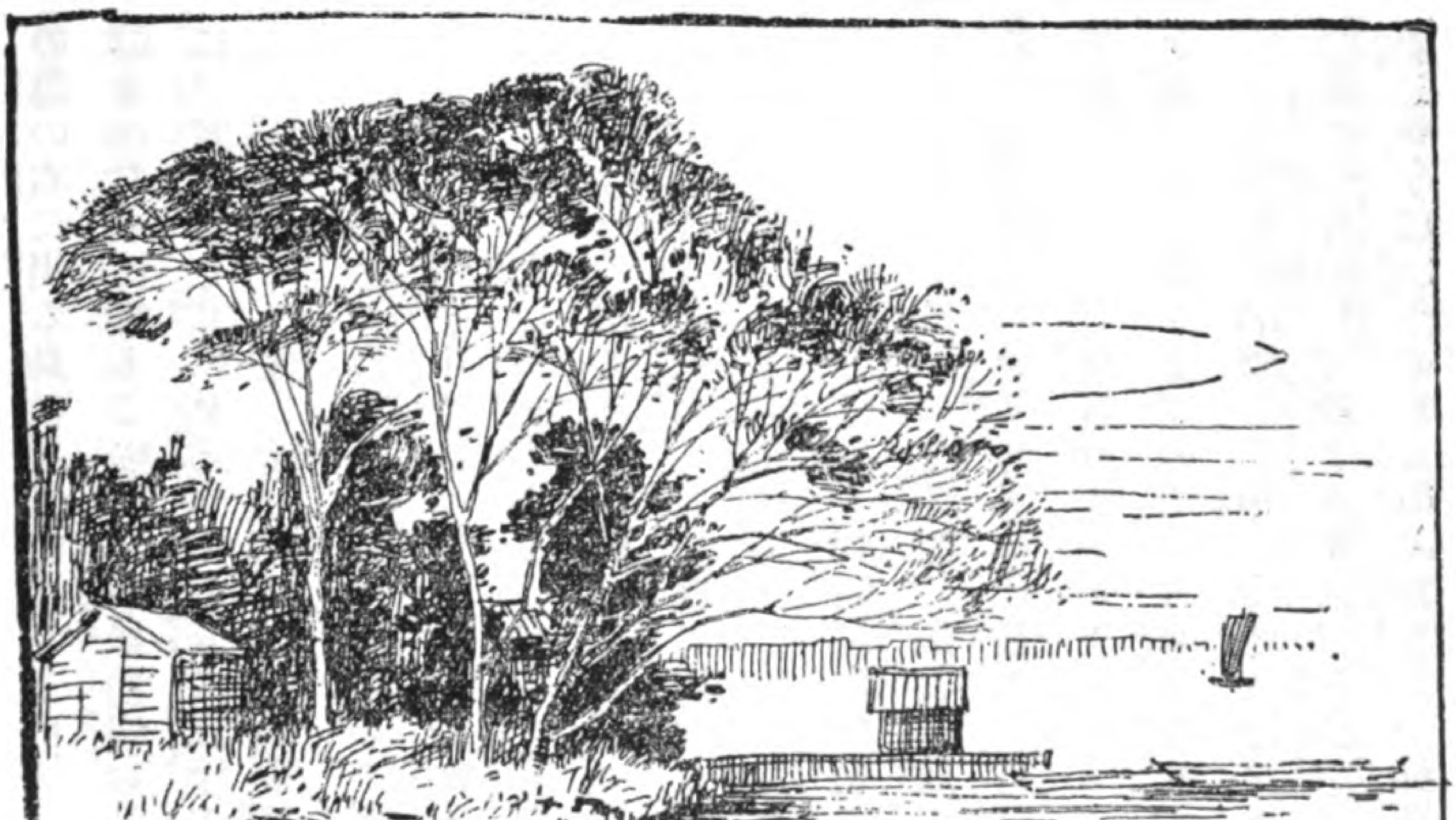
つこう鳥のことで、ほとゝぎすとは少し違つて居ります。ほとゝぎすは杜鵑と書く外に子規、杜宇、蜀魂、不如歸などゝ書かれて居りますが、此等は皆なほとゝぎすのことなのでございます。

▲親に似ぬ子の杜鵑

◎俗に『親に似ぬ子の杜鵑』と申す諺がございまして、この意義は、子と云ふ者は元來親に似るものであるのが、如何かすると親に些とも似ない子が出來ることが御座います。その場合に『親に似ぬ子の杜鵑』と申すのでございます。

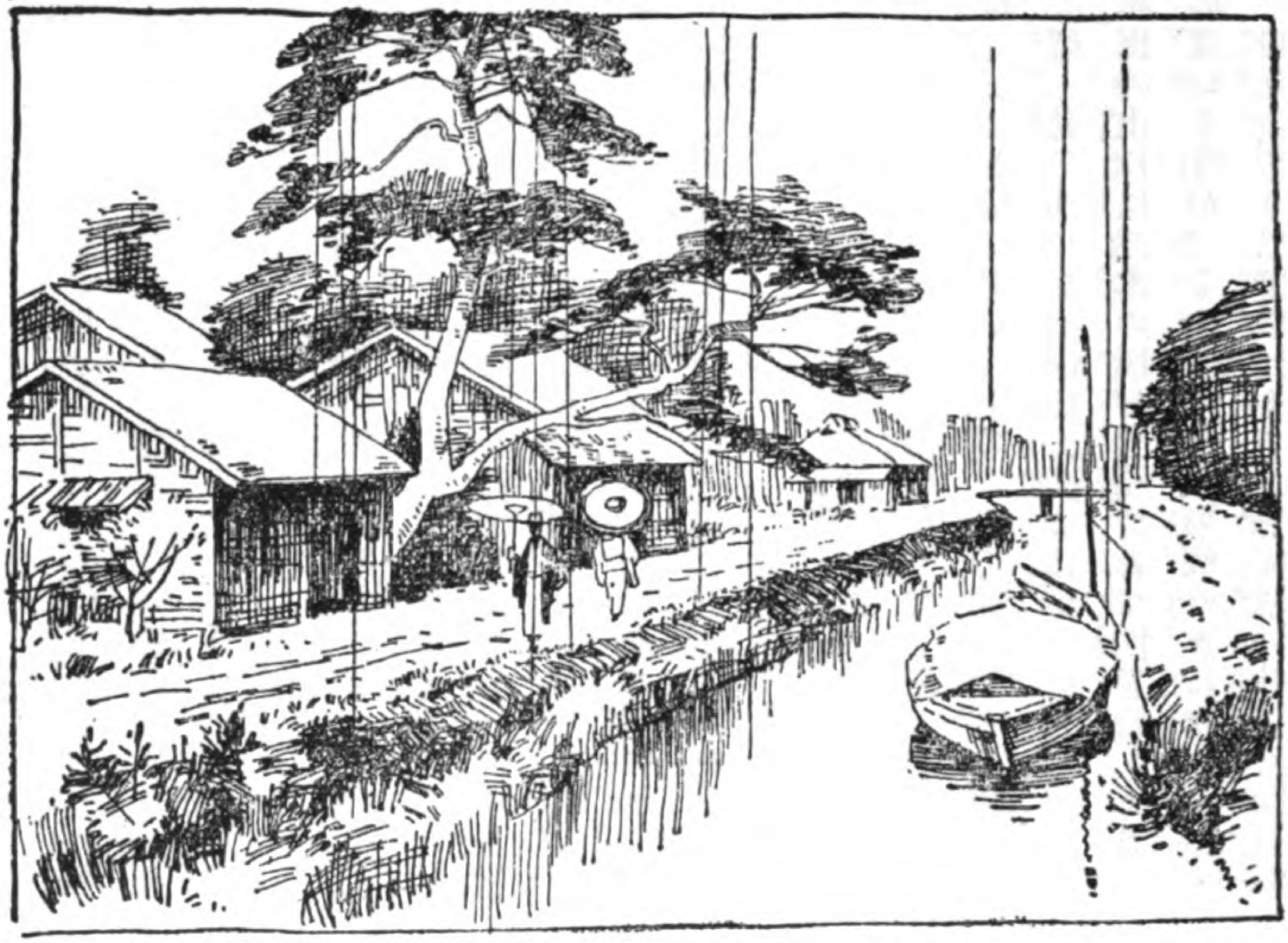
◎その譯は、元來杜鵑は如何も自分で巧く巣を作ることが出來ないので、何時も自分の卵を密と鶯の巣の中に入れて置くので御座います。すると鶯は其れを自分の子かと思つて一生懸命になつて生育てあげて見ると、だん／＼自分に似ない大きな黒い翅が生へて、オヤ／＼と云ふやうな始末になるのでございます。

◎今その實例を擧げますれば、萬葉集に曰く、昔或人



橋場の渡し

曳船通り



の樹蔭に鶯が巣を作つて居ました、其の中の一羽が殊更に大きく、頻りに自分の翅を舐めて居ましたので、どうも怪しいと思つてる中、ホト、ギスと一聲鳴いて飛び去つたさうで御座います。

▲蜀の望帝化して杜鵑

◎これは支那の故事でございます。昔、周の時代に、蜀に杜宇と申す人がございました。此の人は五帝時代の帝國の後胤なので、身柄も立派ですし、最初は王と稱して居りましたが、軈て帝と稱して望帝と申して居りました。

◎望帝は大層徳の高い人で、自分でも自分より徳の高い者は決して無いと思つてゐた位でございました。然るに刑國の人に鱉靈と云ふ者が御座いました。この人は一旦死んだのですが、其の屍が水上を流れて汶山といふ山の麓まで來ると俄かに蘇生り、其れから蜀の國へ行つて望帝へ見えました。

◎望帝は鱉靈を擧げて直ちに宰相と致しましたが、熟

熟惟みるに、自分の德は如何しても鼈靈に及ばないやうなので、終に位を彼れに讓つて飄然逃れ去りましたが、其の死するや化して杜鵑となつたさうで御座います。

◎此の口碑は實に一種悲愴では御座いませんか。先には一國の帝王でありながら、死して後鳥となる……。故に蜀の人は杜鵑の聲を聞くと、是れ我が望帝なりと云つて無限の感に打たれるので御座います。されば他の諸鳥が杜鵑の子を孵化すのも、之れ皆な望帝を愍れんで、其の子を敬ひ憐むのだと申したとの事で御座いました。

◎この口碑すら既に陰氣臭い所に、茲に今一つ陰氣なことには、杜鵑は『死出の山の鳥』だと云ふことが十王經と云ふお經に書いてあることで御座います。

◎閻魔王國の前に死出の山と云ふ山がありまして、この死出の山には二本の樹が立つてゐて門をなしてるので御座いますが、その門の樹は荊棘々々になつてゐて宛ら鋒刄のやうで御座います。此の樹の枝に杜鵑が棲んでゐるとやらでございます。即ち杜鵑は如何しても冥土に餘程緣があるのです。

▲文學に現れた杜鵑

◎先に述べた通り、和歌に、漢詩に、俳句に多く詠せられた鳥は恐くは杜鵑の右に出る者は御座いますまい其の他、昔の文章に數限りもなく載つて居りまするのみならず、小說の題や、雜誌の題にまで載せられてる所を以て見ると、如何に此の鳥が文學と密接の關係があるかゞ判ります。而も其の形や、其の鳴く音を實際に知つてる人は餘り多く無いのは可笑しいではございませぬか。

◎支那では彼の蜀の望帝の故事から一種悲愴な鳥として賦せられ、離別の情を述べる時などには最も好個の景物とせられて居ります。

蜀魂千年尚怨誰、聲々啼血向花枝、滿山明月東風
夜、正是愁人不寢時　　　羅　鄴

◎和歌にも勿論此の鳥を悲愴のものとして居りますれ

ど、其の程度が漢詩に比べれば餘程少く、寧ろ杜鵑の悲愴な鳴く音に却つて趣味を有すと云つたやうな所があるのでございます。されば歌人は如何にかして其の鳴く音を聞かんとし、態々山奥まで其の聲を聞きに行つたやうな始末でございます。殊に其の初音は最も愛賞せられたものでございます。

ほとゝぎす聲まつほどは片岡の森のしづくに立やぬれまし　紫式部

聲はして雲路にむせぶほとゝぎす涙やそゝぐ宵のむら雨　式子内親王

◎これが俳句になると又餘程悲愴の分子が稀薄になつて、唯だ他の景物との取合せに腐心したばかりのやう思はれます。

ほとゝぎす啼くや五尺のあやめ草　芭蕉

ほとゝぎす琥珀の玉をならしゆく　蕪村

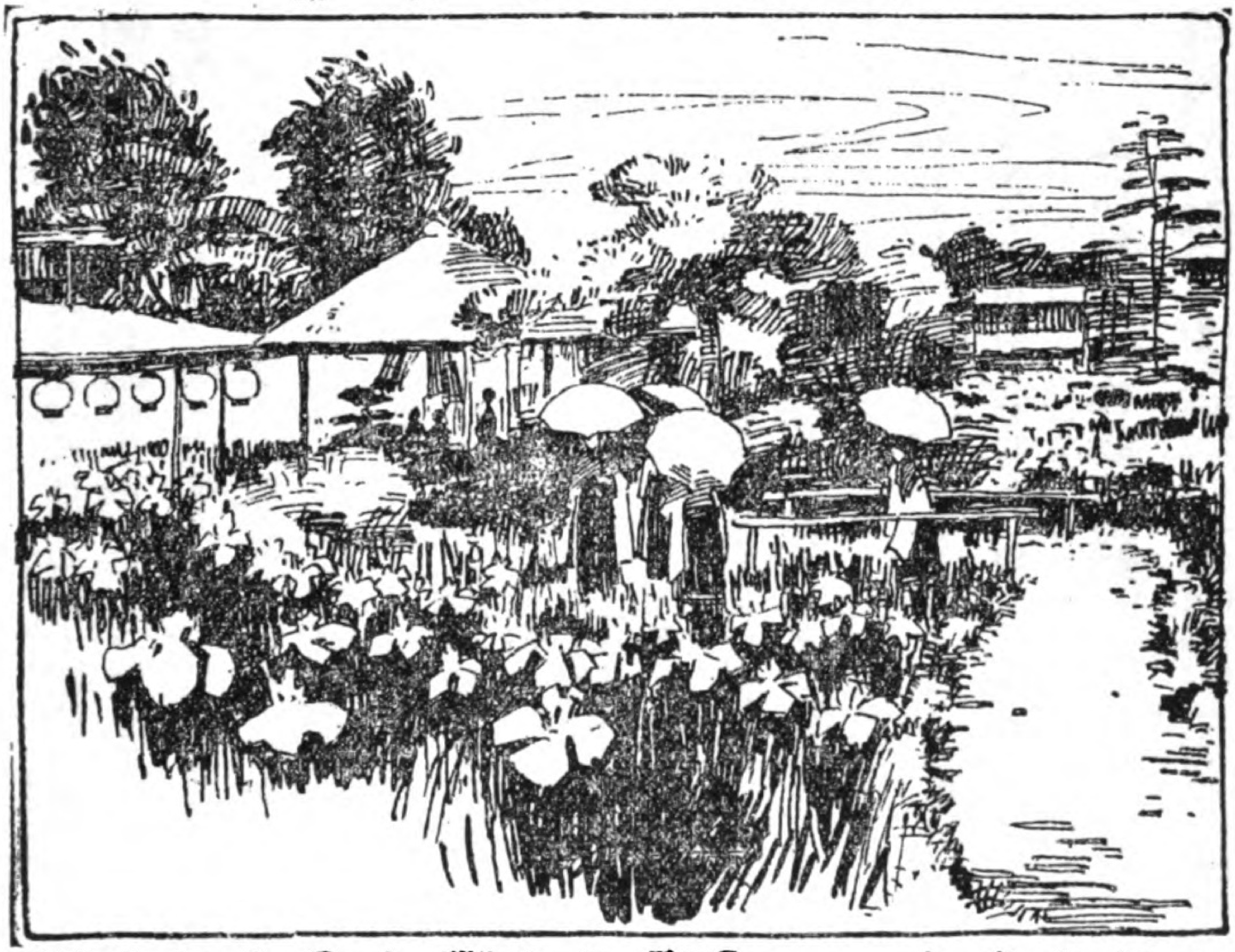
▲都戀しき杜鵑の聲

◎昔承久の亂に、後鳥羽院が北條義時等の爲めに隠岐島に御配流せられ給ひし時、行宮へ近く杜鵑が啼いたので、さらでだに京都戀しと思召されてゐた時でございますから、取りあへず「啼けばきく聞けば都の戀しきに此の里過ぐる山杜鵑」と詠御あそばされますと其の後は決して此の里へ杜鵑が鳴かなくなつたさうで御座います。

◎その後、後醍醐天皇も亦た北條高時の爲めに隠岐島へお流されし遊ばしましたが、杜鵑は些とも鳴きませんでしたので「聞く人も今はなき身に杜鵑たれを怨みて鳴かぬ此の里」と詠御遊ばされますと、其の後は又元のやうに杜鵑が來ては啼くやうになつたさうでございます。何しろ蜀帝が國を逃れて後死して杜鵑になつたとの故事は、定めて後鳥羽院や、後醍醐天皇の御身に取つて思ひ出多く坐したことで御座いましたでせう。

◎尚ほ後鳥羽院の御製と同じやうに物語が、崇徳天皇順徳院に就ても言ひ傳はつて居ります。順徳院も承久の亂の際、北條義時の爲めに佐渡島に御配流せられ給ひ、其の折、杜鵑の聲を聞しめして偏へに東都へ歸ら

堀切の花菖蒲



んことを思召され、一首の和歌をお作り遊ばされましたら、其の後は絶えて杜鵑の來ることなく、今日に至るまで、順德天皇の御陵にすら近かぬさうでございます。但し其の御製は唯だ佐渡の口碑に殘つてゐるばかりですとやら。

▲杜鵑の落文

◎讃岐國阿野郡白峰山なる、崇德天皇の御陵の附近の里民は、蟲が木葉にグル／＼とくるまつてるのが地上に落ちてゐると、其れを杜鵑の落文だと稱して居ります。之は恰も蓑蟲の如く、無論開けて見たら裸蟲が木葉を捲いて巣を作つてゐるのに違ひありますまい。而し里民は之に對して面白い傳説を有して居ります。

◎古へ保元の亂に、崇德天皇此の國へ還幸あらせられその砌、毎年夏になると、杜鵑が來て鳴き、其の度毎に京都の事を思ひ出でられ『なけばきく聞けば都ぞ慕はるゝ此の里過ぎよ山杜鵑』と詠御あらせられました但し此の御製は、後鳥羽院の御製に甚だ能く似て居り

ますから、何れ孰らか混同して誤傳せられたので御座いませう。

◎此の御製あつた翌年からは、杜鵑が此の里を過ぐる時に決して啼くことなく、其の代りに音信奉つた證據に此の落文を落してゆくのださうで御座います。なんと哀れ深き趣味ある傳説では御座いませぬか。蓋し之は杜鵑が餌を啣んで飛んでゆく際、過つて落すものたることは明らかで御座います。



▲朽木の洞穴の杜鵑

◎杜鵑の初めて鳴くのは舊暦三月三日、田家では此の聲を聞いて初めて農事を始めることにしてありました。此の時分から次第々々に啼くのが盛んになつて、恰度商陸子が熟す頃に鳴きやむので御座います。

◎それから段々寒空になつてゆくと、朽木などの洞穴へ潜伏して越年するのださうで御座います。故に冬期間は別に何も喰はず冬籠をしてゐるので、一寸之を見ると宛ら死んで了つたやうに見えます。其れが來年になると俄かに蘇生つて飛び出すので、昔の人は此等の事から杜鵑は陰府の鳥としたので御座いませう。彼の十王經に死出の山の鳥としてあるのも、恐くは此の邊から思ついたので御座いませう。

◎今その實例を擧げますのに、昔信州高遠町に藤澤作左衛門と云ふ者の家僕があつて、冬の或日山に行つて薪木を伐つてゐると、不圖傍らの朽木の洞穴の中に杜鵑が一羽死んで居りました。これは一つ黑焼の妙藥（疱瘡に宜し）にして遣らうと思つて、家へ持つ

て歸つて箱へ入れて藏つて置き、其のまゝツイ忘れて翌年三月頃箱の蓋を開けて見ると、勿體ない死んでる筈の杜鵑が羽ばたきして飛び去りましたとやら。これは「ありのまゝ」と云ふ古書に載つてる記事なので、古歌に「奥山の朽木にこもる杜鵑夏を待ちてや音には鳴くらむ」と云ふのも此の邊の事柄を詠んだもので御座います。

米國の女學生々活

◎米國の大學中百二三十は何れも男女混合教育を實行して居る、從て此等の女學生を收容する寄宿舍も千差萬別で、一樣には行かぬ、元來貧富の差が甚しい米國では既に學生時代からして其寄宿舍生活に階級が付いてゐる、然し感心な事にはそれは單に生活上に於て丈けで、決して教場で上下の差は無い

◎富める女學生になると一ヶ年三千弗位の部屋料を支拂て堂々たる家屋に住で居るのがある、も少し下て田舍家風に出來て一寸ハイカラなのがあるか、此種の寄宿舍は一人一ヶ年部屋料が五十弗位、外に書齋、寢室、浴室まで附屬して、點燈料、暖爐費までも含んで居る、此等は大抵十人前後位一團になつて住で居る

◎普通なのになると先づ大きなホテルと云て可い位なもので百人以上三百人位までも入れて居るが、之れ等は單に自分々々の控室兼寢室がある許りで、外には共同的の應接間がある、又或る大學になると、食事等も互に當番があつて、炊事係を手傳ふ樣になつて居る所もある

◎極く手輕なのになると貧しい女學生が十人位から十四人位まで費用を出し合つて全く他人の手を借らずに自炊生活をして居るのがある、極端なのになると同窓生の仕事や洗濯物を仕たり給仕とか書記自修教師等になつて些少でも收入の道を計つて勉強して居るのがある

◎米國では如何に貧しい仕事をして居ても決して面目を失ふ樣な事は無い、此處等は全く米國生活の愉快な處で、殊に女學生間では其生活に差異があつても、彼等同志の交際は實に平等なもので、羨しい程である、而して朝夕互に往來し、舞踏音樂を樂しみ茶會に招待したりして睦まじく暮して居る。



京の一瞥

關東男

京都の觀察に就ては既に「京のさま〴〵」や「京のさま〴〵を讀みて」があるのに、又しても京の話、さりとはお彼岸のお萩のやりとりのやうに嗅いやうだけれど、お向ふの、お隣の、自分の家のと、とり〴〵に別樣の味はあるもの、「皮層」かは知らねど關東男が一瞥した京のくさ〴〵を書いて見たい。

○自分が京の初對面は四十一年の四月で、今日まで前後六回京の地をふんだ。

○初對面の年の夏には、筒袖に麥稈帽被つて、洋傘を肩に、尻端折り、日に燒けた毛脛を出し、日和下駄穿いて十五日の間雨の朝も、炎天の日も毎日々々二三里も歩いて京の赤毛布をした。此異樣な姿は鴨川の水使ふ京の人の目には如何に映じたらう、黒い面、黒い脚の自分は、「兄はん參りまひようか」と辻待の車夫に屢屢聲をかけられた。

○道を尋ねるのにも勉めて京言葉を粧つて見たが却々口から出ない。殊に右へ曲れの左へ行けのと云ふのを東へ曲れ西へ行けと云はれたのには面喰つた。方角ぢやちと判り兼る。何々上る下るは隨分洒落て讀んだ積りだつたが、失敗！　あがる、さがると云ふのださうな。

○愛宕郡、櫻馬場、鹿ケ谷位は讀めない事もなかつたが、若王子とは讀めず甚だしいのは先斗町であつた。町名も法性寺入道式が多い上京區明寺内上る二丁目下天神町何番地と云ふのも自分には長たらしく思はれた。

○町の看板に質屋が只「質」と一字だけ、鳥屋が「鳥」と一字、さうかと思ふと染物悉皆屋にも恐縮した。祇園の花柳街には貸座敷と出て居た。待合のことだらうとは獨り合點で

○嵐山への途は從弟を案内に金閣寺から仁和寺へ、等

持院や妙心寺や、何處も實物拜觀に食傷して花園から嵯峨まで汽車にのつた。

○渡月橋を渡つて保津川下りの舟を見た時は足の疲勞も忘れた。「花の山二町登れば大悲閣」の鐘樓に鐘を撞いて歸りには天龍寺の前で團子を食べた。

○二條停車場から驟雨に出合ひ、通る車に「行かないか」と云つたら、歸り途でないからと先様からの願下げ、東京なら濡坊主の足下を見てとる處、従弟は云つた「これ京都人に山氣の無いところ」と。

○十九年も京に住へる東京の人の此地は決して活動の地ではない隱遁の地であるとは至言であらう。

○カラン〳〵と氣になるやうな人力車に乘つて増すから急いで走れと云つた處で駄目。

○觀兵式の日に群集の中で蜜柑箱を二錢で貸したり、池の端に鉢放があると云へば直に竹を賣るやうな際物的な事は出來ない地だ。

○想ふに物質文明の弊が名所や名所でない迄も昔から何々横町とか名のついた道も、次第に破壞して、電車が通り、西洋館が建つてゆく東京とは比較すべくもない。

○これやがて京都が依然として山紫水明、事々物々昔ながらの面影を存して人を懷かしめ、人に戀しがらせる所以であらう。

○京美人と云ふが町中ではとんとお目にかゝらなかつたが、石川丈山の隱遁所詩仙堂で尼さんの懇ろな案内を請ふての歸るさ、高野川に沿ふ修學院村では、色の白い女に會した。眞新らしい手拭を姉さん被り、紺絣りに紺脚絆、太い紅襷を綾どつて、頭に物をのせたり車を曳いてゆく所謂大原女は美くしかつた、普請場の杭打の綱引く東京の日傭女とは雲泥の差も夥しい。

○鴨川はもう少し綺麗だと思つたが、四條邊にも河原に草はあつた。併し下加茂から上加茂に向ふ鴨の本流に沿ふ十里の松並木の堤防を行く者は、清冽河底の小石も數え得るやうな流れを見た時、實にや加茂の神泉から湧きでる清き水の集りかと想ふであらう。

○愛宕の山で雷の音がし出した時、自分は此流れに添

して二三杯は續けざまに飲んで見た。

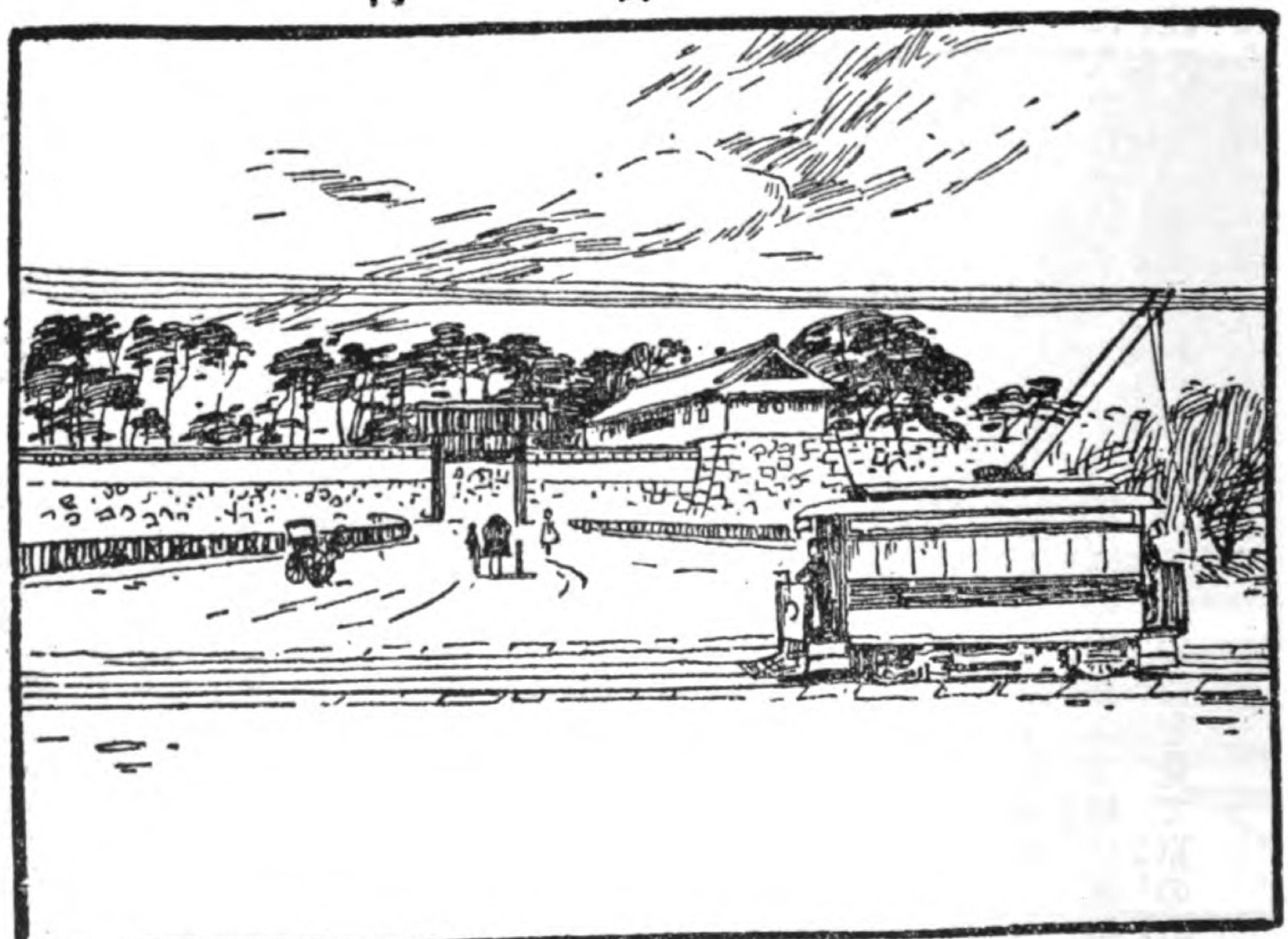
○學生町は大學、高等學校のある邊、吉田から岡崎附近。

○女學生の姿はあまりに野暮だ、何時とかの巾廣リボン、行燈袴を胸高に、靴足輕げに歩む東京の學生を見た目には下田式庇髪に日和下駄の學生はあまりに見すぼらしい。

○動物園は岡崎にある。天然の風致を利用した上野には比ぶべくもないが、水牛に飯匙蛇は珍らしかつた。

○ベンチに腰をかけて休んだ時、案内の某氏が云つた

櫻田門



「これで春になると奥様や何か、立派に着飾つたのが此處で御持參の辨當を開いて、四邊かまはず食べるのです、後は落花狼藉の體ですよ。」

○話の種にと京極の湯屋へ行つた。設備は東京の湯屋も及ばぬ點がある、下足札は勿論だが衣服の籠も番號がついて眞鍮製の腕輪樣の合札がある、それを腕にはめて湯に入る態は一寸滑稽浴槽は二つあつて流しは石疊み、小桶が少なく槽內で平氣で流して居る者が多い槽は流しの中央に設けられてある。

○窓の外には三和土の泉水があつて噴水もある、魚が飼養してあるのかと思つたら子供が泉水の中で騷いで居た。兎に角、如何な貴重品を持參して行つても盗まれる憂はない。

○氷屋は奥の方に庭があつて見るからに涼しい氣持、東京で「薄茶」と云ふ名のを「宇治」とは何處までも雅びた名である。

○盆には墓の花立ての處に水塔婆と云ふ經木で作つた二尺位の長さの普通の塔婆樣のものが一對宛立てられる。而して家のものが墓參の裝は第一服、羽織袴の者もあつた、こんな點は如何にも堅い地である。

○一張羅なる言葉は此地は決して通用せぬ言だらうな

○正月の松飾は東京程盛んに飾らない、貴名受のビクのやうな籠はこれも雅びなもの、商家でも戸毎に入口に吊してあつた。

○麵類所の看板を仰いで蕎麥屋に入つた。

○書出しに親子丼もあつたから注文した、醬油の色が白かつたから安い醬油かと思つたら却つて上等だとの話、「紫」と云ふ異名な恐らく關東から出たのであらう

○京都にきて料理を味はうと思つては失望する、京は決して口即ち食物の地ではない、目の地なんだ。併し冬ならば祇園の平野家に「芋棒」の煮食は五十錢内外で舌皷を打たして呉れる、芋棒は芋で、棒とは棒鱈のことである。

○蕎麥ならば京極の更科、こゝ許りは東京のそばの味である。

○初松魚の刺身は見たくもないが、南瓜の旨いのは鹿ケ谷近傍から出るし、聖護院大根の味も、お多福豆の柔かいのも共に捨て難い處がある。

○去年の暮、三十一日の拂曉に初めてせんざいを味つた。而かも停車場前に居た屋臺の暖簾の中で、せんざい、うどん、延二郎と赤に黒くぬいた掛行燈、お芝居にでもありさうな趣があつた。

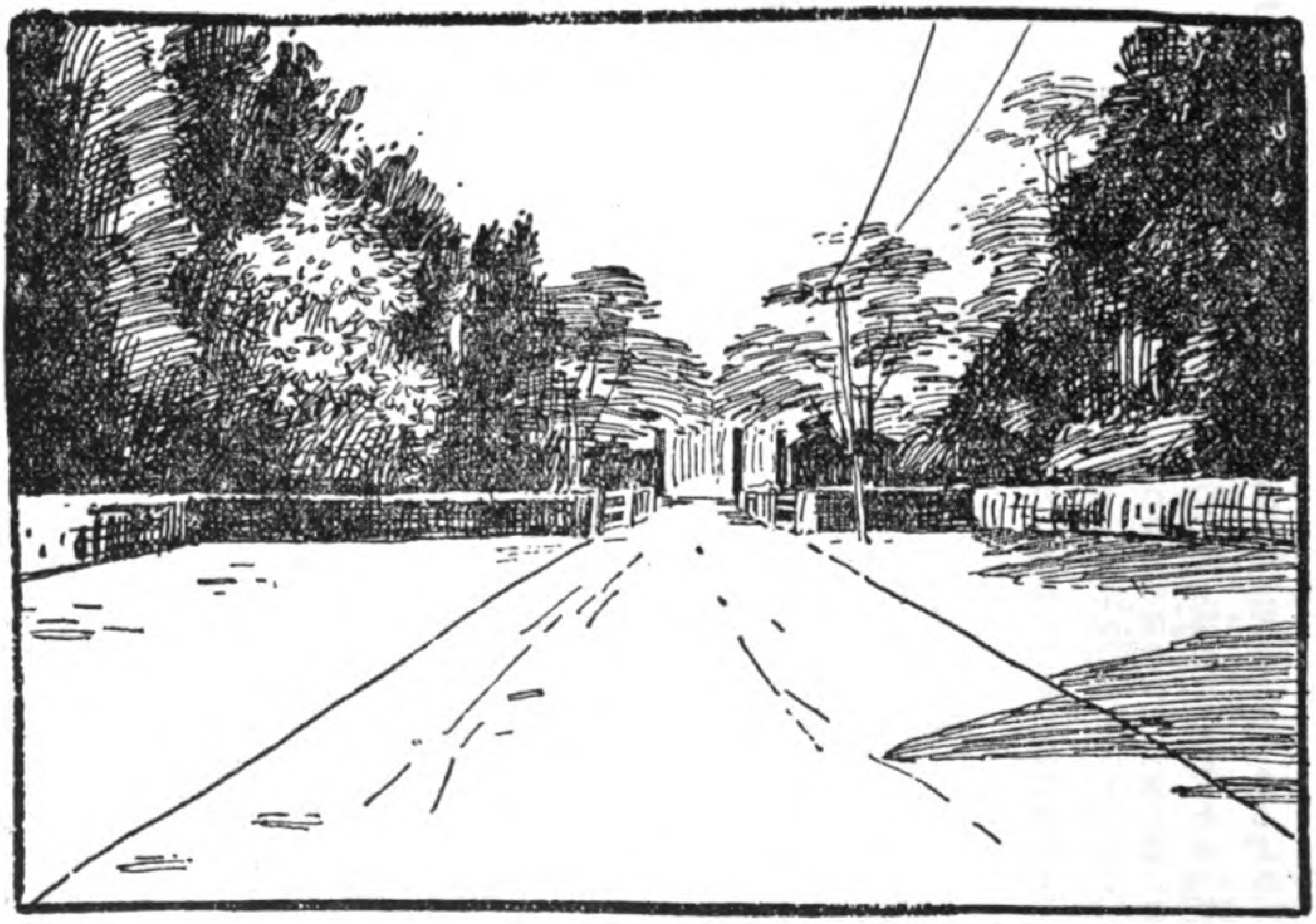
○街區の整然たる樣は氣持よきまでにキチンとして居る、碁盤の目を見て京の町を鳥目觀と思へば間違ひはない。

○何處の神社、佛閣も、掃除の行き屆いて居るには一驚を喫する。白い鴨川石の細かいのを敷きつめた庭なぞ踏むからに心地がいゝ。それも其筈名所古蹟で飯を食ふてふ處だもの。

○自分は京にきて毎も燒物を求めるのを例とした。清水燒は既に赤毛布の土產物と相場が定り土地の人は粟田燒のあつさりしたのを好くやうになつたさうな。

○衣の色好みは恐らく京の人は目が高いであらう。意匠に於ても關東は一歩を讓るやうだ。さればか白木や三越の懸賞圖案の優等はいつも京の應募者の手に落ちる。

新宿御苑



○夏の滯在の折からは、恰かも盆で八月十六日には有名な大文字の火を見た、電氣や瓦斯のイルミネーションも短時間ながら薪の火によつて飾られた大仕掛のイルミネーションには及びもつかない美くしさだつた。

○南禪寺の境內をぬけて若王寺前から東山の裳裾ぬふて道傍の靑草ふみしだきながら、月待山の畔に向ふのは自分が京にきての道順ときめられた。叔母樣の家は月待山の麓にある。北方遙に田から畑、畑から田と續

いて、菜花十里の陽炎の中に雲雀も歌へば、蝶も舞ふ白河あたりの白壁を間に、田はまた丘となり森となり林となる。人の聲も鐘の響も車の音も一つ一つに京の歴史の說明者のやうに思ひながら、身はもう自然美に溶かされて終つたやうにたまらない。

○夏の一夜は月待山の叔母の家で、寢待月を眺めながら義滿が「我庵は月待山の麓にて傾く空の影をしぞ思ふ」を幾度か誦したが、京見物するなら夏よりも、秋よりも、冬よりも、必らず春に於てすべしである。出來やうことなら深い史的知識が欲しいもの。

○京に就ての語り草は却々こんなことではつきない、が餘り書き出てゝ襤褸を出すのも本意ないこと、土地の方々の一言は自分が數萬言に勝るであらう。自分は京をなつかしい、懸しい地として居る、就中淸水は一番大好きな處である。

○停車場の物賣が、

「梁の千枚漬!」

「祇園だんご、八橋、都饅頭!」

の聲に後髪引かるゝ思して毎も〳〵自分は、此なつかしい懸しい地を後に東都へ歸つてくるのである。(完)

△屋根の材料で理想的なのは日本の草葺で、夫は木片葺、瓦葺である、一番非衛生的で而かも夏熱く冬寒いのは亞鉛屋根で、黒いタールで、塗たもの等は一層惡い、

△敷物の中で疊は溫熱を保つ上から一番恰好の物であるが、同時に又細菌の發生に適して居るから日光に時々曝す事を忘てはならぬ、

△日本人は洗湯の熱いのに這入る習が慣があるが、あれは注意すべき事で、科學的に云へば攝氏の二十三度位から三十六度位までが一番適當である、

△帽子は輕い程、襯衣は白のもの、靴は雨天で無い限り布製の物が一番理想的で且つ經濟的である、

△室内の換氣は一時間に三回より多からぬ方が可い、自然の換氣法には障子唐紙を使用するのは無論第一であるが、同時に壁は砂土塗が最上漆喰塗は極惡い、

△洋燈の光力を一とすれば、夫に乳白色の硝子笠を使用すると光力は卅倍になる、故に經濟上から云つても理想的で衛生的である、紙の笠は光力を僅に三倍にする丈けである、

△室内の塗色は灰白色か又は帶青色のものが一番だ、之れは光線の反射上適當な色彩である、冬暖かに夏涼しからしめるには壁の厚さを增す程有効である、

忘れ得ぬ面影（二）

紅蘭女

いづれを菖蒲と引ぞわづらふぢやございませんけれど、斯う目を閉ると、若々しい華やかな御面影の十幾つ、ぞつくり浮んでなつかしさがらん〳〵湧いて參り升もの、誰方からお話致さうかと一寸困り升わ。さあ……先

△鏡子様から――此方は卒業遊ばさぬ中に最早お嫁き遊ばしましてね、今は札幌に被居しつてゞすの。御良人ですか？　あのう農科大學教授で入らつしやい升。今頃は定めし白皚々たる積雪を眺めて桃さく都の空を戀ふて被入るか左様々々、昨年送つて頂いたお寫眞をお目に懸けませうね、えゝ、夫りや、お丸髷のですわ、わざ〳〵束髪のを北海道くんだり迄ねだつて遣る様なそんな氣のきか無いことは致しません。ねえ可愛いゝ奥様でせう、下ぶくらな目の大きい、眉だつて細いけどきつぱりした……お色はあんまりお白い方ぢやございませんでしたが……此方のお髪毛は名代でしたの、夫はお見事なんです多くて長くて、お下げに結て被入つた時分にはお腰の下迄もございましたつけ、學科は上の部、しとやかな方でよく京都言葉を御出し遊ばして急いで云ひ直し〳〵なさいましたつたは。お近いとねえ、緋鹿の子の初々しいマダム振拜見に參上するんですけれど、幾百里の汽車の旅、船のたび……か弱い女の身空では及ばぬ望、只々折にふれてのお消息が何よりの樂しみよ。お筆跡ですか？　夫は〳〵達者にお書き遊ばします。是は私の想像だけなんですが、若か赤ちやんがお出來遊ばしたんぢや無いかと思ふのよ。何故つて、此三月ばかりふつつりお便が絶えて居るんですもの。オホ……はあ恐入りました。仰しやる通り此方からも遂御無沙汰して居升の、思ふばかりで……鏡様と並んで被入つたのが朝子さん――と云ふ方――お猿さんて綽名が附いて居たんですよ。キヤツ〳〵とすぐお騒ぎ遊ばすから……丸顔な肌合細かなお齒並の

お惡いのが却つてお可愛らしうございました。癖の無いお毛をふつくりいゝ恰好に束髪にして、蔦の葉のほら黑味がゝつた紅い簪があるでせう、彼を御さし遊ばすのがお好き。スラリッと華奢な雨にも風にも堪へぬ風情で被入りながら、級切つての運動家、テニスコートに君の影見えねば、人が却つて怪しむ位ですのよ。夫は滑稽な方で側に居ると誰だつて失笑さないぢや居られませんや。いつも快活らしく粧つてゝしたからね誰だつて、呑氣な方だと思ひますけれど、いゝえ、中中御苦勞がお有り遊ばすのよ。お幼小い時父樣にお死別れ遊ばして伯父樣のお手許で――血を分けぬ仲ですもの、どうしたつて伯母樣がねえ。我袖は……人こそ見えぬ乾く間も無し」つて百人一首の中のあれが身につまされて大好な歌だつて仰しやるのを見たつて大抵お察し申上られるでせう。伯父樣と云ふのが某病院長……廣大のお庭を朝子樣大變御自慢でしたわ。伯父樣にお子が無いから跡をお繼ぎ遊ばす筈なのに、御婚約の方は醫科とか承りました。未來の院長夫人として交際場裡に其名ときめき給ふ事でせう。卒業後お茶やお花の稽古でお忙いとか。お琴はもう奥許をお受け遊ばしたんですつて。

△お仲のよかつた友子樣は――丈も充分なりやあ、恰ぷくのいゝ、しやんと胸を張つて腰かけて居らつしやる。姿勢正しく脇見もせずに先生の講義を專念に拜聽と見せかけて居らつしやるんですからね先生の信用は大したもの、操行點の百點だつたのは此方獨なのよ。けれどどう致しまして、中々お人がお惡くつて、足を腰掛の下から長く伸して前の人を靴の先で突いたり、手紙を級中に廻す張本人になつたり遊ばしてね、よく皆なをお笑はせに成りますのに、其くせ御自分ではクスリとも遊ばさない……學科の方も秀いでゝ被入いました。習字は岡田さんに行つて被入いましたけれども、一寸もよかあございませんの、卒業後職業學校に入らしつた由、朝子樣からの御通信です。

△松子樣――大の學習院贔負、頭の先から足の先迄學習院ぶつて居らつしやるのに。二言目には學習院

學習院つて振り廻されるので皆樣が何故學校に居らつしやるんだらうつて蔭口きくのよ。お色白で夫は肥滿つて居らしつて胴なんかはち切れ樣、少し赤い癖のないお毛を例の學習院式カムレットにお結げ遊ばしてリボンは思ひ切り派手なのをおかけ遊ばしますの、常着まで袂の先を三寸位の丸みになさつてなのよ、えゝ矢張學習院のお眞似だわ。お召物からお持物皆ギラギラ日に立つ物許り、お家の財產を中々鼻に懸けて被入い升のでスレ〳〵の方が二三人あつたんでござい升わ‥‥その方達のお名を聽かせろつて？



まあお預に致して置きませう。あまり喋舌ると後の祟が恐しう御座升ものホヽヽ。土曜日毎に鵞堂さんへ被入てゞしたのよ。手跡ですか、御自慢程にやあ‥‥ですわ、月曜日の朝のお話は定つて「おとゝいには何伯令孃と口をきいたの、やれ某侯爵の姫樣が御挨拶遊ばしたのと大威張でお出で遊ばしますのよ。電車の内でわざと高聲でフレンチを得意げにお話し遊ばしますつて寄宿の方が仰しやいました。はア寮生で被入いました。此方の奥樣觀をお數へ申しませうか、御立派の夫人はねお座敷に七輪もお

鍋も持ち込ませてあたりをパン粉だらけにしてフライ一つするにも大騒ぎなものと決めて被入るの、長い紫矢絣のお袖をする〱引づッてヽすつてさ。大の海軍好き、未來の海相夫人を以て任じて被入る……いつもいつもにこ〱、愛嬌のお有り遊はすのが久子様……この方の怒り顔見た事が御座ませんわ、全くよ。たしか英語が得手で被入つたと思ひ升。

△美智子様――洒々落々、フンと人をも世をも茶にした様な御動作、父様が文士で被入るせいかも知れませんが世間の表裏をようッく知り拔いて被入い升のよ。で私なんかは「貴女なんか世間知らずでだめよ」つて頭こなしにきめつけられたものでした。澤山のお毛を高く前髪出して束髪にして被入つたんですけど、御卒業間近に成つてカムレットに遊ばしてね、リボンはいつでも縞。

此方の昔の綽名を知つて居らしつて？　をかしいのよ。「膨張」つて申し升の。譯けですか？　今でこそ何を云はれても茶化して笑つて居らつしやい升けど、四年位前迄は夫は〱名代の怒りつぽで、すぐ眞赤に成つておふくれ遊ばしたからなのよ、鐙鞆子様がこの綽號をお奉りに成つたと覺えて居り升の。自分が云ひ出したら是が非でも押し通さん意氣込すさまじく、もうもう片意地で先生さへ手古ずつて被入つた程ですのにねえ。大變なおかはり方、ですから私いつも左様思つて居り升わ。小さい時の性質なんか當にならないもんだと。負け嫌で在すだけに諧謔ものはいつもいゝ點をお取り遊ばしました。肥えて被入るし、お丈も高し、おみ帶をおしめ遊ばした時なんかまるで、肩揚がなかつたらマダムだめつて云つて上げた事が屢々なんでしたわ。お色艶のいゝ、いつも頰が林檎の様にあかくて……お家庭があんまり面白くなさ相、母様や妹様方の不平をよく並べて被入いましたつけ……いゝえ、實のお母様よ。

△此方と正反對に――お丈のひくいのが蔦子様つて夫は〱眞面目な方。御養女で被入い升とか、道理で人を御そらし遊ばさぬ御交際ぶり、人の顏色を御讀み遊

ばすのがお上手でしたので、先生方に村井々々つて大持でした。わけてお書の先生は一しほ。所謂お花……なのよ。大きな聲では申されませんが……。御器用な方でね。書が御上手なんです。學校に何か會でもございますとね、乾度書の先生のお手傳にお呼ばれ遊ばしましてね。舞臺の背景でございますわね！　夫をお書き遊ばしますのよ。

夫から對話が夫は〱お得意……いつぞや田舍者に扮り遊ばした時などは、ヤンヤと云ふ拍手喝采、式場も爲に破れ相でございましたつけ。蔦子樣御卒業後だつて、まだちか子樣やら、美子樣やら、對話のお上手な方は幾人も入らつしやい升けれど、學校の舞臺が寂れたのは慥よ。地藏眉の目のぱつちりと切れ長な、露宿した如な涼しい眼で仰ぎ見るのがお癖でした。黒い美しいお毛をいつも〱引つめ加減の束髪に何一つもおかざし遊ばさぬのが却つて奥床しう存じ升。我級中いたづら者揃で御座ましたので何か目ろんで相談をはじめる時だつて別物よ。只々ちみな方。いだづらッたつて貴女、性が知れて升わ。御自分の學生時代を考へて御覧遊ばせ。此間ねえ、御嫁き遊ばすつてお噂をきき込んだのよ、何がさて、事あれかしと待ち構へて居る私達ですもの、見逃すものですか、早速、お祝詞やらお恨やら云つて上げたと思召せ――マア其御返辭は――かねて期したこと乍ら、その眞面目さ加減は！　さすがいたづらつ子の誰、彼ギャフンて參つて仕舞ひましたのホヽヽ、御婚家先は學士ですつて、行末長くお榮え遊ばしませ。

△絹子樣――さつりと竹を削つた樣な御性質、其くせ中々の神經家で被入い升の、作文がお得意、皆がわあわあボールなんかして騷いで居ても、詩集片手に獨いつも築山陰の櫻樹にもたれて何か冥想にふけつて被入いましたわ。細面な沈んだお顏立ち、黒目勝ちのお目がたえず憧憬た樣に動いて居升のよ、高師に入學遊ばしたとやら……。御一緒に居た時にはつまらない事にも爭つて白い目仕合つたり致したこともござい升けれど……なくてぞ人は戀しかりけるとやら、斯うお別れして仕舞つては夫もなつかしい思ひ出の一つ、雨につけ、風につけ今頃は如何におはすと偲ばぬ事は御座ませんわ。いつ、又御一緒に集へますことやら……●

閨秀偉人

高畠式部

川又文芽

▲浪士を罵倒す

勤王佐幕兩黨の爭所在絶えず、櫻田門外には井伊大老を戮り、猿ケ辻には姉小路中納言刺さる、薩長は堺町御門に戰ひ、幕府は禁軍に抗すなど、内外上下腥氣に滿た頃、京師で西郷隆盛、梅田源治郞等勤王の士に交て國事を論じた女丈夫に高畠式部といふ八十近い老媼があり升た、或時官軍の一浪士が式部に向て官軍幕軍の死屍累々の狀を見ては何と感ずると問ひ升と

斬る人も切らるゝ人もあはれなり
おなじみくにの民と思へば

と答へましたので、浪士は其卒直にして而も意味深長の歌に一言の返す言葉もなかつた、又木戸孝允、西郷隆盛等に或酒席に招がれた處が、澤山の藝妓舞妓が座に滿ちて、杯盤狼藉流石の豪傑も正體もないのを見て

異國のあだうちふせぐ丈夫も
みやこのねこに腰ぬかしけり

と書捨て、ツイと座を立て歸つたさうです、凡てこの調子で忌憚なく時の貴人や、武士に交際した、高畠式部はソモ如何なる媼であつたでせうか。

▲女子にして刀劍を鍛ふ

初め京都の高畠某の後妻として大阪から嫁して來ましたが、間もなく夫に別れましたので、其以後は管絃和歌を以て世を過すべく決心しまして、殊に箏は故久我建通卿と同じく林廣就に就て大曲傳授を受け宮中に奏樂の砌は必ず召出された程です、かばかり優しい女でありながら、又歌道を千種有功卿に學んだので、その勤王の志に感ずる事深く、卿が邸中で刀劍を鍛はれ升時には、必ず槌を有て其相手もすれば、又自ら鍛ふた事もあり升た、然るに晩年に及で女子の精神の籠た刀劍は眞の刀劍にあらずと自覺して斷然之を廢しました、が其代り。

▲高彫、毛彫を娯楽

としました九十になつても、尚其嗜好を廢めませぬ、明治十年九十三歳の時長六寸、巾一寸位の筆筒に、古今、新古今百首宛を彫刻して、陛下に獻上しやうとしましたが、フト竹に薄い黒い縞が一條あるのに心付いて、別に新に彫刻して獻上し．御褒美として絹一匹を賜はりました、その手許に殘したのを見ますと、歌一首が二行に彫つて二行で巾が五厘ほどしか有ませぬ、若いものでさへ眼鏡を掛けねば見られぬ程纎細な作です、夫を九十三歳で彫たのですから驚くべき精力ではありませぬか、尚此他に一寸四方の象牙の香合の表に千字文を彫ました、最初お仕舞に少し字が入り切らぬので研ぎ卸して、更に彫りましたら、今度は自分の名を入れても少し明きすぎたとて、又研いで、三度目に漸くおもふやうに出來たさうです、これも九十四歳の時です、其根氣は實に今日の若い人には嘘としか、思はれ升まいが、然し事實が證據立てゝ居るから仕方がない。

▲雲助の宿で一泊す

舟が嫌ひ、車が嫌ひ、駕籠が嫌ひ、といふので、明治十四年五月廿八日に九十八歳で歿くなり升まで、旅は草鞋、平常は利休(日和下駄)に限て居升、維新の少し前に四日市の豪商田中武兵衛の家に泊て、夫から江戸へ立がけに雲助を雇ふて兩掛を擔はす事にして呉れ升た、そこで來た雲助を見ると赤裸の大男です、式部はいくら裸八貫でも夫では忌だからとて襦袢を買て被せました、武兵衛はこんな男では途中が物騒だから宅の手代を別に伴させやうといひ升と、ナニ大丈夫雲助は金さへやればこちらの自由、面白い處では休み、草臥た時には好な笙も吹けるとて、手代を斷つて、サテ東海道をボツ〳〵下て、濱松近所へ參り升と、式部は雲助に一度汝達の宿屋で泊て呉れまいかと言出しました、雲助も最早や異りもの〻老人と思て居升から、承知して雲助宿へ伴て行て斯く〳〵と談しますと大勢の

雲助が手々にお孃さん／＼と喜んで柔いものを煮たり腰をさすつたりして、眞情籠めて、世話しました、式部が歌をよむ事を知て分らぬ乍らもわれも／＼とかいてくれといふので書いてやると、雲助等は私共もお慰をと繼ぐくしをして見せて終夜互に歡樂を盡しました式部は人間の飾なき親切は雲助社會に於て見るべしと太く感じて日記に之を書殘し升た、此時は實に八十八歳の老嫗であつたのです。

▲論語の章句を和歌に譯す

當時加賀金澤の本町に近田太兵衞といふ書肆に太代といふ娘が有ました、不幸醜貌で迚も良縁を得られる見込がないので、千代は俳句で名を殘したり、妾は和歌に一生を託さうとて、式部に入門を乞ひ升た、式部はさういふ決心なら誠に結構だが、婦人の貞操を堅固にするには論語位は心得て居るだらうナと念を押ました、太代は恥い事には篤と知り升せぬと答へますと、夫ではとて先づ論語の章句を初から和歌に譯して敎へました、固より澤山あり升が、其中で殊に旨く譯されてあると思ふのを左に掲げます、

貧而無レ諂

やれふすまかつきぬるよも月影を
　しのぶこゝろはそらにすむらむ

道レ之以レ政齊レ之以レ刑民免無レ恥

まつりごといましめのみは甲斐ぞなき
　まことののりをたみにほどこせ

視二其所一レ以

つゝむともこゝろのよるべおのづから
　あめつち人のしるぞすへなき

起レ予者商也

おのづから心のはなの咲出て
　きみが袂ににほひそめけむ

周監二代郁々乎文哉

まごゝろの花にひらきてうるはしく
　さかゆくすがたわれはしたはむ

△天物を暴殄せず

式部は誰の家に招がれて御馳走になつても、其食のこしを綺麗に持て歸るので、「式部さんはきたない人」と後指さゝれ升たが、決してこれには頓着せず、食のこしを捨てゝは天物を暴殄する道理だからとて、持歸つても自分が食べられぬと見れば悉く乞食や貧民に施しました、岩倉贈大政大臣が一時洛北の岩倉村に蟄居を命せられた事が有升が、其後百姓共に手拭を染めてやりたければ、式部に歌を書けよといはれて、

　高畠のくそにもならぬくそみきり
　　きたなきばゝと人にいはるゝ

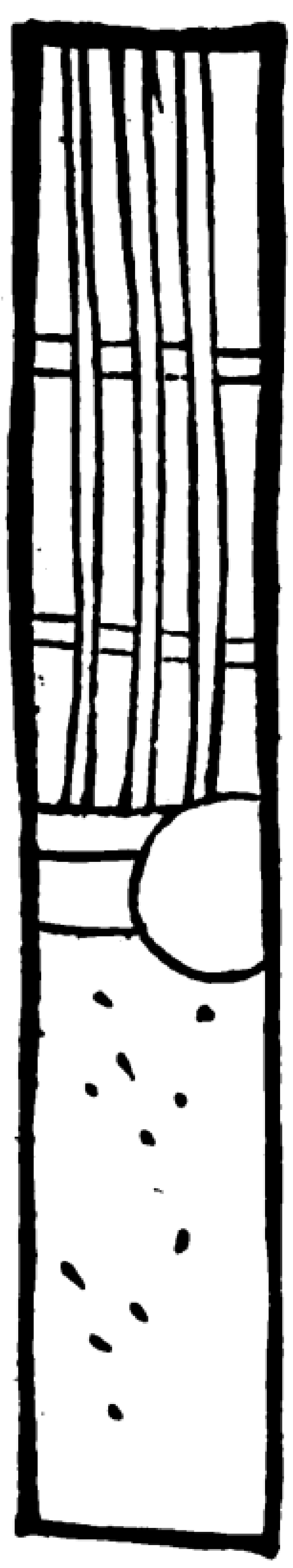
くそみきりは糞三切にして、式部の九十三歳にかけきたなきばゝは俗語のババ野郎と己の婆々をかけたのです、百姓に與へるものときゝてこんな惡戯を書いたのですが、公は面白いとて其儘染さゝれました。

△辭世は平日に在り

式部が死なれます時、辭世はと嗣子が問はれましたら、辭世を態とらしく作るに及ばぬ、平日の作の中でいくらでも辭世らしいのがあるといはれました、僞り事の嫌な式部は死に臨で心にもない辭世を作るのを面白からぬ事としたのです、そこで今更のやうに詠草を繰返しますと、澤山あり升たが、其中でも

　世の中はかくてすぎよと蓮葉の
　　うけてはながすつゆの白たま

といふめでたいのが有升、然し平日から妾が死だら、東山の見晴のよい、嵐山迄見える處に埋めよと言て居られたので、長樂寺の賴山陽の墓に接して、賴三樹三郎の墓と並べて西向に埋められました、但し山陽のは南向です。



名古屋の雜響

清　子

さても其後、中村の花暦、七月は蓮の花、白き赤きが公園の池に咲き、蓮飯の懐かしき香も味はひて候と、御便り申しゝより、四月菜種と交する程、御無沙汰の延び加減、何をか緒として申上げ候ふ可き。

明治四十三年の春は、名古屋の春と一口に申候も、大勝ち過言には候ふまじ。三府二十八縣の國々より、撰び出されたる幾十萬の美しき花は市の東なる鶴舞町、新公園豫定地なる、八幡山富貴閣の傍ら、龍ヶ池に臨みて新らしく建てられたる、大なる建物の中に、今を盛りと咲出で申して候。

名古屋開府三百年紀念祭と記したる、赤く大なる、長き、丸き、提灯は、同じ紀念旗の中央に丸八と市の徽章を三葉葵に包み、其下に紀念祭と赤く、片隅に年の字を青く染め出せるそれと共に、全市街の戸毎を飾り、折からの心地よき春風の吹くにまかせて、ひらりぶらりと、且舞ひ、且躍り居り申候。

若し夫れ、廣小路の紀念碑高く、楊柳嫋繚りなる薄暮、電燈の光り、瓦斯の輝きや、永き春の日の暮るゝを忘れ、蒼穹に星ある宵かとも、赤毛布連は怪しみ候よし。此處に異彩を放ち候は、榮町と大津町との角に夜なく〜イルミネーションを以て、空間に書き出さるゝ、伊藤デパートメントストーアの美觀に候。

「雲間にかゞやく黄金の、鯱に照りさう朝日影。」之れぞ市の人の全世界に向つて誇りとする所に御座候。

「露も曇らぬ代々をへて、光り輝やく我が名古屋、祝へ、祝へ、今日の祭日祝へ、祝へ、祝へ、三百年祭祝へ。」と、上田萬年博士の作られし此歌は、青なる童子も小旗振りつゝ片言交りに唄ひ居る有樣、五月中旬にはと八釜敷く申候て、勝栗の粥を食へ候頑民共も御座候ひし。ハーレー彗星に、獨り我名古屋のみ早く觸れ、水素とやら、酸素とやらの、名古屋人士を狂喜せしめたるかと、思へばひとり可笑しく候。

之れも名物に候名古屋女の、美くしきを選り集めたるが、其加減にや共進會場中なる演舞場に、晝夜の分ちなく、越後のお獅子よろしくと、舞ひ狂ひ居り申候。常々お自慢の物とて、此處をせんとゝ見物の鼻の下を、秋波に讀み分け候由、此度の餘興中第一の呼物に御座候。此外天女館、不思議館、旅順海戰館、曰く何々、曰く何々と、ドンガーブーの樂隊は、耳を聾せん許りとの事、氣の弱き女一人にては、卒倒致さんも圖り難くと、可然相手も無之候まゝ、今日まで未だ一度も見物にとて得參らず候。

中村公園の傍ら、清正公の誕生地跡なる妙行寺にては、清正公三百年報恩會てふ旗幟、貫幟れとなく、田の畔、溝のふちに建て並べて、美しき稚子を舞はせ、二〇加を踊り、煙火を上げ、餅を投げて、旅人に半日の袖を止め居り申候。

こは只九牛の一毛のみ。斯かる催しは市中に限りなく行はれ候が、其中重なるは、五二會館、新古美術展覽會、教育品展覽會（此處には若き妹たちの、美しきむを籠めし作物數多く陳列致し有り候）熱田神宮の寶物拜觀、鶴舞には水族館、武德殿の古武器展覽會、覺王山にても寶物の縱覽を一般に許し居り申候。

電話交換局へ蝦茶を穿き、日々御通ひなされ候、一時彼れ此れと同窓仲間の話題に上りしAさんは、此頃其處も辭められ候て、共進會場前に卓子を並べ、繪葉書賣りとなられ候よし、彼の房々したるお自慢の髮に肉付きのよきおからだ、お白粉白く、紅赤く、肉の香に醉ふ若き男を魅する、一種の魔力を持てる彼の御目許もて、行人を悩殺遊ばし候事と推察仕り候。何しろ一日三圓の錢を財布に入れずでは御歸宅なき由、此Aさんを世渡り上手と申さんには、餘りに悲哀に候はずや。

貧家に生れ蝦茶を穿いて女學生となり、卒業して看護婦となり、高等……となり、交換手となり、今又繪葉書賣りとなられ候Aさんの、二十數年の前半生は、ネチュラリズムの小說家が、筆に上すに足る好材料に御座候。御實家とも音信不通の由、此程風の便りに耳に入れ申候。

「人に接する事春風の如く、自ら嚴しむ事秋霜の如し。」といふ格言一つも、吹き荒しの嚴しき日には守り切れず候程の、我等風情の者にては到底、境遇に逃れ社會に倶ひ、身の振向け情緒の行先を、新らしき枝、新らしき花と、移り行く鶯の如く變ふる事は成り難く、かたくな者よ意氣地なしよと笑はれ候ても、世を渡る船の身一つを、櫓も楫も打捨て、順風にまかする事は得せで、荒き風、強き浪と戰ひを續け居申候處かさ、御笑ひ下され度候。

「萬事は吾人を軸として回轉する者に非ず。」と壁書せし中村の新居に、早や一年を過し申候。

餘りに遠く隔たりたる御地、特にはげしき御敎職にあらせらるゝ御許様の御事とて、共進會御見物と御誘ひもなり難く、Aさんの振つた姿を、御一緒に拜見致す事の出來ざるは、千秋の恨みに候。

樂天の春はまだいと寒き事と存ぜられ候。折角御自愛祈り上げまゐらせ候かしく。

五月　日　　清女

文子様御許

なほ〳〵書き落し候が、來る十二日より、三百年紀念大祭に、例年の名古屋祭り有之、お馴染みなる源氏車、「七間町の辨慶さん。」も市中を囃しあるく筈。Aさんの店で繪葉書を買求め、此次には今少しく纏まりたる御便り致す可く申添候。此度の所は何卒平に〳〵之れにて御宥し下され度願上げ候。

衛生的の睡眠法

睡眠には何ういふ姿勢が最も適して居るかと云ひますと、全身を一ぱいに伸して、少し身體を斜めにし、顔を仰上げて兩腕を輕く組んだ姿勢で、足も輕く組んだ方が宜しうございます、枕は餘り高くしない方が宜しい、餘り高い枕をすると頭痛を起すばかりでなく、時とすると腦から血が逆行るやうなことがありますから、枕は普通の高さにする方が血液の循環も好く安全です、然しこれは人の癖で、高い枕をしなければ何樣しても眠る事が出來ず、低い枕をすると餘り早く頭へ血液が上るやうな氣がして堪らぬと云ふ人もありますから、一概には云へません、兎に角身體を息めるには、平らな床の上に臥ると云ふ事も最も大切です、小供の時から親が注意して、斯樣いふ姿勢で寢かせつけますと、子供の身體は極めて素直に、又よく調和を得て發達いたします、枕を高くし其の上に腕を組んで腕枕とし、仰向いて寢るのも、誠に快よい姿勢ではありますが、之は決して長時間の睡眠には適しません、と云のふは此の姿勢で長い間寢て居りますと、肩が張つて痛くなるばかりか、往々頸の骨の屈出る原因となる事も尠くありません、俯向いて匍匐に寢る姿勢も、三十分以上に及んでは不可ません、此の姿勢で長い間寢て居りますと眩暈がして來るばかりか、俯向いて居りますと、枕で鼻息が遮ぎられ、口でばかり呼吸をするやうになりますから、從つて咽喉や肺の爲めに宜しくありません、不眠症に罹つた場合には成るべく床の上に靜臥して、身體中の筋肉を出來るだけ弛緩せしむる必要があります。

おてんば娘

△

夢見る人

二人は手を執つて春の野を歩いた。
柳の糸のゆるくみだるゝ好季節、
空は瑠璃色によく晴れ渡つて、若
草の薫り初々しく、かぎろひ燃るゝ
小川の水は、活々とした草の間を、
花藻の薫する海へと跫音和やかに
──辿つて行きます。西の天には薄
紫の富士の遠山。



この日、しつとり汗ばんで、眞白い頰が、ぼつと上氣してる桃代樣のお顏は、輝くやうに美しかつた。

桃代樣は今年、女子美術學校の裁縫科を出た才媛である。二十一だけれど小作りだからお若い事つて。藤色のお羽織がよく似合ふ。ふつくりと中庸を得た束髮にいつもお好な造花の白ばら。私とは誌上から交をもとめられた友、今では姉樣と呼んで居る。

ふと水に寫つた姿見て

「ねえ萩ちやん、貴女はほんとにお島田がよく似合ふのね、」

「さう、」

「蕉園樣に願ひたいやうよ。いゝえ、まつたく。私だからいゝけれど、誰だつて思はぬ人はないのよ、しまひには「悶々の情に堪へず、」なんて…おほゝゝ、まアそんな事もないでせうが、隨分御要心御要心……」

「あら、可愛い花？」私は身を曲めて摘み取つた。桃代樣は何と思つたか、今まで大切に持つて居た菫の束を、ぱつと水に投げた。二人は流れて行く紫の花の行方を、うつとりと見まもつた。

やがて二人は疲れて芝生の上にごろつと坐る。足袋を脱いだので、草がチク／＼むづ痒ゆい。

白手拭を蝶々のやうに冠つた村の娘さん達が、二三人籠を脊負て、春の日に腰の鎌をピカ／＼光らせ乍ら笑ひ興じて傍を通つた。私は大聲で「春高樓の花の宴めぐる盃影さして、」を歌ふ。

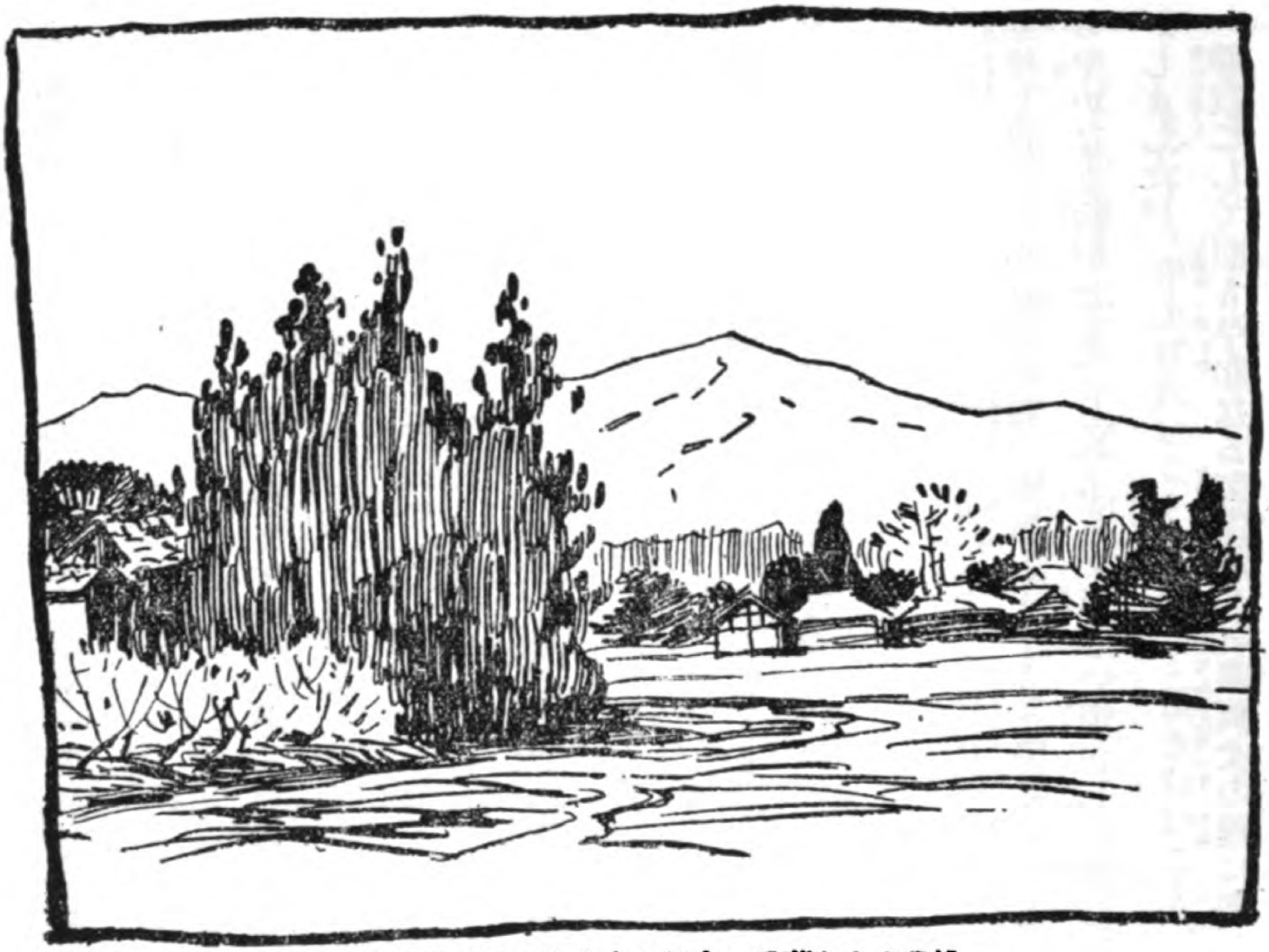
「萩ちやん。」

「何？」と眼をあげる。

「貴女と御交際しはじめてからもう一年半ね――。早いものだけれど、永い／＼御つきあひのやうな氣もしますわ、貴女もあの頃から見ると變つたのねえ？」

「そりや年を老つたからよ、十八と云へばもう夫人になつてる女もありますからね、」

「ほんとに早く萩ちやんのマダム振りが見たいわね、ねえ萩ちやん、遠からぬ將來において、あの…金子の百合さんのやうな、たのしい新家庭を造つて頂戴よ、私、それを祈つて居ますわ。」



桃代さんと萩香さんはこんなところで落合ふた

「厭だ。その頃は、姉様、もうお母様よ、」

桃代様はそれに答へず、手近の草をむしりながら、

「何もね、私がよくばりに貴女を獨占しやうとは思ひはしないけれど、あんまり多勢、御親友があつては、實のところいゝ氣持はしないのよ……」

顔をあげて

「男子の方が羨しいわ。せめてその半分でも、私、萩ちやんに思はれて見たいわ、」

「あら、姉様、」肩にかけられた手をふり放し

「いやだ、姉様？」

「ほんとに恨んだこともありましたよ、手紙の返事さへ几帳面によこして下さらないんですもの、そして此方から上げなければ幾月でも……？　私、貴女が貴女なら私も私ッ　と云ひたくつても、やつぱり私は煩惱の人間、我まんしては居られないのよ。私、貴女にいつ捨てられて了ふか判らないんですもの……」

「まア、桃代様、」

「女の友達はどうしても永久にその交情をつゞける事

が出來ぬものですつてね。萩ちやんは異性の方がお好なんでせう？――」

「あら、」

「若い夢……まつたく若い夢ですわ。花やかな青春の夢に醉ふてゐらつしやるのよ、いまのうちです、わけもなく心が跳つて、熱しやすくて……」

「そんな事止しませう姉様、唱歌でも謡ひませうよ。」

「えゝ謡ひませうよ。オホゝゝ」つよく私の手を執つて握つた。

兩人は立ち上つた。

青草に曳く影法師、黄ろい蝶がひら〳〵と、すり合せた肩を越えて柳の蔭に見えなくなつた。

△

翠緑したゝる小松原の裡、春雨しと〳〵と降る日、しめやかなる物がたり、しみ〳〵と床しい懷かしい感じがしました。

靜寂にして而も平和なる御生活、紅塵萬丈の裡に常に功名に燃え、かすかなる未來の光明？を望んで、心神徒に萎えつかれんとしつゝ浮世のさがに戰鬪しつゝある小生の心に、如何に痛烈な深刻なイムプレッションをあたへたのでせう！ 嗚呼六分の狂氣、四分の熱、胸中絶えず或ものゝ缺陷を感じ、常に或ものを憧憬して止まざりし往にし日を思ひ浮べて……

天氣よけれど駿河灣の碧浪の澎湃たるに心かきみだされつゝ

○○濱より　△　△　生

△

松波さま、

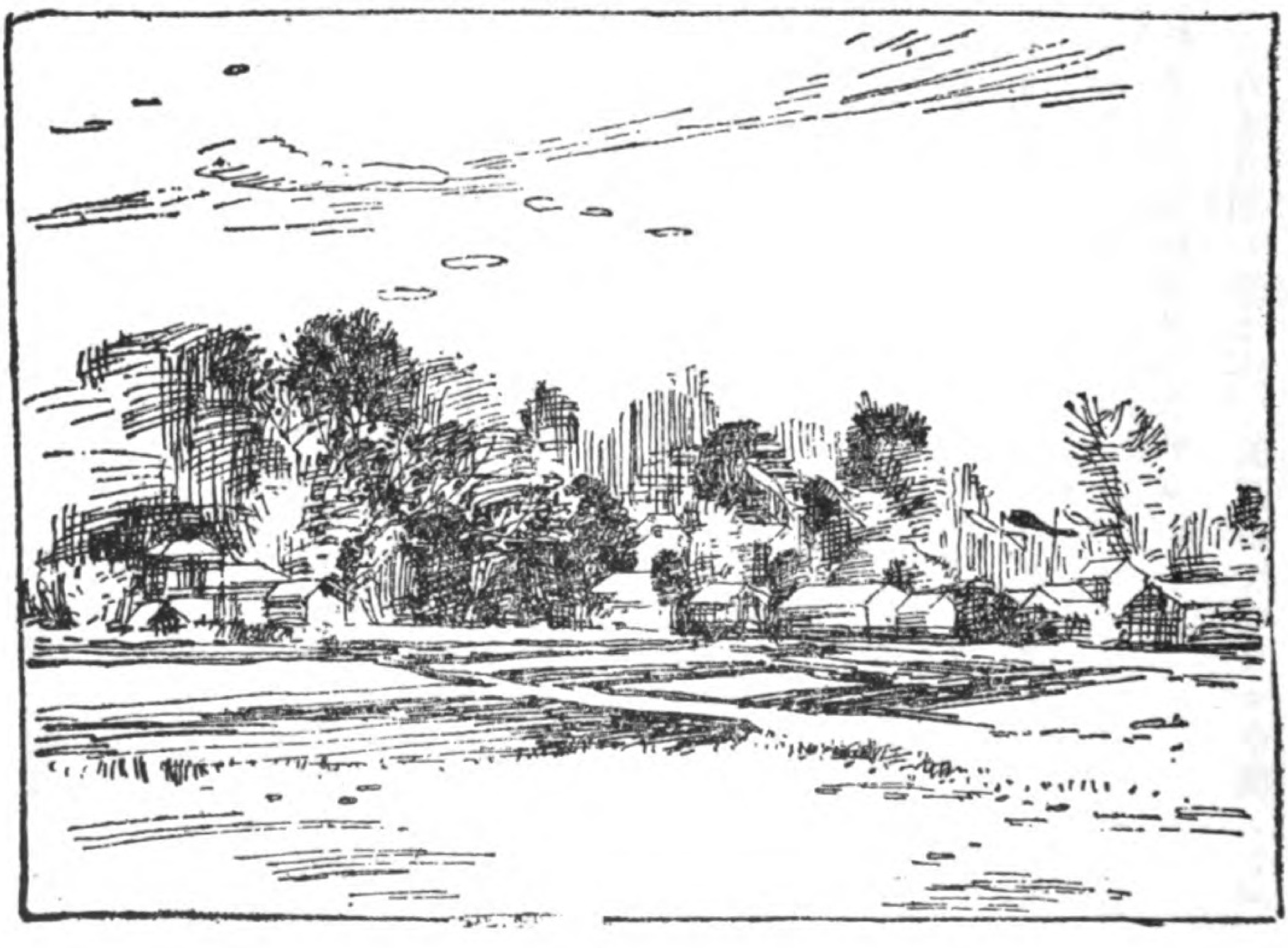
久々にてのおんめもじ、あゝ私は……今日までもまだ夢のやうでございます。

思ひに思ふた願ひが叶ふて、三年ぶりの對面……。うれしうございました、この位うれしいと思つたことはありません。松波さま、ほんとによくお立より下さいましたわねえ。あんまり……あんまり……うれしさ

あまつて、悲しいやうな氣もいたしました。
まだ〳〵申上げたいこと、きいて頂きたいこと、山ほどありましたものを、口の重い私は、どうしても言葉が出ませんでした。今から思へばあれも、これも？伺ひたかつた、お話したかつた？と實に殘念で殘念でなりませぬ。

松波さま、ちつともお變り遊ばしませんのね、ほんとうに昔のまゝでゐらつしやるのね、ほんとに不思議な御縁ですわ、三年前、たゞかりそめのカルタの席で……云はゞ行ずりの異舟の客、あの時はこの後ふたゝび相見る事のあらうなどゝは、夢にも〳〵思ひがけませんでしたものを……。

いろ〳〵お噂したせいでせう、昨夕千鶴さんの夢を見ました、大そう背が高くおなりで、昔ながらの頭高の束髪、紫矢飛白の上品な……ふり向いてニッコリなすつたお顔の美しかつたこと。さめての後の物悲しさ、人戀しさ、私はたまりかねて飛び起きて了つて、机に凭りました。そして赤くたゞれたランプの光りをみつ


鯉のぼり

あながら、まんぢりともせず思ひ明かしたので、今日は肩がこつてなりません。

松波さま、私一生忘れませんわ、あゝしめやかに雨そゝぐ日、恥かしかりし對ひ居や、門邊に殘るわだちの跡も君がかたみよ……。

ほんに我ながらふがひない、何故あのやうにお話が出來なかつたでせう、さぞ煮え切れない女だとおんさげすみ遊ばしたでせうね。

つひ御禮申後れました。けつかうなお土産まで頂戴致しまして、誠に相すみませぬ。あやにく母が不在中で重ね〲失禮いたしましたのね。あゝ松波さま、またこの上の縁あつて、お目に掛る日はいつでせう、再會の機を祈ります。

今日も朝から雨がけぶつて……丁度あの日のやうでございます。懐しうございますわ。

くだらぬ事ばかり書きならべて、御勉強のおさまたげを致しました。おん身御大切においとひ下さいまし。さやうなら。

松波さま 御許に　　千代

△

今日はあまりいゝお天氣の日曜なので、初枝さんに誘はれて、防風つみに出掛けた。

菜の花がいま眞盛りである、私は三年振りで唐人笛の音に似た麥笛を鳴らして見た。道々すみれや蒲公英で二人の手籠は一ぱいになつた。

藤戸橋を渡り掛けると、次郎ちやん(初枝さんの弟)が息せき切つて飛んで來た。萩香さん、お客樣で迎に來た、と名刺を出す。眉をひそめ乍ら手にとれば、あら、本田達彦？　鉛筆の走り書き「出京の途中一寸およりました、お目に掛つて行きたいと思ひます。急ぎますからどうぞ直ぐにね」まア本田さんかどうして？

「初枝さん、私はお先へ失禮よ、」

とどん〲引かへした。

「母樣？」

からりと勝手口から飛び上り、いきなりお座敷へ行つた。

「や、」

「入らつしやいまし、御機嫌好う。」

坐つてかろく頭を下げると、

「しばらく。」と吸ひさしの莨を灰にさしこんで、

「大分大きくなりましたね、萩香さん、」

「エ、そのわり貴下はおぢいさんにもおなりなさらないことよ、」

「いや、どうも。なかんづく口先の發達が、もつとも著るしかつたと見えますな、」

「無論よ、二十世紀の婦人ですもの、口も八丁、手も八丁……」

「そんなにお轉婆ばかりしてると、良人君になりてがなくなりますよ、」

「餘計なお世話よ。あなたのやうな人を持ちはしないから大丈夫だわ、」

「これは御挨拶。驚いた、流石はデカダン令孃……」

「何です、僞君子……」

「大分御盛んですね、ホヽヽ」お茶をいれかへてはいつていらした母樣が「お兩人とも相變らず……萩香にも困ります。」

口でたしなめ目で笑つて、それでも一寸おにらみなさる。私は堪らず吹き出して了つた。

白うらの大島かなんかに銘仙の小袖、新らしい小倉の袴を正しく着けて、火鉢を前に威丈高、もう生徒でもないものをと可笑しい。五尺六寸、十八貫の好漢、天晴れ二十八の男振り「僕は依然として放浪生活だ併しまだコゲつかないだけそれだけ、廣い未來がみえて居ると思つてゐる、」とゐばつて居る人だ。非常に氣の小さい、神經質で臆病な……そして皮肉屋で口が惡くつて、お好なものは猫（四つ足の）と洋食、嫌ひなものが、女學生とお故郷とハイカラと……、おほゝゝゝ秘密！　秘密！

久しぶりだから、それからそれへと話が絶えない。

褄なりに盛り上げたビスケットは、たちまち缺陥して了つた。母様は幾度がお茶をさしにお立ちなさる。

歎、いつか私の作物の上に落ちて行つた。

「萩香さん、おこつちやいけない。——僕がこんな事云ふて、イヤな事、いけすかない……といつぞや言はれた酷評を玉はるかも知らぬが——僕ア貴女の作が氣に入らんのだ。萩香さんの文章は常にハデをお好みだハイカラ式だ、ね。僕、自分がバンカラだから云ふんぢやないが、また何處かといへば陰鬱な氣質だから云ふんぢやないが、少し方面をかへて、何だ、憐れな孤兒をうつすとか、良人を失ふた賤の漁師の妻を描くとか、要するに光明方面に——瓦斯や電氣のパツと明るい方面を主とせずに——その方面を寧ろ、いやしんで——得意の女性的の細い觀察を以て人世——自然を寫されたいのだ。演劇でも悲劇でこそ、その本色を發揮さるれ、喜劇の文學的價値に至つては、少しく文學を解するものは、讀者を待たずしてその云ふに足らぬのは分明ぢやないか。萩香さんにも似合ぬ……ヴアイオレットだとか、ローズだとかの馨のある文章は、何だかイヤな氣がさす。一般の讀者の受物なら格別、自分の作物としての品格にもかゝはる。兎角ウワベの淺薄なやうな書き方についちやア、恐らく僕ばかりがさう思ふばかりぢやなからうと思ふ。敢てその言葉が惡くはないが、その、前にもいつた電氣のぱつとした座敷的……そんな場所の出て來るのがいかぬと云ふんぢやないですよ。それは飛んだ間違ひでいろんなハイカラの役割が入用なのは勿論だ、併しその主眼點……つまり筆者の心の置きどころが、ヴアイオレット式でなかれと……」

「ホヽヽ、ちやアヘリオトロープ、」

「串談ぢやない、」叱るやうに

「貴女の憧憬して居らるゝ大學生だの女子大學だの、僕アそんな材料の入つた物ア大嫌ひです。何だか餘韻に乏しい淺墓な、奥行のないやうな氣がしてならん、」

「ところが一般青春の人々はさうでないんですからね——嫌はれたつて困らないわ、本田さん、」



私はね、心の冷たくなつて仕舞はない前に、大いに讀者に悲憤の涙を流させてやるべしだと思つて居るのよと我知らずほゝ笑んだのを見て取り

「萩、萩香さん！」とせきこんで

「一葉全集を讀まれたでせう、」

「はアゝ」またしても微笑を禁じ得ない。

「十三夜ねえ、僕ア一等好きだ。今でも頭の中に殘つて居ます、上野からそら、俥をやとつて、その男が昔の戀人であつて、はな紙かなんかに小錢を包んで上げる處なんか、僕ア下手な芝居なんぞ見るより、どの位うれしく、胸が——胸が——同情の涙にみつるのをきんじ得られなかつた。廣小路の枯柳、影長く地に曳いてとか何とか、本郷座の書割もとても及ばんね。女性の小説はかくありたいやうに思ふ——」皮肉な笑をふくんで、

「貴女は華美な事をお好だ、僕等よりは氣强い處がある、物に當つても〳〵くぢけぬするどい物があるんだ一葉女史のやうに夭折されないね？　や、いやこれは延喜でもない事を、失敬、失敬、」

私、思はず苦笑して

「本田さんは何にでも一葉さん、一葉さん。一葉さんと十三夜の引合に出てこない事はないのねえ、貴君に賞められる位だから、そればかりでも一葉さんは、偉かつたに違ひない……」

本田さんオリエントの烟りをふき出し乍ら、

「それから貴女のはだ、又候、乾度カルタ會、お作にも僕に下さるお手紙にも、一度ももれてた事はないやうですな、いかにも〳〵執着が深い。あれももうこれからは眞平です、僕アいつも胸をわるくして頭痛を催ふす、あの浮薄なヴアニチ——」

「またヴアニチーの攻擊ですか。澤山よ、もうわかつて居ましてよ、どうせ私はヴアニチーのかたまりよ、本田さんは君子よ、」

にらめてやつて、

「男子のくせに女學世界なんか買つて讀むくせに……頭痛を催ふす程なら、お手になさらないがいゝぢやあ


綾瀬のほとり

りませんか、女の雑誌を喜こんで讀んで――そしてそんなに攻撃なさるのは、やつぱり何だかヴアニチーよ、ヴアニチーは女ばかりの、專賣特許品ぢやなくつてよ。」

調子にのり

「本田さん、ヴアニチーていつたい何ですか。私は、人間の本能だと思つてるのよ、「生きたい」と云ふ本能……その本能に附隨して、當然來るべき副本能だと思ふのよ。男子にだつてこのヴアニチーは、必ずあるに違ひないわ、男子はそのヴアニチーをヴアニチーとして、むき出しに外部にあらはさない所がまた、一種のヴアニチーぢやないの。こんな風に考へて見ると世の中はまるでヴアニチーが日光のやうにみなぎつて居るわ、本田さんは正に悶絶して了はなければならない、ほゝゝゝ」笑ひ出し、

「人間にはどうしても自己の制御や克己と云ふ事を取り去つて、氣まゝに、本能的に動かうとする、いはゆるそのデカダン性ねえ、デカダン性のあるものだと思

ひますわ。これは昔から悪い事に考へて居るやうだけれど私、この人間のこの性が活動の根源だと思ふのよねえ、絶對に自由を欲する慾、この慾の變形したものが、即ち活動ぢやないでせうか。ヷアニチーもさう一概に排斥するものぢやありませんよ、否、ある程度までは必要なものですわ、」

「あゝ、つひに度すべからず、僕アもう何とも云ひません。自然主義君、存分能筆を振ひ給へ、」

ついと座を起たれる。私は吃驚して、

「あら、本田さん」

「失敬します。ハヽヽヽ」パチンと時計を開けて見せ

「またお目に掛ります。まアお身體をお大切に、……過度の御勉強はおつゝしみ専一ですぞ、」

「いけません。母様、母様、」

「何ですね、仰山な、」

ぬれ手をふき／＼お勝手から出ていらした母様も驚いて、

「まア、貴君、」

「もうお歸りなんですつて、随分……随分だわね、母様、」

「いや叔母さん、お邪魔しました。ハヽヽヽ、一寸およリ申すつもりであつたんですが、ついお話がはづんで……意外に……何です、今日はいそぎますからこれで、」

「まア――？」まア、まア、とふたりで云つゞけながら、仕方なく共に玄關まで立出つ。式臺に跪いて、手早く薩摩下駄直したを、「痛み入ります、」と手をあげて無造作に穿き、「失敬」と一寸帽子の廂へ、三足ばかり行きかけて、「や」と立もどられる、私は無言でステッキを差出した。

「左様なら、お大事に、」

「御きげんよう、」

がら／＼と門のくゞりをくゞる。

そよ春風、たはゝなる櫻の枝を誘なふとハラ／＼ハラ／＼落花の雪、柱につかまり身をそらして、見送る袖に襟に肩に。

向ふから疊紙を抱えた白胸かけのお濱さんが、小股の急ぎ足でやつて來る。あゝ今日は結日だつたのね、傾いた髻に手を加へて、こんなこはれた髪で惜しかつたわ、と思ひながらはたと障子を閉した。

△

打振る水色、應ふる淡紅色？　落ちんばかりに窓から半身をのり出して居る久子さんをのせた汽車は、えん／＼と進んで行つて了つた。

私はそこへ泣き倒れたかつた。

行く人は前途に輝く光明を望み、學びの道に分け入らんとての門出、勇める心にはこの悲しみも、悲しみとするの餘地はないであらうが、殘さるゝ身を推したまへ……。

力なく／＼家へ歸つて、机の前にくづ折れた。

逢ふは別れの始めとやら、うれしいまとゐも束の間の夢、その姿に接し、その聲をきいてる間は、たゞうれしくてうか／＼過した三日間…、またの逢瀬のそもいつなれや、思へば果敢なし、わりなき緣、あゝまさきく在せ、君よ。

萬感こも／＼思ひに燃ゆる胸を抱いて、西の方函嶺をのぞめば、またさらに熱い淚が止度なく湧き上るのである。

あの美しい蘆の湖の美しい風景？

義兄樣、義姉樣、いま如何に、

あゝ過ぎ去つた回想には、云ふ事の出來ぬなつかしさがこもる。湯本通ひの電車の車掌の顏すら、尚目の前にちらつくではありませんか。

風光明媚のあの仙境を後にして、入學のため御上京の久子樣、羨しいわ。あゝ浪風あらき漁村の住居は、かよわい身に堪へがたい。私は思出に泣くべく生れて來た子なのだらうか。

お道さんもあんまりな。此の間の學生についても……、私は人傳にきいて憤怒に身をふるはした。友達甲斐もない人である。

久子さん。いまいづかた過ぎ行き給ふらむ、夕の風

に心し給へ、羨しとも妬ましや、君は花やかな女學校へ……、あだとは知れど胸ゆらぐ。

この湘南の片ほとり、君を慕ひて涙する、はかなき妹を忘れ給ふな。

かぞふれば、私がある山中の町を辭してからもう八月目になる。昨夜は若樣方のお噂も出た。あゝ、あのお緣側に肩すり合せて立つた時、おぼえず息のはづむだも、優しく云はれたお言葉が、たゞ何となく身にしみたも……の今さら胸に湧き出て、若き血汐の狂ひたつ。面影戀へばうつゝなう、涙浮めるおのが瞳に、雲のやうにもうつりましてし。

久子樣の書いた湖畔生活、どんなのでせう。早く早く五月の女學世界が待遠い。

二十一になつた久子樣は、まだ肩あげして居るのに三ッ齡下の私が……私はつくづく悲しかつた。誰だつてまだ十八ぐらゐで、落す人はありやしない、強いられて、泣いてあらそつて――エ、そんなにも惜しいものかつて？　それや惜しいわ、情ないわ、涙がこぼれます。私、肩あげとつて平氣で居る人は、無神經だと思ひます。同じ年齡の人はおろか、口繪の寫眞、小說のカット、まづ目を落すは肩のあたり、娘の心も知らぬ母樣、肩巾ひろき大人ぶりぞ、ふさひぬと宣る口惜しさよ。乙女老ひしを祝ぎ給ふて……。

さらぬだに背の高い私、更け性で、川島さんてば、どうしても二十だつて承知なさらないんですもの。

あゝ人も我も、いつ／＼までも、青春の人でありたいわねえ。

女は先天的に秘密の多いもの、わけても私は、罪業の深い秘密の多い女ですわ、つて久子樣はお泣きになつた。

秘密……私には秘密なんかない。けれど、眞の自分と云ふものを、滅多な人には知られたくないと思つて居る。

自分から悲しい身の上話や煩悶など打明けて、先方の同情をもとめるやうな事は大嫌ひ。

それで人の同情がうれしいのです、何よりも／＼嬉

しいのよ。身にしみてたつた一枚の葉書を氣の遠くなる程讀み返したり、たつた一言の言葉を、終日胸にくり返して、よろこんだこともありました。

ある人は萩香のことを、優しいおとなしい内氣な乙女と云ふ。泉田さんには、氣强い處がある、あるをくり返された。

萩香さんはたのもしい、お年が若いのだ、卑俗な現世を知らない、白牡丹のやうなものださうだ、牡丹そつくりだ。

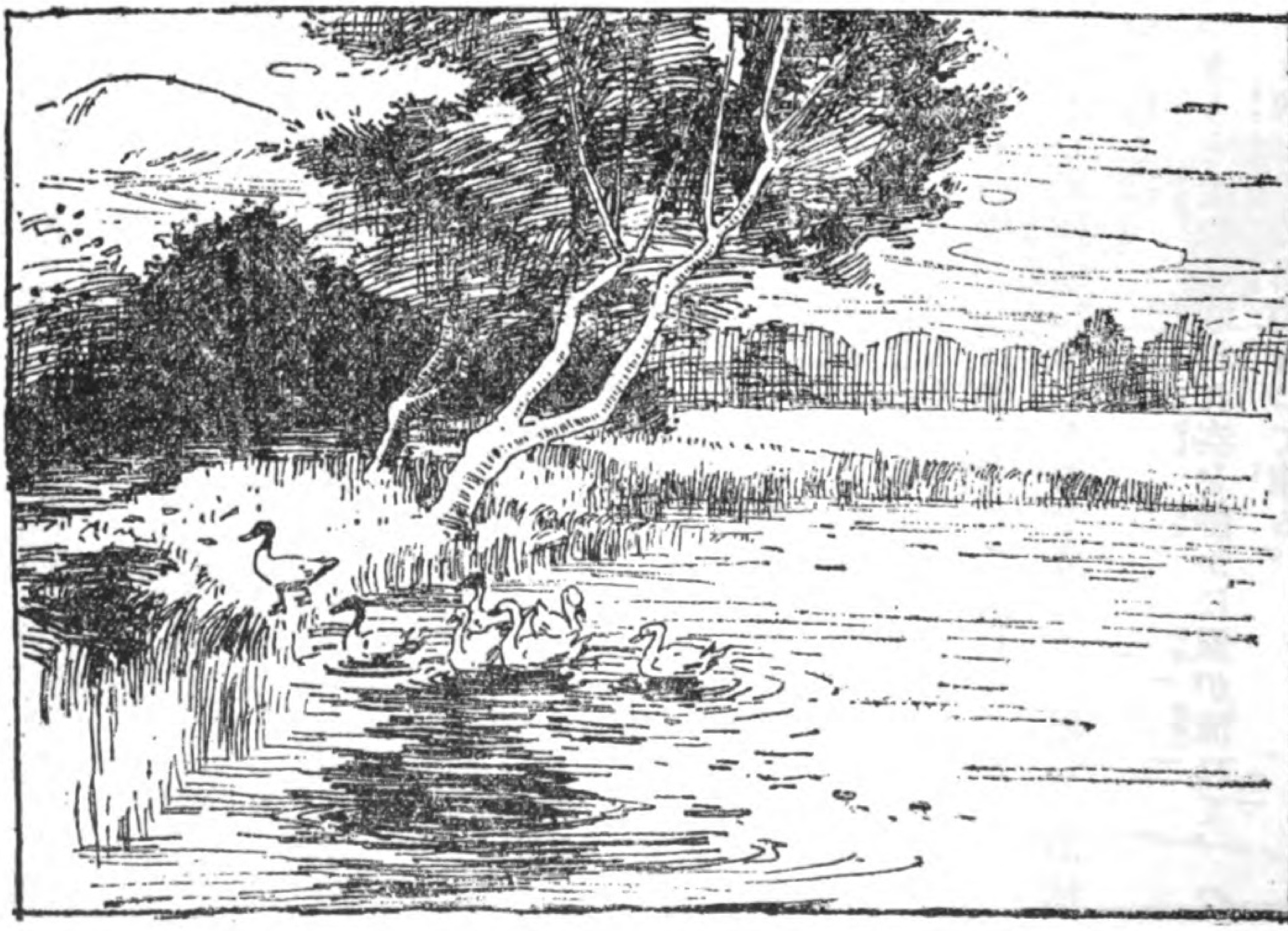
そのプラウドに富んだ處などはそつくりだ！

とも評された。

何處となくしづんで淋し氣に見えるのは、語らぬ苦痛があるのではないか、と云つた人もあつた。

いつたい男子つてどんな女をお好になるんでせう。色買る女ぢやなし、こびると云ふわけではないけれど……。

今日までまだ一度の縁談もかゝらず、熱烈な戀愛の



隅田の上流

甘酒に醉ふた事もない身が悲しい。

久子様はさまで美人と云ふでもないが、實に人を引付ける魔力のある方で、これがためもう何人の學生を失戀のふちに投げこんだか知れぬ。私はほんとに羨しい、女の誇りであると思ふ。

これからあのすらりとしたおからだに、長めに穿いた袴の裾を、踵の高いフランス形のお靴で輕く蹴たて長い袂を飜し、本郷通りを御通學の姿は、さぞや幾多の角帽連をして、どんな煩悶にしづめることであらう……。

久子様、羨しいわ。運命の鐵鎖につながれて、恨みつゝ泣きつゝなほも都戀ゆる、田舎乙女をあはれとおぼせ。

見上ぐるかなた、夕榮花やかな相模連山、あゝ思出多し函嶺湖畔……。

△

春暖き南の國は、早や櫻ちる晩春となりぬ。

松青き海邊にゐます君の今日此頃、如何に過させ給ふらん。

想へば二たとせの昔なりき、片瀬川のほとり鹽ちやんと共に、紫の磯藤の花をつみけるは。

あゝ逝く〳〵春よ！　汝に逢ふ毎に、年々思ふ事の多くなりまさるよ。

千代子様　　Y生

△

母様は鹽ちやんをつれて、川島様へお出掛になつた。六疊の室一杯、緋の長襦袢やら鬱金のしごき、黒襦子の丸帯、腰帯の白、箪笥から引出して取り散らされたまゝなのをその儘、私は袖を重ねて窓に凭つた。火鉢においた鐵瓶は微かな音を立てゝ、優しい湯氣を吐いて居る。

すつきりと柔かに晴れた空を靜かに風が流れて、ハラ〳〵薄紅の雪が降つて來る。

あゝ月岡様は私の「肩あげを下して」を評して、わか〳〵しい悲哀？　あまい煩悶？　と有仰つた。あまい煩悶？　わかき悲哀ッ……それに違ひない。

あゝ春は逝く、春は逝く、プライド多き十八の、幸なる春の逝くを悲しむ。

月岡さん、月岡様、どうにか御都合遊ばして、せひせひ當地へも御立より下さいまし、お目に掛つていろいろなお話を、伺ひたいのでございます、きいて頂きたいのでございます。田舎人の蛙口、そしらばそしれ云はゞ云へ、君はなつかしい我が文筆の友、ねえ、趣味の友と有仰つて下すつたわねえ。

今や落花既に草に埋れて、若葉の匂ひ空を籠め、緑すが〳〵しき暮春の天地に、人の心も鎮まるの時、床しや京めぐり大和路の御旅、さぞな繪行脚歌行脚に、美くしい君の御詩想は、ほとばしつて百合と薫り、星と輝き……あゝおん羨しう存じ上げます。女はつまらないのねえ。

私は、お待ち申して居りますよ。月岡様……。



房州保田海岸（向の岬は鋸山）

迷信の弊害

◎人間と云ふものは多くは精神の薄弱なもので、從つて物事に迷ひ易い、そこで此弱點を附け込み御幣を振り込む者も少なくないが、其結果として精神上に惡い影響を受くるは言ふ迄もなく物事の運びも不便となつて、家庭に受くる不利益は少くはない。例へば御幣擔主義の家庭は移轉に先つて必らず方角を見る。而してその惡い方角を避けて家を搜す。果して注文の方角に貸家があれば可いけれど、若し思はしい家がないとしたら、方避けといつて一旦目的の地から方角の好い他の場所に移り、夫れから始めて注文の家に移るのである。又妻女が病氣で醫師を賴むとかお產があるとか云ふ場合には、醫師の資格や產婆の技倆などは何うでも構はぬ、先づ方角を見て其方角の人を賴むとは何んと云ふ馬鹿々々しい事であらう。

◎旅行の時にも日や月の善惡など卜ひ、今日は何歲の何の歲の人は旅立つてはならぬとか、此月一杯は其人に取つて旅行が禁物であるとか、其事ばかりに屈托して肝腎の用事を果す時期の後れるなどには頓着しないものもある。これは極端な例だが、郷里の親が急病と云ふ電報に接しながら、其日は旅行に惡い日で餘儀なく一日延ばした爲め、親の死目にも會へなかつたと云ふ話は屢々耳にする所である。現に私の知人に一人の畫家がある。此れが大の御幣擔ぎで、恰度私の旅行しやうと云ふ先きにやつて來て、先生何所へ行きますと問ふから、一寸京都まで旅行しやうと思ふと云ふと、急に手を振つて、先生可けません、此月一杯は旅行禁物ですと云ふ。私は其時冷笑して何にを馬鹿なと大威張で出發したが、兎に角そんな事は云はれたのが耳に殘つて氣持が惡く、とうとう不愉快に旅をした事があつた。そこが人間の精神の薄弱な處であるが、時には意氣沮喪の爲めに出來る仕事も出來ず了ひになる例しが多い。

◎この通り御幣擔ぎは色々な方面に害を與へる。家屋を新築する時にも、西向は惡いとか、東向きは祟りがあるとか此所に窓を附けては何うとか、便所は此の隅に置いては何うだとか、其六ケしい事八ケましい事、一通りの話ではない。若し強ひて惡いと云ふ事を仕て退けると必らず好い結果はない。そこで愈々御幣を擔ぐやうになる。何故好い結果がないかといふに、夫れは決して方位の惡い爲めに來るのではなく精神の恐怖から自然と身體に關係を生ずるのであるから、方位などを研究して爲事に御幣を擔ぐのは、吾れから求めて不幸不運を招くものといはればならぬ。(山田醫學博士)



溫泉旅行

藤田いさを

（一）出發

七月三十一日、北國の旅を思ひ立つて南海の磯を離れた。北國と云ふ、目指す所は但馬である。

ぱつとして明るい太平洋岸に産れた私には、讀んだり聞いたりして、北海に面した裏日本は、うす暗くて陰氣で、濕々として重くるしく沈んだ土地だとの印象が頭に深く泌みこんで居るので、たとへ十日でもあの様な處に住んで居たなら私の頭腦が腐蝕して了ふかもしれないとさへ思つた。で、一度來よと云ふ友の懇情をも退けて應じなかつたが、今年こそ退引ならぬ仕宜となつて了つた。しかし、松風や波の音にさへ胸ときめきするこのなつかしき南國の磯、茲を離れるには餘程の勇氣が必要であつた。

さらばと門を出て車に乘る。八町の松畷道、入江に沿うて朝風の涼しい中を走つた。車上ながらふり返ると、濱にあけ潮が洲崎にくだけて白くきらめき、沖にかもめが群り飛んで淡路島が模糊として浮んで居た。行途は少々無氣味である。

和歌山市驛より和泉を通つて大阪に入る。此の間は稻葉のすが〳〵した青田のながめや、松の木の間からちら〳〵見える海の色が美しくつて、何時も飽かないのは此の汽車である。私は一年に四五度はきつと通るたかしの濱や住吉浦のなだやかな波打際の風物はどうしても忘られない。態々下車して磯邊に立ち、靜思を波路の末にやるのも度重つた。そして茲を通る時、きつと思ひ出される人がある。其の人は程近い河内の國に住んで居る。詩歌に忍ぶ假の名は「夕ちどり」と云つ

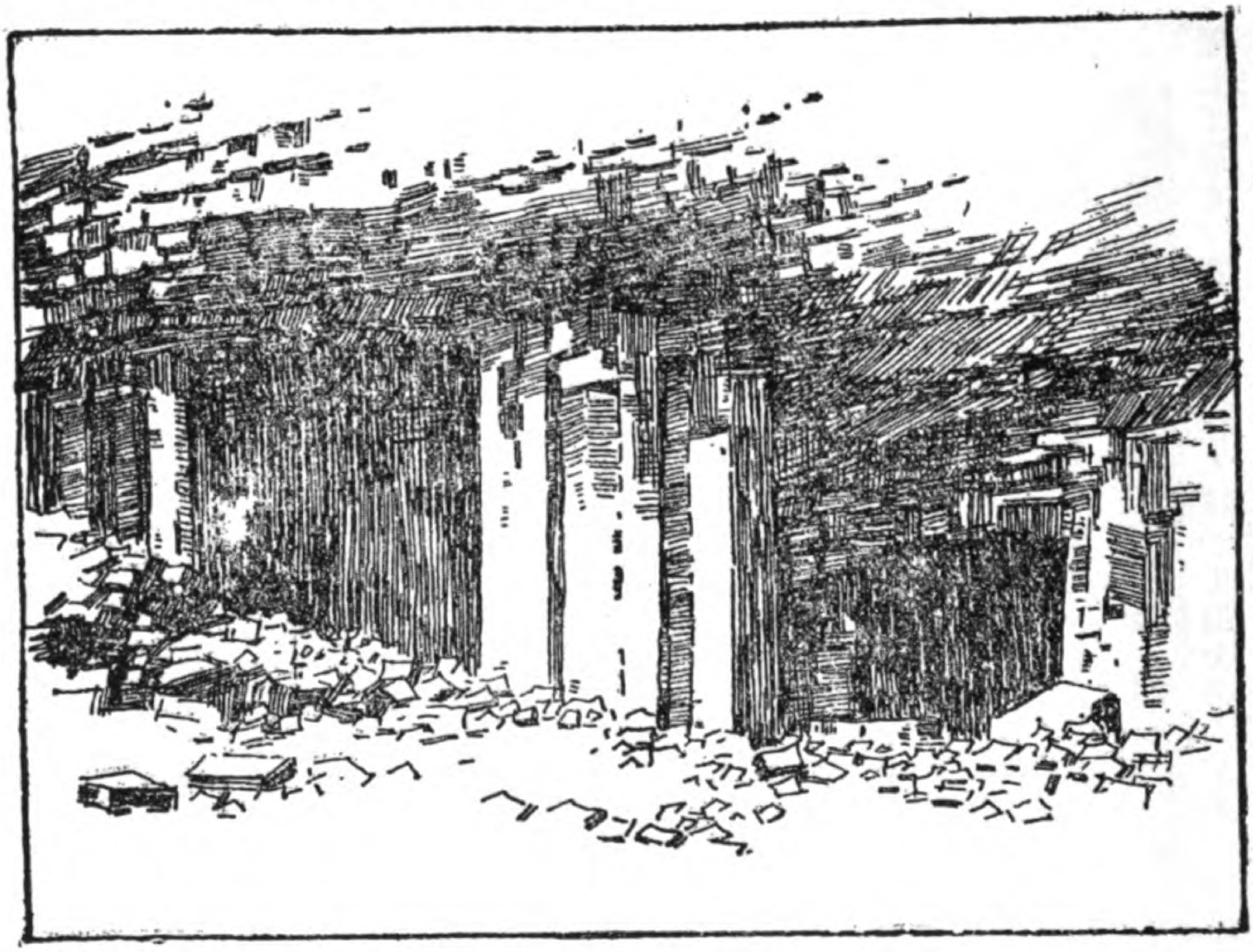
た。手紙で交際した丈けでまだ遇つた事はないがこの人の身の上は種々と外からも聞いた。失戀と不治の病と、痛ましい懊惱の泉を胸にしめて、日毎の涙はつきないと云ふ。何の爲めに花の少女と生れたか。私はこの袖を裂いてもあの樣な人をこの浮世のすさびから隔して上げたいと思ふ。涙を拭つて上げたいと思ふ。それにしても其の後如何なされたらう。全二年の間何のたよりも聞かない。またこの夕ちどりの君と關聯して思ひ出される今一人の少女がある。下谷あたりのある文學士の家に居られた。この文學士、人の夢を食ふ獏と云ふ獸の樣に詩人の夢を食つて英詩の飜譯ばかりを業とせられて居たが、ウオーヅウオースが「ルーシー、グレー」を譯して「照子よ汝」とした。照子は此の少女の名である。思ひ出すとまだをかしい。ある初秋の頃であつた。夕ちどりの君上京せられた時、照子の君と共に私の武藏野の家を訪ねると云つて來られたので時雨模樣の空合を半日待ち暮した事があつた。二人は遂に來なかつたが初秋、武藏野、時雨の雲、初對面の人々、あの日の感興はまだ夢の樣に殘つて居る。

早々、もう四年の昔となつた。

丁度大阪大火の日で大阪市中は混雜返す大騷であつた。神戸に着いたのは午後一時、荒田町の從妹が停車場で迎へて呉れた。車を連ねて伯母の家に入る。此の從妹をなるべくならば但馬の旅へ連れゆきたいと思つたまだ十五の無邪氣な可愛らしい少女である。

（二）伯母の家

伯父は一昨年死んだ。夫に別れて心配事の多かつた伯母は昨年また姉娘に死なれて、落膽した。長男夫婦はさる商店の外國支店員となつて留守なので妹娘と只二人淋しく暮して居る。餘程年を老つて白髮も多くなつた。久しぶりの訪問を涙を流して喜んでくれた。姉娘の死に付いては悲劇の一編が語られる。しかし私は玆に默して只此の不幸の從妹を弔ふべきである。ある朝私は花賣を呼びとめ、一枝を其の位牌に手向けて合掌した。



城崎溫泉玄武洞

從妹に「但馬へ參りませんか」と云ふと「お母樣も御同伴なら」と答へた。

其の夜大阪の大火未だ消えず、表の通りが騷々しい何とか云ふ丘の上に登ると炎が見えると云ふ。去年の大觀艦式の夜よりも人出が多いとの噂。風通しの好い二階で萠黃蚊帳の中に三人枕を並べた時、ガラス窓から滿月の光がさし込んで、從妹の寢卷の派手な模樣があざやかに映つた。

滯在五日、慈母と孝子、美しい家庭の有樣でそゝろに離れ惡い氣もする。毎日の暑氣嚴しく日中は九十四五度である。之れには少々閉口した。

中山手に都合あつて絶交した昔の友が住んで居た。絶交したとは云へ恐らく一生を通じて忘れる事の出來ない人である。ある夕方その家の前を通つて見たら、表札が違つて居た。この人はさる青年の運命を轉覆した女である。もし死んだら好からうと勸めた事もあつたがどうしても死なれぬと口癖の樣に云つて居たから新らしい世の新らしい煩悶を抱いて日本の何處かでま

だ生きて居るに違ひない。

夜、伯母と従妹と三人散歩に出かけた。楠公社の境内は非常な雜踏で氷店が大入であつた。遊園地の月は海に映つて美しく、西洋人の女の長い裾が夜風に飜つて居た。但馬の友への土産名物瓦煎餅を買つて歸る。

（三）但馬路

八月六日午前八時何分神戸驛を出發して但馬路に向ふ。瀬戸内海に面した風光は美しい。須磨、鹽屋、舞子、明石と海水浴客の乘降夥しく、旅館や別莊には浴衣の人が打寛いで居た。このあたり家の庭内にも停車場の構内にもすべて夾竹桃の花がうす紅に咲き亂れて美しい。この炎熱の候を此の色にさく、正しく自暴自棄の笑で其の性は毒に相違ない。

十時半姫路着、これより汽車はいよ／＼山の間を縫うて北へ向ふのである。雲のかゝつた峰巒が行くてを壓して居る。車中の人柄も變つて田舍の人が多い。城崎温泉に行くと云ふ一人の若奥様が女學世界の避暑號を讀んで居たのと三人の女子師範の生徒がぺちやく／＼とよく喋つたのとが人の注意を引いた。

播但の境生野の隧道を越すと風がやゝ涼しくなつた分水嶺が南となつて溪河が皆北へ流れる。

豐岡驛に着いたのは午後三時、まだ新らしい停車場のプラットフォームになつかしい友の姿が見えた。「よくまあ」と云ふ。北へ七十里の旅、茲に友あり、胸が一杯になる程うれしかつた。

友の一家は喜んで迎へて呉れた。

私の動悸が高い。日本海に近き北國、ふるさと遠く生野の路をも過ぎて、この一小都の孤客となつたかと思ふとまだ世なれない私の思想が、紛糾つて意識がちよつと鈍くなつた樣である。

初めての夜は急に寢つかれないで困つた。また更けたと云ふでもないのに人の足音が絶えて四面寂漠、墓地に眠る樣である。夕方空にはびこつたあやしい雲のなびき樣が思ひ出される。街燈の少いうす暗い町が思ひ出される。大きな暗黑な影が屋根の上から蔽ひ冠つ

學校家庭 兒童講話資料

東京市精華高等小學校長
加藤忠三郎君著

凡そ兒童が精神修養上に資せんとするの講話は、學校及家庭の平素最も多く意を致すべきところにして、努めて其選定を嚴にするの要あるやいふまでもなし

本書は學年始たる四月一日に起り、學年の終たる三月に至る迄の間、或は偉人の生誕又は死亡若くは事業成功の日に配して其敎訓を示し、或は至誠忠孝、百世の下、欽慕敬仰するに足るの忠臣義士の事蹟を述べて、趣味を感せしむるの裡に歷史に通せしめんことを期する等、專ら其の月日の順序を追うて編著したるもの、子弟敎育の完成の實を擧げんとするの士は、乞ふ宜しく一本を座右に備へて日常の參考に供せられんことを。

四六判美本約三百頁
正價金卅五錢　郵稅六錢

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

北村東紅君著

娛樂園藝 花と庭

洋裝　四六判總クロース特製美本 紙數二百八十頁挿畫數十圖

正價六拾五錢　郵稅六錢

著者は、多年、花卉、庭園、蔬菜、果樹類の栽培及手入等に從ひ、現に其豐富なる經驗を以て、高輪なる岩崎邸の園藝部に主任として、日常の實際に管掌しつゝあるの士なり。本書は、一般家庭に於て、小園藝を樂む人々の指針とも爲さんが爲めに、其蘊蓄を提供して、實際に應用し得べき各般の事項を流麗なる筆致を以て詳說したるもの。園藝趣味の益々擴大されんとするの今日、斯道に志あるの士は宜しく一本を座右に備へて可なり。



▼東京本町 博文館▲

女（その三）

少女スケッチ



少女世界記者 沼田笠峰君著
榊原蕉園女史畫

全一冊洋裝四六判美本
紙數……二百五十頁
正價卅五錢　郵稅六錢

美しい少女、やさしい少女、ハイカラな少女、感心な少女、快活な少女、ゆかしい少女、あはれな少女……さま〴〵の心と行ひとを、そのまゝに描いたもの。平易な文章と、趣味の多い事實とは、小說よりも面白く記されてあります。而もこれを讀めば知らず識らずの中に、一種の敎訓を味はふことが出來ます。少女諸子の御一讀を祈る！

巖谷小波君著
久保田金僊畫伯 装幀竝畫

新洋行土産

上卷（紙數約四百頁）
定價壹圓卅錢
郵稅拾錢

全二冊
洋裝菊判新形
總クロース
特製美本

先に伯林二年の觀察を、洋行土産二卷に著はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめた著者は、此度渡米實業團に加つて、在米三月間の見聞を、新洋行土産として、發表せんとす。著者が鋭利なる眼光と、輕妙なる筆致とは、世已に定評あり。而して彼の實業團の渡米や、亦本邦空前の擧なりとす。本書他の外遊記に比して、其光彩を異にせるもの、元より論を俟たざるべし。

東京本町 博文館 振替口座東京二四番

女（ろの四）

新撰名勝地誌

全部十二冊

田山花袋君編

毎編 洋裝四六判總クロース 紙數約五百頁 正價六拾錢 郵税十錢

第一 畿內

第二 東海道 西部

續刊

第三 ▲東海道東部
第四 ▲東山道西部
第五 ▲東山道東部
第六 ▲北陸道
第七 ▲山陽道
第八 ▲山陰道
第九 ▲南海道
第十 ▲西海道
第十一 ▲北海道樺太
第十二 ▲臺灣琉球

本書は日本全國に於ける名勝を半ば地誌的に、半ば案內記的に記述せんことを企てたるものにして、全部十二巻より成る。其特色を謂へば、交通路に由りて名勝を記したること其一也、産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたること其二也。つとめて新しき材料に由りてこれを記したること其三也。旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し、裝釘を堅牢ならしめたる其四也。ことにその最も特色と稱すべきは、編者の足跡殆ど海內に遍ねく、殘山剩水と雖も訪はざるなく、探らざるなく、從つて其記述と排列と頗る精確を極めたること是也。況んや編中處々に各名勝地の寫眞數十葉を挿入し宛然人をして足其地を踏むの思ひあらしむるに於てをや。旅行せんとするもの、各地の名勝の分布を知らんと欲するものは、來つて本書を看よ。



元發兌
博文館
日本橋區本町
三丁目

女(るの七)

てゐる樣で呼吸も憚られて寢苦しい。北國の香りがぞくぞくと身にしむ。迷宮に入つて變化の餌食となるのでなからうか。十二時、一時とまだ眠れない。厨で猫が騒ぐ音を聞いて下女が檢分に起たのを覺えて居る。

(四) 豐岡町

二日三日と日を重ねて、北國に對する私の不安の念が消えた。空がよく晴れる。野路をゆくと矢張り私の故鄕と同じ樣に夏草の花が咲いて居る。大川の橋の上へ涼みに出ると、夕榮の雲美しく、流れゆるやかな水の面にさゝやなみ立つて風が涼しい。靜かな暮色、集まつた浴衣の人々も他國と云ふ事を忘れて聲かけて見たい樣な氣がする。友の話によると夏は南國と變らない只秋から冬春の初めへかけて北國特有の獰猛な天候が多いとの事である。

豐岡町は、戸數三千人口二萬、但馬第一の都會で、京極家一萬五千石の城下であつた。從來は交通不便であつたがこの七月から播但線の延長開通と共に山陽と



城崎溫泉場の全景

の連絡が出來たのでこれからは漸々發展して行く事だらう。町家は商業半分柳行李製造業半分の有樣、柳行李は此の地の名産で山陰道第一の特産物である。京極舊藩主は教育に熱心な方と承つた。中學校女學校幼稚園まで揃つて居る。言語は京阪に似て居るが全然抑揚が異ふ。他人との會話に語尾へ「あんた」とつけるのが最も耳立つて聞える。「嫌ですがなアあんた」「わしやそんな事知りまへんがなアあんた」。

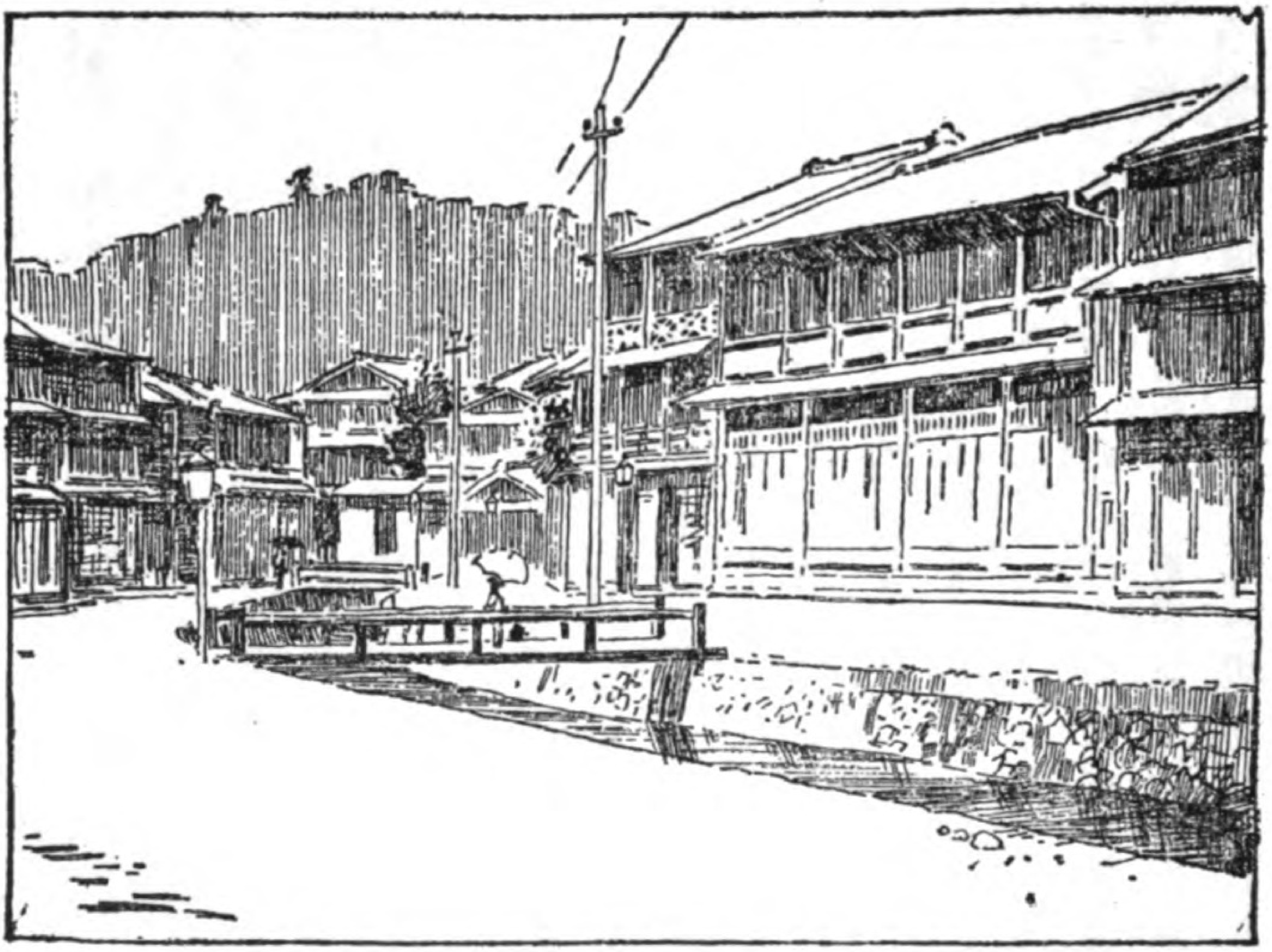
別に名所とてはない。西へ三町ばかり離れて大石良雄の妻むつ子の墓がある。今年修復すると云つて醵金して居た。北へ二里にして玄武洞、三里にして城崎の温泉がある。東へ二里半程行くと出石と云ふ小さな城下町があるが、そこの高い松の梢には、毎年鶴が北から來て巣を造り子を育てゝまた北へ去るとの事である

雅懐をやるべき特別の風趣に富んだ處とてはないので私の印象は矢張り他の田舎町と同一普通である。丸山川の鯉の刺身と鮎の鹽燒との味、川端の裏通りを通つた時、涼みに出て居る娘達若者達の放埒な風姿、何とか會の謠曲音樂會を聞きに行つた時、會長が中尾都山と云ふ人を紹介して「先生の尺八は關西第一と云ふが」と云つて一段と聲を勵まし「實は日本第一である！」と怒鳴つた其の大聲、先づこんなものであつた。これで市民の風俗も好尚も大抵は分るだらうと思ふ。

(五)　玄　武　洞

豐岡の町はづれから、流れゆるやかに水多く、葦の風涼しい圓山川を乘合船で下ること一里あまり、玄武洞のすぐ下へ着いた。城崎温泉行の旅客で立ち寄るものが多い。うす色の夏衣着けた少女達のかざしのリボンが美しく榮え、浴衣がけの男達の麥稈やパナマの帽が白く光る。或は青田の間に或は夏山の木の間に、錦の屑を撒き散らしたやうだ。

玄武洞はあまり高くない山の中腹にある。大龍口を開いて山の裾を流るゝ大河の水を飲まんとする形である。不可思議の大神を齋ぎらめたい樣に、大岩窟、柱も壁も天井もすべて六角の玄武岩が餅を重ねた樣になつ



城崎溫泉市街の中央市

て出來て居る。一滴又一滴、淸冽な水が岩の間から滴りおちて、底に湛えて物凄い程澄む。手を浸したら冷然とした。一人の書生が大聲で怒鳴つたら、其の岩窟にこもる反響の大なるには、女達は皆驚愕した。男達はハヽヽヽと笑つた。小さな茶店が傍にあつて、一人の老婆が繪葉書を賣る。私も其の皺のよつた乾干びた手から買つた。何處かで石を割る鐵槌の音が眞晝靜かな山の間の空氣に銳い振動を與へて居る。赫々と日は熱して人々は暑いとつぶやいた。

（六）城崎溫泉

玄武洞の山を降りてまた船で流れを下ること二里、城崎溫泉に着く、この溫泉は關西では名の知られた避暑地である。わけて本年は、播但線が豐岡まで開通したので浴客頓にふえ、旅館は皆滿員だと云ふ。日ならずして公園もホテルも出來、汽車も玆まで及ぶさうな。山陰第一の溫泉場として漸々發達して行くのは頼もしい。一の湯、御所の湯、鴻の湯と三ヶ所あつて皆比較

的温度の高い湯を噴く。設備は簡單で　宿泊料も廉く人情は素朴だと云ふが、四方に山があつて風通し悪く避暑地としては少々暑すぎるのが缺點である。

　町は一通り歩いて見た。喧噪と不規律と放埒とは、何處の温泉場も同一である。浴客共がすぐに感染してしまふこの一種の氣ほど私の嫌なものは世にない。

　圓山川を溯つて歸途につく。船が將さに岸を離れやうとした時、束髪にリボン何れ何處かの避暑客らしい二十二三の女人が急いで來て同船を願つた。この船は私共の買切りなので船頭は「いけまへんなアあんた」と辭つた。もう時刻がおそいので、外に乘合船がないと云つて頗る當惑顔であつたので、友が「お乘りなさいまし」と勸めたら「ありがたうござんす、どうか」と答へ喜んで乘つた。この女人あたり構はず喋々と辯じる。而かも元氣滿々、傍で冷汗を流した。家は大阪で、東京女子大學校の生徒で、豊岡の親戚へ遊びに來て、今日この温泉へ入浴に來たと云ふ。話し相手がなくつて困つたが今日計らずも御好意により、あなた達に遇つてお話しするのは何より愉快だと云ふ。これ等はまだいゝが何かの事から飛んだ議論が初まつた。教育は須く人格を目的としなければいけない、人格を博大ならしむるのは修養で、修養を助けるのは教育である。人格の活動は事業となる事業は人生の意味であると云ひ此の爲めには吾人はプラグマチズムとして心身の活動と慰安とを求めなければいけない。プラグマチズムの從來の哲學と異る所は認識論に對する意見の差から生ずる…何時やみやうもないので話しを外へ轉じようと努めた。午後五時、巳に日は右岸の山に沒して、水の上は涼しい。追手の風に帆を上げて靜かな波の上を走る心持ちは何とも云へない。私は「涼しう御座いますね」と云つたら辯士少々氣拔の體で、友が只笑つて居た。

　實行せずともよい、虚榮心の滿足に用ゐてもよい。この山の中に於てまで、この樣な議論を聞く、心賴もしい。女子大學教育の効果　大したものである。成瀬仁藏先生の德は偉なるものだと思つた。僞善でも好い

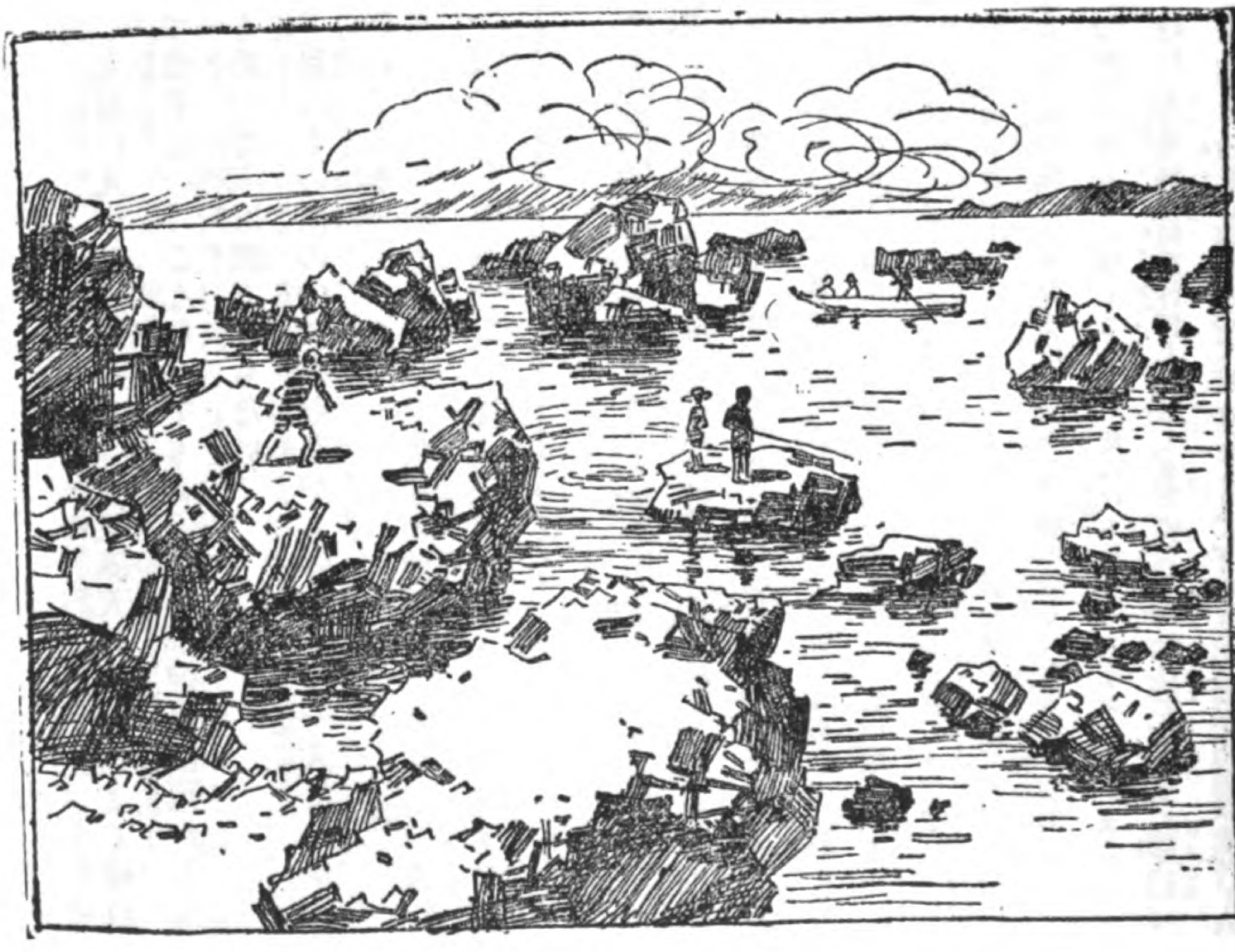
人に施しをするのはせぬよりもましである。虚榮でも好い辯じ得るのは得られないのよりはましである。物事はさう最初から甘く行かない。形式から進んで、完全になるのである。

私は船の舳へ出て西の空を見た。夕榮の雲は美しい山の裾の方の家から炊煙徐々に上る。

（七）歸郷

滯在二十日、二百十日も間近くなり、そろ〳〵と雨季に入る。二三日前から降り出した雨はまだ已まない四方の山へは霧がかゝつて欝陶しく、重苦しい空氣が一杯になつて咽へもつまりさうである。一度ならず私は友に聊つた。「もう歸ります」と切り出したら、友が笑つて止めなかつた。

出發の日も雨が降つて居た。砂利を敷いた新開の路を車に搖られながら停車場に着いた時はまだうす暗かつた。一番列車で出發、汽車小山の裾を廻つて、見送つて呉れた友の姿も消え、只漠々たる白霧は但馬の山



城崎温泉瀬戸の海水浴場

を蔽うて居た。

十二時神戸着、伯母の家に立ち寄つて從妹に城崎溫泉名產の麥稈細工の手文庫をやつたら下にも措かず大事にして喜んで居た。

翌日午後、遂に紀伊の海邊の家へ立ちかへる。父母君は其の夜、但馬の話しを聞いて下すつた。

九月に入つて磯にはもう秋氣滿天、毎日空よく晴れて海美しい。こんな日でもあの友の國但馬は雨かしらと思つて不思議でならない。

私はあの雨の中に住む友がこの雨から一人なつかしいのである。

（完）

美人畫の稽古

私は繪を描きます時大して用意を致すのではございません、唯心の儘に筆を動かしますので、人物を多く描きながら時の風俗抔と申すものは餘り頭に置かないので御座います。けれども外出でも致しますと、仍り流行や風俗の好いのが眼に留まりまして、意氣な島田や、丸髷の中には、隨分繪の材料に致したらばと思ふやうな格好が多うございますけれど、實物で拜見して好いと思ひましても、之れを繪にいたしますと、藝者か令孃か區別がつかないやうになる事が往々ございます。夫れから束髮でございますが、これは何ですか唯今のところ型に飽かぬ節があるやうに存じられます、併しこれは束髮が惡いので無く、私の繪がうまく参らぬかも知れません、御婦人の方が美人畫をお描きになるには、最初どう致しましても繪をお寫しになるのが宜しうございませう。郊外なり町なりで人物の寫生を致すのも時好の風俗や流行を知るため有益ではございませうが、幾分男子と違て左樣な事は面倒でもありませうが、初手は繪を寫して描いて後には母上なり御姉妹の方々なりにお頼みして圖を取りになるのが宜しいと存じます。私なぞは幼少の頃、何時も草双紙のお姫樣をうつして本をベラ〳〵に致しまして、母に叱られました事がございました。それから下繪はなるべく描き消しを致さないに限ります。けれども私抔は始終打消しを致しますので、自分ながら困つて居ります、繪は梅雨の頃は大層描き立うございますが、寒くても暑くても繪具が爽になつて描きにくうございます（榊原蕉園女史）

まぼろし日記

（藤田いさを女史を想ふ）

森　隆子

砂塵を吹きまく、名物のからつ風も、けふはやつと和いで、いさゝか春らしい光が、あかり障子に漂つてゐる。重くなければ、偶には病氣するのもいゝものね、二三日から、ぢつと落ちついて、天井の節穴でも數へて見たいものだ、なんて言つた戯言が、ほんとになつて、首尾克く、「インフルエンザ」クンのお見舞をうけて、ちやうどけふで六日……。けさは熱もないし、大層頭も輕いから、そろ〳〵起きだして見る。おや〳〵まあ、四五日お目にかゝらないうちに、紅梅孃、すつかり盛りの色を見せて、嬌艶な姿を、そよ吹く風に誇つて居る。去年の冬、手すさびに挿して置いた猫柳までが、むく〳〵とふとつて、花粉のこぼるゝさまは、毛蟲のやうで、いやらしいこと……。いつの間にか伸びた、ばらの新芽の赤いのや、毎年芽は出るけれど、花の咲かない黄水仙の、スイ〳〵した深緑色の葉なんか、眺めて居たが、十坪に足らぬ狹い庭の別に面白いものもない。

中の間の火燵にもたれて、手ずれた藤村詩集だの、雜誌だの持つてきて見たが、これとても珍らしくはない。あゝどうも退屈だ。

無意味に筆をとつて、手あたり次第に、むだ書きをしてるうちに、ふと、人のすなる心の日記てふものを、わらはもして見んとて、しやうと思つたけれど、別だんかく事もないやうだ。

私等も、學校時代、處女時代には、よく怠らず日記をかいた。燃えるやうな靑春の血潮は、日々の行動、言語にも溢れて、幼いながらも、其日〳〵の感想が、書いても〳〵かき盡されぬとばかり、あつたものだが、かう、所謂囚はれたる女となつてしまつてからは、其當座こそ、甘い新婚の、夢か、現か、うつら〳〵と、何とはなしに樂しくて、變つた境遇の珍らしいまゝを

しるしても見たが、二年三年、追々と糠味噌臭くなつて來ては、さう〳〵心の動搖も烈しくなければ、隨て記す程の奇拔な事柄もありはしない。日々の生活に不足がなくて、家庭が平和なれば平和なる程、人生は單調なものだ。此に於てか、覇氣ある女や、趣味に活きんとする婦人などには、堪へられぬ苦痛……、籠鳥の感が、ひし〳〵と胸にせまつて、女子解放なんて聲も、勢をましてくるのであらう。もしも僕が男なら、女子解放大賛成だ。全く、今のやうに、家庭中心主義が閑却せられて、個人主義は盛んになる、虚榮心はいよ〳〵增長すると、いつた風の女を妻にもつて、嬉しげな笑顏の一つも、見やうといふには、男たる者の、苦心慘澹……、げに、同情する價値はあらうと思ふ。此重大なる義務(?)を果し、權利に誇らうとするからして、つまりは不正の金でもなんでも、掴みたくもなる筈よ……。そんな厄介な女なんか、後生大事と囚へて置くより、さつさと自由に解放すれば、男の負擔も、大に輕くなるだらうし、まあ、兩得といふものでせう……が、放たれたなら、そんなに幸福かしら、兎に角自由の天地、自在の翼、急に大きくなつたやうな氣がして、目的は向の山、まつしぐらに翔けてゆく、虚空はひろい、爪をといでる熊鷹もゐる、隼もすむ、お隣の小坊ちやんまでが、空氣銃で狙つてゐるんだもの……、おゝ危ないこと……、怖いこと……。翼の弱い僕などは、矢張囚はれた女として、優しい良人の腕にすがつて居る方が、まあ〳〵無事だ。と觀念の眼を閉ぢて、一しきり瞑想に耽つてゐると……、表の格子がチリチリンと開いて、「あのー、本やさんから賴まれてきました」と愛らしい聲、出て見ると、學校歸りの近所の女の子が、女學世界三月號を持つてきてくれたのだ、ま、嬉しいこと、けふ、此折に、屆けてくれたこの女の子ほんとに天使のやうな氣がする、有合せの梅の簪をやると、にこ〳〵と大喜びで、幾度も頭を下げる。早速あけて見る。

いつもながら千紫萬紅、色とり〴〵の美しさ、まづ以て、大家元老方のは、とつてをきとして、晶子樣の

雜記帳を始めに、若い血の温かさうなのから拜見する、いづれあやめ、エデンの園とはかうもあらうか、花の香はむせぶやうに胸に染みる。疲れた目を、鳥渡一休みと思つて、誌友俱樂部を覗くとふと目についた一項は「女學世界」の昔ごろ才筆をお揮ひ遊ばした紀伊の藤田いさを樣は今何處で云々……」と、見た刹那、儂の胸裏ふかく秘んで居た或者が、烈しく胸に迫つてきて、はら〳〵と涙がこぼれる。

古い誌友の方は、まだお忘れもムんすまいが、一二の昔の頃、此文壇の花形としては、みすゞ刈る信濃の方、宮澤すみれ樣の氣高い白梅の淡々たる御筆つき、又は濃艶桃の如き山口あき子樣の御作



さては又、現に閨秀作家として名高い、長谷川しぐれ女史、たしか其時分には、水橋康子樣と申して、梨花一枝雨を帶びたりとでもいふやうな小說……。其方々と共に、吾藤田いさを女史は、小說に新體詩に、美文に論文に、其縱横自在の才筆を揮はれてゐらしつた其頃、いさをさんの人氣は、今の内藤千代子さん以上で、實に朝日の下に匂ひ出でたる櫻とばかり、爛漫たるものでありました。其他奥島秀子樣

とか河原なでし子様とか、誰様かれ様、櫻桃梅梨、妍を競ひ芳を爭つて、目もあやなる園の片隅に、あるかなきかの、はかなげな様に、露を力と、やつと咲いた野菊一輪、それは―、それはかく申す私の其頃、幼い胸の想を、たど〳〵しい筆にうつして見て、顔あからめて居つたのでムいました、元より自分の存在を認められやうの野心もないし、とても及ばぬ櫻梨の君方に、御交際を願ふなんて、大膽な望みもなく、只孤獨の想をやる、唯一の樂しみとして居たばかりでしたけれど、でも、南島の某子様、東北の誰様、西國の何さま其他文の上の友となつてよ、などゝ、いつてよこして下さる方も澤山にあつた其中に……、忘れもしませぬ或年の冬、僕が骨髄を疾むで、都の片ほとり、さる病院の冷たいベッドの上に、身動きもならぬ、骨ばかりの身を仰臥半年……、今更のやうに亡き父母をなつかしんだり、世を呪つたり神を恨んだり、苦悩呻吟の枕邊にふと一片の信書を見出した時……、あゝ其時のうれしかつたこと……、まだ〳〵頼みある我世かなと驚喜しました……。え、誰からの文……と仰しやるの？……沙滿ちくれば片男波、田鶴なき渡ると詠まれた、和歌の浦わの夕の磯に、少女十九の振の袂を、胸に疊んで詩を思ふ。それは、いさを女史から求交の美しい水莖の跡なつかしい文でしたの―。日頃からお懐しい、床しいと、あこがれて居た方からの賜物だもの……、僕は痩せて、色あせた頬に、熱い涙の痕を染ませて、喜んで泣きましたわ。まだ、ものを書くのは無理な仰臥のまゝ、打震ふ筆の命毛危ふげながらも、お返しをあげると、折返して、温情あふるゝ見舞の文を下さいました。それから後は花のあした、月の夕折々の想ひをかはしつゝ、翌年の春、僕は新婚の良人のなさけに、病餘の身を、故郷の花になぐさめられて居つた時、手にした、いさをさんからの通信を、何げなく開いて、あつと驚きの聲を止めることは出來ませんでした。見る目のあやまりかしらと、又、繰返してもあり〳〵と我偽りの罪をゆるしたまへ、とある。いさをは實に異性の人なりとある。眞か、うそか、幻か、何だか夢の

やうに讀んでゆくと、「君は人妻……、よし、詩の神のみ前に罪はなくとも、世、人、恐ろしとならば、涙よくこの交り斷たむ……」と、幻影か、幻影か！、あゝいとをさん、とうとうまぼろしの人となつてしまつたの！？……と、僕は叫びました。終りに、やゝ、うら亂れた筆つきで、

　我思ひ戀ふには
　野ばら影しろう
　みどりの水に投
　げてし妻

と、僕は手紙を顏に押あてゝ、すゝろに聲たてゝ泣きました、心臟の鼓動は烈しく、小さい胸をうつて、血



沙の波は、うづと狂つて……。何の涙とおきゝなさるの……？、良人も其時、何の涙とがめましたが、よしや何の涙であらうとも、あだし心を吾もたば末の松山浪もこさなむ、二つない身をも心をも、愛する良人に捧げた、今の僕は人の妻……。文を、良人に見せると「ム、とう／＼男だつたのか……男だつて好いぢやないか」と微笑まれた。僕はすぐにわなゝく心を筆にして、返事をかきました。「われは人妻……、人妻なればこそ、異性の君と、文の友垣結び

たればとて、何のやましき事やあるべき……」と、けれども、あの、松の葉越しに海見える二階の欄干に凭れて、うつとりと、片よる波の音をきゝながら、想を練つて筆をとる、少女十九の花の姿を、どうして僕の胸から、とりさる事が出來やうぞ。よし幻にもあれ、才情ゆたかなる、いさを女史は永久に、吾會心の友であると誓つた。で「まことは異性の君なりとも、只とこしへに、わらはをして、いさその君と呼ばしめ給へ……」と書いたやうに覺えて居る。

其後、私等は再び文の友どちとなつて、其人が上京して、某大學に入られて後も、一二回の通信はとり交したが……。うら珍らしい袷の袖をかき合せて、落ち散る木の葉に、そゞろ人なつかしい想のまさる其秋の頃には、ふつと音づれも絶えてしまつた。

たばしる霰の、軒をうつ夜など、良人とふたり、埋火かきわけながら、ふと「どうなすつたんでせうねえ」と、僕が心配すると、「今迄とはちがふさ、くだらない手紙など書いてるやうでどうする……、將來有望の人が……」なんて、折々の物語りにも、幻の人をなつかしむ思ひは、變らないけれど、端書一ひら、あげやうすべもなくて、其まゝに……。

今から思ふと、其人は、ちやうど其頃から、七彩燦爛たる、戀の虹に目を奪はれて、甘い泉の滾々として、幾世つきせぬといふ山路に、抑々の第一歩を踏み入れやうとする時でゞもあつたでせう。渡しもはてぬ岩橋の中絶えてからはやくも三年、去年夏、女學世界の避暑號を手にした僕は、再び又、驚きの眼を睜つて、長く深い太息の下に、其人の運命を悲しみました。

誌友の君！！　昨年の避暑號第五十三頁、小說、暑中休暇……、何と御覽になりました？。山田哲次が悲しき失戀の物語……。噫この一篇こそ、實にかの人が、荒んだ心の一端を寫さう爲に、悲憤の淚を硯にうけて、かき流した懺悔の文！！　有爲の青年、活世界に活動すべき眞男子が、あまりに女々しい繰言よとお笑ひ遊ば

すな。戀は盲目なりと申すでは厶いませんか。美しい友情といふ名のもとに、熱し易い青年の弱點を捕へて單純な心に、蜜のやうな戀を想はせさんぐ情を弄んで、愈、對手が高調に達しつめたと見てとるや、俄然「われひとり醒めたり」と、逃げた文子さんの、學者面の憎らしさ。假面、虚僞を世渡りの料として、纎手よく有髯男子を自由に操つり、一度笑へば城を傾くといふ、美目盼たる「きみけいせい」にも、一掬の涙はありときくものを……、夏期寮の修



養に「眞の自己」とかいふものに、行きあたつたとやらで、美しかるべく甘かるべき戀の花束、惜しげもなく引むしつて、蹂躙つて、高慢顔なさる文子さん……嗚呼、最高學府に六ケしい學問を遊ばした方のお心は私等無學の凡婦とは雲泥の相違……眞に恐れ入つたものでム いますことね。

こちふく風の便りにきけば、此かしこい文子樣とやらの其後は、某新聞の婦人記者として、花々しい活動振を、觀光團の外人連にまで、見

せつけて、得意滿面でゐらつしやるとやら‥‥。凩の風、身に染み渡る夕まぐれ、孤影淋しく、漂浪の旅にのぼつた靑年は、いづこの里にどんな夢を結んでゐるのでせう‥‥●

小說暑中休暇一篇、恐らくはいさを女史として、これが最後の筆かもしれないが、どうぞ篇中の山田さん其人よ、なんの‥‥戀。たかゞ心の腐つた女一匹位に尊い男の淚なんど、めつたにおこぼし遊ばすなよ。運命は勇者を恐れ怯者を恐れしむとやら。雄々しい心を振起して、立派に計畫の事業を、やりとげて下さいませ。學もなく才もない野育ちの子ではあるけれども、意氣は人にも劣らぬつもりの私も、陰ながら、あなたの成功を祈つて居ります。

あゝ靑春の、戀に敗れた靑年の面影は、知るよしもないけれど、幻に見たいさを女史の、美しい姿は、妙なる文才と共に、深く僕の胸に刻まれて、なつかしい思出の種となつて居ります。今ゆくりなくも、女史を思ふ同志の君を、此倶樂部に見出して、又更に、想の糸を操返し、懷舊の淚にぬれた袖袂‥‥、他人が見たら怪しみもしやう‥‥。良人も、もうお歸りなさらうに、亂れた髮でも梳いておきませう。

立上りさま、ふと見ると、夕日花やかな窓の障子に疎影一枝‥‥、これはまあ、何處の畫伯が筆のすさびか、墨繪ながらも、生きてるやうな枝の上から、チヤチヤ‥‥、ぱつと何やら鳥影、オヤと思つてあけて見たが、もう影もない。そよ吹く風に梅が香はむせぶやう‥‥。

藤田いさをの君に申上げます、溫泉日記は昨年九月の末に受けましたので發表は自然冬枯になるわけ故殘念ながら篋中に、藏めてまた來ん年の雲の峰湧き出る頃までと大切にして意氣なかけ〲して置きましたよ。

森たか子の君に申上ます、まぼろし日記は二月の末に受けましたがいさを樣にそれほど打込みたまひしを片口だけ揚ぐるのも何とやら惜まれて今日まで延引いたしました●

それからあなたはいさを樣を何かあの異性の方のやうに思召すがとんでもない事、あの方は矢張り御婦人で被居ますのよどうしたお間違でせうれ。

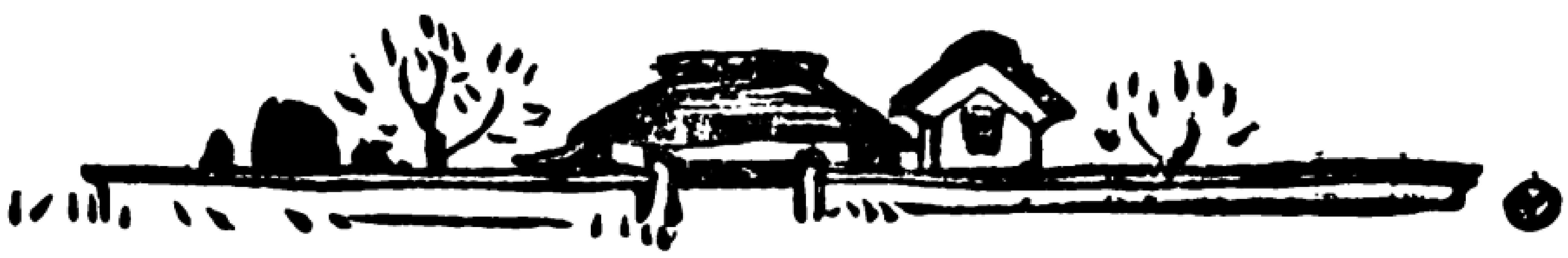
社會觀察

綿綀織の工場

島の女

極めて閑散な田舎の土地にも、此處は綿綀工場の一部、大きな長い家が二棟いかめしく並んで、ドスンガタンと凄じい音を其近傍に響かせて居る、織女が我劣らじと朝の暗がりから夕べの月影を見る迄、根限りに黒汗たらして綿綀を織つてゐる。

ズツト見渡すと大きな不格好な機が三筋に設けられて行儀よくズラリと並んでゐる。都會の工場の様に年頃揃つた工女と云ふ譯には行かぬ、十四五歳の小娘から三十歳前後のものが其多數を占めて居るが中には四十近くの年増も少なくない。各自襷十字に綾なして、下品なひな歌をおかしな節で、大きな聲を張り上げてうたひながら精々と織つてゐる。綀機は普通の機に比べると其仕掛の大きな丈けあつてこれを織るものも非常に骨が折れるのである



△織女の種別

此處に飛び込んで來る者はどんな女かと云ふに、都會の紡績工場の織女などゝは大いに其趣きを異にしてゐる、其主なる者は土地の若い女が大部分を占めてゐる、之等は家計を資ける爲めに綀織してゐるので、中には嫁入仕度の目的でやつて居るものもある、又嫁入後生計の助けとして織子となつて居る者も少なくない、殊に出戻りなどゝ來ては大抵は必ず織子となる、これは土地の習慣として一度嫁に行つて歸つたならば里の厄介にならずに獨立して行くと云ふ習ひなので自活の爲めに織子となるのである、さうして田舎としては割合に賃金がとれるので案外氣樂に暮して行く事が出來るからである、故に若し夫婦の仲違が出來たり一家に波瀾が起つたりして嫁の離縁沙汰にでもなると、なあに綀織して食つて行けばこんな家で辛棒するより遥かに増しだと云ふ様になつて來た。

小さな島で工場が四ヶ所もあつて其勞働次第で相當の賃金が取れるので随て他の職業に從事する女がいたつて少ない、殊に奉公人と來ては實に拂底して來たのも大に之れが原因して居る。

△賃金

春秋の好時節殊に夜の長い時分には朝は四時半から五時頃に起出で點燈して仕事をなし、夜は夜業をすると云ふ風で一日凡十四五時間も働く。さうして織上げの品に依つて上中下の等差が付く、上等の分で一本の織上賃が凡そ四十五六錢から五十錢位に上る事もある。其下は一錢二錢の差で、一本織り上るに二日乃至三日

位の日子を要する、最も熟練の者は僅か二日を要さば充分に織り上る事が出來るから一ヶ月七圓乃至九圓位の賃金を得る。で皆が人に負けない氣で自然競爭する。本社からは賞與として七圓以上は何程とか廿本以上は何程とか云つて別に金を與れて織子を勵ますのである。

田舍で女が他の職業に就いて月に七八圓の賃金を得ようとするのは中々容易の事ではない、尤も之等は社中の上等株で、相當に熟練を積んだものである。中には月に二圓半か三圓にしかならない者も澤山あるが、是等は新米か或は練織を專門として居らぬ手合である、まづ平均五六圓が普通。

△おつき合

かう云ふ風に田舍にしては割高の賃金が取れるので、随て金使ひも自然荒くなる、そこを附込んで此處に飲食品を賣に來るものが澤山ある、梨、柿、みかんとか其時々のものは云ふに及ばず、餅、菓子の類にいたる迄絶えず賣りに來る、さうすると一人が買ふ、他の者に振舞ふ。斯う云ふ風であるから幾ら儉約主義の者でも自然おつき合が澤山に入る樣になるので賃金の取る割に金は殘らぬ

△品性

勿論無教育者の寄合であるから、遠慮もなければ用捨もなく大口を叩きちらして惡口のお稽古をする、時には聞くに聞かれぬ樣な事を言合つて喧嘩をするので有る、入社當時の新米やまだ年の行かぬ小娘は至極眞面目で大人しくして居るがそれはたゞ始めの程許りで、こんな莫連者に揉まれるので遂に始末に終へぬ轉婆になるこれは誠に歎かはしい次第である。

費用六千萬圓の結婚

紐育にて數年前より大評判となり居りし、世界鐵道王エドヰン、グールドの令孃マリヲン、グールド(十九)は米國屈指の富豪アントニー、ジヤン氏(二十二)との結婚は愈々事實となりて現れ、益々同市内の評判となれり、同市寶玉商の語る所によれば、此結婚の贅澤は紐育にて前代未聞にして、結婚の費用六千萬圓、當日此の盛況を見んとて雨中に立盡せし同市の婦人數萬人と算せられ、蝙蝠傘或は拳にて掻き分け押し分け我勝ちに花嫁の顔を見んとて喧嘩の如き大騷動を爲せり、花嫁に對する祝品は、之亦た價額二千萬圓に上り、萬一を慮つて數日間其の贈品に特別區の探偵數名を附したる程なるが、父のグールドよりの贈物は一百萬圓の家屋なりと云ふ、結婚式は悉く桃色の物を用ゆる事にしたれば、グールド家の各室舞踏室は云ふまでも無く、教會街路も悉く桃色の花卉を以て掩はれ、約中里の間満目悉く桃色ならざる無き奇觀を呈したり、猶ほ又た當日の賓客にはグールド孃より豪奢の御馳走あり孃より數萬の賓客への贈り物は金剛石の中に鏤めたる豆時計にて、同市新聞の傳ふる所によれば、此までの結婚の贈物として之ほど高價なる物を用ゐたる者は未だ唯の一人も無しと、

道理に外れた成功者
不思議な結婚媒妁人

堺　まさ子

昔から媒介者の任務は實に大切な者であつて、謂はば神様の代理をするのであると申されて居ります、然らば何の爲に神の代理をするのであるか、言はずもがな、人生の運命を左右するものは婚姻であつて、花咲き匂ふ春のあした、綠吹く柳の陰に迨ひつゝ、玲瓏たる鶯の聲を聞く樣な樂しいホームを作つて生活するも、はた然らざるも、一つに婚姻の好結果と不結果とによるのであります。

されば此の婚姻をまとめる所の(重大なる任務に當る)媒介者は、實に一通りの御苦勞ではないのであつて、若し自分の力に及ばない時は、神の御力を藉りてまでも、彼等の爲に安堵をはかつてやらうと云ふ赤心を有せなければならぬ。此の赤心を有すれば眞に神の代理たるは當然でありませう。

然るに世の中には隨分物好きな人があればあるもので、別にその人から依賴されたのでもなく、又知己朋友の間柄でもなく、別だん義理があると云ふ譯でもないのに、何の理由もなく唯面白半分に行る人が澤山あります。危いではありませんか、若しも是等の氣まぐれ者のいふ處を信じて、その言に從ふたなら、どんな悲境に陷るかも判りません。けれども世の中には、馬鹿でないくせに、前後をも考へず、うか〱と人の調子に乘込んで、だまされる人も往々ありますから思へば不思議です。そこへ持つて來て、それ等の人の行つた所が、却て志の厚い深切な、所謂神樣のおぼしめしにも増して、好結果を得る事がないでもない。かゝる實例はいくらもあります、じつに不思議ではありませんか。

昔春日の局は大さう人の媒介をするのがお好きだつたさうで、知人と否とにかゝはらず少年少女を御覧になると、直ちに手帳を出して、年頃や、顔つきの事や、

色々な事を明細に書き留めて置き、最早彼是相當の年頃に達したらうと思ふ頃になりますと、そろ〳〵聞きたゞして媒介をされたと申しますが、私の近所に丁度そんな人があります。

然るに此の人は何から何まで春日の局の様に賢明なら宜しうございますが、人の媒介を好む所ばかりが春日の局の様で、その他は中々さうは參りません、職業は小商ひで毎日「テンプラ」だの「オデン」だの菓子だの、鹽センベーだのと、色々様々な物をかつぎ廻して、その日〳〵を送つて居るのですが、どうも此の人は生來が薄馬鹿で「キヨロッケッ」で直きにキヨロ〳〵したり、錢勘定を間違へたり、内の人が何程注意致しても、落ちついて事を行ひ、愼んでものをいふといふ事が出來ないのであります。

或る日何時もの如く商賣に出かけて、或る人の宅へ參りました。さて申しますには、

「今日は誠にどうもとんだお早うございます、何時ものテンプラやオデンは如何でございますか」といつた様な工合、けれども此の位な言は珍しくはないのですもつと可笑しい事がどの位あるか知れません。かくも賢ならざる人間が、婚姻の媒介者となつて其の間に立ち、程よく雙方を結びつけるのであります、然かも未だかつて一度も不結果を見た事はないと申します。今でこそ此の人の婚姻の媒介をするのゝ上手な事が一般に知れて居りますから、別に懸念もありませんが、その最初に於て誰がひつかゝつたか、斯様な人に能くまア人生一代の最大任務を一任する事が出來たものだと、その大膽なのに感心致します。何も運は天にあると申しますからには、人間の運命と云ふものは到底人力をもて左右すべからざる事は、疾うに承知致して居りますが、それでも私等の如き小膽者には、出來ません。いかさま他の方面に向つては、人の後にもつけない程に劣つて居りましても、此の方面に向いては誠に天才を得たものと申しませうか、いや寧ろ單に物好きと申した方が適當でありませう。

さてまづ此の人の媒介法を紹介せんに、是れは實に


お祭へ

面白いのです。前にも申しました通り小商人で、毎日それを仕事に所々到る所を歩いて居りますから、中々世間が明るう御座います。で世間を歩いて見れば中々に男も在る、女もある、云ふにいはれぬ美人も在る、又見るに忍びぬ醜の荒らくれ男もある。朧ろ夜に、朧ろ月の下に、人をして一種曰ふべからざる思ひに堪へざらしむるまでの好男子もあれば、痘痕だらけの見るも厭はしき娘もある。斯樣に千差萬別なるを彼男は春日の局の樣に丁寧に、明細に、手帳につけて置きます。現にその手帳に留められた者が、男女合せて百八十人もある由です、驚くではありませんか。而して最初は如何して口開きをするかと云ふに、先づ「テンプラ」でも賣りながら串談半分に、御宅にも好い娘さんが居る樣ですが、最うそろ／＼御嫁づけなさらなくてはねえと云ふ樣な鹽梅に行るのです。それが終ひには串談どころではない、眞面目になつて立派なる一個の夫婦を造り出す樣になるのであります。

而して斯樣にして出來た夫婦が、何れも／＼も圓滿であつて、何所からも不平の尻が來ないと云ふ。して見ると媒介などゝ云ふものは、盲にでも出來る、少くも六ケ敷いものではない。神の業どころか、子供の業の樣に思はれます。それを世間の人は何故この位な事を六ケ敷いの何のと云ふて引込んで許り居るのでせう、いかにも勇氣がない樣に思はれます。

今かりに自分が或る人の所へ行つて、誠に御迷惑でもありませうが、何所にか相當なものが在たらば、是非世話をしてもらひ度いと賴むとせんか、その人はかならず、折角の御依賴ですがどうも自分は口を利くことが不調法ですから、これは何卒他の然るべきお方に御相談を願ひ度いとか、何とかいはれるに極つてゐます。

然るに世間には「今日は誠に何うもとんだお早う御座います」などゝ云ふ樣な人ですら、少しも臆劫がらずに行るではありませんか、が、苟くも婚姻は大問題である。要するに斯の如き人は婚姻の何たるをも解せず自から媒介者となつてその任務に當りながら、媒介の目

的は何であるかをも考へず、徒らに人と人とを結びつけたに過ぎないのであります。然るに幸なるかな此の人の手によつて作られた夫婦が、何れも皆圓滿で、不平の聲が聞えないとは、さても不思議な話である。成る程これでは運と云ふものは全く天にのみ在るもので、到底人力の及ぶ所でないかも知れませんけれ共、通常の人は此の婚姻の大問題に對しては、聊か躊躇するのが當然です。たとひ少しは口が利けても、道理が知れても、先づ遠慮して然るべきでございます。よくよく自分が逃れられない場合に於て、初めて口を開くのであるが、斯る場合には專ら彼等の爲に幸福を祈り、私利私慾を抛つて之に全力を注ぎ、成つても成らなくても成らせてやらうと云ふ、所謂智仁勇の三徳を漲らして行らなければなりません。何故ならば此の媒介者にして、一歩を誤まる時は、その新夫婦に對して大責任を負はざるべからざるは、勿論の事、一般社會に對しても非常な責任を負はざるを得ないのでございます。是に反して注意、深切、周到、綿密、なる態度を取り、正直を旨としてこゝに媒介の勞をつくし好箇の伉儷を成立させて、新夫婦に人生の至貴至高なる幸福を與ふる事が出來たなら、誠に世にこれ程尊敬すべき慈善事業は恐らく他にあるまいと思はれます。

媒介者の任務と云ふものは斯樣に尊く、六ケ敷いものでありますから、世間の人が人に依賴されたからとて、無暗に輕々しく返事をせずに「私一人のはからひにも參りませんから何れ又内々とも相談の上にて御返事申しませう」と曰つてかへすのも至極御尤も千萬、些とも無理ではない、他人は知らず私は御察し申します。

勿論世は十人十色で人樣々な裏表、誰でも同じ樣な譯にはゆかないのに定まつて居る。私の幼い時にお隣家のお婆さんが、赤ン坊をお負うて能く遊びに來ては、斯んな話をされました。

「本當に內にばかり閉ぢ籠て居ては、何の興味もありませぬが、外に出ると辛い事もある代はりには、又面白い事も頗る多いとの事、私の倅なんぞは出商賣です

から、日々面白い事を聞いたり見たり、感じたりした事が、毎晩話しきれないのですよ。此の間の晩も大笑ひをしましたの、それはねえ、斯うなんです。日東村の西の方に何とか云ふ小さい村があるさうですが、其所に一人の山師がありましてね、此の人が或る時自分の友達の娘を或る人の處へ世話をしました、然るに此の人は如何に平氣だつて貰ふ當人だけ即ち男の方には話をして置き乍ら、嫁ぐ當人即ち女の方には一口も話しませんでした。自分獨り承知して娘の親にさへ相談せずに、ズン／＼先樣へ獨りで行つて、

「何時何日は丁度吉日ですから當日には不取敢つれて參る事に致しませう。」

　とちやんときめて歸りました。そんな事とは夢にも知らなかつた娘は、その當日大師樣へ參詣に行くとてお召しを更へて出かけやうとした所へ、彼の山師は大汗をかいて青くなつてとんで來ました。そして息せき云ふに、「貴女には今日は大師樣どころではない、お嫁さんに行つて貰はなければならない」

と話の中からぶる／＼震ひ出しましたけれども、誰も些とも信じません。娘の父は

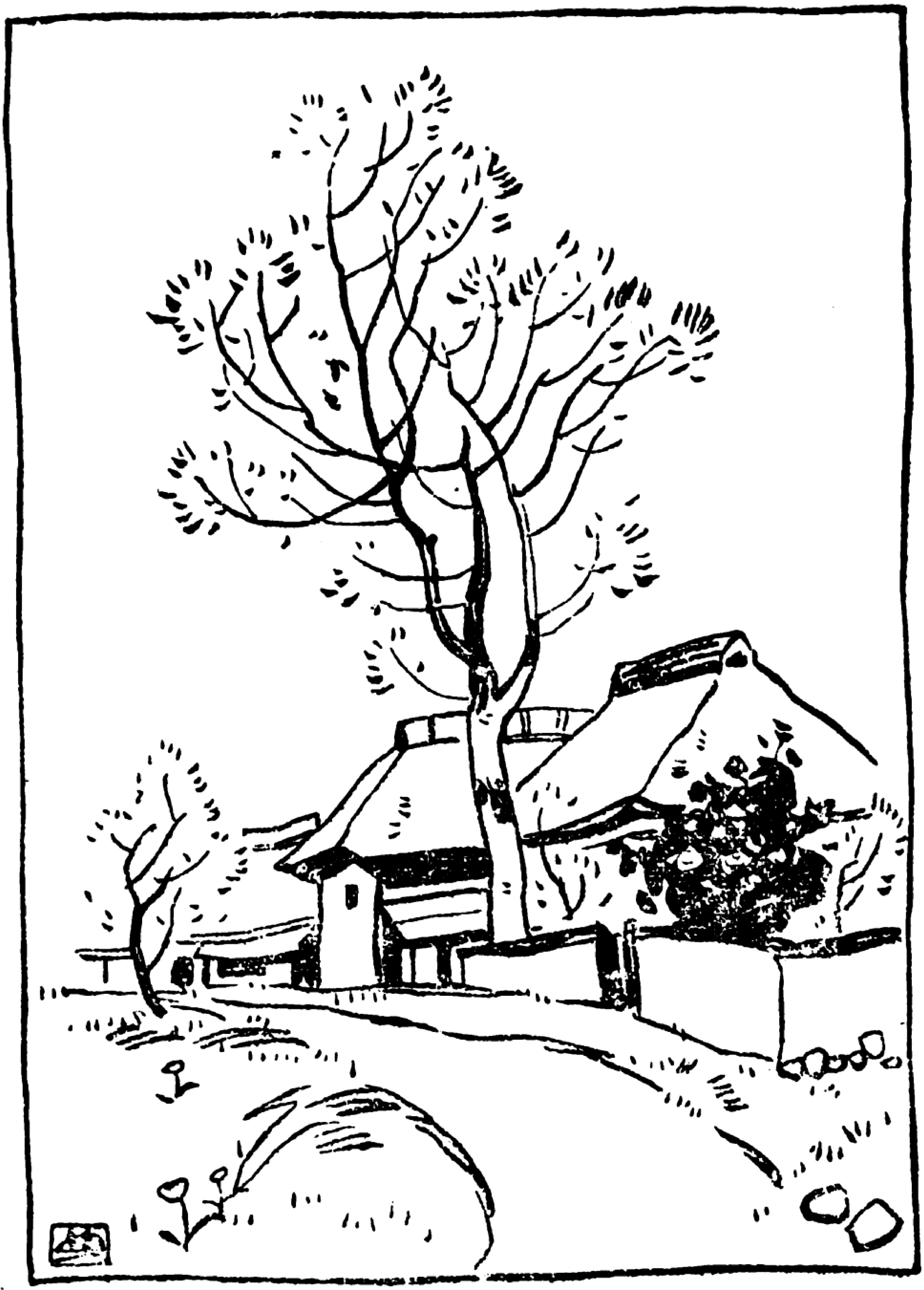
「串談云つてはいけない」と笑つて居りますその時彼は泣き聲を發して

「串談どころではない、是非行つて下さい、今日貴女が行つて下さらなければ自分は今此處で腹を切らなければなりません。」

　と叫びて申しました。こゝに於て一同は初めてその虚言ならざる事を知り、立腹する事限りなく、

「人の娘を相談もなく矢鱈に人に世話をするなんて、口がないではあるまいし、不屆千萬な奴である、言語に絶した奴である、腹でも尻でも切り度い所を切つて見ろ。」

　と大變怒りました。そこで流石の山師も大いに閉口して、自分の不始末を悔いましたけれども、今更謝るに術もなく詫びるに由もなく、さうかと云つて最早約束して終つて見れば、此の場に到つて如何とも致し方がありません。止むを得ず人を賴んで之を詫び、且つ



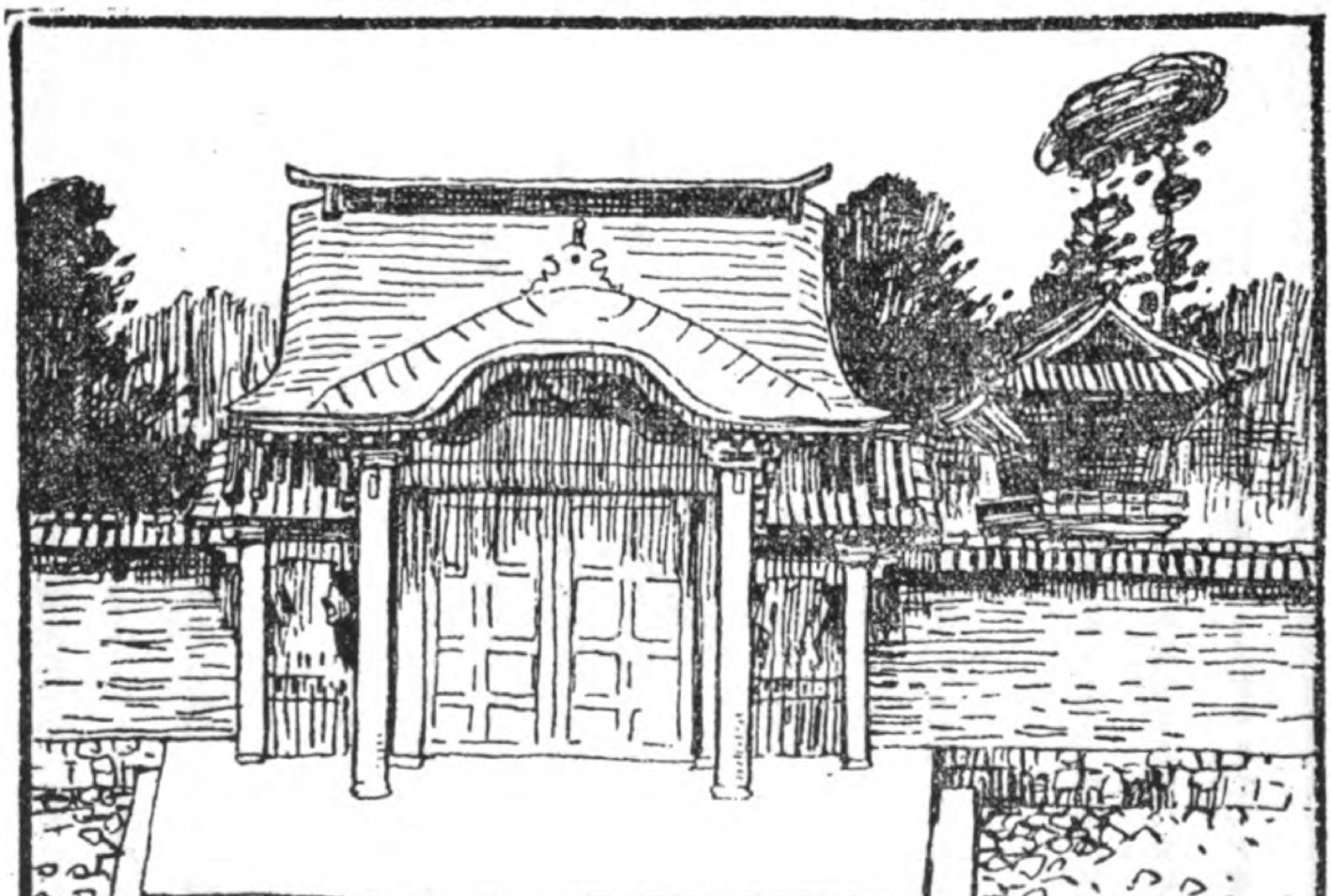
是非とも行つて貰はなければならないと云つて、手を合せましたが、中々娘の父は聞き入れませんでした。如何に山師が大膽で、圖々しくつたつて。此の場に至りてはじつとして居られません。入りかはり立ちかはり人を頼んで漸く堪忍してもらひ、結納やその他の事は後として、とにかく娘をつれて行く事だけは許されました。それでその媒介者は幸ひ腹も尻も切らずにすんだと申しますが、なんと呆れ返つた人ではありませんか。」

とお婆さんはさも呆れたらしく話されました。誠にどうも世間には何とも申し樣のない大馬鹿が、あればあるものだと熟々と感じました。こゝにまとまつた夫婦も矢張り無事に治つて居ると云ふ話ですが、定めしその婦人の胸中には、嘸不平も籠つて居りませう、此の婦人はまだ生きて居ります、最う彼是六七十歳の高齢にも達して居られませう。とにかく此の人を尋ねてその所感を伺ふたなら屹度奇々妙々な感覺を與へられるに相違ない。幸ひ日東村（山師の家の一里許り向ふ）の向ふだと云ふから、いまに機を見て尋ねて見ませう。

要するに彼「のテンプラ屋」と此の山師とは何れも例外中の例外で、こんな人は何所へ行つたつて幾人もあるものではありません。然るに此の世にも珍らしい二人の變人が、雙方とも揃ひも揃つて破鏡に陥らず、世に人の媒介者として少しも愧ぢなかつたと申すのは、如何にも不思議千萬な話しで御ざいます。ついでながら諸君の爲に聊か所感を述べますが

それは全く不思議には違ひない、けれども、私に於てはひそかに感ずる所がありますよ…滿天下の淑女諸君——諸君は堪忍と云ふ事を知つて居られませう。…知つて居る——知つて居る——屹度知つて居る事と私はお察し申上げますが、然しいざやと云ふ所に出遇て必ず堪忍の二字を守るか、否か、それは頗る疑問です。此等の婦人は何れも不幸にして世に珍しい變人の手にかゝつたのであります。吾等も同じく女性たる身にしあれば、大いに此等の婦人に同情を表すべきで

ありませう。今此の不幸なる婦人等の心中にはいつて見たならば、乾度いふべからざる不平、悲しみが滿ち〳〵て居りませう。然るに此の人々は能く堪忍の二字を守つて、少しも之れを態度に現はさず、人をして如何にも樂しさうに思はしめんと務めて居りますから、終に今日まで未だ一度も騷動を起した事はありません。是を見て私はその心情の健氣さを思ひやらずには居られません。何うしても私には一滴の暗涙を落さずには居られません、諸君の中には既婚者もありませう、又その中には幸福な方ばかりもありますまいけれども、例の婦人等の樣なあはれな者は斷じて無い事と存じます。あゝ諸君よ、如何に慘憺な目に出遇ふ事あるも、それは浮世にながらへば免れぬ。此の例外な人の爲に、人知れず袂をしぼる婦人を見て、大いに堪忍の德を養ひ給へかし。實に堪忍は無事長久の基、何ぞ人と交際する上に於てのみならんや。



上野德川靈廟

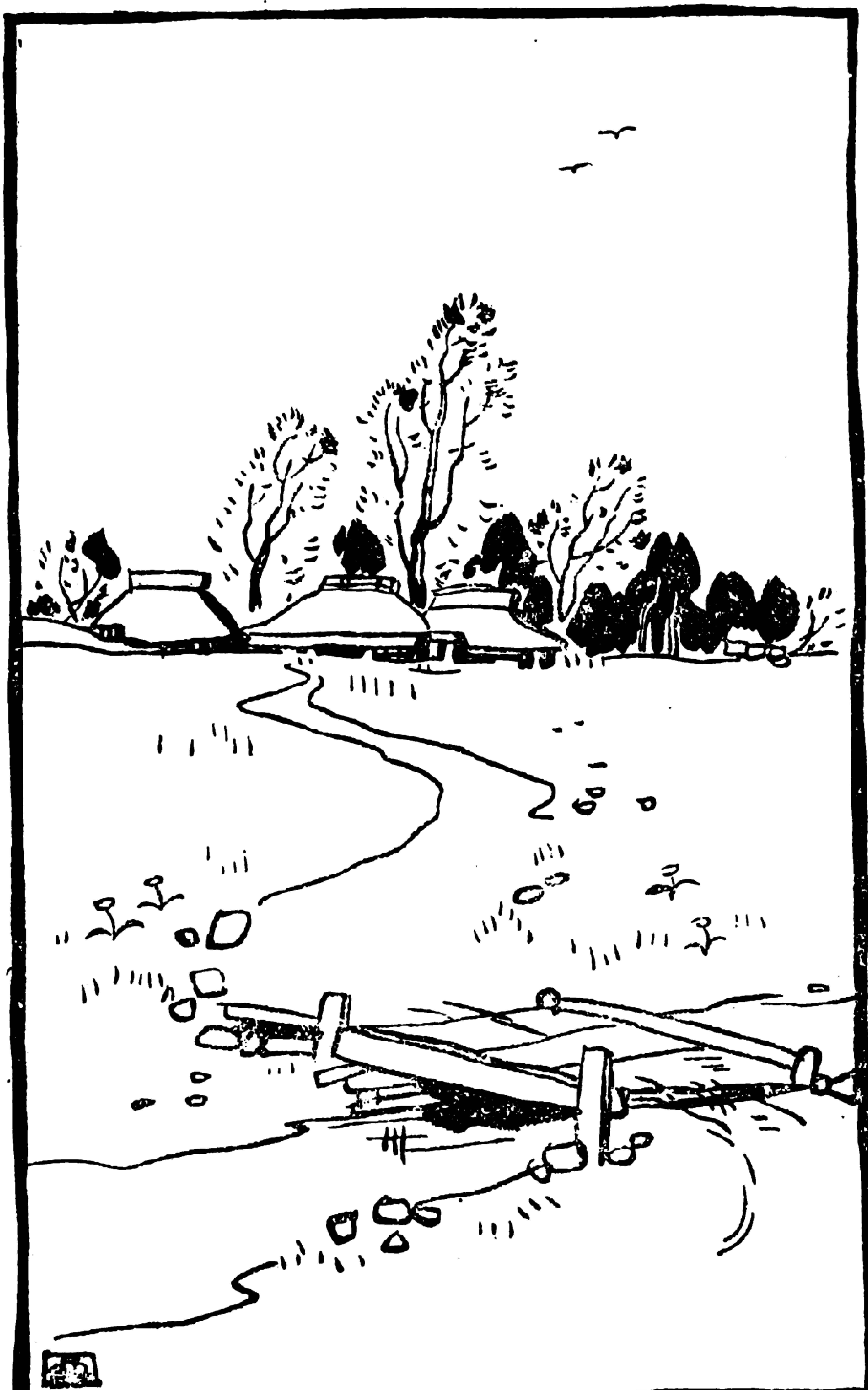
青葉だより

▲熊本に淸原千鶴子、又の名を千里眼婦人と云はるゝ不思議な女性のあることが、心理學者の福來博士に依つて世間に紹介された。同女は凡ての物體を透觀する能力を有し、狀袋の中にある名刺の文字を讀んだり、十間先の土中に埋れてゐる金物類の在所を指示したり、又、肺病患者の肺のヂストマ菌を透しても見る、現に角、尋常の婦人ではない。噂に聞くと同女は自ら學者の研究材料となる目的で、最愛の夫中尉と離婚し、單獨上京する由、心理學者は其着京を待ち構へて居る。

▲千里眼婦人と同じく熊本の出身で、目下麻布の飯倉に住んで居る木村駒子と云ふ婦人は、是れ亦た不思議な事をする女で、自分の體に木綿針を刺して平氣で居たり、また觀念的治療法に依つて壁を立たせたりしてゐる。之に就いて同女の語る所は簡單なもの「是は不思議でも何でもない、自分に出來るといふ觀念さへあれば、その觀念が感覺に打勝つから、針を刺しても痛くない、個人が熱湯を探るの、烈火を踏むのといふのも詰りこの理窟です、又此觀念作用に依て病者を治療することも出來るが、私のは催眠術とは異ふから、施術者を眠らせることはせぬ、私の理想は百里外の人に自分の觀念を傳へて、思ひ通りに動かす域に進むことです」と、世人が物質的の文明に飽いて來ると、精神的の色々珍らしい事が起つてくる。

▲橫濱の山手に私立小學校と幼稚園とを開いて居る米國人、カーロー夫人は、去る三十九年、廣島に行つた歸りがけ、汽車が衝突した爲めに打撲傷を受け、後ち其が因で神經痛を起したので、鐵道院を相手取つて、損害賠償の訴訟を起し、第一審では敗訴と成つたが、控訴して此程やうやく勝訴の判決を受けた。正義と信ずる所に向つて飽くまでも奮鬪する意氣組で、三年越も訴訟を續けて屈しなかつた其勇氣は感ずべきである。

▲五月の中旬、初夏の大氣を衝いて、京都から名古屋、名古屋から靜岡、靜岡から橫濱へと自動車を走らして、東海道筋を旅行したクラーク、フヰツシ夫人は、米國の紐育在の生れで、齡既に五十路の坂を越えてゐるが、其の自動車を操縦する術は青年男子も及ばぬ程で、仲々元氣なものである。同夫人が自働車旅行を企つる樣になつた動機は、是ら汽車の衝突から夫が命を亡つた事を忌々しくも口惜しくも思つた爲めで、決して汽車には乘らぬと言つて居る。



處女の空想時代

梅本軒子

五月一日、晴

養蠶を掃き立てゝ今日で三日、母樣のお仕事の都合で朝飯後すぐ桑摘みに出掛ける。姉さん冠りも近頃は大分甘くなつて、自分の口から申すのも可笑しいが、村での評判となつた。いつかもお隣りのお藤さんが、軒子樣の姉さん冠りはほんとに粋ですこと、女の私達でさへ惚れ／＼する位ですもの、塚本さんが……つて笑つてらしつた。嫌なお藤さんだわ。

お藤さんては、私よりたつた二ッ年上な癖に、赤兒を抱いてもうすつかり世帶やつれをしてる。女の盛りつてほんとに短いもの、私つく／＼嫌になつちまつた、一生お嫁なんかにゆかないで、面白可笑しく暮さうかしら、然し塚本さんとは、私どうしたつて……。

五月の朝は何となく氣が晴々とする、みづ／＼しい嫩葉の色鮮やかに農村の木立ちを彩り、清新な初夏の香が漲り漂ふ。

野路に立つて目に入るは小田、加波、足尾の連山、而も滴るばかりの新綠を粧うて目覺むる樣。其背後に紫の筑波山、蒼然たる英姿をくつきりと爽かな初夏の朝空に描いて、脚下の連山を統べてる。右手は日本第二の大湖たる霞ヶ浦の深碧、洋々として蒼漣騷がす巨人の眠り未だ覺めざる樣、遠く麻生潮來の森地平線上に浮き出で、近く白鷗の群、葭の茂みを離れて水上に飛び交ふ、雲間を漏るゝ美はしき太陽の光りは、凪ぎたる朝の湖上を照らして宛ら鏡の如し。

穗の出揃つた。青疊を敷き詰めた樣な麥畑に沿うて桑園に行く、しつとりと宿つた露を打ち振り／＼摘み取る。

今日は午後からお雪ちやんと土浦へ行く約束をしておいたので、大急ぎに摘んで歸つた、丁度十時に十五分前。

一ト通りお化粧を濟して、縞の平常着に矢絣銘仙の

羽織を引掛けて、お雪ちやんを誘つて出掛けた、田舍は他所へ出るにも世話がなくていゝ。すましやのお雪ちやんは、不相變めかし込んでゐらつしやる。でつぶりと肥つたお雪ちやんと、瘦ぎすの私と二人連れ立つたコントラストは一寸妙なので、道行く人が振り返る。お雪ちやんてば、見惚られたものと早合點して、

「いくら他人のスタイルがいゝからつて、立ちどまつて茫やり見送るなんて、餘り恰好のいゝ岡ぢやなくつてよ。」

と、流石に得意らしく笑つてる、まア嫌な――己惚もいゝ加減にして頂戴よ、オホヽヽヽ。

眞直に自習堂へ行つて女學世界を買つた、何か面白い小說でもと思つて見廻はしてると、

「ちよいと」

低聲でお雪ちやんが袖を引くから、默つて振り向くと、秀才文壇口繪新作家面影の、花精とか花林とか云つた人の寫眞を指して、

「いゝわねえ、一寸文士らしくつて、私氣に入つてよ」うつとりと見入つてるから、

「竹田さんに濟みませんよ」と言つたら、

「知らないわ」一寸優睨みをする。

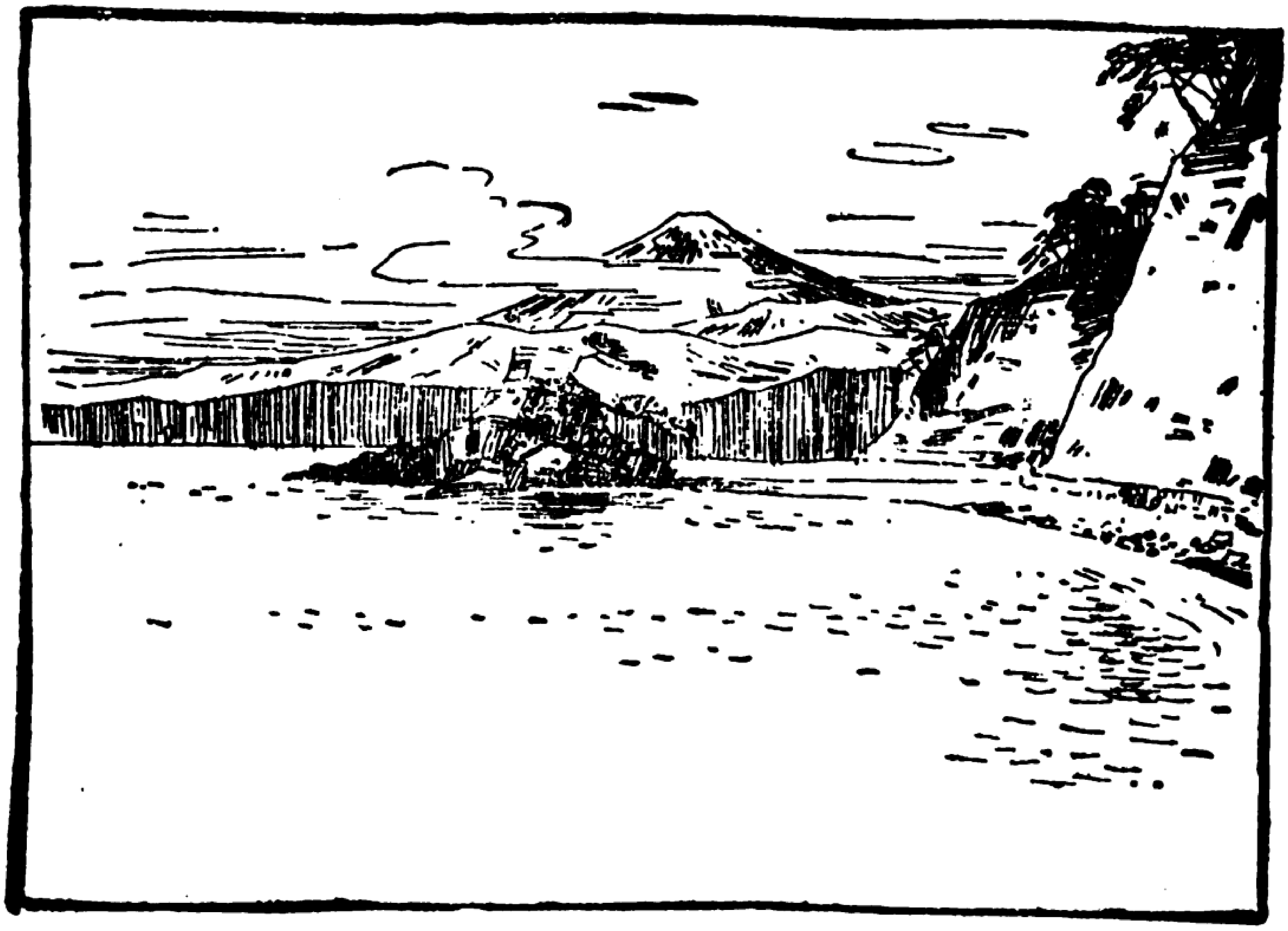
お雪ちやんを促して書店を出で、琴平神社の裏へ拔けて公園の方へ行く、裁判所の曲り角でひよいとハンチングを冠つた館岡さんに會つた。

「やあお揃ひだね、どちらへお越し? 林さん（お雪ちやん）は例によつて男性の注目を惹くね、豐艶掬すべしかね。」

「あら憎らしい事、何とでも仰しやいよ。」

とは言つたものゝ、賞められて滿更憎くもないと云つた風。お雪ちやんも得な方だわ。

お雪ちやんと私とをじろ〳〵見てゐらつしやるから、何かと思つたら、かう二人並んだ所は丸でソマトーゼの廣告見たいだねえだつて、人を馬鹿にしてるわ。然し館岡さんは、いつ會つても氣が晴れ〳〵として居て、ほんとにいゝ方だわ、しんねりむつつりしたいやに心の拗ねくれてる女の友達なんかより餘程いゝわ。



相州靜浦の富士

「急ぎますから今日は失敬します、其内また……。」腰を屈めるかと思つたら、最う口笛を吹き乍ら行つて了つた。ほんとに面白い方だこと。惜しい事に早稻田の文科を中途で廢されて了つた。

何處へも寄らずに歸る事にして、田宿の通りへ出る商家の小僧が忙しさうに自轉車を飛ばして使ひに走る白い風呂敷包を背負つて足袋跣足の在の娘が、目を痛めなけりやよいと思はれる程、キヨロ付かせ乍ら往來をノツ〳〵歩いてる、いくら田舍だとて、是れは又番外な醜態。

肩を並べて歩いてるお雪ちやんをソツと見た、まア濟してらつしやること、歩き方迄が違ふ樣だわ、お雪ちやんの濟しやは有名なもの、その濟し方に竹田さんは參つてらしやるのかしら、オホヽヽヽ。

土浦から我村へは雜と一里、變化に乏しい山村の野路を夕陽と一緒に我家に歸つた。

今夜は弟の袴を縫ふので、切角買つて來た雜誌も風呂敷に包んだまゝ。十時半床に入る。

二日、晴、

起き出づれば眞白くなる迄霜がおいてある、道理で曉方あたり冷や〳〵すると思つた。漸く伸び出した桑の葉が害を受けやしないかと、流石に氣にかゝる。母樣はもう大騷ぎ、吉(下男)を起して桑園を見にやる。

「いくらかやられたらう」つて父樣も仰しやる。

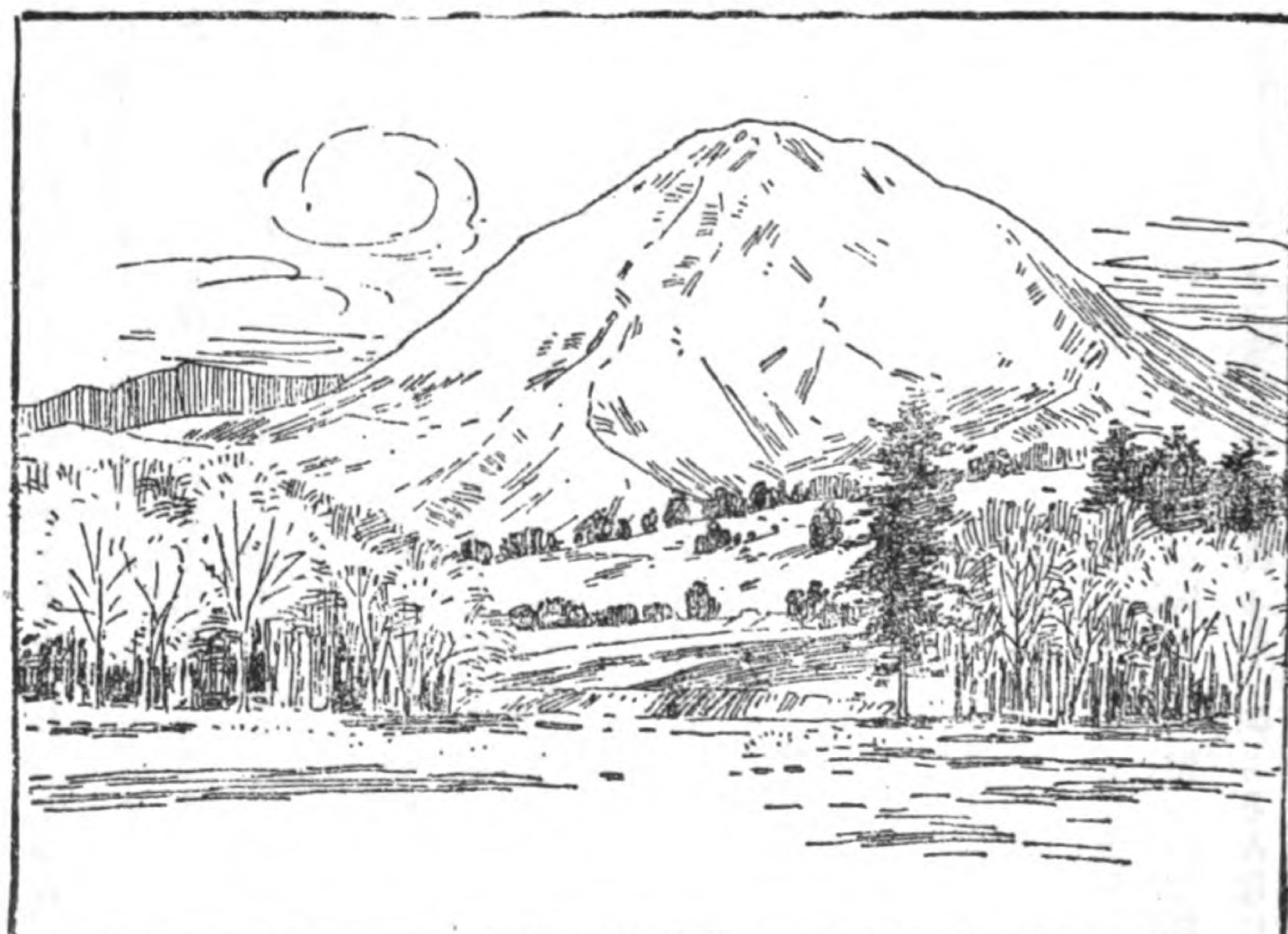
お米を磨ぐにも、雑巾をかけるにも水が冷たい、荒れ性の私も漸く胝が癒つたと思つたら、今朝の寒さで又辛い目に逢ふ。何だつて今時分霜なんか降たんだらう。

御飯の膳に向つた時、吉が歸つて來て、宅のはたんとの害を受けないと復命する。誰よりも母樣大喜び。

だが、他家のは隨分やられたのも多く、中には大半黑く萎縮して了つたのがある事など、吉が言ふ。

「さうだらうとも、肥料が少なけりやどうしても害を受け安いが、宅のは肥料は十分だし、それに土質がいいと來てるから、大抵の霜なんか受付けやしない。」と父樣大得意の體。

秩父の武甲山



「さうですともね」と母樣も合槌を打つ。

祖母さん御飯ですよつて聲をかけたら、恐ろしく寒いねつて、蒲團の中に小さくなつてゐらつしやる。もう五月にもなつて、大分暖くなつて來たのに、偶とこんなだもの、年寄りとしては無理もないわ、御飯後庭の掃除をする、此頃の暖氣で廣い庭の隅々へ雜草が生え出したので、一々拔き取る、面倒な事だ、手の荒れるのが氣になる。

十時、机に對つて女學世界を繙く、何より先に内藤樣のスヰートホームを見る、四月號にもスヰートホームと云ふのが出て居たが、今月のは内藤樣の御作、嘸かし素敵な事だらうと思ふと、頁を繰るのももどかしい。だが四月號のスヰートホーム、作者は金子百合子としてあつたけれど、私はどうしても千代子樣の御作としか思はなかつた、筆の運び工合がどう見ても内藤式なんですもの、果然！五月號には内藤千代子と名乘りを上げて、其續きをお書きになつた、今に始まつた事ぢやないが、どうして内藤樣はあんなにお上手なんでせう。私なんかすつかりチャームされちまつた、あの御文才が羨しくつて〳〵。

スヰートホームはほんとに甘く出來てること、全くあゝしたものかしら、私も早く塚本さんと…、早く味はつて見たいわ、オホヽヽ。

百合子夫人の御境遇がしみ〴〵と羨ましい樣。あの百合子夫人は本庄先生にホの字らしい、オホヽ。實際小學校あたりへ奉職てらつしやる若い先生方の中には、隨分御樣子のいゝ御方があるんですもの、巽先生なんかも其お一人、本庄先生なんか足元にも追付けやしない、私も巽先生には矢つ張りなんだもの、百合子夫人ばかりを笑はれないわ、オホヽヽ。

口惜しい事には、若い美しい夫人を持つたら、早速梨のつぶて、とんとお便りも下さらない、もう私の事なんか疾うに忘れちまつて、乾度家庭と云ふ甘い愛玩物に醉うてらつしやるんだわ、男つてほんとに薄情なもの、それにつけても若い夫人が譯もなく憎くつて堪らない、なんてまア我ながら呆れるわ、何もそんなに

落膽する事もない、私にはあの塚本さんがちやんと控へてゐらつしやるんだもの、巽先生なんかとは丸で譯が違ふ。今十一時が鳴つた。

母様がお呼びになるから茶の間へ行つたら、弟が障子の蔭から身を躍らしてワアッと怒鳴る、私まア吃驚した事、思はず體が後へ退つて動悸が高まる。弟は得意の笑聲を高く揚げる。ほんとに近頃は腕白になつて仕方がない、私の事なんか丸で馬鹿にしてチッとも言ふ事を聞かない、偶に何とか言ふもんなら「女なんか何が知るもんかい」

二言目には必ずかうだわ、男の子には呆れて了ふ。それに母様は殊の外可愛がる、それだからあんなにして了ふんだわ、少とはたしなめてやらなくちや。

母様と二人で蠶の床替へをして、細かく剉んだ桑を振りかける。十二時を過ぎて晝飼を濟す。

一寸又蠶室を覗いたら寒暖計が六十五度、少し溫度が足りぬ様だから、高めておいて母様に申し上げたら新聞に目を通してゐらしつたまゝ、お世話様つて輕くお頭を下げる、お禮なんか勿體ないわ。

郵便ッ。

ハッと胸躍らし飛び出して受け取つたら、その人でない、がつかり！

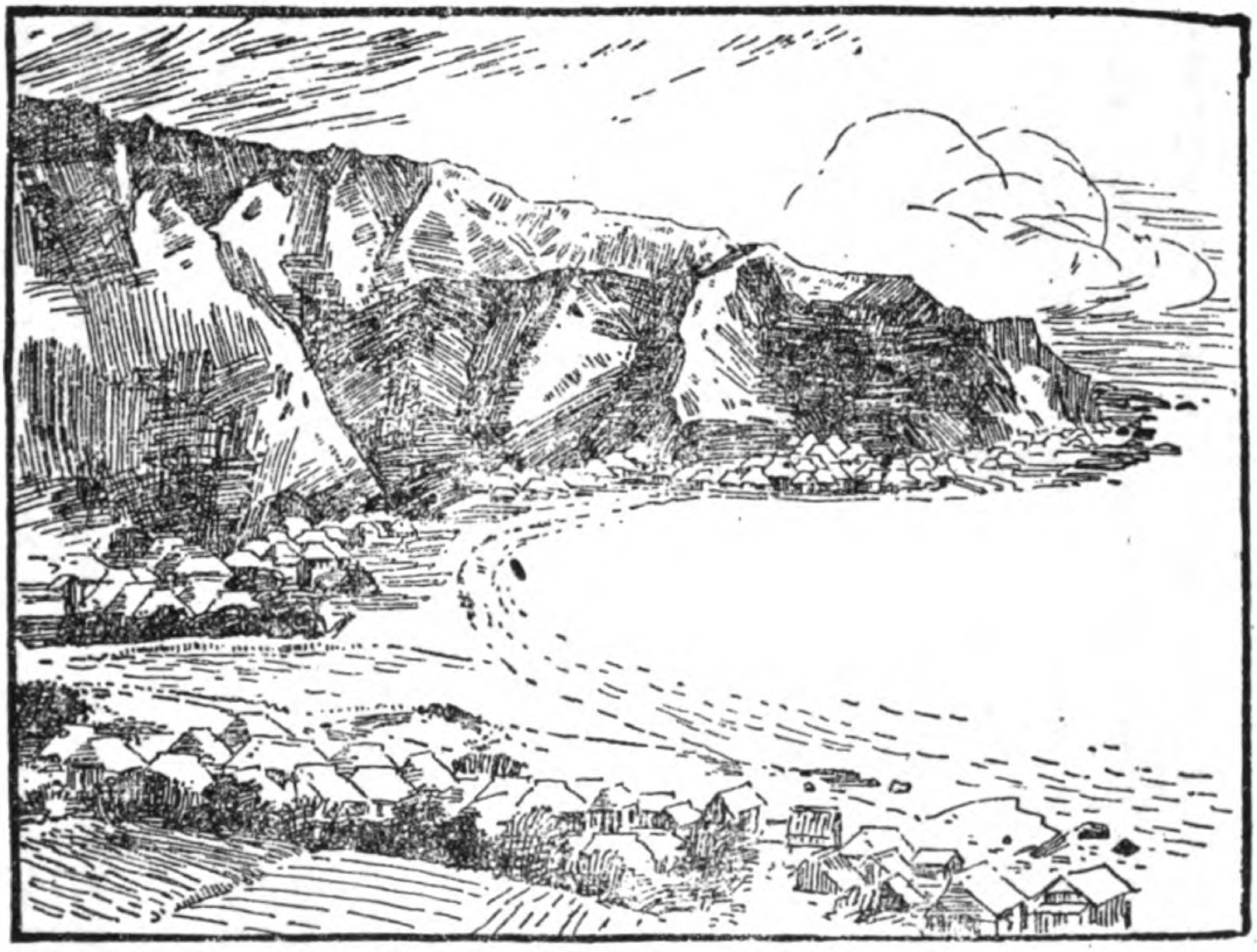
誰からだらうと思つたら、湖堂生、まア大久保さん珍らしい事、裏を返すと鉛筆で走り書き。

開け行く世の有難さ、昨日暗い田舍に燻ぶつて居た我輩も、汽車と云ふ文明の利器に運ばれて、今日は江戸表へ罷り越し、殷賑な大都會の光景に、度膽を抜かれてオッ魂消居り候。田舍漢の東京見物、珍無類の赤毛布談は歸鄕の上。早々。

不相變、呑氣さうな事ばかり仰しやつてる。

それにしても、大久保さんが都へ入らつしやるなら私無理にもお願ひして連れてつて頂きたかつたわ、會つてしみ〴〵お話しがしたかつたのに。然し母様はお許し下すつたらうか。

話しがしたけりや電話でも、お顔が見たけりや寫眞でも、こんな世の中だもの、會はなくともお互の心さ



金谷から見た鋸山

へ變らなけりや何も心配するには及ばないだけど、都の地は誘惑が多いとやら、固よりしつかとしたお心とは信じて居るものゝ、私の身に取つては案じないでは居られないわ‥‥。

夕方お隣りの老母さんが赤兒（お藤さんの）を抱いて入らしつた、ふつくりと肥つて可愛らしい事、額のあたりから口元の締つた工合、一寸塚本樣に‥‥。わたしも早くこんなのがほしいわ、オホヽヽ。

老母さん近頃念佛にお凝りになつて、それは〳〵大の信心家、若い私を捕へてくど〳〵と御利益を述べ立てられたには恐れ入つた。

今宵、東都の君へ手紙を書く、甘へたり、怨んだり愚痴を言つたり、亂暴な氣儘な書き方、あの君も嘸お困りだらう。だつて遠く離れて居ては、女の身として愚痴もこぼさなけりやならないわ、お許し下さいな――塚本樣――。早く夏期休暇がと夫れのみを待つてるの、え？　五月から夏の休みを待つてちや鬼に笑はれるつて？　だつて私には‥‥。

三日、晴。

今朝御飯の焚き方が少し硬過ぎたとて、母樣からお小言を頂いた、朝から小言なんか甘しくもない。平生かうして眞面目に働いてるんだもの、少し位のやりそこねに小言とは母樣も酷いわ。まだ若いんですもの、水仕の業なんかしたい事些ともないわ、お化粧三昧に花の盛りを暮したいのは當前だけど、嫁つてからまご、、つきのない樣にとかうして、辛抱してるんだわ。これも誰れ故、あの君故、お察下さい。あら笑つてらつしやる、嬉しい事。

今日も亦桑摘みに出掛ける、何だつて母樣はあんな養蠶氣狂ひなんだらう、私が嫌な口吻を言ふと、

「大丈夫、お前なんかに世話はかけないから。」

かうは仰しやるものゝ、いざと言へばすぐ私、軒や軒やつて使ふんだもの、温和しくしてりや際限がないわ。そりやあ働かなけりやならないけれど、一々母樣の買つて下さる品にばかり滿足して居られない、自分の思ふ存分强請つて買はなけりや癖になるわ、こんな



相模我入道河岸

に使はれるんだもの。
十一時に歸る、弟が
「姉さんお手紙だよ、男の所から手紙がくるなんて、姉さんな生意氣だなア」私もむきになつて
「御覧よ敏ちやん(弟)の鼻の下を、何だね其棒は、見つともないよ。」
流石に怒つた顔も出來ないので、笑ひながら言ふと
「構ふもんかい、姉さんだつて、子供の時は隨分垂らしてたつて、太田の叔母さんが言つてたよ、女の癖に僕なんかよりもつと見つともなかつたらう。」
默つて引込むかと思へば、すぐ逆襲とくる、小學の二年あたりと來ちや腕白盛り、兎ても始末におへないだから男の子はいやだと言ふの。
手紙を見れば正しくその人、昨夜出した私の手紙と行き違つて了つた。また御返事を書かなけりやならない、いゝわ、餘所へやるのと違つて、何通でも書くのに精が入つて、オホヽヽヽ●
今更ながら、こみ上げてくる嬉しさ懷しさが、熱し易い私の血潮を煽つて、血管が張り裂ける樣。一體手紙がくる程樂しい事はないが、取り分け懷かしい。開封は急ぎたいが、また何だか惜しい樣な氣がする、美はしき水茎の跡ちつと見入つてると、堪らなく戀しくなつて強く唇へ當てる、弟が怪訝な顔して見て居たので一寸面喰つた。
急ぎ書齋へ入つて靜かに封を披く。いつも乍ら濃かなお情けのこもつてるお手紙、身に沁みて有難い、こんなお心を察しもしないで、愚痴や怨みを申し上げる私は、ほんとに罰が當るわ。あらこんな事書いて：：
僕も二ヶ月ばかり前から髯を蓄いたよ、今日も床屋へ行つて姿見に寫つた漆黒のカイゼル（己惚れかも知れぬが）思はず會心の笑を漏したね、煩い事には腮ひげが矢鱈に生えて仕方がない、寧そ伸ばさうかと　思つたが、腮ひげとは些と色消しだからね、何れ暑中休暇には髯面をお目にかける事と、今より樂しみに。
たゞし、トゲ〳〵しい腮ひげを、美はしき玉の頰に觸るゝとはチト酷かも知れんね。まア：：　思はず顔

がほてつて、妙に鼓動が高くなる。

塚本さん、貴所も矢つ張り暑中休暇をお待ちですか嬉しいわ。互に西と東、體は遠く離れて居ても思ふ心は只一つ、私も夏の休暇が待ち遠しくつて堪らないのかくてこそ異體同心とやらの實を揚げ得るんですわね。お〻嫌、もうWになつた氣にして……。

午後五時、母様と二人で蠶に桑をやる、今日で五日もう二日もしたら初眠に就くだらうつて仰しやる。熱心な母様は私にいろ〳〵と飼育上の御注意をして下さるが、あの黒い小さい蠢てる蟲が私には氣味惡くつて。

夕飯後、祖母さんの肩を打つて上げる、大變お喜びになつて、お蔭で今夜は樂に眠れるつて、お禮言ひ〳〵お床に入られた。今宵、御返事を書こうかしら、昨夜出した許りであんまりうるさいわ、二三日お預りにしておこう。

何處かで尺八を稽古してると見えて、しつとりとした初夏の空氣に波を打たせて、ホロ〳〵と聞えてくる。うつとりと聞惚れて了ふ。しめやかな夜の靜謐がしみ〴〵と身に沁み渡る。それからそれへと空想を趁うてる中にも、あの君の面影が目にチラ付く、空想程つまらぬものはないと思ひ乍らも、其空想に耽つてるうちが、私達の花なんでせう。

あの印象の鮮やかな色白のお顔へ眞黒なお髯、嘸似合ふ事だらう、せめて夢なりとお髯のお顏に會いたい胸に手を當て夢に入る。



婦人の雄辯家

鳩山、嘉悦、下田三女史の月旦

脊骨に剛氣を出來した河岡潮風子、頃日熱海の客舍から同病相憐れむ我輩のところへ雄辯といふ雑誌を送つて來た、何だ雄辯！　こいつ三百代言を養成する目的ぢやなと披いて見ると成ほど集めたりな天下の名士論客の高論卓說、我輩衰へたりといへども、いまだ辯舌を以て天下を取らんなどいふ彌次馬的功名心に驅らるゝほどに耄碌はしないつもりで居るから、ろくに讀む氣もしなかつたが、終の方に須磨の浦人といふ人の書いた女流雄辯家といふのがあつて、下田、鳩山、嘉悦の三女先生を月旦した記事が一寸おつで耳新らしいやうに思はれたから引つこ拔いて御送りする。

（湘南の一病客K・S）

△まづ下田女史を月旦した中に

明治の世とは如何なる世ぞ。この世間にあつて頭角を露すものは、伯叔の徒にあらず、屈原の輩にあらず、辛辣なる手腕と、明快なる頭腦と兼ね備へたる者である。死後もし佛者の說く如き、地獄天堂あらば、明治式の人物がいづれの門に入るか知らぬ。たゞ、生前の富貴權勢は、獨り明治式人物の取るにまかせてある。下田歌子は明治式女流のチヤキ〳〵だ。むべなる哉、大の髯武者よりてたかりてあせるも、尙その名を社會より滅し能はざるや。



彼の女の辯はこの爲人を了解して觀察すれば、男子とても處世上に得る點少なからざるをおぼえる。

浦人が、泰西偉人に敬服する第一の理由は、その多趣味・多方面な才能である。堂々たる政治家にして文學者あり。數學者、天文學者、理學者を一身に兼ねたるあり。大哲學者同時に大文章家。軍人にして詩人たる。こんな實例はいくらでも發見されるではないか。文明は學者をして狹く深き專門家たらしめるとはいふものゝ、實務界に百貨小賣商店が旺に起さるゝ今日である。デパートメント、ストア的の人物はなほ不必要であらうか。六法全書以外に文學書をのぞいた事もない法學士や、時の宰相の名も知らぬ文學士は自慙すべきであらうか、まさかにさうぢやあるまい。

事務の才に加ふるに幾分の詩人的情緒、幾分の文章辯舌、畫策經營の智略を具へて居る人こそ、完全な紳士と申すべきである。これを婦人化すれば、理想の淑女となる。

下田歌子を理想の淑女とは許せぬが「手枕は花の吹雪にうづもれて、うたゝね寐し春の夜の月」と優婉なる和歌を唸り出す頭腦は、同時に、華族女學校學監として、細川校長以下數

十人を騒がせた、かの大事件を案出した頭脳である。源氏物語の講義をする朱唇は實踐女學校のために、富豪名士を説服して、應分の盡力をなさゞるを得ざらしめた朱唇であつた。伊藤博文に近づき、宮内省に羽振りをきかし、自分の配下には所謂「下田四天王」なる堂々たる五尺の男子、その命を待ち、數十百の崇拜者に圍まれて、下田女王國の光輝燦然たりし往時の偉觀は、男子にしていへば、その一を保つだに政治家、文章家、歌人、事業家、辯士、辯論家として、所謂「名士」の價あるではなかつたか。彼の女は稀れなる人傑だ。之を戰國時代に放てば如何。お家騒動の渦中に投ぜば如何。兎にも角にもこれだけ大きくなると、光秀の辭世でないが「順逆無二門」である。女放れがしてゐる。

個人の月旦が長くなつた。これからが、演壇の人としての彼の女だ。

辯は人格の鏡である。彼の女の辯はその性格をよくあらはしてゐる。多趣、婉曲、優雅にして、ピンと利かぬ氣の分子を混じ、滔々たる女先生の御演説とは選を異にしてゐる。彼の女を無名の女教師と較べるのは失當でもあるし、惨酷でもあるが、由來、女教師には一種のタイプがあつて、女教師と云へばスグに、銀ブチの眼鏡でもかけ、紫紺の袴をはいて、何じろ人案の少い顔付で、いやに皮肉ないふ、その癖美しい女生徒を可愛がるといつた風のオールドミッスの三十女を連想するのだ。此輩は活ける女のミイラでござる。それから見れば歌子は實に勿體ないほどの先生だ、學は和洋を兼ね、何しろ女らしいといふ點では申分がない。六十に手の屆くよいお婆さんでありながら白きものを薄からず施して楚々として壇に現はれる云々。



次は嘉悦女史にうつる

麹町區土手三番町に博士和田垣を校長とする女子商業學校がある女事務員として腕の人として働きのある主婦として幾多の評判よき出身者を出すを以て名高い、磊落洒脱を生命とし、賣りものとせる和田垣その人に、多務多端なる活動け出來兼るであらう、然り彼は到底その器ではない、彼れの陰に隠れた嘉悦孝子こそ眞の校長だ。

彼の女四十を出づる一二歳、棚橋絢子の門下で、女子教育界の比較的後進であるが、その活動振りは遙かに師の上を抜き、風變りの學校經營者として、やう〳〵世人に知られてきた。

浦人は彼の女を男にすれば、安部磯雄の類ならざるやと謳ふ。類似せる諸點をあぐれば。一、性質の淡白なる。二、齒ぎれよき要領を得たる辯。三、體格が似て居る。四、勿體ぶ

らず、よく學生とも將棋する。五、目的に徐ろに、而して堅實なる步一步を進む。六、政治的趣味を持つ……これだけあげれば、マヅ證明は立つであらう。

彼の女は林龜輸長と婚約ありしと傳へられたる女なり。その父君は九州國權黨員嘉悅氏房也。政治家的の太ツ腹なることはこゝに基くので、かくの如き婦人を内助者として有せば政客は多幸だと云はねばならぬ。

彼の女はつひに嫁がなかつた。一人の夫に屬さなかつたが、その代り廣く社會に屬した。家庭に注ぐべき愛を學校に注ぎ、幾百千の小嘉悅女史の養成に腐心してゐる。竹を割つた樣な人と俗に云ふ。その言葉は彼の女にあてる言葉である。

彼の女の演說は小生意氣な點がない。耳ざはりのよい朗らかな聲で、その若々しき容貌を壇上に現はす。論旨はあくまでも嘉悅式でその小時、父君が製絲場を設立した頃など、女工と一しよになつて働いた事もあつてともすれば「怒るな。働け」の校訓を眞向に振りかぶつて、勞働は萬事を征服するから、いつも元氣で笑を含んでやれ〳〵と敎へてゐる。即ち夫婦共稼ぎの奬勵者なのである。彼の女の辯は婦人としては、なよなよした處がない位らなほ捨てがたき味ひがあり。敢て女らしくないと非難は打てぬ。下田歌子の辯を反物にたとふれば、京織物で、彼の女は大島紬だと云つたら。隨分苦しい例ぢやと笑はれた事がある、笑はれても何でもかまはん。僕はただ直覺的にさう感じる。



彼の女の學校を參觀し、彼の女の書齋に語れば、その一言一行に人格が溢れてゐるのを發見するのである。彼の女の十年後の演說振りは確かに長足の進步するに相違ない。まだどことなく女書生の口吻のあるのがもう少し枯れればよくなるだらう。

次は鳩山夫人の月旦である

敎育家にあらず、外交官にあらず、何爵夫人にあらず、されど入つては一家の主婦としての責を充分につくし、其二子共に法科の大秀才出てゝは社交界の奔走家として、或は其夫を助け、或は諸種の事業に盡す、良妻賢母として鳩山春子の名は……然れども春子は活動夫人、良妻賢母、才學、而して出しやばり、お調子者、長所は同時に短所の存するところ。選擧騷ぎに東西に奔走して良人につくした功勞は、後年贔屓がすぎて味噌をつけた爲めにプラスマイナスになつた――樣に門外漢は觀察する。

かつて早稻田大學に學長科長が新たに設けられて、校長たりし鳩山博士の椅子は自然に消えてなくなつた、彼の女は不平を云ふまい事か！　早速某華族夫人を訪問した砌。

「いくら何だつて、大隈さんもあんまりですわ。三博士だつてウチの先生(和夫)がお世話申したのです。專門學校に盡力しても報酬らしい報酬は求めなかつたのです」

と口說き立て、該夫人嘆じて曰く、

「春子さんも矢張女ですねエ」

然り大いに然り。而して彼の女の演說もいまだ女放れがせぬ。

女としての辯舌の雄は普通、能辯か多辯である。彼の女のは前者七分に後者三分の混じたもので、洋行もして智見も廣いだけに、饒舌かアクドク聞えぬばかりだ。浦人は某の結婚披露式で、彼の女の相手かはれど主かはらぬ雲雀的能辯を實見して、これ寧ろ考へものであるまいかとおもつた。云々

以下鳩山夫人に就ては月旦子甚だ皮肉の言を弄して居るやうに考へられる、夫人の美點を發揮せしむる事が甚だ吝嗇で而して其缺點を剌すこと頗る努めたりやの感がある、人は見樣によつて樣々に見ゆるものだが、浦人は不幸にして鳩山夫人の偉い所を見るの機會に接しなかつたかも知れないとおもふ殘念々々。



磨の齒き方

▲普通の齒楊子は其面が平坦であるから、之では完全に齒を淸める事は出來ぬ。成るべく齒列の通り彎曲して齒楊子を用ふるがよい。平坦の齒楊子を每日使用してゐると、中程の齒に能く當る部分から磨滅して來るが、これは齒牙の中央の部分のみが磨滅するのである。故に齒を磨くには是非とも齒楊子か平等に齒牙に當る樣のものでなければならぬ。

▲毛の軟かいものは元より何の役にも立たぬ、去りとて餘り剛過ぎるものは齒の磨滅さるゝ事が多く、且つ齒齦を傷める恐れがあるも、大體から云へば軟かいよりも稍剛い齒楊子を使ふがよいのである。此の點から云へば彼の護謨齒楊子の如きは殆んど無効のものと云はねばならぬ。

▲齒齦が弱いと云ふて態々毛の軟かい齒楊子を使ふ人がある。併し却て毛の稍剛いものを使ふ方が宜しい。毛の剛い齒楊子は始め多少の痛みはあつても、齒齦に刺擊を與へる爲めに、血液の循環を促がし、遂に强壯なる齒齦とする事が出來る。

▲元來齒を磨く目的は齒間にたまつて居る種々の汚物を除く爲めであるから、內面も咀嚼面をも能く磨かなければならぬ然るに一般の人は只表面を横に磨く丈けである。之れは實に誤まつた話で齒を磨くには必ず齒の生へた通り上下に之を磨かなければならぬ。尙齒楊子の古くなつたものは毛の根元に種々の汚物が堆積し、從て黴菌の繁殖し易いものであるから、時々熱湯に浸して消毒する樣にしなければならぬ。



名物料理

東浪女

○長崎名物豚の角煮

長崎といふところは、久しい前から外國人の入込んだので、萬事が他の處とは違つてゐます。殊に支那人の數は夥多しいもので、館内などには其處で生れて其處で死ぬといつた風で、衣服こそ支那人ですが、全然日本人同様。支那の内地などは踏んだ事もない者が多いのです。從つて日常彼地で使つてゐます日本人同志の語にも、支那語から轉じたものが澤山で、他國から參つた方には、トント解り兼ねます。匕の事をトンシだの、たわしの事をソーラなどいふのです。殊に物賣の呼聲が面白い。

トーラコロアコヤギヤアおキヤヤまつせんか。（海鼠に阿古屋貝を買ひませんか）

カキワツチイ、カキワツチイ（柿やかき）

カブダライ、ダライ、デホー、デホー（蕪に大根）

ハンペン、フカノサツシユーミ（半平と鱶のさしみ）

タツキ、クツキ（漬物）

などゝいふのですから一度や二度聞いたからとて解るものではありません。

此樣な風ですから、食物も他とは變つて、支那料理から轉じて、數多の星霜を經るうちに、全く日本化して仕舞つたのです。その一つは今日の長崎名物の豚料理を生み出した譯かと思はれます。それ故今日の豚料理は充分日本化して、日本人の口に適ふ樣に出來上つたものですから、少しの厭味もなく、滋味しく味はれますのです。

豚料理の中で、先づ第一に指を折るのは、角煮といふもので、今その拵方をザツト申しますと、先づ五

人位のお客にしても、豚のロース肉を二斤ほど取りまして、それを切らずに其儘鍋の中に入れて、水を鍋一杯に注して、文火で好く煮るのです。一旦煮立ちましたら、湯煮汁を捨て、元の通りに冷水を注し、又湯煮ます。此の通りに都合三度湯煮まして、杉箸が貫る様になるのを度とするので、ロース肉でなく、股とか、肩とかの肉になりますと、本來が硬い肉ですから、三度以上も湯煮ませんと、舌に載せて溶けて仕舞ふ程に軟くはなりません、軟さを見る程合は、杉箸の樂に貫ると貫らぬを加減とすれば、失策はありません。此様に湯煮上つた肉は、非常に軟い上に、厭な膩氣は全然で失せて、豚の本質の香も消えて仕舞ひますから肉のお嫌な方でも、これが豚の肉かと怪しまれる位です。そこで湯煮た肉は、大さ一寸五分から二寸位厚さ五分位に切つて、一人に二片宛位の積で、五人分ならば、都合二十片とし、別に煮物鍋に酒鹽三合、白砂糖半斤、鹽は金杓子に半分位、鹽の代りに醬油を使へば龜甲萬の様な色のないのを一合位、それに水二合位混合せ、加減を試る、鹽加減は甘き方が好いのですが、兎に角甘辛い位で味がよろしければ、その中に肉を入れて、矢張文火で永く煮るのです。一度や二度煮立つた位では未だ本統の味が出ませんので、鍋の中のお汁が肉とピタ〳〵であつたものが、段々とお酒の氣が蒸發し、水氣が失せて、お鍋の底の方に飴の様になつて粘質が出て來るまで煮ますので、それまでには幾度も肉を上下に轉倒さなければいけません、それですから好く人様が角煮は飴で煮ると一口に申されますが、決して飴などで煮てはゐないのです。煮上りましたなら綺麗なお皿に二片宛取分けて、向付けと致します。此様して煮上げましたのは、肉の光澤も好く、全然琥珀の様で、見るからに滋味さうです。夫故角煮をするには、湯煮るだけでも三四時間もかゝるのですから、朝から片手間に湯煮てゐましても、晩のお料理でなくては間に合ひ兼ます。彼方でも上等の會席とか、鄭重な宴會とかでなくては、何處の料理屋へまゐりましても直ぐ様出來るものではありません。今日の御馳走には

向付が角煮でしたなどゝ、宅へ歸りましてから、家族の者と話合ひます位です。これは重にこの五月頃から使ひますものです此のやうに珍重致しますのですから、取分けますお皿も、錦手とか、青磁とか、立派な陶器を使ひますし獨活か何か外の野菜類などの添物も使ひませんで、只角煮ばかり二片だけつけておきますそれで彼方でも角煮は手が掛ります上に、お砂糖なども多分に要りますので、滅多には致さぬものです。



角煮の煮加減さへ充分飲込みますと、豚を扱ひますには、何を拵へますにも容易くて、鹽加減から煮加減まで自然に工夫が附きますのです。

そこでこの角煮を拵へました序に、尚ほ他の豚料理を一つ二つ演つて試ませう。しかし扱方はもう大體似たり寄つたりで、大した違はありませんですが、平常のお惣菜には、次に擧ます方が却つてよろしからうと思ひます。

○豚の炒焼

炒焼といふのは、角煮ほどに手も掛らず、價段も安上りで、お惣菜向には至極よろしいものです。これも一斤位の肉を切らないで、其儘湯煮てから味を附けるのです。湯煮るにも一度で澤山です、湯煮上つたなら二分位の厚さに大きく切り、お砂糖と鹽と酒鹽を混せ水を注して濃さを加減し、お加減がよろしければ、その中に肉の切身を入れて、好く味の通る樣に、矢張文火で煮るのです。煮上つたなら、お皿に移して仕舞ひ殘つたお汁で、萌なり、葱なり、時候相應の添物を撰みまして、一寸か一寸五分位の長さに切つたのを煮ます。それから別の平皿に五片位宛體好く列べ、前の方に添物を附けて、一人前とし、尚は別に小皿へ芥子の攪いたのを酢で溶いて附ける。一體豚の肉は芥子をつけて食りますと、味を増すもので、煮附けたり、炒附けたりしたのには、是非添えなくてはなりませんものです。只無暗に鍋焼とか何とかいひまして食べて仕舞つては不經濟の限りで、味も下品なり、人によりましては、差上げられません。此樣な風に炒焼とでもいたしますと、チョット誰方樣にでも、お惣菜とはいへ、出せますし、お格構も好し、味もヅット上品で滋味ふ御座います。

○豚の芥子虀

この芥子虀といふのは、お客來とか何かで、角煮又は炒焼などを拵へますと、是非共見綺麗に形を切りますので、屑が出ますから、その屑の取扱にチョット形を變へて使ひますのです。それに何から何まで豚を材料に使つては、餘り面白見もなく、飽きますから、その切屑は殘しておいて、翌日なり翌々日なりのお惣菜に使ふ方がよろしからうと思ひます。總て肉類は一度湯煮ておきますと、後は毎日忘れぬ樣に、火の序に火を通しておきさへ致せば、三四日位經ちましても、味の落るものでもなく、一週間位は決して腐敗するものではありません。殊に、お魚の當來物か何かありま

した節は、お魚の方は早く何とか致して、方をつけなければなりません。肉の方は保存も好し、翌日に廻せますから、そこで味をつけぬ内なれば、湯煮た儘でもよし、之を醬湯煮に致しておけば、尙更安心で、大丈夫です。何にもその日ばかり贅澤に山海の珍味といつた樣に並べ立てゝ食つて仕舞はんでも、保存して置けば、翌日もお滋味い御馳走が出來まして、一家の經濟の上には、一日なり二日なりの餘裕の出來て來る譯です、何ぞと申すと、何だか吝嗇な話の樣ですが、其方が日々味の違つたものが戴けますから、却つてお滋味く食られるのです。

そこで芥子虀を拵へますには、前に申しました切屑を、短册なり糸切なりに刻みまして炒燒同樣、酒鹽と白砂糖と、鹽又は醬油を水で加減して味をつけ煮上りましたなら、その汁で、萌と蒟蒻の賽の目切にしたのを煮附けまして豚の肉と一所に、他の器に移して、お汁を切つて仕舞ひます。そこで芥子を溶き、そのお汁で好いお加減に薄めまして、以前煮上げておいた豚の肉と萌、蒟蒻を入れて攪交せますれば、それで芥子あひになりますです、割合に結構に食べられます。一體豚の肉の相手にいたしますのは、野菜では豆萌に限るのですが、東京では餘り見當りません樣で、時折は八百屋などに見受ける事も御座いますけれど、其代りに葱を使へば濟む事です。葱を使ひますには、一旦湯煮て、直ぐ他の品と一所に和てよろしいのです。

その外には前號に出てをりました、豚のソボロ、それから、燒豚、つみいれ、味噌煮、オボロ、など日本風の豚の料理方がいろ〳〵ありますが、チヨツト風の變つて、お滋味く食べられるものだけにいたしておきませう。

鼠色

在倫敦　大谷繞石

春着を注文しやう、鼠色にしやう、とモオドは決めたのである。が、物事は夫のフランクに相談して、その意見を聞かうと思つて居た。兩人の意見が異ふ折でも、最後に勝を制するのは常に自分の判斷なのを思ふのはフランクに愉快であつた。そして細君がすぐと自分の意見に從ふその從順な女らしさがフランクにはいつも嬉しかつた。今度も細君が衣物の話をして、何色にしませうかと聞いたので、

「鼠色でなきや何んでもいゝ。鼠色はたまらん」

とフランクは言つた。心立のいゝ女だから、モオドは、自分は鼠色にしたい考でしたとはよう言へなかつた。夫が斯く思つてるのに、鼠色にしませうと言ひ張るのは、無論好ましからぬことである。が、話して見やうと思つた。

「何色がいゝんでせうか、あなた。あなたの御意見通りにしたいと思ひます。」

「淡桃色かな。淡桃色は好きだ。」

「本當にさうですね。淡桃色ほどいゝ色はありませんね。いゝと仰しやるなら、それにしますが。去年淡桃色のをつくらなきや、よござんしたね。折角つくるなら、新規な衣物だと判るやうにしたいもんですから。」

「うん、さうだつたな。さう〳〵。淡桃色は御廢止だ。空色はどうだい。空色の淡いのはいゝよ。」

「まあ、いゝ御見立ですこと。空色の淡いの程上品な色は凡そありませんね。それなら客間の壁を草色にしなきや善ござんしたね。配合がどうも善うござんせんから。でも空色でも構ひません。」

「うんさうだな。尤もだ。配合がな。ぢや、黑と白にしては。」

「おや。半分喪服で‥‥」

「ぢや、少し赤味がゝつた黑にしては。」

「でも私の晴衣がそれですからね。好みがいつも定つてると人が思ひますわ。でもあなたがいゝと仰つしや

ら……」

「いかん〳〵、無理にそれに爲いとは言はん。お前が着るのだからな。うんとそれぢや褐色は。」

「少し秋めいた色ぢやございませんか。」

「うん、私もさう思ふ。春めいた色は何かな、黄？」

「まあ、あなた。」

「ぢや、白かい。」

「さうですねい。白よりいゝ色はありませんねえ。」

「うん。ぢや決つた白にせう。」

「でも直ぐ汚れますよ。一度着たらすぐ洗濯屋へやれと仰いますよ。」

「そいつあ困るな。おやはつきりした色でないのにしたら、――乳色といつたやうな。」

「乳色は白とさう異りませんよ。エツスに此の秋乳色のを買つてやつたでせう。今ぢや悔んで居ますよ。」

「黒味の勝つたのにすればいゝぢや無いか。」

「鼠がゝつたのですね。」

「うん、さうだ〳〵。」

「あなたの御考はいつも善うございますわ。それなら乾度善うございますよ。それに定めませう。午後買に出ませう、あなたも御一所にね。」（コナン、ドイル）

跡見校友會

緑の雨檜にしたゝる五月の中旬上野公園に精養軒を會場として名にしあふ跡見の同窓會を開かれたり、會員はいづれやんごとなききわにまします令夫人、時めける方の令孃、花のごときおん顔、新月の眉、峙つ高島田、聳ゆる丸髷、扇厚板の帶、友禪のふり袖、バラの簪肉色リボン、千代田草履、いつも氣高く奥床しく拜見さるゝはこの校友會にぞある、五年、十年、二十年、中には三十餘年前に學びたまひし方にて今はお孫さまの生徒を持たせたまへるおん方もありける、師弟の情誼あつくこまやかにしていつも南風の薫ずるかごときはさすがに老刀自の德の高きの致すところと慕はしくおもひぬ會は午後一時に開かれ、園遊會は生憎の雨にて興少かりしも餘興に設けられたる喜劇は滑稽のかぎりをつくして平常生まじめなる奥樣方をしてあたらお腹をかゝへてくつがへらしめたる芝居の中にも賢こき教訓のこゝろ籠りていと〳〵めでたきものなりき。

福來博士に試驗された千里眼の奇婦人

一　記者

心理學上の國寶

千載一遇の奇女

昔から千里眼だの神通力だのといつて、普通人間以上の視力、遠くの事柄を居ながらにして透覺する不可思議の作用を現はす者があるといひ傳へたものだが、今の世には餘り類例のない話である、然るにこゝに彼の有名なる福來文學博士は、變體心理學研究の目的で去る四月中旬熊本に出張し、熊本市外本山村陸軍步兵中尉吉田司績氏妻千鶴子（二十五）の千里眼につき始て詳細の實驗を試みたのである。

從來歐洲でも幾多の千里眼の女が續出した、しかし、實驗の結果、何れも僞物が多かつた。是迄の例によると、人間の視覺とか、嗅覺とか、或部分の感覺機能が異常な發達を遂げて、十枚位のハンカチで眼を蔽ふて物を視、數十人の手拭の臭味を嗅分ける位の事は出來た。然るに今度千鶴子の千里眼は、金屬、木製、石材其の質の何たるを問はず容器の種類厚薄に關はらずその容器中に秘めたる品は、あり〱と千鶴子女の目に映ずるといふ不可思議なる現象である。是は決して眼の作用ではない、昔の行者が禪定三昧に入つた所謂心的作用の致す迄である。即ち●●心眼の力であるのだ。

偖この心的作用を研究する變體心理學は、佛蘭西や伊太利に大層流行してゐる學問である、現に伊太利の大魔女と稱揚さるゝユザピヤ孃は、世界で最も傑出したる千里眼者である。彼女は實に數百哩先の事件を透覺する不思議な作用を持つた女であるが、歐洲の科學者や哲學者は、何れもこれに驚嘆してゐるさうである次に露西亞のソフキスタルケル孃といふのは、單に自分の父の手を握つて『わが父は今何を考へてゐるか』といふ事を確實に言當てる不思議の作用を持つてゐるのであるが、これは千里眼ではなくて他心通又は讀心術である、但し他人の思想感情を讀み當るといふ事が

不可能であるから、まだ眞の他心通とは言はれない、今彼の兩孃の通力と、我が千鶴子女の靈妙不可思議の作用とは、共に現今世界の珍らしい奇現象として大に研究しなければならぬ事であるが、就中千鶴子女のは實驗に曖昧の點が無く、透覺の的中する點に於て、殆んど世界第一であらうとおもふ。福來博士は、千鶴子女を心理學上の國寶であると稱し、變體心理學の研究材料としては、千載一遇の女であると稱してゐる。

博士の試驗に依て確定した千里眼

千鶴子女は決してヒステリ病でも其他の何の患者でも無い、寧ろ健康體である、氣質は頗る温順で、又婦人に通有の多涙性を有し、そして催眠術に感じ易い方である、頃日麻布飯倉に現はれた觀自在敎の木村秀夫氏の妻駒子女は皮膚に木綿針を刺して痛くも無ければ出血もしないさうである。尤もこの出血針と木綿針は、針の造りが異つてゐて、木綿針の針體は圓錐で、出血針の針體は三角の別がある、故に木綿針で刺した皮膚が、痛く無く出血せざるも道理で、それはまだ觀自在と論ずるほどの事はあるまいが、猶これは專門學者の研究を經て紹介をする。

此點に於て千鶴子女のは、少しも山師的の行動が無く、寧ろ世間に隱れた女であつた、今春來熊本の中學校長の紹介で、始て福來博士の耳に入つたのである、

其處で博士は、去る二月十六日附を以つて名刺十九枚の通信實驗を試み、これは其名刺に錫箔を貼つて、金字或は其中の一二字を隱したる上、不透明のカードを前後に挾み十九個の狀袋に入れ、嚴重に封印をして、千鶴子の許に送つて透覺す可く試みたのである、然るに其結果千鶴子は、透覺の際、過つて三個の狀袋は、火鉢の中に取落し燒いて了つたが、殘り十六個の狀袋の中に二三透覺の相違したものもあつたが、大體に於て成功であつた。

其處で福來博士は熊本に出張して、光線屈折の機械、二重底の箱等を持參し、彼女が果して觀力の千里眼で

あるか、又は想像力の千里眼であるかを詳はしく實驗せんが爲め、試驗に着手したのである、嗚呼憐れむべし、千鶴子は、專門の學者が、電機仕掛の機械か何かで、いろ〳〵試驗をさるゝことだらうと、心の不安に障げられてゐたさうである、其爲め二重底の箱の實驗に對し千鶴子は再三透覺を試みたけれども、不幸にして透覺の氣分が現はれなかつた、そこで博士はいろいろと千鶴子に、慰藉の言葉を與へて置き、更に考案の結果ビスケットの鑵中に、前の二重底の箱を秘めて、千鶴子に與へたのである、すると千鶴子は十三分四十二秒といふ長い時間目を瞑つてじつと考へた末、「まア私をお欺しなすつたのねえ、鑵の中には例の失敗つた箱が入つてゐます」と、少々立腹の體となつたのである。それから引次ぎ千鶴子は、だん〳〵博士と會話が馴るるに從つて明瞭な解答を與へるやうになり。結局彼の女は、眞正なる千里眼であるといふ事が確定された。

千鶴子の態度

かくて博士は去る三月十一日より十四日まで、千鶴子の許で、一日兩三回宛、實驗を試みられた。要するに人間の根本識の中に含まるゝ能力が現はるゝ際五官以外の一官が續々發達してくるもので、今千鶴子の根本識より現はるゝ千里眼などは、實際は、X光線以上の通力である、今の處千鶴子は、透覺する物件を手に觸れて、徐ろに考ふる習慣であるが、他日だん〳〵と手を觸れない實驗を練習し、數百哩先の事件を豫知する、所謂根本識中の能力を發展せしむる途も容易であると、博士は說いてゐる。

偖千鶴子女は、去る四十年吉田中尉と結婚し夫婦仲も頗る良かつたが、其中中尉は滿州の守備隊に赴任して留守中、姉婿淸原猛雄(三十八)方に同居してゐたのである。猛雄氏は去る三十六年來熱心に催眠術を研究する處から、一度千鶴子を睡遊狀態に導き、暗示の成績が極めて善良であつた。即ち日露戰爭の際には軍艦の所在地を知り、又他人の胎兒の男女を透覺して知り紛失物を言當つる等、非凡な判斷であるため、大に附

近の評判となつた、現に千鶴子は、猛雄氏に就き、不思議な實驗の練習を積んでゐる傍ら、毎日幾多の病人が押掛て來て、千鶴子に病氣の固着點を透覺して貰ひ猛雄氏は催眠術で、其病氣を治療すると云ふ順序で、強ひて千鶴子の職業と云へば病人透覺を職業としてゐる、記者は千鶴子を過日熊本に訪問し、親しく見聞する處、千鶴子は「たゞ義兄猛雄氏の導きで御座います」と謙遜してゐた。

千鶴子女の家は田舍としては可なり瀟洒した家であつた、千鶴子は其家の奥の六疊（北向）にゐて（口繪參照）座蒲團に座して透覺に從事するのを常としてゐる、他の部屋に入つてするよりは此六疊が透覺するに都合よく出來てるのださうな、（物體を透覺するには十數分間深呼吸をなし無念無想に入るものとす。）

夫の中尉は今度學問の研究材料としてそれ程千鶴子が有益なものであるならば、敢て、家庭に囚はるゝ必要はない、軍人が戰場へ出るも同じ事で國家の利益になるのだから、若し良人があつて、家庭に囚はるゝやうでは、千里眼も十分に發揮する事が出來ないであらう、むしろ離婚して十分研究の犠牲になれよと相談が決まつたものゝ夫婦の情は又格別で悲しく〳〵泣き別れたとの事である、此事に就て義兄猛雄氏は大いに中尉の高潔を德としてゐる。また千鶴子は研究の爲めに尼になつても厭はぬと言つてゐる。この健氣なる清原一家の態度に對し福來博士は、いたく尊敬を拂ふ可しとあつて、千鶴子の上京を待つて、更に前人未發の不思議な研究をしやうと樂んでゐるとか。

附。試驗の模樣は諸新聞の報導に詳しければ略す。

△新案都針箱

今度日本橋區住吉町二三長島商店から賣出した都針箱といふのは三寸に六寸位な小形な箱で裁縫道具一式を入れる樣に出來たものゆゑ學校通ひの生徒が携帶するには便利重寶の針箱です。一個の價三十五錢　送料八錢

文明人の產と野蠻人の產

櫻井里子

外交官の家内には、東京者でなくてはいけないと、一人息子の云ふ儘に、非職軍人のお孃さんお茶の水を首席で、卒業なすつた方を迎へて赴任する、ほどなく妊娠の報知があつて、何分にも人情風俗を異にするのみならず、人手少なき旅の空にて、萬事に心を煩はす事故、氣の毒ながら歸國してお產をさせたいとの手紙でした。

家は兩親に、私と妹、田舍の閑靜な廣い家だけれど姑の傍では氣づまりだとてわざ〳〵町へ、借家をして看護婦と女中とを使つての準備をさ〳〵怠りなかつた素より衣食住に就ては產婦の注文通りで、二日に一度づゝ、すつかり肌付から皆取り代へる、其洗濯に女中は殆んど追はれて居る。

朝は九時頃に御目覺め、お湯を使つて御化粧してやうやく、朝の御飯、毎日旦那様から來る御手紙を待ち焦れて、それが來ると泣たり、笑つたり、まるで子供の様だし、午後は毎日御風呂、其後は小説本を見て、御消光になる。

兄からは、心細いだらうから、よろしく賴む、との手紙が來る、兩親だつて初孫ですもの、早く安產すればと、日一日と引出す様に、待ち望んで居られる。

月に入つてからは、町の方へ詰め切りにして小間使ひ代りにでもと、私も行つて居りましたが、私のひがみかも知れぬが、母様の一言一動を蔑視した様なお顏付產後には特に食養生が專一だ、と云ふので御自分に三週間ばかりの献立をお作りになつた、オムレツやフライ位なら母様も少しは、御存じだけれども、高尚な佛國の料理などは、珍紛漢紛、少しも分からぬ、鯛の鹽燒きと書て下さればよいのに、ベークドフイッシュとか何とか書てある有様で嫂様も御不自由だらうが、こちらもずゐ分困つた、御產褥の品々も、榊博士の考案だといふので東京からわざ〳〵取り寄せる、田舍に

は毎年手拭を新調するので、未だ新しいのがあるのに一から十迄新らしづくめ、純白づくめ。

一時雇つた、近所の老婆は、「まるでお姫様の御産でござりますまあ御結構な事で」と驚いて居た。

萬事此有様では兄が苦勢をするであらう、と母様は今更後悔して御出の様子。

御産氣が付くと産婆二人に、病院の産科の醫師迄呼びつけて、用心をさく\／怠り無しであつたけれども、一寸痛んでは、眠氣が付くといつた有様で、十二時間も要してやつと産れました、其さわぎはなかく\／大したもので、嫂さんは、平常の澄し方にも似ず、聲を上て泣かれたのには殆んど持て餘した様子。



△お産の時に泣く嫁は勘當さる

しつかりなさい青竹を握ぎり割る程でなくてはと力ある低い聲で、母様は勢を付けて居らしつたが、其後いつでも私にお話しになるのに、六人の子を産んだけれども、一度も泣聲立てた事は無い

尤も母樣が十七歳の春、父樣が二十歳で、此家に嫁に來る時に、祖母樣がお產の時に泣く樣な事があつたら勘當するといはれたとか、とにかく、凡ての感情を外に現さぬ極端な克己主義の教へではあるけれども、此内にも日本魂が、吹き込まれてある樣に思はれる、しかるに嫂さんは澤山な自分の乳を飲ましもせずに、一ヶ月も床に就て居て、赤ん坊は人委せで、英語の會話の本などを讀んで居られた、がやう〳〵二ヶ月目に賜暇休暇で歸つた兄と共に、任地に赴られたが、赤ちやんが產れたと云ふので、小婢を一人雇つて、御出になつた。

これにつけても思ひ出すのは或る裏屋のお神さん御亭主はたしか非番の宵から家に居つた。今年二十三の女盛り、太り肉の無邪氣な人、大分お腹がせり出して、此月始めでせうと、毎日の樣に樂しんで、古い浴衣をこはして、襁褓を拵へたりして居ましたが、いよいよ御母さんに成るのかしら、村一番の器量よし、兵隊に行く前からの許嫁で、除隊で歸村して間もなく、東京に出て、今では某署の巡査拜命、まだ盜坊は捕へぬが、好人物で評判もよく、お神さんは鼻緒の内職に毎日のお菜代位ゐは取れるので、至つて圓滿な家庭を作して居る。

何氣なく起て見ると、お神さんは腰湯を使つて居る一包の脱脂綿の包や、ぼろ切れなどが、出してある、形勢なか〳〵有望らしいので、お催しになりますか、と問ふた。

今し方、下り物がしました、と平氣なもの、無口の亭主はたゞにこ〳〵もの。

女子が產褥に臨むは、武士が出陣と同一で。功名手柄現はすか否か、良き子を產むかうまぬか、噫!!! これ生死の境ひ、實に勇ましいと同時に一種沈痛な 苦しみを經驗するのである。

亭主は女子には徵兵が無い代りに、此役割が神樣から命せられたのでせうと、笑つて居る、其間に帶を占めて襷だけかひ〳〵しくしたから、まあそれよりも早く產婆のところへと言つたので、ぢや御願ひ申ます

と和服に靴をはいて出て行つた。
御神さんの話しには、東京でお產の時に入用の一揃のを買へば、三圓も入りますからとぼろ切れの上に脫脂綿を敷て其上に据ゑられる樣にする、あなた誠に濟ませんが、其行李を出して下さいと云ふ、横腹に手をやつて、顏をしかめて居る。
行李を前にしてゐるうち、少々痛んで來た樣子、ウーウーと、產婦の陣痛が激しくなる、あひにくかまどが煙くなる。



私は恐怖と不安の念に充たされながら、一生懸命に產婦の腹を撫でゝ居る、どうやら湯も沸つて來た樣子產婦の苦しみは、絕頂に達して、自分は跳ね返されさうになつた、と思ふと一聲、扨どうしてよいか分からぬ、兎に角、脫脂綿で、赤ちゃんの手と口と眼だけ拭た、產婦は腹帯をしめて下さいと訴へる、そこへ勢よく歸つたのは、御亭主と產婆、御よろこび斜めならず。
先安心と、臺所に立つて、盥に湯を汲み入れる。

まあ間に合はぬ位の御安產で、もう後產も濟みました、大丈夫ですよと產婆を援けて床に就かせて、扨赤ん坊をお湯に入れてまあこんなお輕いのは、私共でもめつたに存じませんと、話して居る。

產後の振り出し藥を二三服置いて歸つて行く　もうちやんと取形付てある。

五日も立つとお神さんもう起て居る、別に食養生もせず、でも糠味噌漬だけは、田舍の母がよせと申ましたからと、堅く守つて、味噌漬の大根を食べて居る餘りだと思つたので、御飯炊た序に、玉子のおかゆを拵へて與へると、大變によろこんで、乳がよく出ますと、幾度も禮をいふ。

七夜の日に、赤ちやんの頭をのぼせるから剃つたらよいと云ふ、產婆はどちらでもよろしいと言ふ私は其儘の方がよいとすゝめたので、其儘になつた、何だか官員さんの樣ですはね、と神さんは言ふ。

此家に嫁入せぬ前に、見習ひの爲、或軍人の宅へお飯炊きに、行つたが、御產れになつた若樣も、初毛を剃らなかつたと話して居た。

諺に、案じるよりも產むが安い、と云ふけれども、全く異例の安產であつた、尤も醫學衛生上から、割出した統計上から見れば、無論死亡率などに差あるであらうが、全く平氣、無神經で、身體を常によく働かした御蔭であらう。

青葉嫩葉

▲この春、目白の女子大學を卒業した中に、堀内増子と云ふ老女學生三十六歳のがある、同女は伊豫松山の稻川雄事といふ人の娘で、十九歳の時、同市の酒造家堀内熊太郎に嫁したが、夫の失敗から家產の沒落を招き、夫婦共々國を出で、さすらひの身と成つたので、何うか夫を助けて家門を再興したいと思つたが、哀しいことには學問が足りぬので、廣島の高等女學校に入つた、三十五年卒業後、夫婦揃つて上京し、夫は有隣生命保險會社に、増子は女子大學に入り、爾來八年間、苦學の功を積んで家政、國文の兩科を卒業したので、國許に預けてあつた子供を引取り、親子四人水入らずの樂しい家庭を作つた、増子は今後夫を助けて活動し、家名再興の覺悟と言つてゐる。

▲先頃、上野精養軒で開かれた跡見女學校校友會は、生憎の雨天にも

揃らす、集る者五百餘名、なか〳〵の盛會であつたが、花蹊女史の挨拶が終ると、直ぐに餘興になり、杵屋六左衛門連中の「石橋」に一同耳を澄した最中、雨の雫が天幕を洩つてポタ〳〵落ちて來たには皆閉口模擬店の店番は會員の受持とて、藤色模紋服の九條公爵夫人や堀田伯爵夫人などがおデンやさんといふ譯で、寶石に輝く玉の腕を差延べて、竹串押取り、客に侑めらるゝ御樣子は實に振つたものでした。ソレニ餘興係りの三宅の奥さん、島田の奥さんが極惡るさうに、まご〳〵なさる可笑しさ、但し喜劇の「お留守番」と「化の皮」は大當りでしたと、當日參會された婦人のお話。

▲去る頃、琴曲界の老手窪田榮喜翁門下の夫人令孃達が、翁の功勞に酬いる爲め打寄つて謝恩會を催した節、かくと知つた跡見花蹊女史が祝意を表して寄せた歌は

　松風の千歳をかけて妻琴の
　　高き調は世にひゞくらん

といふのでした。有繋は老大家の詠、すら〳〵と優しく、めでたい歌である。

▲深川に鈴木お光とて、今年八十二になる釣好のお婆さんがある「釣りの御隱居」といへば界隈で誰知らぬ者なき程の釣魚道樂、毎日竿と竹籃を提げて釣堀通ひをしてゐるが、其の動機を聞くと、同女は十八年前夫に先立たれて悲痛の極腦神經痛にかゝり、いろ〳〵治療を受けても更に利目がなかつた所、或人から腦には釣魚が一番だと勸めれたので、其氣になり、六十六歳の年から釣魚を始めたのださうな。そのお蔭で腦はよくなる釣魚は面白くなる、到頭、六本の竿を使ひ分けて、一日平均二十本の鯉が取れるまでに熟達した、息子が危いから止せといへば、是ばつかりは死ぬまで止められぬと首を振る、兎に角變つた婦人である。

▲維新の際王事に奔走した土佐の志士故武市半平太の未亡人富子刀自は本年八十一歳の高齢を迎へ、養子の半太氏、嫁の千代子と共に本郷片町に住み、和氣靄々たる家庭の御隱居樣として若夫婦から册かれてゐるが、なほ矍鑠として衣類の裁縫にも人手を借らぬ程達者な所から、昔し半平太氏の指導を受けた土方、田中の兩伯其他の人々發起となり、刀自の長壽を祝す賀筵を常盤華壇に開いた。畏くも皇后陛下には此事を聞し召されて、紅縮緬一疋と酒肴料金百圓の御下賜があつた、刀自は老後の光榮之に過ぎずと、雖有涙に咽んで喜んだとか、めでたし、めでたし。



衛生顧問

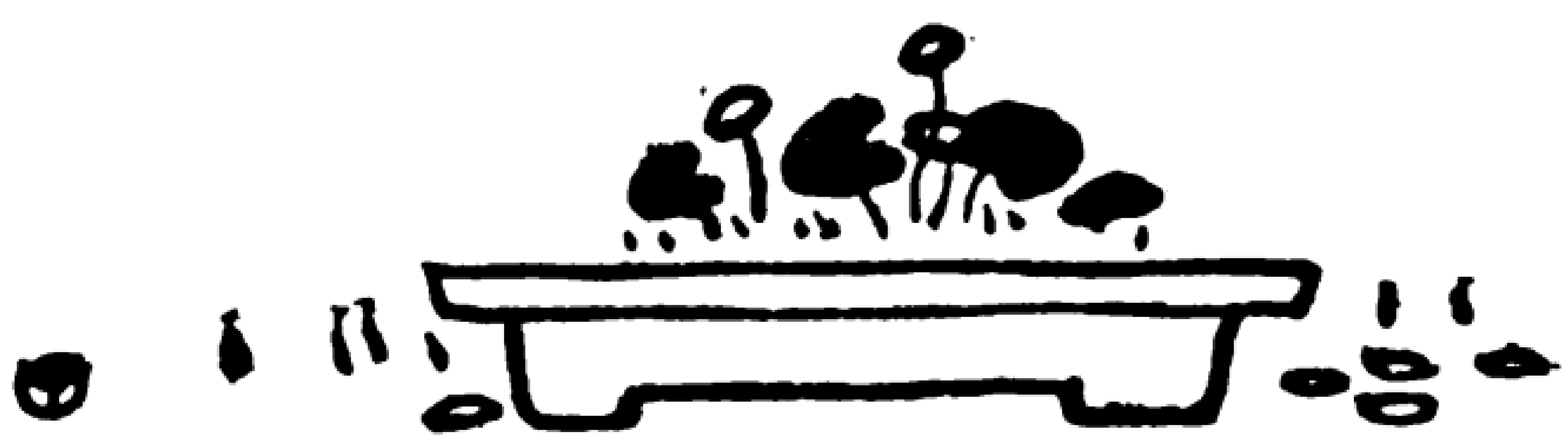
糸左近

白髪の二度と再び生えぬ法 ■ 髮毛の根本に白き毛生じ抜き取つても又生えますが、之を再び生さぬ自宅療法が有りませうか(信濃心配女)

■ 根より抜れば再び生えぬもので、若し生えるとすれば根が残つてゐるのでせう、兎に角一度白くなつて抜け又再び其の根より生えても矢張白きを免れぬ、故に現今の醫學上では之を黒くする療法は殆んど有りませぬ。されど俗説に生薑の搾汁を抜いた跡へ塗けておけば再び生える毛は黒くなるとの事、小生には經驗無けれど害にならぬ事なれば試して見玉へ。

お尻を小さくする方法 ■ 私の娘は、お尻が大きくて甚だ不恰好ですが、之を小さくする方法を教へ下され(北越の心配女)

■ お尻の大きいのは女子の特性だ、之は生理上斯く無くてはならぬからである。然れど特別目立つて大きいのは先天的にも依るけれど、一つは運動不足からも来る。されば大いに秩序ある運動を勵行して姿勢を美しくせねばなりませぬ。換言すれば運動すると姿勢が美くなり、従つて各部の筋肉が平等に發達し



お尻のみ大きく目立たぬやうになります。

無子は男女何れの爲か ■ 私は結婚してから六年になりますが、未だ子を生みませぬのみならず半産すらも有りませぬ。それで夫や姑は御前は子の無い性であると言はるる度毎に身を切られる様な思が致します、過日も大學病院婦人科で診察を受けましたれば、何の異常も無いとの事、元來子の無いのは女ばかりの爲でせうか。(深川の淋しい女)

■ 醫學上の統計に依ると、子の無い故障は男に三十％女に七十％である。されば夫より子の無い性だと言はれたら「貴方も三割の責任が有ります」と御答へ遊ばせ、否男子も診察を乞ふの必要がある。

姙娠と灸 ■ 結婚後五年になるも姙娠致しませぬ、所が或人の說に灸を据ゑると可いと申しますが、灸は子宮や卵巣などに害が有りますまいか。(大阪の藤井ふた子)

■ 舊式の醫師の中には灸は神經を鼓舞し、爲に脚氣などには甚だ効能が有ると說く人もあれど、健康なる皮膚を態々傷めるにも及ばぬと思ふ、況んや姙孕力と何の關係も無きに於てをやである、されば左程の害は無いにしても益ならぬことに熱い思をせんでも可いでせう。

乳房を小さくする法無きか ■ 十九歳の頃より乳房が大變大きくて恥かしくい、人工的に小さくする方法を

教へ下され度。（大阪の廿一才女）（伏やの女）

■ 乳房が益々として大きく、而も結塊の感あるは健康なる徴で、而も將來子を有つた曉に於て乳汁の分泌多く、生兒も健强になること受合なれば、目出度しとして喜ばるゝが當然、然るに之を小さくしたいなどとは以ての外の不心得である。外觀をのみ飾らんとする嬢ちやん達の中には乳房を胸廓と共に壓迫繃帶して小さくせんと勉めつゝ有る人も有れど、天理に背きたる事なれば、後に必ず天罰あるや疑無し、あな恐ろしや。

鼻が隆くならうか ■ 隆鼻術は如何なる手術を施すものにや、又果して有効にや。（筑州二十女）

■ 巴拉賓といふ物を注射するので、我國では守田學士千葉學士などは斯道に巧者であつて、一度術を受くれば彼の醜い所謂獅子鼻なども隆く立派になる。然れど不熟練な人が行ると或は化膿を來したり、或は壞疽つたりして「嗚呼施術を受ければ可かつたものをフヤ〳〵〳〵」となる。

聲の立つ方法 ■ 短日月で聲の立つやうになる藥、或は方法無きか。（東京の不幸女）■ 常に鼻つまり聲嗄しくれ之を治す方法ありや。（大阪のなちば）■ 昆布湯は聲を美くするものとは果して眞か。（小石川の北洋女）

■ 聲は肺臓から出る空氣が喉頭の聲帶に觸れ、それが鼻や齒齶などの關係で色々變化をなすのであるから、聲を美くしやうと思はゞ第一に肺臓や喉頭を强くし、且つ鼻腔や齒牙なども健全にせればならぬ。故に夫等の場所に故障が有つたら醫療を受く可きは申すまでも無い。又健全な人でも一日に數回は新鮮なる空氣中で深呼吸法を行うて肺を强くすることが肝要である。昆布の中には沃度を含んで居る、沃度は痰を去る効能が有るから、昆布湯は間接に聲を美くする一方法である。



亞砒酸の用法用量 ■ 亞砒酸の服用量を、然し亞砒酸は毒藥、然しながら量を正しく致せば、さしたる事はあるまじく、白粉を見ればいづれ鉛毒もあらんいづれ、何卒五月號にて御教へ下され度。（岡山の田舍鼎助）

■ 文章の意味が解せられませぬ。されど察するに亞砒酸の用法用量を教へよとの事であらうと思ふ。抑々亞砒酸は非常な毒藥なれども、變質强壯劑として醫師は一回の量〇、〇〇一即ち目に見えぬ程の量を他藥と混ぜて用ふるのだが、一度之を用ふれば毎日の如くに其の人を診察して中毒無きかを確め、若し少しでも中毒の徴が有れば直ちに服用を止めるのである。然るに世には色を白くしようといふ目的から斯る毒藥を大膽にも濫服してゐる人がある。無鐵砲とは之をや云ふならん。

顏の赤きを白くする法 ■ 顏と鼻が赤くて困りますが、白くする方法を。（宮城の名無草）■ 私は夏でも冬でも常に顏が眞赤ですが、白くなりますまいか。（京都の眼赤

女）■ 身體肥えて健康ですが、常に顔面紅を呈し、多人數の前などでは熱くなつて赤くなります、斯うならぬ方法を敎へ下され。（長野の野之女）■ 鼻の周圍赤くなり、脂肪の分泌甚だ多くて困ります其の療法を。（九州の女）

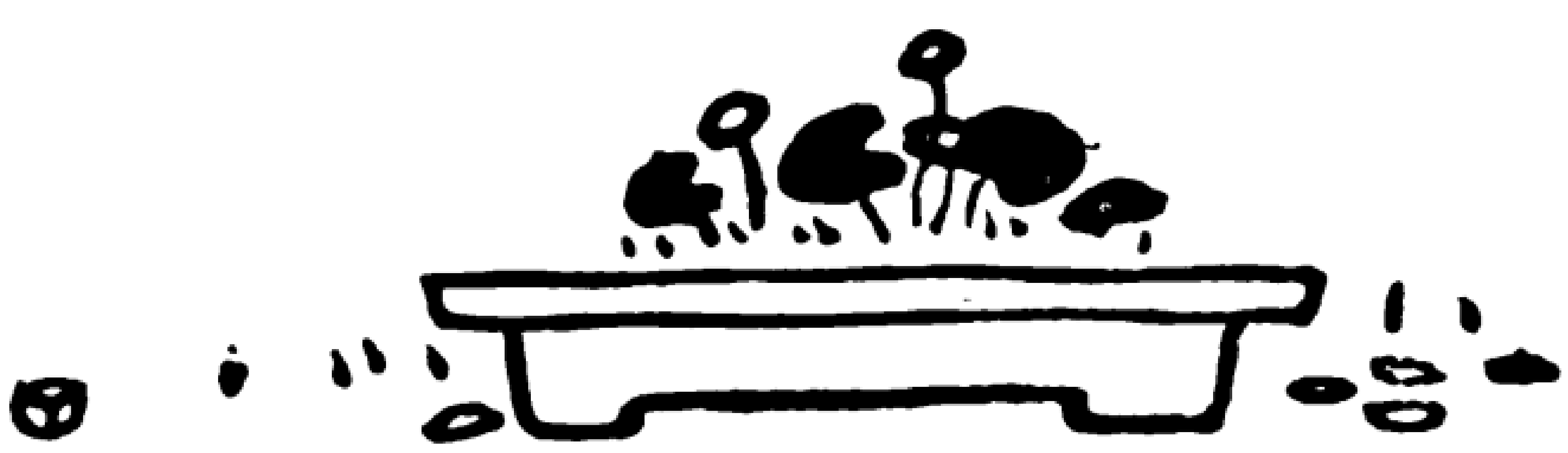
■ 顔や鼻の特に赤き原因は（一）便秘（二）月經不順（三）酒類飲用（四）寒風に面を曝す事（五）腸加大兒（六）腦充血等である。されば其の原因を考へて治療すれば必ず治るものである。

（ふけを除く法）■ 四季共にふけが非常に多くて困りますが、之を治す藥を敎へ下され。（芝の美つる）

■ 楊子を以て掃ひ落し、後肝油を少し許り毛膚へ塗つておき玉へ。

（多毛の療法）■ 女の身でありながら鼻の下や顎などに頻毛生え、實に醜くて困りますが除く方法を。（上野の多毛女）■ 毛深で困りますが根本的に脫毛せしむる所の無害なる藥を敎へ下され。（新潟の淋しい女）

■ 根本的には醫師に就いて電氣療法を受けるのである。藥物療法としては硫化批業、澱粉各二・五生石灰一五・〇。右三品を温湯を以て十分時間程攪拌せ、之を五分四方程爪の厚で擦り塗り、豆鉛米軟膏を塗つておく、斯くて一週間も經つてから、又其の部分を五分四方程塗り、又前の如く處置し、斯くして氣長に一部分宛除くのである。



（毛髮を發生せしめる法）■ 眉毛が薄くて困る（滋賀のきみ子）■ 毛が髯が少い。（男の愛讀者ＯＰ生）■ 兩眉の間が甚だ離れてゐる（大阪の大阪女）■ 毛が細くて弱い。其の間に少し毛を生したい（駒込の木たよし子）■ 眉毛が容易に拔けて薄くなる。（大阪の少女）■ 生際が薄い（東京の田舍娘）■ 頭頂部に銅貨大の禿がある（鹿兒島の恥かし女）右何れも有効なる毛生液を敎へ下され度。

■ 五％の食鹽水即ち食鹽五勺、水九合五勺の割合に溶したる物を以て洗ひ、然る後スキンテン氏處方藥を塗布することを續け月も續けて居れば毛根を刺戟して毛の發生を促し、薄い毛も濃く禿けてる所も生えるものだ、併し毛根の無い所には何を塗つても生えませぬ。乃でスキンテル氏處方藥とは

規那丁幾	六四、〇	安息香丁幾	二四、〇
フヘンテル精	四八、〇	芫菁丁幾	五六、〇
蓖麻子油	八〇、〇	酒精	三二〇、〇

の六品を混合したものである。毛生藥としては之が理想的の妙藥であらう。併し中に劇藥があるから藥屋が賣らぬとか、或は田舍ですから無いとか、或は一週間塗けたけれど効が無いとか甚しきは「・」の打ち所を間違へたり、或は「〇」を書き落したりして買ひに行き、それを塗けて大刺戟が有つた等の爲に、小生を怨まれても小生には責任が有りませぬことを前以て御斷り

申ておく。

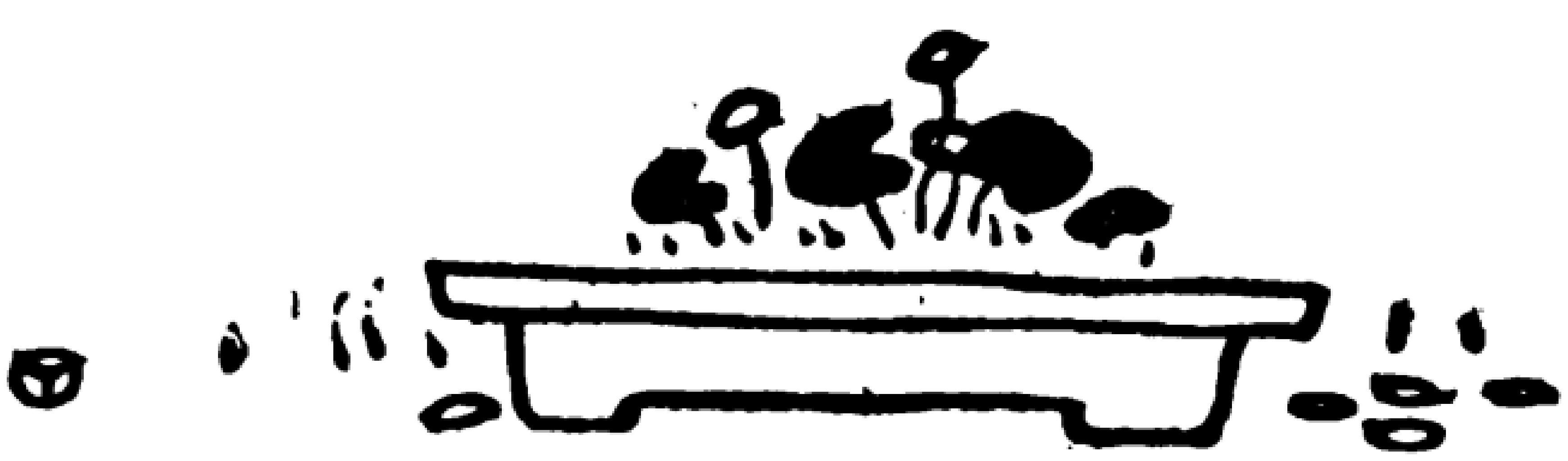
毛が生えた後の處置 ■ 私は先生の著書に就き、毛生藥を七箇月塗け候處、成程濃く相成り候へども、從來の毛よりも赤くて、それが斑の樣に見え候が、如何致して宜敷や。（加賀の今千代）

■ 植物の油を少し宛塗つて居れば遂に他の毛と區別が無いやうになります。

癲癇の病狀及治不治等 ■ 癲癇の發作狀態は如何に候や、催眠術は効無きか右伺ひ申候（本鄕の田舍女學世界愛讀女）

■ 下より上に微風が吹いて來るやうな感覺がして其揚句に眩暈がして倒れるのであるが其の倒れる時に大いに叫び、其れより人事不省となり、顏は青くなり、口を硬く閉ぢて泡沫を出し、拇指を内に枉げて握つてるものである。而して中には糞便を洩すのもある。併しこれは一般の狀態で中には之と大同小異のものもある乃で治不治は原因に依るので、遺傳性は大抵治り難いが、其の他は治療の方法が宜ければ大抵は治る、催眠術も大いに治療を助けるとの事である。

肋膜炎及盲腸炎後の處置法 ■ 第十七歳昨年八月盲腸炎に罹り十月全快、十二月肋膜肺炎に罹り、一時は重態なりしが、二月の初旬より快方に向ひ、三月下旬全快、されど



盜汗もあり食慾進まず何と無く惰々致さず、醫師中には轉地を勸める方もあり、又宜しからずと拒む方もあり候、如何致して宜敷や。（本所の十九歸）

■ 小生は轉地する方に賛成致します。乃ち伊豆山か熱海あたりに行き、湯治を兼れて又食餌療法氣候療法轉地療法をせらるるが宜い、若し行かれたら、入湯は午前に一度、臨臥に一度、之よく多くては宜しくありませぬ。但し十七歳の青年を一人其地に留めおくと、身は異鄕に在つて語るに友無き爲め鬱憂症を發することが有るから、是非共御兩親或は御兄弟の中で一人は共に行き精神を慰籍せねばなりませぬ。これ小事の如くにして決して小事ならず、世間の醫師は之を左程に言はぬ爲に患者が一人異鄕に在つて悲觀の念を起し、遂に治る可き病を重くする事がある。

咽の渇きを治す法 ■ 炎暑毎夜咽が渇き困難致しますが、飲料水は何が宜しく有りますか。（下谷の小金井女）

■ 原因に依ります、晩酌の醉醒の爲めならば沸湯の冷めたので濟む、甘い物や鹽辛い物が過ぎるのであるならば、夫等の物を多く取らぬやうにし、糖尿病等の他病の爲ならば其の病を治せば自然に治る、されば一槪に此の飲料水を用ひ玉へと言ふ譯には行かぬけれども、他病が無いとすれば、麥湯でも差上たら宜いでせう。

長身器の賣捌所及代價　【問】長身器がある云々と四月の誌上で拜見致しましたが、該器は何くにて賣り、且つ代價は何程に候や。（横濱の愛讀少女）【答】元は東京で受賣り致しましたが、今は直接に合衆國紐育州ローチエスター市カーチレーザ會社へ宛てらるゝより外致し方ありませぬ。代價は日本金二十圓である。

脫脂療法　【問】私事脂肪過多症にて困り居り候が、脫脂療法を敎へ下され。（牛込の十八歲嫂）【問】私は脂肪が多くてデブ〳〵太り居り候。（今川小路四十三歲婦）【問】脂肪分の多い爲か腹などは布袋樣の如くに膨れ步行困難に候。（若狹の布袋女）右何れも脫脂療法を敎へ下され。【答】四月の本誌で述べた瘦せる法を實行せられよ。今更に繰返せば、（一）飯と脊の物のみで他物を食べぬ事特に液體を飮まぬやうにすべし。（二）睡眠時間を五時間乃至六時間に減ずる事（三）入浴を多くする事。（四）心身を多く使用する事。これ丈實行すれば必ず脂肪が減る、目的通り減ったら漸次に元の生活に復す可き事。

膓チフスの豫防

◎兆候は發熱　該病の兆候は徐々に發熱して何んとなく身體に倦怠を覺ゆるのみにて他に何等の異狀もなく、其熱度も時に降下して恰かも健康狀態に復したるが如き觀あるを以て、大抵は苦痛を感ぜず或は苦痛を感ずるも差して甚しからざる爲め、往々我慢にて押通す者あり、然れど此の我慢が取返しのつかぬ大事を惹起すなれば、少しにても發熱して身體に異狀ありと思はゞ決して姑息の手段を用ゐず速かに附近の醫師に就きて診斷を乞ひ其の指揮に從ふべし。



◎飮食物の注意　總ての病毒は人の口より侵入するものなれば、飮食物は特に此際新鮮にして消化し易き物を用ゐ、飮料水は必ず一度煮沸せるものを用ゆべし、而して漸次夏期に入るに連れ人の好んで食する副食物は重に刺身の如きものなるが、此刺身は至極危險なるものなれば成べく用ひざるを宜しとす、又之を取扱ふ魚屋等に於ても注意して成るべく井戸水を用ひず水道の水を用ゆべし。

◎自宅治療患者　該病に罹りたる者が自宅に於て治療する場合は、單に衣服飮食器具等の消毒に止まらず、大小便の消毒をも十分に行ふべし、又一旦快復したりとて決して油斷は出來ず成るべく長期間消毒法を持續するを要す。

◎臺所の注意　臺所を常に淸潔にすべきは無論なれど、更らに注意すべきは臺所の主人公たる下女なり、若し下女が該病に傳染し居るに氣付ずして其下女の手になれる飮食物を用ゆる時は一家悉く傳染する恐あるに依り、少しにても發熱の兆候ある時は速かに保護を與へて醫師の診斷を乞はしむべし。

◎流板と小溝の掃除　井戸流及び溝等は常に汚水の排泄を良くして停滯せざる樣注意すべきなれど、時に肥取りが糞便の附着し居る糞杓子を隨所の溝にて洗滌するは多く見懸くる所なるが、是等は未だ其設備が十分ならざるを以て止むを得ざる所なれど、將來は此糞便の取扱に關して完全なる施設が必要なり

（駒込病院長宮本博士談）



いろいろの實驗

白木の器物の洗ひ方

岩代　岩井梅

簞笥でも机でも火鉢でも、すべて白木製の器物の煤氣たり、汚れたり致した物は、曹達湯で洗ふに限ります。再び新しい器物になつて、木理までか判然いたします。曹達湯は普通の洗濯曹達を熱湯に溶かしたものです、その分量は着物を洗濯する時よりも、少し多量に曹達を使ふのです、そして熱い熱いうちに、刷毛などの樣な物を用ひて、靜かに器面を洗ふのです。(賞)

私の臺所經濟法

筑前　澤山はつる

私共では御飯を炊くに、一切薪を用ひません、七輪にコークスを熾し五德をかけ、其上に釜を載せます。そしてご飯が沸騰るときに、コークスの屑を少しつぎ足し、其コークスが火に化る頃、釜を卸しますと、結構な御飯ができます。けれども私の經驗に依ると、お湯を先に沸かして後でお米を入れた方が早く炊けて、出來損じが無い樣です。斯うしてコークスで炊きますと、御飯の後でオカズも煮え、お茶も沸き、其上後仕舞のお湯も沸きます、私共では朝と晩に二升の御飯を炊き、其外煮炊き一切コークスで致しますが、一ケ月のコークス代金は三十錢位で足ります、誠に經濟の上に、家も燻らす、一擧兩得の便法だと存じます。(賞)

美味しい豆のお汁

千葉　武田練子

私共で拵へる豆汁は、何人にも容易に出來る料理で、而も仲々おいしうございます。拵らへ方は、先づ白豆五勺程を一晝夜餘り水に漬けて置きます。すると豆は能く脹れますから、其を擂鉢でよく擂りつぶし、後、味噌を入れて擂り交ぜ、程好く水にて薄め(淸汁ならば醬油を入れて擂るのです)それから鍋に移し、極く弱い火で徐ろ〳〵と煮立てます。此時餘り煮上らせない樣に注意しますと、上層に玉子のフワ〳〵見たいな皮の樣な蓋が出來ます。鰹節は煮立たぬ前に入れます、一寸蟹たまきの樣で、結構な味です、拵樣面倒がらずに試つて御覽遊ばせ、お豆腐のお汁よりは遙かに旨しく頂けますよ。(賞)

油斷のならぬ不良學生

本郷　きよ子

或日、學校から歸つた後、着物を例の通り下女にたゝませると、袖の中から一通の手紙が飛び出しました。其にはチャンと私の姓名が書いてある。ハテ妙な譯と思つて開いて見ると、貴嬢の御名を昨日電車の中で、ゆかしき傘の朱の文字‥‥などゝ、いやな男の筆蹟、此の頃はほんとに油斷がなりません　傘の文字で名を知つたのでございます、皆様不良學生などの多い時節柄、十分御注意遊ばせよ。（賞）

靴下の重寶な編方

東京　夕顔

買つた靴下は直ぐに踵が切れて仕方がありませんから、私はいつも自分で編みます、其編方は踵を別につけずに、踵の處三寸ばかりは目を四つ位ふやし、毛糸の色と同じ木綿糸を入れて編みます、又爪先の方三寸程も糸を入れます、斯様にいたしますと踵を付ける面倒もありませんし其上いつも同じ處が底になつて居りませんから随分長く持ちます。（賞）

かびの豫防法

福井　加藤小蝶

夏季のお臺所には困ることが三つあります。（第一）醤油が黴びて困ります。之を防ぐには醤油一升に付唐辛一本位入れて、一寸火を入れて置くと宜しうございます。（第二）酢がドロ〳〵に成つて困ります、之を防ぐには鹽を少許入れて置くと宜しうございます。（第三）味噌がかびて困ります。之を豫防するには味噌の上層へ平らに均して、パラリと鹽をふりかけて置くと宜しうございます。（賞）

簡易な健康法

東京　やよひ

私は不斷睡眠の前後に、約そ二十分間位づゝ、床上に端坐し、手を膝の上に組み、腹部にウント力を入れて、姿勢正しく、靜かに目を閉ぢて深呼吸を致します。かうして毎日缺かさずに之を實行したところ、食慾も進み、體量も一二貫は確かに殖えました。（賞）

豆腐珍料理

和歌山　池田蜂子

豆腐の料理法も澤山ありますが、私共の仕方をお咄し申すと、豆腐を潰さない様にして水を切り、其れを美濃紙に包んで丼鉢に入れ、其鉢の中に木灰を、豆腐が隠れる程に盛つて、一日程放つて置きます。かうして後ち灰を除き、紙をとり、豆腐を骰の目に切つて、一寸淡味に煮付けて水氣を切つて置きます。それから別に南京豆の煎つたのを皮を剥いて、擂鉢で擂りつぶし、味噌少しと砂糖適量とを入れて、よく擂り交ぜ、なほ酒を加へてドロ〳〵に溶きます。是が出來たら前の豆腐を此味噌で和

へるのです、賢しくて結構なものです。(以)

赤坊の遊ばせ方

京都　井田芳子

生後二三ヶ月も經つと、いろ〳〵の物が見え出して、目が覺めると抱かりたがつて泣くものですが、その時分に美しい手毬か、又は然う云ふ類の赤い物を天井から目の上に吊して、振つてやると、子供は面白いから、其に氣を奪られて泣きません、又、毬が左右に動くやうに、子供の瞳も動きますから、瞳の發育を助けます。(實)

新發明の海苔

大森　三好秀子

私の家は田舍でございますから、秋になると裏の畑一面に黄菊白菊が咲きます。私共では其な白は白、黄は黄と、別々に花瓣を拔いで、水で洗ひ、簀の子の上に淺草海苔位の厚さに並べ、蒸籠に入れて蒸し、陰干に致して後ち、そつと剝がして保存して置きます、是は使用前に一寸湯を潜らせて、刺身のツマなどに致しても妙ですし、お酢の物に拵らへてお正月のお餅に添えたり、或は胡麻和などにして、菊の花の無い時分出しますと、珍らしくもあり、仲々結構でございます。鹽漬にして保存する方もありますが、色も味も變らぬ樣に致すには、蒸すのが一番宜しい樣でございます。(實)

催眠療法の實驗

越後　つる子

私の子供は寢小便を洩らして困りました、醫者にも診せ、其他にもいろ〳〵方法を講じましたけれども、一向効驗がありませんでした。すると或日の新聞に、半睡の時分に寢小便をしては善くないことを暗示して、一夜治らねば二夜三夜と續けると、大概の者はよくなる、此等も催眠療法の一つであると樣の事が書いてありましたので、物は試しと思ひ早速行つて見ました。すると直ぐに其効驗が顯れたので、大變に喜んで居ります。別に六ヶ敷い事でもありませんから、私と同じくお困りの方は行つて御覽なさい、屹度お止みになります。(貸)

お子さんのある方に

札幌　かすゑ

襁褓は大巾のネル地を二つに切つたもの、長さは二尺五寸位が一番適當です、で、之を單のまゝ輪にして置きますと便利でございます、洗ふに時間もかゝらず、絞るに手も掛ます、乾燥も早く、且つ臭ひも少く、又たあちらこちらとクル〳〵廻して當てますから、布もある一點ばかり損じませんで、眞に好都合でございます、詰らぬことの樣ですが、大層助かります。(實)

梅雨中お茶の保存法

京都　白雪

梅雨季に入りますと、お茶が兎角濕たがつて困りますが、之を防ぐにはお茶を錫葉の鑵か、又は壺の如き物に入れて、其中に干柿を一つ二つ入れて、よく蓋をなし、乾燥せる場所に置く時は、決してかびることなく、また味も變りません。(賞)

洗濯石鹼の使ひ方

牛込　遠矢小枝子

洗濯石鹼は求めた許りの柔軟かいのを其儘用ひるよりは、一度緣側へなりと出して成丈け能く日に干してから使つた方が、餘程徳用でございます、けれども鼠の多いお家などでは、夜分は忘れずにお仕舞になりませんと、嚙られて却つて損になることがございます、私なども度々やられたものです。(賞)

古いリボンの利用法

牛込　輝子

皆樣のお宅でも御妹樣などのお有りになる所では、定めしリボンの古いのが澤山お出來になりませう。其を何う遊ばしますか、私の宅ではためて置いて、ハタキに致しますが、大層丈夫で宜しうございます、皆樣も心掛けて保存してお置き遊ばせ、是も廢物利用の一つです。(賞)

絹布の裁屑

堺　貞子

一寸二寸の細かい絹布の裁ち屑も疎末には出來ぬもの、私は此の裁ち屑を貯めて置いて、徒然の折、二布つぎ五布つぎ、氣の向いた時などは半日もかゝつたりして接ぎ合せて居りますうちに、積り積つて約一反程になりましたので、子供の夜着にしてやりました、誠に輕くて綺麗で、結構でございます、其の配合に工風を用ひれば、尚更妙です、皆樣如何、一度御手箱を御整理なすつては。(賞)

薩摩芋を炊く

大阪　山本ゆき

昨年、新の薩摩芋が二三本殘つて居たのを、少し許り煮るのも面倒だと思つて、能く洗つて、御飯を炊く時、火を引く前にお釜の中に並べて置いて、御飯を移す時に出して見たら、好い加減に柔かに成つて居りました。一ツ喰べて見ますと、特別の甘味があつて結構でした。そして御飯には少しも色も着かず、あくも別段出ませんでした。今年も直きにお薩の出る時分になりましたから、復た行つて見る積りです。(賞)



和歌

佐々木信綱先生選

一等

逝く春をむさし野の末にわび住みて山吹に降る雨なつかしむ　大森　もゝ代

評　しめやかなるおもぶき、さながら山吹の花の枝に、しめ〳〵とそゝぐ春雨の音をきく心地す。

二等

又雨と日記にしるして小窓あけぬ今日はしみ〴〵ふるさと戀しき　越後　中野かず子

評　病める人などの、温泉にやどり居てよめるやうの面影うかべり。結句の字あまりも、耳だゝずして佳し。

二等

君を刺す言葉を撰りてゆきし子は丘の夕日に泣きて歸りぬ　豐後　江口さかえ子

評　あはれさ、胸にしむやうなる歌。

三等

初夏や丘に登りて石狩の青くはてなき野の面をみる　小樽　上原ちよ子

評・廣野の初夏思ひやりても心ゆくこゝちす。

三等

あたゝかき母のみ胸による如も春の光は我が窓にさす　横濱　月岡やすら

評　やすらかにのどかなる歌といふべし。秋冬の日のかなしくさびしき歌のみ歌にあらず。春夏の日の長閑に力ある又望まし。

三等

思出の悲しき布を織る機に一すぢ白しよろこびの糸　府下　前川美津子

評　たくみによそへうたはれしかな。

秀逸

うぐひすの小きまなこうるほひぬ花散る里の春のあけ　遠江　石野豐子

ぼの

○　清國　稲田つる子

にぎはしき酒樓の門の楊柳にけぶるが如き春のあめかな

評　金陵古都の春雨、眞に有聲の畫。

○　十勝　萬柳まりや

若葉にほふ櫻の下の燈籠に灯を入る時月はのぼりぬ

○　麻布　伊東百合子

殊更に少さき事にもいとかろく諍しつゝ春の野邊ゆく

○　牛込　平塚百合子

岩つゝじ猶紅に山そめてさ靑の空に立つ妙義かな

評　曾遊忍びいでられて。

○　府下　川岸照子

山樓の窓掛とれば涼しくも靑葉に浮ぶ遠海の色

評　下句を採る。

○　釜山　朱雀とも子

胸のはて月は出づれどもどかしく空は黄ばみて悔の灰ふる

○　四坂島　渡邊梅子

靑嵐さと吹き來り河鹿なくこゝろもまじりておはしまに入る

評　二三句のつゞきすこし此處には切迫に過ぎたるやうなり。

○　大阪　秋野洋子

たちはなの花のにほひそしみ〴〵とものおもひけりたそがれの家

○　伊勢　岩本淑子

このまゝに一日は一日あたゝかきかげにへだゝる我が宿世かな

佳作

○　群馬　正木芳野

しめ〴〵と雨ふる日なり野をゆけば草のかをりのなつかしうして

○　牛込　うた子

夢のごとしづかに暮るゝ春の野なあわたゞしくも散る櫻かな

○　伊豆　鈴木安子

海の空紅く染れる落日に海人が子うたふ夕燒のうた

○　橫濱　有馬いし子

淋しさは靑葉のなかに黄ばみたる枯琛の如し君逝きてより

○　宮城　鈴木ちぎく

ふる里のよき君として華やかに物がたる夜をきくほとゝぎす

○　麴町　牧野銀杏

ほとゝぎす濱名の湖の夕雨を鳴きて過りぬ海近くして

○　島根　靑柳生

蚊遣火の烟の末に馬洗ふ人仄の見えぬ夕月の影

○　京橋　川上淑子

濃みどり堤の柳に白銀の糸を垂して春雨のふる

○　福島　紫陽花

春ゆくや潮さく夜は思ひ出に胸せまりきて夜すがら泣きぬ

○　愛知　村松光蓮尼

たれこめて一人さびしく物思ふ我にぞ似たる遅ざきの花

○　青森　天内浪子

赤々と春の日はてりれむれるが如し人さへ病にみる村

○　栃木　山口れん

若草に露する路も山吹の雨にちる戸をゆめみけるかな

○　下野　青蘭女史

静かなる心のひまをうかゞひてまだかへり来る悲しき少女

○　在米　夏野病葉

何物か待たるゝおもひひとりゐの丘なるいほの安息日の朝

○　札幌　やす子

懐しき夏草の香よ楡の香よおもひ出遠る初夏の野路

○　札幌　俣野恭子

何となう死ぬ夜のおもひ一人居て月影仰ぎ淋しむ夜かな

○　信州　野口千鶴

乳子の夢まもる小さき繪日傘に白蝶狂ふ堂の廣庭

○　大阪　中野富子

稚兒の手ににたる若葉の楓かなまれくがやさし風のまに〳〵

○　下谷　加瀬きく

いそやかた胸にとゞろく浪のおとにおどろかされて琴引きやみぬ

○　羽前　白霜

銀の細き糸にて散る花を縫ひつゞるらん春の女神は

○　伊勢　種瀬なさむ

このあしたふる晩春の夕雨に蝶の羽色もいとあせて見ゆ

○　神戸　花蓮

町の末一本柳芽に出でゝ占ふ人も去年に變らず

○　小石川　よしか

なしの花戀に病む兒の眼の如くうるみとぢけり此長雨に

○　大阪　好子

うつくしう君を忘れし其日より我心淋しうなりき

○　長崎　深見つゆ子

ゆく春に思をのせて北の國君ます里にことづけせばや

○　四谷　戸田道子

ともすればよしなき事をくりかへし淡き光を淋しと思ふ

○　伊勢　世木千代子

野の丘の青柳けぶる一つ家に煙たゞよひ五月雨の降る

○　相模　中田雪子

蚊やり焚く烟りながらにくれにけり小家つゞきの山木の里

○　岐阜　加納園子

ところ〳〵家毀たれて草萌えて蝶飛びて居ぬ故郷の町

○　豊後　熊谷ゆき子

夕されば川岸の砂の池こぼち月の路ふみ歸る子なりし

○　京橋　秋山千代

粋や旅の女と舟守の憂き數々の物語して

○　熊本　井上雪子

天地はたゞ悲しみに滿ちにけり姉に別れて母に逝かれて

○　羽前　野口菊子

香も高く色よき花に目もふれで名無し小草をめで給ふ君
○　三重　大西桃鶴

真白帆や霞の中にほの見えて菜の花黄なる湖添ひの家
○　佐渡　古藤英子

旅人は白馬に乗りて夜もすがら笛吹きて居ぬ夏草の野に
○　群馬　松村美津子

あざやかに新潮よする朝風や真珠とる船に港につきぬ
○　奈良　みどり

紫のすみれに交る早わらびをつみつゝ誇る丘の上の春
○　大阪　山田芳枝

雨あがり夕ぐれ闇をたゞ一つほたるの飛ぶは變化めくかな
○　越中　榊原田鶴子

遠山はかすみ渡りて近き野は見渡すかぎりむらさきにほふ
○　大阪　古川清香

我が宿は三坪にたらぬ庭なれど牡丹なでしこひなぎくの花
○　河内　森若柳野子

日ざかりやあきつ追ふ子のうなじ吹く淀の河原のひるごろの風
○　豐後　菅原敏子

鶯の歌をきゝつゝ磯に釣たるゝ筑紫少女は思ふことなし
○　明石　千代香

山霧やくだる峠にもや深くわかき楓のしづく涼しき
○　丹波　上田艶子

風よろし木の下かげのハンモック青葉を渡るそよ風よろし
○　福島　近藤かすみ

五月雨や貧しき町の中庭にはくさん木の白き花咲く

午後の日は水土の山に土を掘る土方の群を灰にてらしぬ
○　横濱　小豆澤露野

庭もせの百色の花うつる池はる行く水にかきつばた咲く
○　備後　松下歌子

静けき日庭の牡丹はいくつかの蝶々を生みぬ風のゆらぎに
○　京橋　今泉千鳥子

永しへに此の百合のごと清かれと君がみむれにまして別れし
○　小石川　高橋春江

ひらく\と散るよま白き梨の花あゝ亡き友の面影に見ゆ
○　紀伊　みさほ

森の奥ひとり空洞の木によりて涙す我れとおん夢に入れ
○　大阪　田宮百合香

わが祖のみ墓のめぐれるあけぼのゝ山をよぎりぬなくほとゝぎす
○　小石川　石木鶴子

物凄く北風いたく吹きすさぶ父待つ宵の心寂しき
○　京橋　岡田まさ枝

窗際のこなの赤きが春風のこぼれてちりて朝の井の端
○　日向　新名直子

丘の上は若葉しげりて初夏の海面遠く海鳥のとぶ
○　奈良　桃花

青嵐はなれ馬追ふ川堤渡り上りてたてがみ操ふ
○　四坂島　渡邊棣子

いと嬉し夢は小鳥にさまされてあななつかしとみ名よびてみぬ
○　出雲　しらぎく

○　越後　とみ子

よしさらば君が蔑み受けんかなからき聞えも胸につゝみて

○　米國　村越光子

母の手にせがみし頃を思ひ出てはゝとよばるもうら恥かしき

○　名古屋　福井はる子

菫咲く野にうつむきて歌を思ひ君を思ひて戀しうなりぬ

○　遠江　石野なか子

まれに來て語らん君は世に非ずかたみに匂ふあぢさゐの花

○　新潟　高橋かう子

朝雨の晴れて椿のほの白う鷄こゝと鳴く日向の庭に

○　芝　古川花子

つや〳〵と光る若葉の上越えて初夏の日に風窓に入る

○　大阪　山下繁世子

むらさきのすみれおほひて葬りぬ白き胡蝶のむくろ一つを

○　栃木　波多野嘉子

霧あさき山黄昏て雨細し紺の傘行く紅の橋

○　牛込　華子

牧の野に遊びつかれし小羊がうまいの夢を春風のふく

○　大阪　むらさき

春ゆくや我は運命の其もとに日ごと〳〵におとろへてゆく

○　横濱　大島一二子

山里の春は靜かに眞晝きて垣の白梅風なきに散る

○　信州　北川睦子

淺間野は桑の大畑新緑の波寄するかになりにけるかな

○　岩手　江田すみ

牧の野はいづち行きけん緑なす廣野が原に牛群るゝ見ゆ

○　東京　鳥飼蝶

瑞々と獨活の香のする畑ちかき家など戀し古き書繙けば

○　攝津　尾西壽子

春雨や止みて若葉に日は照りぬ葉陰に光る玉美くしく

○　神戸　山口さい子

いざはやく來て見てよ君吾家指のさす彼方なる

○　信州　渡波奈子

みどりして幾日をこもる病室の窓に淋しき葉櫻のかげ

○　陸前　小岩やなぎ

順禮の詠歌誦しつゝならし行く鉦の音遠し霞の中に

○　陸前　沼倉たか

少女子が假粧におもを打つごとき音をたてつゝ春の雨ふる

○　宮城　沼倉醴子

朧夜に花の下道さまよひぬおなじ心に君や來ますと

○　兵庫　田畑ぎん子

花の下黒の衣とき藤色の衣つられて行く人を見し

○　兵庫　田畑あき子

ふめばやはき若草の香よなつかしきむかしの夢の野路に我れたつ

○　水戸　榊いち子

戀ふ人のありとしもあらずひとり來て野に白梅を折ればさびしき

○　本郷　佐藤かず子

やれ瓦黄みてのころ燒跡にさびしく笑める桃の花かな

とある日の野行きに君を知りしよりまた春の人とわれはなりぬる



幼きもの

京都　朝子

やう〳〵一人立ちする程になりしのみの我子ながら、人手なきまゝに一人遊びになれて、針持つ母の傍に、古雑誌等ひろげ、仔細らしう一ひら一ひら拔き行き、人の繪あれば、ネンネと云ふ、又或日ふとけたゝましう泣くに、何事ぞと行きて見るに變りし事もなし、信子よ如何せしと云へば、乳持ちし手を出して向ふを指す、見れば一分程の虫のそろ〳〵歩むがありき、あるは櫛持てば髮をとき、布持てば面を拭ふ、又父なる人の抱き居給ひし折、其乳を出して見せ給ひしに、チッチと云ひて口持て行きしが、屆かれば、しばしして指につまみて口に持て行きぬ。かわゆきものは子供なりけり、頭うちて、持てる物取られて悲しきも暫時、玩具菓子など貰ひて嬉しきも暫時、只母の懐の乳房にすがる時のみ永遠に懐しげの相見ゆるこそなほいぢらしけれ、されどやがて乳離さるゝ頃よりや世の苦を知らん、あはれ母も子も今の儘にて永久にあらなんものを、(一等)

お琴

小石川　唐澤みさを

「アラ、小夜さんは姉さんが恥かしくなつたの、オホヽヽ」、妾がかう云つた時母樣の笑聲は下へきえた、妹の小夜さんは今年十、久しぶりで妾が寄宿舍から歸宅したので、今お得意のお琴を聞かせてくれる所、やがてお琴は運ばれた、愛らしい小夜さんは其前へチンと座つて、櫻色の頰へ紅葉の樣な手をあてゝ、「母樣何を」と云ふて鈴の樣な眼をパチパチ、「お前の好きな那須野がよいでせう」小夜さんは見るもいぢらしく小箱の爪とり出して、「姉さん間違つたら敎へて頂戴ナ」小夜さんの指が輕く絃の上を動く樣は、丁度水に流れたもみぢ葉、可愛い口が金魚のそれの樣に動くにつれて、ふり絞る銀聲朗らかに、——「蘭菊の花にかくるみやこの伏戸‥‥。」(二等)

都を立つ日

大阪　八重子

青葉の影を映す南の間は、衣服や土産物で一ぱい取散らされた、手傳つて下さる嫂樣は、洗朱に光琳風の菊を染出した長繻絆をたゝみ乍ら、「明日の今頃はもう汽車ですれえ」と仰る、自分は土産の人形を破れない樣に子供の扱帶で卷いて詰合せながら、「眞實に早いもので御座いますれえ、東京へ行くと樂しみにしてゐたのに、もう歸る仕度をする樣に成りましたわ」とつく〴〵名殘を惜しむ、

隣の方に机を置いて、朝鮮語の研究をしてゐる弟の定次は、近眼鏡の曇りを拭きながら、まぶし相な目をして「でも姉樣の處は北嵯峨なんて名を聞た許りでも詩趣に富んでゐるいゝ處でせう」「そんなに善いと

思ふなら羽餅へ赴任する時此度お暇りなさいよ、だがいつ醫學校を本業するの？」と姉様の揃へて下さつた化粧品箱の蓋をピンとする。昔笑ひ崩れた、行李もやう〱詰めて仕舞つた「細引は僕が掛け升」と弟が立上る、電車の鈴が西風に混えてゴーゴーとレールを走る音がする、あれも當分聞れぬかと思へば耳障りな喧擾しい音もけふは懐しい。(三輪)

久々の外出

東京　通子

けふは風も無い好い天氣、お墓詣りを仕やうと思ふて、仕度もそこそこ玉枝を連れて十時頃代々木から電車に乘り、まもなく昌平橋に降りたそれから谷中までぼつ〱あるく、久しぶりでの外出故玉枝は大喜び、脊中で躍つてゐる。明神下の通りも三年前に住んだ時分とはまるで變つて居る、明神下からお化横町をぬけて行く、切通から仲町通りを池の端へ出ると急に時代が變つた樣、ひろ〱してこゝまでは電車の音も聞えぬ、氣がゆつたりする、雪見橋から向を眺めた景色、精養軒が森の間にちら〱する處などまるで畫の樣、こゝまで來たのだからと辨天樣へも鳥渡おまゐりをして谷中の方へゆく。(秀逸)

里の夕暮

島根　柳子

空を斜に、風と風を切つて來た一羽の鳶が、扇の樣な尾を振げ、一廻り棚の上で輪を畫いて、緩く羽叩き乍ら、彼方の村に飛んで行つた、繭綿の翼を開いた樣な浮雲も、次第々々に何處ともなく消失せ、金色の空は、はや灰色になり、やがて薄暗くなり初めた、左手の小川に、膝迄浸してゐた黑毛が、小坊主に引かれて行くと、其邊に遊んでゐた實鳥が二三羽長い首を伸して堅堤に四邊を見廻し乍ら向ふに泳いで行く、其も少時で小い白いものとなりて仄暗い中に隠れた、山吹の下に小い魚が撥れて、美しい渦が輪になつて擴がつて行く。(秀逸)

歸り汽車

東京　若紫

赤羽から上野行きの汽車に乘る、私の向ふに、可愛らしい子が、父親らしい人の膝に乘つて、珍らしさうに飾を見廻して居る、持切れない程摘んだ櫻草を胸に抱へて、花の中からパッチリとした目、うるみを持つた長いまつ毛、紅石を白羽二重に包んだ樣な頬を見せて居る、「あんな子が欲しい」と周りの赤てがらが少さな聲で云ふ、王子から醉ひつぶれた書生が二人乘つた。「ヤア可愛い〱」と無やみに目を細くして、「君ー令嬢の御親父ー其の令嬢を僕に下さらんか、子供位可愛いゝものは無いつてますれえ、本當ですか。」父親は返事はせぬが、面かも滿足さうにほゝえんでゐる。(秀逸)

朝の間

大阪　友子

お出ましを御送り申して部屋へ這入る、朝日斜に床の間の花がいみじう薫る。机に倚つて新刊の女學世界を見る、人眞似に何ぞ書いて見樣かと筆を取つたが、隣の子の泣聲が耳について趣が纏らない、一行書いては棒を引く、スーッと襖を啓けて仲働がお誂を松蔭が持つて參りましたと羽織を包んだ帖を出す、色合もよし仕立もよく出來た、又二三行書くメメ〱と小さい足音がして、「母樣いゝもの頂戴」と晶子が頬をまつかにして這入て來た。「林檎、お菓子？」「ちやあ」と戸棚からアップルを出

して與へる、「ロナム」と皮と分けて食べながら、「ねえ母様、明日琴平様御縁日ねえ、連れてつて頂戴な、ねえ、活動紙買つて頂戴よ、夫からホーツキも、ねえ、よくつて、嬉しいわ、早く明日に成るといゝ、あらお手玉が無い、母様お手玉が無くなつてよ」と泣聲に成る、胸掛のポツケツト、猫圖の下火鉢の横手にも無い、「あらさう〳〵女中部屋へ置いて來たの」と笑顔に成つて駈けて行く、靜に墨すりつゝ又想を練る。

選擧運動

京都　市川ふさ子

もう四五日すれば市會議員の半數改選があるとやら、私の家にも其の選擧權があるので、今日此頃は毎日々々赤青など彩色をした名刺や依賴狀が面白い程舞ひこんでくる、彼ちやんはそれを集めて喜んで居る、けさも立派な御召物を着、鼻下に美髯を蓄へた人が這入つて來て、何卒よろしくとて一枚の名刺を置いて歸つて行つた、見れば市會議員二級候補者何某とある、御本人が直接においで遊ばしたのだ、「私等男に生れても此樣にして迄なり度くないわ」つて言つたら、兄様はフフゝと笑つて居られた。

夜の十二時

名古屋　福井はる子

今恰度十二時を報つた、騷がしかつた街も、漸くさびしくなつた。薄暗いランプの光をみつめてゐると、さま〴〵の追憶が幻影のやうに湧いて來る、窓から入つて來る風に、燈火はいら〳〵する。もう五體は疲れてきた、机の上の卵の花が、わたしの眼をさまさうとしてゐる、床の石膏の聖物は羅馬の昔を偲ばせてゐる、蛙の聲が幽かに寂寞を破つて聞えた。

七年前の今頃

京橋　幸子

小學校の二年生の時でした、學校の庭の躑躅が散る頃、先生に連れられて郊外へ遊びに行つた時、竹藪を見つけて吾も〳〵と這入つて筍を引き抜きました、其内に持主に見つかつて、大變に怒られ私達は筍を放つて逃げ出しました、後で梅田先生があやまつて下さつたとか、あゝそれももう七年の昔となりました、あの先生も彼地を去つて今は琵琶湖の邊りの小學校にゐらつしやるとか、今頃は如何してゐらつしやるか、筍時になると何時も先生を懷ひ出します。

西洋草苺

京都　山本すみれ

去年の秋、母様に願つて、須磨の育種場から、西洋草苺三本だけ買つて植ゑて置いた、寒中肥料を一度やつただけで別に世話もしなかつたのに、此頃は澤山花を持つて、早く咲いたのは、もう實に成つて居るのもある、それには稻藁を敷いていつ赤くなるかと毎日見ては樂しんで居るが、赤く成たらお初を父の御佛前に供へ、後を母と二人で頂く積りです。

工場の邊り

大阪　金森秋子

十二時の汽笛が鳴つた、此所に住んで居れば時計の必要を感じ無い、門の青柳は短かい影を投げて居る、田舍ならば靜かな正午も、生存競爭の烈しい都會では最も騷々しい時で、ガタ〳〵ゴロ〳〵と何時止みさうにもない、食後は書齋に閉ぢこもつて雜誌を讀む、此一小雜誌を見ても世

間の腐敗が能く分ると思つた、思ひは其れよりそれと盡しもなく移つてゆく、くさ〳〵したから妹をつれて散歩に出た、工場の音は依然として、やかましい眞に紅塵萬丈の巷である。

養蠶室

岐阜　田中柏葉

蠶棚と桑籠とが歩くところもない程並べてある蠶室には、桑の香、虫の香が絶えず漂うてゐる、弟が背負つて歸つて來た桑の葉を、磨ぎたての庖丁でザク〳〵刻んで、棚と棚との間を横になつて歩き乍らバラ〳〵と撒いてやる、これが一寸難しい、一面平均に撒かぬと繭になる時に過迹が出來る、大分虫は大きくなつたから、繭を作るにもう間はないが、繭になつて、それから綺麗な絹絲……、誰の着物になるかしら？　こんな事を思つてゐると、虫はバサ〳〵と雨の樣な音を立てゝ新桑を食べてゐる

雨上り

日暮里　野の花

雨がやんで、天王寺の森も、庭の植込も、夕日を受けて滴る樣に美しう光つてゐる、飛石の窪に溜つてゐる水には青い影が落ちてそよ吹く風にチラつく、柱にもたれた儘、藤村詩集をひもとく、ハラ〳〵花片が落ちた、春の名殘りの八重櫻で、母樣と兄樣とに連れられて展覽會へ行つた歸りに、美術學校の前でひらふて押して置いたものだ　押しがきかなくて縮んだ所は縮緬を染めた樣で、却つて美しい。

山寺

露子

久々の好天氣を幸ひに、山蔭の長建寺に藤見に行つた、藤は枝が枯れて房も小さくなり、先年見た時とは餘程見劣りがしたが、紅葉は年毎に大きくなつて、芽出しの色得も言はれぬ風情、其下にある紅、白、薄紅、ぼかし等の大小の躑躅は、殆度見頃で、皆美しく刈り入れてある、池の水の少しく濁りたるは稍物足らぬ心地がしたが、河骨の花の此處に咲ける、汀の燕子花の葉に、白に、互に劣らじと咲ける樣子は、絵筆持たぬ身が今更恨めしかつた。

夕煙

大阪　野口たつ子

野寺の筧水を渡りて、日は鎭守の森より暮れそめぬ。百戸に足らぬ村なれど、煙にぎやかに立ちのぼりて、夕餉の準備とり〳〵なるに、小川の橋のかなたには、誰が家の斑犬ぞ、尾をふりたてゝ主人の歸りを待ち顔なり、茶店の前を、鍬かつぎたる男、さては鎌さげたる女三人四人つゝうち連れて歸り行く。牛追ひ歸る十七八の少年は、店の娘に辭儀をして過ぎ行きしが道はやがて左に折れて菜畠の間に入りぬ。

白躑躅

三島　遠山雪子

降り濺ぐ細い雨をうけて町端れへ出ると、後から菅笠に雨を避けて、墨の法衣はづぶ濡れにした瘦せた行脚の老僧が、杖に倚りかゝつて道を尋ねた、北の方を指して教へてやると、幾度か禮を言うて、口の中に眞言を唱へながら、煙る雨の中を、鎭守の森の彼方に影が消えた、小川の汀の崩れた土の塊に咲いて居た白躑躅は、ほろ〳〵と二三輪花瓣を水に落した春は斯うして暮れて逝く。

水交社の半日

美　ちか子

ボーイが運んだコーヒー茶碗を側に置き、美味しさうなネーブルを切りながら、夫は仰有つた、「其寄生木の將軍は乃木大將だといふよ……」私は丁度徳冨さんの「寄生木」を讀んで居た、「まあさうでございますか」時々ナイフが皿にあたつて、カチと音をたてる、テーブルの中央には目覺むるやうな西洋花が生けられてある、外には若草の芝生が見えて、階下から妙なるピアノの調が聞える、

炭屋の跡

大和　操子

炭屋が奈良に立つた跡は、貸家札が欠伸をかんで居たが、昨日荷車が横付けにされて、誰か入つた、次の日はもう炭の香も何處へやら、山吹色をした天ぷらや、蓬の香徽かな粢餡や、攫奉程寃盛つた饂飩等が、小僧過の眼を光らせて居る、曉廉は廢物を利用したものと見えて、「飯森岩太君入營」の暈色を現はに見せる事ができる。

離別

肺戸　田村よしか

お嬢様、御荷物も出來上りましたから御召物を御着更へなさいませと何から何までゆかりのないお松、私は心から感謝しました。御み帯は私にと、絹の帯を取られたは仲よしの好様、其御目には涙が一ぱい、私は胸も破れる思ひ、其儘に頼んで頂きました、嘶しい故鄕を後にするより好様に別れるのが、どんなに悲しいかわかりませぬ。昨夜も更けるまで泣きました。村人に別れをつげて車に乗つたも夢心地、御機嫌よくの聲のもとに車はもうかけ出しました、好様は垣根にもたれて左様ならとにつこり。

療養

麻布　登美子

藤の花も二房三房笑ひかけた、病氣とはいへ、たゞぶら〳〵と日を送るのも勿體ないと思つて、此の間初を相手に花壇へ種花をまいた、もう薔薇や姫百合が咲くのもぢきだ、先日姊様にいたゞいたホワイトローズこれが早く咲くといゝと思つて、今日も縁を下りるとまづ見に行つた。このやうに知らず〳〵運動をするせいか、此頃はめつきり病も怠つてきた様に思はれる。

うらぶれ

東京　幸枝子

雨はやんだ。が、空はどんよりとしてまだふりさうだ、八重櫻は、昨夜からのどしやぶりで、あらかた散らされて終つた、此間よこした靜枝さんの詩に「櫻の花にひとしきをとめ、きのふに異る衰殘よ」とあつたが眞實く女の運命はそんなものかも知れぬ、あゝ十七の年ももう半分過ぎた。



日記文

彗星

東京　美園子

朝晴れて寒し。彗星見ゆとの聲に眼覺め、急ぎ庭に下り立てば、碧玉の水を湛えた樣な空は次第に色が、褪れ行きて、一つ〳〵又一つと星が消えてゆく。あの星取つて空の星を掃き落したいと言ふて弟が指す東の空を見れば、曉の明星の左に當つて、尾を長く南に流した怪しの星が群を拔いて光つて居る。あれこそ正しくハレー彗星と思ふと、眠より覺めんとする靜かなこの天地に、今にも怖しき事が迫る樣におぼへて、ぞつと身の毛が戰慄つゝやがて白み行く空と共に怪星は影も止めず拭ひ去られて朝日が昇る。私は包みあへぬ嬉しさを感じて、聲高く讃美歌を歌つた。門にたてる幟の矢車は幽かな音して、歌に調子を合せる樣に廻つてゐる。（一等）

里の一日

尾張　榊原みね子

今日は夫と一緒に私の里へ遊びに行つた、春の日がぱつと障子にさして明るい客間に、私の母と夫と私の三人は、小さい話題に迄面白味を覺えて物語つた、午後の三時頃に三人裏へ出た、桃の花が七分開いて、うら若い紅色を帶びて居る、只其れ丈けの小天地、其が妙に私共の氣を伸々させる、私には結婚する時の不安、其後の氣疲れも疾うに過ぎ去つて、なつかしい父母の慈しみと、新らしい夫の愛とが私を包んで居る、うつとりとして心ゆく迄思續けて居ると、もう夫は母に挨拶して居られる、あゝ樂しかつた一日も暮れた。二人は母に見送られて門を出た。（二等）

初夏

京都　三宅きみ子

一日＝朝早くお隣から蕨を頂く。白躑躅を床の間に挿ける。お里樣が遊びに來られて奈良へ行つた話をなさる。昨夜、隣村に火事があつたとのことなれど夢にも知らなんだ。美い聲の女が下の道を通つた。夜、入浴。二日＝袷二つ、足袋二つ洗濯する、文江は草花を門前へ散らして父に叱らる。私は夫にお臺のおさいが辛いとて叱らる。和歌を念じてお隣の小母樣に閑人と笑はる。いやな日だ、終日雨ふる。三日＝十時頃、和尙さん御入來。裏へ筍掘りに行く。すゞかけの花盛り。お向ふから茶團子を下さる。午後文江と昴とは山遊に出掛ける。私は和歌に苦しむ。夕景。早く御飯を濟し、文江を連れて叔母樣を訪ふ。（三等）

雨ふり

尾張　佐東黄久子

お晝過に雲が切れて一昨日からの雨が止んだので、家鴨の籠を開けてやる。と、如何にも嬉し相に五羽の白いのが雫の滴る山吹の下枝を潜つて

門の田へ下りて行つた。それから縁側へ出て糊米を揃んでゐると、庭の若葉の緑色が殊に映えてすが〱しい。お母さんが、常楽院の七つが鳴つたといはれたので夕飯の仕度をしようと、背戸の井戸へ水汲みに出ると、隣の炭葉が夏らしう薫り合つて、垣の豌豆が見ちがへる程伸びてゐた。暮方又雲が流れて来て庭の柴樹の下で雨蛙が啼く。家鴨が騒しく上つて来た。（秀選）

無言の一日

近江　塚脇瀧子

サン〱と七時が鳴つたのを、現に聞いてゐると、「オイ起きないか、いつまで寝てゐるんだ」と、尖つた夫の聲、「ハイ」と不承々々に起きた。程なく夫もお目覚になつた、今日も何うやら御機嫌が斜めらしい、何も悪い事した覚えもないのに、何うして毎日かうなんだらう、イヤになつてしまふ。

午後呉服やが来たが、今日は駄目々々と、荷も解かせずに追ひ帰した。夜は夫が書見の傍で裁縫をしてゐたが、どちらも無言の行の仕合で、口の中に蛆が生きさう、こんな日は、早く眠るに限ると、お先へ御免を蒙つて床についた。（秀選）

結婚披露

菊香

花の頃までと延ばして置いた兄様夫婦の披露式はいよ〱今夜となつた。私を迎へに居間へ居らしつた嫂様は滋賀の手がらの大丸髷に銀簪光る御頭を一寸かしげて「もう御揃になりましたから御挨拶にね」つて、エクボを御見せ遊ばす。實に御美しい方だ。座敷では主人公の兄様が多勢から祝盃を向けられて、其の處分にお困りの御様子。婦人席の中程に居られる祖母様が、好物の鯖を歯の無い御口でモグ〱遊ばすのを、ヂツと見て居らしつた祖父様が、「ヲフヽ、日の立つのはほんに早いものでのう。其池で見合の時、母御の後で赤うなつちよつた娘さんが、あんな様子になつたからなあ」つて仰有ると、祖母様は「オホヽヽ、さう言はつしやる爺様こそ小町娘の私が見染めた業平様と見えませうかな」なんて、皆を笑はせておゐで遊ばす。「菊様お酌を」と何處かで聲がしたから、早々居間へ逃げて来た、中兄様の處へ今夜の様子をお知らせすべく手紙をかく、座敷からは又笑聲が洩れる。（秀選）

新家庭訪問の記

備後　十九子

春日麗らかの日、新家庭の奥様と成られた石子様をおたづれした。旦那様が週番なので淋しくつて困つてゐたとて大變喜んで下すつた。南の開け放たれた日當りのよい理想的の新築の家で、間取りもよい。桜の花の散つてゐる庭を眺めながら二人は打ち解けた話しを仕合ふ。

石子様の旦那様は青年士官中でも未来有望の御方らしく、加之も非常にお優しいとの御事、御話しを承はつた丈でも御睦まじさがあり〱と目に見える様。御容色の美しい石子様があのお優しい御気立で従順に御仕へ遊ばす御様子も、さこそと察せられる。全く春の光りに満ち〱た御家庭である。

おいとまして門を出たら、緋の様な夕日が西の空に傾いて山田山を色取り、東天の月は久松城の松に懸つて光うすく、えも言はれぬ景色であつ

た。嗚呼此美しき景色、戀しき郷の義兄樣に寫生して御送りしたいと思つた、夫と仰ぎ妻と呼ばれて朝夕心の限り侍く事の出來るのも、今數ヶ月の後と日數かぞへながら家に歸つた。

忘れ草

名古屋　通ひ路

お庭の花菖蒲も最う那邊に伸びたのに何故今朝はこんなに寒いのだらう、お琴の稽古から歸つて、爪箱持つたまゝ縁先に立つて居るところへ御手紙、……鎌倉にて宇佐美としてある。病氣で鎌倉に來て居ることの、とても長からぬ命であることの、も一度貴孃のお琴が聞き度いことのと心細い事が綺麗な手で書いてある。ほんとに御氣の毒な方、せめて其御心を慰める爲めに、此の方の御好きな忘れ草を靜さんと二人で彈いて見やうと思ひ、竹に靜さんを呼びにやる、築山の躑躅が火の樣に燃えて何時も今時分になると何處ともなく芽の香がさまよふ、全くりが暮れ切つたに、靜さんが來て一緒に宇佐美樣へ返せ認める。

やがて二人は琴取り出して、

忘れ草がなあ……忘れ草が一本欲しや……植て育てゝ見て忘れよ……。

雨の日

阿波　若葉子

今朝は嫌にもやくする、髮をとかすと櫛に諮まつて大分拔けた、爪髮の少く成る程心細い感じのするものはない、此間から神經衰弱と云はれて居たが、今日の樣なお天氣には餘計にわるい樣だ。窓を明けて植込の方を見て居ると、先日男樹樣が菜地の雨は詩的だといはれたが、體のよくない時には鬱陶しくつて可厭だと思つた、合歡木にヒッキが宿つて居るのを見て居ると大粒の雨がパラく落ちて來た　お隣の琴は今日は遠くに聞える、雨の音を聞きながら來し方を追想すると、つくく現實の悲哀を感じる。もう半年の後にはいやでも一家を掌らればならぬ身となつて居るのに、今迄の我が境遇を考へてみると、自由なるべき處女時代を日陰の草同樣に過して來たのが如何にも殘り惜しい、あゝ、もう半年、思ひの儘に振舞つて見たいが、其れも出來ぬか、噫。

一番の樂み

三　笠　花

日曜日。ふきぶり。外出が出來ぬので二階に上つて、學校時代の行李を開けて見た。「存がするく藏暇の音がいよく以て先生らしい」。是は確かに野崎さんの筆、自習時間にこつそりやりとりした手紙。「義政公がお手水の水……」なんて說明者の口眞似まで寫したのは、京阪旅行の日記。「木津川が其裾を洗つて流れる樣子何とたとへたら……百聞一見にしかず、ほんとにですれ、」是は笠置遠足の話を土曜會にした原稿だ。それから其れといろく、な物を擴げて見た。唱歌が出れば歌ひ、雜記が出れば讀む、そして私は學校に居る樣な氣持になる、ほんとうに之を開けるのが私に取つては一番の樂しみである。

病床日記(寄宿舍にて)

大　和　操　子

今朝は頭がずんく、する背中は汗びつしより、二三時間缺課する事にきめて、隅の方に蒲團を敷せる。皆さんは樂しさうに笑つたり話つたり

してゐる、其が私には癪に障つて堪らない、後間に成つて眼をつぶつた。あゝ家に居たら大騒ぎして呉ることだらうと思つた。お大事にと言つて骨教室に行つて了つた。セコンドの刻が胸をさすのみで、何處を見ても趣味のない窓や壁許り、一輪差し花がお不在である。あゝまだ九時、一時間が一日の樣に長い。頭を擡げて見るが矢張痛む、窓掛の隙から日影が差込んで來る。お父樣やお母樣は私がこんなにしてゐるのを、御存じあるまい。と思ふと故郷戀しくて、何時か熱い涙が頰を傳はつて居た。

園藝日記

小石川　てい子

四日くもり。伯父上に教はりながら菊の株分けをする。何とやら言つた鮮の影い白いのを四五本、生垣の隙からお隣へ進げた。お禮は八重山吹の枝もたわゝに咲き亂れたのを澤山下すつた。千代ちやんが欲しさうに木戸に立つてゐた。序に草を摘る。午後、鮮に燃ゆる躑躅を折つて花瓶に挿す。それから靜子と唱歌を歌ふ。厨にて肉を煮る香が家内に漂ふ。

出産後の一日

大阪　山田芳枝

お歸りッ……の聲が玄關で消えるか消えぬに、早や洋服姿の夫は私の室へ這入つていらしつた、「お歸りあそばせ」、「ム、……坊は何うした」、「こゝに居ります」、「オヽ坊か〳〵、お父さんだョ、見えるか、貴樣は赤い顔だ、丸で赤蛙の樣だの」、「マアあんな事を……あの今日お姑樣が見えまして、月なんてハイカラな名だ、併し近頃はハイカラが流行るからそれも宜からうて仰有いました」、「ハヽヽお母さんも近頃は大分開けて來なすつた、ぢやアいよ〳〵明日は命名式の擧行か、ドレ飯を喰つて來よう、坊や待つておいで……」とさも可愛さうに髭のお口でキッスをして出て行かれた。私は直ぐ側に寢さしてある赤ン坊にお前はいゝお父さんを持つて幸福だネと言つて、心からの笑を禁じ得なかつた。

養蠶日記

阿波　居城忠子

「千代さん給桑ですよ」と伯母樣のお聲に、床から飛び出したものゝ、目は仲々開かぬ、夢中で、紐締め、室を出しなに、柱で、ゴツン、「いやだよ此人はまあ、まだ眠つてるの」と笑はれたけれども、私隨分痛かつたわ。八時の給桑に擴入して、十一時に除沙、寒暖計は、七十度、雨蛙が頻りに鳴く、降らないうちに桑を摘んで置かうと畑へ行く。聖徳太子は「蠶を思ふ事我子の如くせよ」と仰せられたとか、風につけ雨につけ、寒暖、陽氣の加減毛の先程もあるかないかの虫が雪のやうな美くしい繭に成るまでの心配は一通りでない、「其靜着物に成ると何とも思はずに着るのね、」と伯母樣は仰有る。「だつて私、其樂しみがなけりやあんな眠いのに起きられませんわ。」こんな事を話しながら五貫目程摘んだ午後小糠雨がふり出した。



書簡文

落膽せる弟へ

京都　京　子

今朝社會に於ける迷子よりとの郵書を受取り暫し思案にくれ候、フト岡山との消印に心づき扨ては御許よりのと合點致候、同時に略〻其内容を推察しつゝ讀みもて行き候へば、果して其通り、實に〳〵殘念に存じ候、本人なる御許の心中さぞかしと充分お察し申候、併し落膽はさる事乍ら存外に膽玉の小さきには驚き申候、春秋に富める身を以て此世を悲觀したる言葉の數々、社會の迷子よりなどゝは、餘りに意氣地が無さ過ぎる言草には候はずや。一度二度の失敗は致方もなしと諦めて、此上は、尙一層黽勉努力して最後の成功を期する　程の覺悟こそあらまほしく存候、御老體なる父母上樣に對しては御氣の毒に候へ共、私よりよしなに取計ひ可申候間、今一度奮發して初志を貫く樣に吳々も願上候(一等)

いらつしやいな

駿河　丘　靜　子

いらつしやいな三保へ。貴女が淸水波止場からこの東間の崎へ渡られる時、私は二人前のお辨當を持つて、お迎ひに出てゐます。參島、菜種島の間を、左手に富士を仰ぎつゝ暫し行くと旣う三穗神社。この邊一面桃が今眞盛りです。それから花に飽いた脚を羽衣へ運ぶのですが。此の間僅に四五町です。其處は又格別で、前者の艷麗に比べて雄大とでも云ひませうか、まア何も申さずに貴女のお眼に訴へませう。廣い〳〵大洋に洗はれて來る春風を浴びて、天女ならねど松の根方に腰打掛けてお辨當を使ひませう。歸りには桃の枝をお土產にするのも宜しう御座います。兎に角一度いらつしやい！。次の日曜が好うござんすわ。待ちぼけさしちや厭ですよ。(二等)

同窓の友に

東京　若　紫

百合樣、お尋れの事まるつきりのウソですわ、未だ私中々人の妻などになれるんぢやありませんのよ。單衣の片袖に半日掛つたつて兄に冷やかされたり、崖の上に登つて櫻ん坊を取つて從兄におどかされたり、學校時代以上の御轉婆に成つて了ひました。昨日もれ！　お笑ひになつちやいけませんよ、裏の畑で豆の葉(蠶豆)を一生懸命に口でふくらまして居ましたの丸くふくれるのが面白くつて夢中になつて居ましたら、後で「コラ何しとる、大きなくせに」と兄の聲。ヘツと驚いたはづみに肥料(油かす)の桶の中に片足落して泣くにも泣かれず大弱り。おどかした兄も吃驚して夢中になつて井戸端に連れて行つてれ、水をザア〳〵かけるのですもの、いくら暖い日でも震え上つて了ひましたわ、其で何言ふかと思へば「母アさんには無言つて居るんだよ」ですつてッで到頭昨日は半日着物干す爲に畑で日向ぼつこして了ひました。隨分滑稽でせう。ホ

ホ……、この次の同級會は何日?、幹事は花子様と濱様れ、御馳走を何卒澤山に。(三等)

轉宅後友の許へ

大阪　芳　枝

今移つた家は、天王寺停留所から二丁足らずですから、是非近いうちに、巨ちやんをお伴れあそばして、御いで下さい。何分主人が自分で撰した家ですから、某挨へ以來の自慢は申すに及ばず、日記の一節にさへも斯うなんです、「夕陽丘!、濱華名所の夕陽丘!、何たる優しい、床しい名であらう、我れは本日を卜して居を此所に構つた。若夫れ丘の上に立ち、落日淡路島山の彼方に沈み、殘紅茅渟の浦濱に臙すの景を望んだ時、誰か其美觀を三嘆せざるものぞ、大阪全市千屋萬瓦の上を掩ひ、人の生命を縮めるてふ煤烟も、此時ばかりは薄靄の立罩めると眺められて、一入の風趣を添へる、快……」隨分でせう、でも是れだけ満足して居れば飛覺めも暴くあるまいと思ひます、丘の櫻の散らない間に是非一度れ、御來車の、時日お知らせ下さらば停車場までお出迎致します、何彼は入らしつた上でのことに……かしこ(秀逸)

東都の兄へ

宮城　高　屋　ちよき

マア復たお宿換え遊ばしたの、驚きましたれ、是で五度目れ、最初の所は婆様の念佛の聲が五月蝿いとて逃げ出し、次のは妙におかみの親切なのが怖しいとて飛び出し、三度目は給仕に出る下女の御面相が拙いので、食欲まで減つたとて某些へた遊ばしたんでしたつけれ。そして四度目のは……宿の娘の横目つかふが癪に障る故表記の處へ轉宿いたし候。オホヽヽア・なかしい、眞面目で而も應爪らしく、報告してよこしなさるだけ、餘計をかしくて堪らない。併し今度のお家はお氣に召したやうですれ。御卒業にも間のないことですから、今度は落付き遊ばせよ。母様よりも呉々さうお言付でございます。(秀逸)

命名の報知

美作　田　鶴　子

雅姉様は其後ますく、お肥立ちよく、赤ン坊も愈々健全に成長致して居ますから、何うぞ御安心下さいませ。

昨日のお七夜は幸ひ日曜日で御座いましたから、兄様も朝からり在宅で御座いましたの。

虚れし子は我が家の礎なれば何卒よき名をと、あれかこれかと協議の結果、終に「未來の英雄たれよ」と兄様のお好みにて其の字をその儘に「ヒデヲ」と命名致しましたの。

英坊がお宮詣りは來る五月廿七日海軍の大捷紀念日を選びましたの、又改めて御案内もいたしますけれども、其日には伯母様必ずくお越し下さいまして、英雄が漆黒の髮、色白の寛かな顔、何うぞ澤山賞めてやつて下さいませ。先づは。(秀逸)

姉様へ

妹　よ　り

姉様お變りもなくつて?、うちでは父様母様皆元氣ですよ。姿姉様に

逢ひたくつて會ひたくつて、毎晩姉様の夢ばかり見るの。だけど姉様はもう丸髷の奥様に成つたんだから、今迄の様に唱歌うたつたり、遊戯したりして遊べないんですれ、藤は立派な學士の奥様になつて仕合者だつて、父様はいつも仰有いますの。だけど矢田部の兄様はピカ〳〵する金縁目鏡をかけてカイゼル髯をひねり、いつも眞面目な顔していらつしやるんですもの、妾何だか怖いやうですわ。うちの兄様もれ近頃では髮を長くして、チックをつけ出したの、兄様も矢田部の義兄様の眞似をなさるんですれ、今日は日曜で兄様は朝から釣りに、母様はさつき吉田の伯母様の所へゆかれたの、妾一人で淋しいわ、姉様がおいでだと二人お喋しするんですけどれえ。あゝ姉様は今頃何していらつしやるでせう、當てゝ見ませうか、お裁縫？お料理？此二つに極つて居ますわ。

はがき便り

松山　野の花

第一信　兄様私想像して見たの、建仁寺の垣根の卯の花がはら〳〵と散つて、青い空につゝ立つた五重塔の頭に白い雲が一寸かゝつた日を、南向のあの窓によつて、机に積み重れたノートを前に卒業證書を眺めて、につこりなすつた其御顔を。

第二信　今朝婆やがいゝもの持つて來てよ、兄様お好きな物、わかつて？、新やのお嫁さんが拵へたんだつて、婆やがいつか拵らへたのよりか、もつと〳〵おいしくつてよ、兄様御口から何か流れやしなくつて、ホヽヽヽお萩よ。

第三信　城山の天主閣に消えた夕日の名殘で、一しきりパツと赫らした西あかりを背に受けて、鬢の亂れ毛もかきあげず、濃い萱染の手拭をくつきりと白い頸にかけて、チリン〳〵と鈴音優しき馬の後から並木の下路をそろ〳〵歩いて來るのは新屋のお嫁様―、なか〳〵の別嬪よ。

寫眞に添へて

東京　眞琴女

追々夏めいて來たわれ。墨堤の景色が面白くなつてよ。兄は毎日ボートレースの練習に出掛けますの、天晴れチヤンピオン氣取りが可笑しいわ、一度も勝つた事もない癖に。それに近頃は寫眞で夢中よ。これも兄が撮つたの。『ホラ首が傾いてる　――もつと口を結んで――視線を正しく――』なんて、學校の體操より六ケ敷いわ。それで結果はいつも畫間出る幽靈の樣、オホヽヽ決して百點ぢやないのよ。マア御笑覽下さい。

山奥より

岩代　岡美都子

四郎さんいろ〳〵御心配有難う、當地に參つてからは日増しに力付き、めつきり心地やうなりましたから安心して頂戴。當地の閑靜な事は無類です。どちらを向いても山、又山。今は躑躅や藤の花盛りで、非常に美事でございます。そして聞えるのは鳥の聲と草刈り女の、里歌位です、深山なので種々珍らしい植物の多いにつれ、蟲類にもゾツトする樣なのが多く、殊に大きな蛞や蛙が澤山居るには閉口します。山の頂上からは、白河や郡山の町が見え、猪苗代湖も鏡の樣に見えるさうです。運動を盛んに仕て餘り勉强に凝らないで頂戴れ、日誌は毎日つけゐでせう、サイネリヤは盛りでせう、ダリヤに霜かれ、マルのお產はまだですか、

けを仕ましたか、も少しの間ですから、確かり手入をやつて下さいよ、後輩に珍らしいお話を、どつさり申上ます。さやうなら

再び南國より

福岡　川崎やよひ

五年振りに相見ゆる故郷！と云ふ喜びに、病の不幸も泣かずに歸りました。併し私には矢張泣くべき故郷でした。家屋を守る一人の兄は五人の子の重荷に何うやら斯うやら堪へて居るのが寧ろ不思議な位、呑氣に過ごした學校時代の我身の周圍は華やかな望に輝きましたが今日の吾が家を背景とするに及んで、我が身邊には唯だ涙あるのみと知りました。矢張り親なうしては生き難き浮世と見えます。茂るが儘に任せた持山も大方拓かれて、何とか云ふ丈高き木が行儀よく植ゑ付けられ、その合間々々からは白堊の建物がチラ〳〵と見えて、今はもう名も知らぬ人手に渡つて居るのです。兄は地租を納むる厄介を遁れたと申しましたが、苦しき笑は口のあたりに漂ふて居ました。南海の柔い風、只是許りが舊來の私に對するせめてもの慰めです。

都會の女より

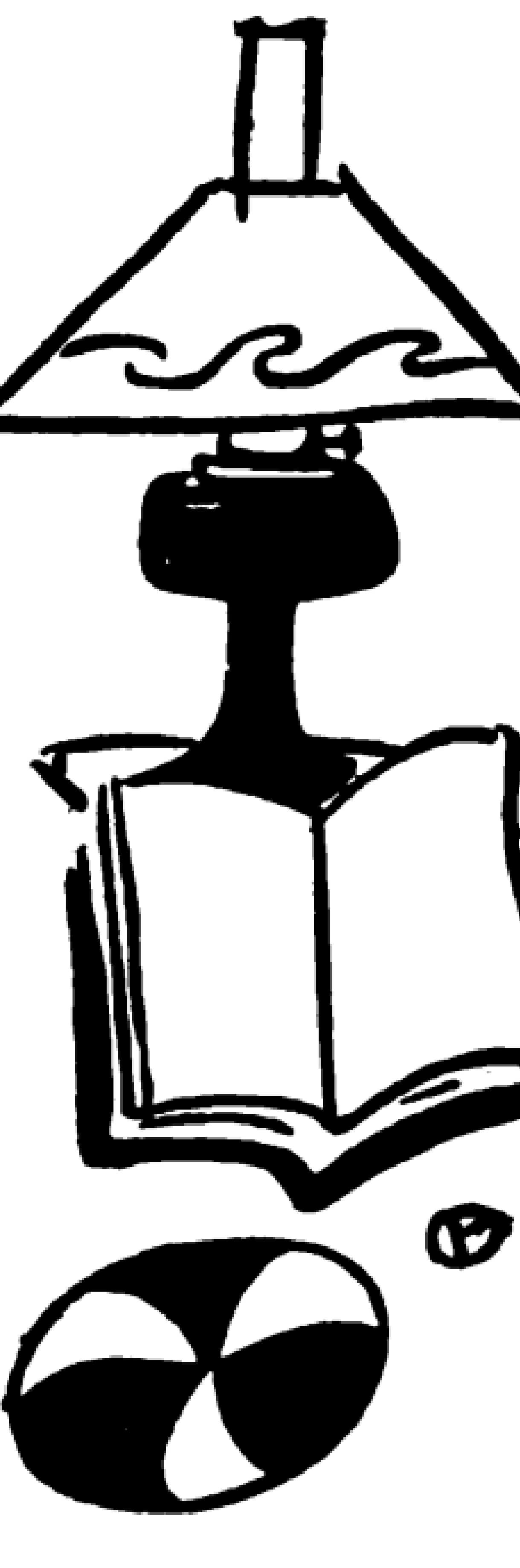
幸子

卯の花の里よりのお便り嬉しく拜見致しました。私の病氣は相變らずですの、快かつたりわるかつたりで、何うも仕様がございません。田舎へ來いとのお勸め難有う、山の姿水の色、慣れないでもありませんけれども、私のやうなものは迚も田舎では暮せませんの、肉體上には適當でせうけれど、精神上には餘りに單調だと思ひます。私は絶えず刺戟を受けてゐなければ生きてゐられないのです。やつぱり都會の劇しい渦中に在つて、折々は、涙のにじむやうな物思ひに耽つてゐたうございます。私のやうなものは終にはどうなるでせう？。また、お手紙頂戴ね。

出産祝の文

京都　黄菊女

只今電報が着きました、姉様お芽出度う。男でしたつてね、私どうしませう、父様や母様は大悅びだけれど、一生懸命にこさへた着物や、涎垂掛が皆赤いのですもの、この間も元祿袖のを縫つてゐたら兄様が「止せ、何時迄も馬鹿らしい、マイ、ドル、イズ、シックでもあるまいし」ですつて、オホヽヽヽ、ほんとに何うしませう、だけれど、赤ちやんですもの、赤くてもいゝわね、すぐ送りますよ、後生だから着せて、あげて頂戴な。私夏休みになつたら、すぐお守りに參りますよ、それ迄にお寫眞がとれましたら下さいませ、待つて居ります、どうぞお大事になさいまし、さやうなら、





天　麹町　紫涙女

君去りて我が肩細し初袷

地　京都　加藤重代

牡丹咲て寮の女は歌日記

人　長崎　今村美佐子

朧を押せば底摺る石や夏の月

秀逸

滋賀　野崎愛子

螢飛んで軒の風鈴一つ鳴り

三重　静女

時鳥木曾路の宿の箱枕

大阪　花里

馬追て來るは我背か夕がすみ

下野　香蘭女史

樋の上に夏は來にけり蝿二つ

山口　松根静枝

氣に入らぬ髪結直す日永哉

雨にして蛙聞く夜を杜鵑　奈良　向上喜代子

撫でゝ讀む石墓の文字や苔の花　淺草　くちなし

魚町もかげろひそめぬ櫻鯛　神戸　井代涙子

此里を水鷄のたゝく夜明哉　麹町　牧野はん子

蛇穴を出て苅菰と世は亂ろ　釜山　朱雀とも子

卯の花の庭に風呂あり夕月夜　千葉　日暮文子

卯の花の初音待ろゝほとゝぎす　牛込　酒井輝子

絶壁に燃ゆる躑躅の千株かな　三河　はろ子

花の旅嵯峨野に君を訪ねけり　大阪　愛子

短夜や潮鳴を聞く島の宿　堺　村田千代子

先陣の駒いなゝくや時鳥　新宿　原山時子

鮎あらふ小川に光る螢哉　備後　松下巻子

仰向て花の香を聞く盲目哉　佐賀　大河内かま

花を賣る女は若かし女郎花　近江　河崎種子

螢火や試みに見る字治拾遺　岐阜　加納圖子

螢び落つる峰遠峰遠や青嵐　三重　まる子

干す夜具に蝶々眠る旅館かな　美濃　酒井登美子

立てかけし琴のそら音や春の宵　長野　北川睦子

椿落ちて波にゆるゝやあひる池　丹波　細見文子

鯉跳ねて藤三尺の雫哉　伊勢　三浦さと子

春の夜を筆に親しむ朧月　石川　河岸柳子

藤波の縁に微笑む茶屋をんな　志摩　こと子

目刺焼いて母と二人の夕食かな　芝　百合子

堤二里絵のやうにして蛙なく　大阪　西澤かつ子

牡丹さく緑に姫まつ朱のふとん　後志　千鳩みゆき

彩雲の膜だるき下や百千鳥　淡路　正井よしゑ

行春をまどに寄りたる狂女かな　大阪　長岡ちゆう

霞の峰里未だ見えず岸衣　麻布　都地喜代子

五月雨や奈良に一夜の歌日記　新橋　春江

蛙なく田面の水のにごりかな　東京　飯田愛子

ま草喰む馬よにじるなすみれ草　大阪　まさる子

五月雨の晴れて聞ゆる蝉の聲　三重　清水政子

梅子の咲きみつ庭の夕日かな　靜田　八木原市子

逝く春の館は鳥羽殿伏見殿　三島　遠山雪子

蚊の聲の耳ざはりたる夜學哉　靜田　市女

星澄むや松杉暴きかすが道　奈良　美穂子

山吹の闇にさめたる夕日哉　靜田　八木原市女

行く春を思ひ句にかく女かな　佐渡　美穂子

闇に居て闇に友呼ぶ螢かな　長野　丸山ふさじ

寫されて居るとも知らず野の女　肥後　須磨子

朝月に茶の木原行く杜鵑　滋賀　尾土しのぶ

ざく／＼と草刈る人や五月雨　志摩　大西千代子

東雲に舞とぼしき鵜川哉　長崎　牛島英子

卯の花の門を出でくる男かな　靜田　いち子

鼻唄で米磨ぐ下女や花菖蒲　愛知　三浦ぎん子

蚊遣火や女天下の瘦世帯　尾張　三浦しの子

名門の流れを汲むや桐の花　宇都宮　稲原廣子

飼猿の物ほしげなる日永哉　伊豫　近藤留代

大腹の毛臑の僧の晝寝かな　長崎　吉川知郁

日は斜古廟の松に蝉の聲　大坂　前川千鶴子

江村の家皆秀づ柳かな　兵庫　安田つや

出所を問ふや市場の初茄子　根室　植草さか

夜は更けて螢飛びかふ山の湖　熊本　佐伯智代子

傘さして鶏呼ぶ人や五月雨るゝ　宇都宮　皆川濟子

白ばらの香のみする月夜かな　下谷　杉山淑子

藤咲くや用無き寺を通りぬけ　丹波　山田松枝

雲消えてちりやく畑の日暮かな　後志　かほる

一人娘が墓石のそばに百合一つ　美作　喜ぬ子

結ばれて輪形にかゝる柳かな　信州　吉池英子

草に寝てうつゝ心や蝶長閑　青山　やす子

古寺に櫻問ひ來る旅僧かな　韓國　相原葉子

ひた／＼と柳をくゞる小舟かな　長崎　近藤せい

苗代や行儀正しき足のあと　淡路　原いの

衣更て寫眞屋へゆく夫婦かな　大阪　山本幸

夏痩も氣にする親の情かな　相州　藤村糸野

魚眠る蛇目が池や五月雨るゝ　十勝　沖島英代子

涼しさや砂に横臥く濱館　長崎　田中得子

笑話

○賢こい兄

山形　田中露子

兄、勉強して居る弟へ「一寸伊藤さんにこの手紙をもつていつて下さい」、弟「いやです、今地理を暗記してるんですもの」、兄「さうか、それではそれを兄さんが暗記してやらう」、弟「それぢや」といつて出て行きました(秀逸)

○母親の苦笑

久留米　藤吉とみ子

子「お母ちやん、鼻の高いのはいゝの」、母「あいゝとも」、子「脊の高いのもいゝの」、母「あいゝとも」、子「何んでも高いのがいゝわネ」、母「あゝ何んでも高いがいゝよ」、子「お母さんは額が高くてほんとにいゝわ」(秀逸)

○米國の奇術師

大阪　山本ゆき

甲「米國の奇術師は豆腐の上で角力を取るとさ」乙「それは當り前さ、日本人などは酒の上で喧嘩をするぢやないか」(秀逸)

○母親の閉口

埼玉　櫻子

母「お前、親の命令を背くものぢやないよ、彼の蛙を御覧、あれは親の命令を背いたから天道様の罰が當つて眼が背中に附いたのだよ」娘「お母さん、それぢや蛙の親の眼の背中に附いて居るのは何うしたんですか」、

○客と友達

仙臺　秋涛棠

玄關に人の氣配、誰方かしらと思ふ折柄、「御免下さい」、「ハイ」と答へて走り出づれば、日頃兄様と極く仲よしの宮下さん、「あら、御客様と思ふたらホヽヽ」と笑へば、「や、これは驚いた、僕は御客様でなくて何んですかアハヽヽ」

○撒かれては大變

八王子　包子

母「埃がほこりになるからあばれるのではありませんよ」、子「ナニ好いよ、僕あとで水をまいとくから」、

○坊の外人觀察

筑後　つる子

坊「母さん、西洋人は轟いれ、乞丐でも洋服を着て居るから」

○彗星と地球の衝突

大阪　幸田てる

花子「今度地球と、ハレー彗星と衝突するんですつてれ」、夏子「さうですつてれ」、花子「そしたら貴女どうなさるおつもり」、夏子「ザナ秋空中飛行機に乗つて逃げるわ」、

○輕いおしろい

美作　きぬ子

花ちやんがお友達から、おしろいには鉛の入つてゐるのがあるから買ふときに注意しなさいと聞いて居たので、或日小間物屋へ行つて「あの一輕いおしろいを下さい」、

○これでも困る

美作　松岡きぬ子

母「花や、よい年をしてゐて何だれ、ちつとは身だしなみを成さいよ」、娘「どうでもよござんすよ、一身をさゝげて文學者となつて名を上げるつもりだから」、

○八方ふさがり

四谷　あい子

ある老人何ぞといへばすぐ方位のことを八ケましくいひなりしに、ある時あやまつて、どぶの中へ落つ、老人「何方より上ればよいか急いで方位を見てくれ」、家内の者「今は生憎八方ふさがりです」、

○結婚談判

四宮　高塚たね子

男「英子さん、貴女私の家に嫁て下さいませんか、私の家は何一つ不足は在りませんよ」、英子「それならなぜ妾が入用です」

讀者倶樂部

▲五月號の正岡子規氏の令妹りつ子様の御話しを承つて、そゞろ御同情の念に堪へませぬ、永年兄君の御病氣の御看護遊ばして、今又雄々しくも獨立で老いませる母君を慰め玉ふ其の行爲の立派さ、御親類もおあり遊ばすに母君を養ひ給ふとの事、私は師として仰がればならぬと思ひました。

病める子規氏の半身像の下に靜かに語り玉ふ面かげ、目の當り御目にかゝる様です、御話の御臨終に至る時不覺涙にむせびました、御辭世の「糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな」などの御話しは、子規言行錄などで讀みましたが、此度りつ子様の御話しを承かつて、今更懷しうございました、私は先生のあの半身の御寫眞をいつもかざつて果物や草花を御供へいたして居るのでございます、「おとゝひの糸瓜の水も取らざりき、」「痰斗糸瓜の水もまにあはず」、など終生忘れぬのでございます、終に母君りつ子様の御健康をいのります。(伊勢の濱萩)

▲米國加州羅府滯在一農夫君に答ふ――御注告の件有難く存候三千里濤を隔てし御地の事不敏なる記者往々其の眞相を誤り傳ふる事有之は深く謝する次第に候(記者)

▲備中眞子様の前號寄韻文(一等)ほと〱感じました、何て優しいお方でせう、病み給ふ弟御様は御幸福ね、充分御養生遊ばして、早く〱お母様や御姉様に御安心をさせ遊ばせよ、私事は斯うして可愛がつて頂く姉様もなければ、又いたはる弟妹もありませんの、一人り身は淋しう御座います、何卒皆様誌上の御交際なされ、よろづ御導き下さいましね。(本郷、霽生)

▲誌上の姉様、内藤千代子様の事について、申しませう、私の親友が鵠沼になりますのネ、その人に聞くと、千代子さまは、ほんとに〱女性で、廿歳より以下なんですつて、お母様にお盡しの爲に學校にも行かず、そして文章ばかり書いてゐらつしやるんですネつて、どんな方でせう。(大阪、姫百合)

▲晩春の夜は靜かに更けて、汽笛の遠音すら何となく物淋しき折から、私は獨り文机によつて日頃お慕ひ申してをります萩香内藤千代子様のことを思ひ浮べました、私は心から萩香様の御文才に感じてをります、或る方は萩香様を男子の方だと云はれ、また或る方はもう御年召した方が昔の夢をくり返して御出になるのだと申されます、然し藝術の上に老幼男女の違ひはありません、例へ男子の方でも、御年召した方でも、私の崇拜の念は變りません、どうぞこの後とも盛に又御名文を御出し下さいまし。(横笛)

▲本欄のお陰様で、御交換を得ました朝顔種は、見事に發芽致し、手長性や變物には、相當の出物も、現はれまして、嬉くて〱なりません、厚く御禮申上ます、皆様もどうぞ園藝の模様を、お聞かせ下さいませ、未熟ながら私は、花粉の人工媒介も行ひます、今秋には一層盛んに種子の交換を、お願ひ致します。(信州三留野驛、青木恒子)

▲前號に箱根湖畔の家庭生活として御出しになりました石内富枝子様、私あんな御作大すきですの、お腹をよらして拜見いたしました、そしてあのやうな御兄様御持ち遊ばしたのがほんとうに羨しう存じます。(美濃、夏子)

▲四月號のスヰートホームは思ひに違はず萩香の君に候ひし、其筆致の輕妙にして文章の豐富なる、何んとも學び難き天才ぞかし、さればものゝ半頁も讀みゆかば、たとへ變名を用ひ給ふとも萩香の君、千代子さまの作と何處なりともなく私語の聞ゆ、由來まろき家庭に鍋のくつがへるは何かの暗示にや、野菊様の御留守中、稿さんとやらは味噌汁を、今またきよどのは汁粉鍋を、もし火傷なし給ふともそはスヰートの飛汁なれば、腹だてるなどは以ての外、よくあや

かり寵を給へ、さるにても幸福なる新婚の御二方、大隈伯ならねど百二十五歳の後までもいやが上に榮へませよ(アカバ)。

▲相州葉山一色今園八重野樣、誠に不束者ですが此後お交際をれがひます、私しばらく一色に居りましたので、何となくおなつかしう存じます、又繪葉書はどんなのをお好みですか、一寸お知らせ下さい、私の所は東京青山穩田四林光榮

▲奈良の都のすみ子樣よ、先日は御丁重なる御葉書下さいまして有がたう御禮申上ます、私こそ申上樣もない不束者でございますが何卒行末長く御見捨なく御導き下さいませ、御地西紀寺町の春日見山正覺寺にゐらつしやいます齋伯大雅堂先生及び先生の御一族には一方ならぬ御厚意をかけて居ります故時折には先生の許へ參ります、おさしつかへなくば何卒御所お洩し下さいませぜひ一度親しく御目にかゝりたう存じます。(京都、跡谷都子)

▲山口縣の紫山樣、私はパールは用ひません、束髪にはチエリーオイルを用ひますが、さらさらして氣持がよろしう御座いますよ、日本髪には東京の日本橋柳屋で實揃く煉香を用ひて居りますが、大層よろしう御座いますよ。(山形、よし子)

▲皆樣、私は内藤千代子樣の御樣子よく存じて居ります、私も御同樣にいつも〳〵御才筆には感じいつて居ります、處が皆樣の内には彼の方のことを男子の方だとかまた三十以上の方だとか想像なさる方をお見うけ致しますが、實際お年は十八つぼみの花、その上ハイカラ風なごく、しとやかにやさしい令孃で入らつしやいます、一寸申せばおぐしも高島田にあげてうつむきかげんの、花ならば白ゆりとでも申しませうか、うたぐる方はおうらめしう存じます。(府下代々木、山谷宗子)

▲都下の女學校を花に例へて見ませうか、學習院女子部のお品のいゝハイカラな處は、匂ゆかしい白ばられえ虎の門の念入りのおつくりは濃艶な牡丹にくらべませう、御茶の水の華やかなられどおかしがたい處あるは紫苑でせうか、女子大學は日廻りのやうれ、跡見は十九世紀式なれど、優しくてお袴の色を見てもゆかりの藤でせう、府立一、二、三の目立れど實あるは白桃のやう、女子商業は實用向の栗の花、渡邊女學校は栗の花、ホヽヽ皆樣何れを採りませう、春の草秋の草。(本郷、彌生)

▲牛込の平塚白百合樣、毎號貴雜誌にて御作を拜見致し、誠にお懷かしう存じて居ります、私は四月の初に上京致しまして、只今親族内よりヴアイオリンの先生の許へ通つてをります、不束者ですけれど何卒御交際御願ひ申上ます、又御住處くはしく御知らせ下さいませ。(牛込白ばら)

▲滴るやうな若葉の木立、日影は強くともまだ暑いといふ程でもございませぬ、こんな所で緑の香を吸ひながら、親しいお友達とスケッチブックを披く時の心地よさ、妾はこんな片田舍に生れたのを何よりの幸福と思つて居ます、數萬の愛讀者諸姉樣の中には、定めし同じ趣味の方もございませう、どうか御自筆の繪葉交換を願ひます。(大阪府三島郡三島村、石田愛子)

▲北見の信田英子樣、どうぞあなたの御住所を此欄でお敎へ下さい、私御手紙を差上げたいのですから。(北海道札幌、加藤雪子)

▲おなつかしき誌友の諸姉樣、私都合によりまして下記の本宅の方に移りましたから、この後はどうぞこの方へ御手紙下さいませ、大阪の島田の御姉上樣に、辻内御姉上樣、どうか御近状御知せ下さいませ。(京都市両替町三條上ル、跡谷都子)

▲皆樣、私も内藤千代子樣をウオーシップする一人で御座います、私のクラスの方も千代子樣の御名前が女學世界に見えませんと大失望で、見る氣になれぬと仰られますのよ　皆樣の御評によると、千代子樣は鵠沼の一旅館の娘さんで、

其お従兄樣が大學の文科二年になるのですつて、其方が毎月女學世界に出る文の作者なのですつて、文科の方は秀才として其名高く、さうして眉目秀麗の好男子ですと伺ひました、此事は何でも事實らしい御座います、私ね、元祿姉さんのときもずゐぶんさわぎました、ほんとに女學世界投書の方には不思議な方がおゝいのね。(牛込にて千鶴子)

▲岐阜ときわ樣、ようこそ御しらせ下さいました、來月をたのしんで居ります、實は私お友達と内藤千代子樣の事で爭つて居りますのよ、お友達はいつも、あれだけの才筆でお寫眞を御出しにならないはづはない、記者樣だつてだまつてゐらつしやるはずはない、だから男の方よ、さもなくば御年の召した女の方だと仰やるの、私はどうしても若い方だ、も少し家が近くなら毎日さがして歩くわと申しますと、あつてびつくりおひげのはへた千代子樣よと御冷かしになりますのよ、ですから來月をたのしみにしてまつてゐます、ほんとに一日もはやく伺ひたいわ。(京都にてなゝしぐさ)

▲本鄕のすみれ樣、何かは知りませんが、是非私に知らして下さい、御姓名と御處だけでも、私の名は此處へは申されませんが、大阪南區上本町七丁目有安靜子樣宛にてよこして下さい、願みます。(白井とし子)

▲私は神戸で松蔭女學校に通つて居ましたが、去年病氣のため一旦やめて、再び親和女學校に通つたもので御座いますが、此度都合で渡韓致しましたが、別に樂しみとても御座いませんので、本年二月から本誌の愛讀者になりました、どうぞ不束のもので御座いますが姉樣方の御仲間に入れて下さいませ。(感興にて桃の川)

▲私は本誌を永く愛讀して居りますが、近頃趣味の多くなつたことは誠によろこばしい事です、全く記者樣の御力と諸孃達の御熱心との結果だらうと思ひます、今後も皆さん振つて御投稿遊ばせ、終りに記者樣の御健全を祝し合せて女學世界の益々榮えんことを祈る。(磐城愛讀者)

▲諸姉樣、朝顔の播種は五月から七月上旬頃迄が最も好期です、若し其種子が御入用でしたら、女學世界の如き好き雑誌か、繪はがき(五枚以上)御送り下さい、妾より朝顔種子百種交りを送ります(大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豐子)

▲えゝ、私第二を出ましたのよ、すゞ子樣ってどなたでしたつけかしら、私忘れてしまつても しや荒木さんぢやなくつて、よろしかつたら次號に御姓名おあかし下さいな、先達の同窓會にゐらしやらなかつたのね、同じクラスの方はたつた六人しかお出がないんですもの、それに知つてゐる先生は一人もゐらしやらなくて、ずゐ分つまりませんでしたわ、秋には是非ゐらしやいませんか。(四谷、戸田道子)

▲千草樣有難う、誠に過去は夢ですのね、でも私のは悲しい〳〵夢でしたわ、噫…、もう申しますまい、前途に光明をみとめよと優さしい君のお言の葉、忘れませんわ、千草樣眞實にあり難う、でも私弱いのね、靜かに黄昏る夕なんか堪へられませんわ、自然に涙が頬を傳ふて、：否、止しませう、忍耐、勇氣、…こんなに勵まして下さるんですのに…(萩子)

▲内藤萩香樣のスヰートホームほんとに面白うございましたね、讀んでゐるうちに私が其場へいつたやうな心地がしますの、千代子樣の丸髷姿がありありと目の前にうかびましてよ、あれ實際御自分の事でせうか、私うたがはれてなりませんわ、夜來の雨…、文章のお上手なこと、感服の外ございません、私何度も讀みましたわ、マダム振りにお書きになつたのは石内萬枝樣のお宅のやうですね、楊柳美人…、皆文章のおうまい事、羨やましいわ。(淡路、千鳥子)

▲東京の上村すみれ樣御手紙有がたう、御返事出す筈ですが、御所書を失くしてしまひました

の、どうぞ悪からず。(高崎、春枝)

▲金澤市上松原町の愛讀者様、早々御送附下され、厚く御禮申上候、御蔭様にて嬉しく拜見致し候、就ては御返送致し度、且參からず候へ共當地繪葉書がき四五葉差上度候間、御差支御座なく候へば何卒御姓名御報らせ下され度御願ひ申上候。(尾道寧)

▲病める妾をお書きになつた翠葉様、同情致します、もう此頃は少しよろしいですか、お大切になさいませ、そして圓滿な家庭の人となられん事を祈ります、私昨年和歌の浦へまゐりました時、冨澤様で宿つた事もございます、片男波のあたりにもよく行きました、あなたが散歩してゐらつしやるのが見えるやうです、折角御攝養あそばせ。(千鳥子)

▲下關の野菊子様、私も下關に住んで居るものです、五月の本欄であなたの御名を見まして、何だかおなつかしう思ひます、どうぞ當地にいらしたのを御縁に御交を願ひます、私は下關の東部ですが、あなたはどちらの方でございますか。(下關市、こほろぎ)

▲只管都の空に憧れて妾は一昨々日初めて都人の一員となりましたが、人多き都ながら、今は沙漠の中を一人迴る様な氣がして、無限の孤獨と寂寞を感じます、只だ古郷で友として居りました「女學世界」のみは一層親しく思はれお顔も知らぬ誌上でのみ知る諸姉が懷しく思はれます。(麻布にて糸井まつ子)

▲在米國ST様・HK様、はる〳〵お珍らしき花種のかづ〳〵御惠送下さいまして、厚く〳〵御禮申上げます、草花をいぢつて居りますと胸の悶えは何もかも忘れてしまひますのネ、何とか此の御厚意に報ひ度う存じて居ります。(大阪府下草深き田舍にて月下香)

▲諸友諸姉方、皆お目が高くつてれネ、四月號の「スヰトホーム」は萩香様だつてよくおわかりになつてれ、感心してしまつたわ、私などは一寸とも氣がつきませんですたよ、それにしても内藤千代子様は何たる文章の大家でゐらつしやるでせう、羨しいれ、三分の一でも似してみたいわ。(北海道札幌ホワイトローズ)

▲妾は懷しき古郷を去つて三年の其間今日まで絶えず辛き運命に飜弄されて來ました、忘れもやらぬ一昨年の事、妾には唯だ一人の妹は眼病の膝の身となり、遂に雙眼の明を奪はれました、昨年は又た慈愛深き母なる人は重き病の床に臥され、服藥も其の効なく、遂に黄泉の客となられました、今年は我が身に廻る小車、未來の良人は、……諸姉よ、あゝ又病で死にました「美人薄命」と云ふ、妾は薄命の意味に於て美人かと存じます、……遣る瀬なき心の悶えを誰に訴へん方もなく、茲に倶樂部の余白を藉りて諸姉に訴へます。(芝區白金三光町十五浦久保しげ)

▲内藤千代子様、私は昨年の五月に親友から貴女の御作が中々よく御出來だと聞いて、其から非常に貴女の御作を崇拜しかけたのです、殊にマガム振りに出てゐた「思ひ出多き幽嶺の湖畔」といふ御作には實に〳〵ふるい付き度い程でしたよ、願はくば毎月貴女の御作を拜讀したいものです、此私等の愛讀する女學世界に貴女の如き文士を得たのは實に幸です、記者様に申上げます、いつも倶樂部に内藤千代子様の寫眞を誌上で拜見したいと愛讀者の御望みですのに、何故誌上にのせられないのですか。(萩香女史崇拜女姫路殘月)

▲十卷一號にちぬの浦にて美鈴女様が御交際遊ばしたいとこの欄に御座いましたが、恰度私が愛讀者の内に交際して居る方が少ないので之こそ幸とさつそく住所をお知せ申しませうと存じましたが、あいにく試驗でしたものですからつい今日迄出さずに居りました、私の住所は北海道札幌區南六條西七丁目角十二番地でございますから、どうぞ御文下さい私も差上ますから。(北海道札幌加藤花子)

▲永住町の定千様、先日は御言葉を有がたう、

おなつかしうござい升ワ、私の實家も淺草にありますの、永住所にも親類がござい升、何うぞ御交際を願みます、無教育な者ですが、も一度貴女の御所を詳しく御きかせ下さいませんか。（大阪、白梅）

▲石川百合子樣、米國のセンテシノ市に居らしつやる女學生さんの御住所を直接に下名の所までお知らせ下さいましな、お願ひいたします、御所姉樣方、スタンプ付の繪葉書の交換を願ひます（大阪府北河内郡二島村大字三ツ島、中野末摘花）

▲あちらでも內藤さん、こちらでも內藤さんと、千代子さんで持切の樣ですね、全く今の世の中にあの位の事を書ける方がなければ、女子教育なんてやかましく言つた甲斐がありません、水仙女史さんも中々の御才筆ですね、私貴女を崇拜してゐるのよ、以後どし／＼とお書き遊ばせ（北の端にて落葉）

▲皆樣、繪葉書や寫眞の交換を願ひます、それから私は「コブシ」、「魔風戀風」、「乳兄弟」、「青春」、「嫁ヶ淵」等の小說を持つて居ますが、皆さんの「多情多恨」、「觀音岩」、「寄生木」等と交換して下さいませんか。（伊勢鈴鹿郡加太村一ツ家、伊室治子）

▲諸姉樣、妾は病氣の爲めに此地に轉地して淋しき日を送りつゝある憫なる者ですが、何卒繪葉書の御交換を御願ひ申ます、又御文通なりとも（相州葉山一色、竹澤翠子）

▲私宅に化學的食養雜誌叢數部ございます、もしお望みの方がおありなら誌上で住所氏名おあかし下さい、何號でも御送りいたします。（深川、久子）

▲四月號に「北海道の山里」と云ふのを御出しになつた龍子さん、私も昨年の六月移住したものですが、貴女はどちらにいらつしやるの、全くあの記事の通りですね、記者樣「今樣枕の草紙」と云ふのは未だあとがあるのですか、どうぞ御かゝげ下さい。（駿東富士の麓にて富子）

▲皆樣は何をおなぐさみして御暮らしでございますか、私は琴は幼少な時から習つてますので、少しは彈ずる事が出來ます、それで大阪か神戸か或は其邊の御方樣で琴や三味線でも合奏して遊ばふと云ふ樣なお望みをもつていらつしやる御方樣はございませぬか、もしございましたら次號で御處と御名前とを御知らせ下さいまし、すぐ私共參上致しますから。（攝津、ばら子）

▲皆樣、案の定スイトホームは內藤樣でしたのね、隨分素敵な物お出しになるぢや有りませんか、もうどこでもどこでも內藤樣のお噂で持切り、然し私此方のお書きになる事はお机の前の御空想ぢやないかと存じますわ　其からね地方の諸姉樣方、以後御交際願ひます。（東京、白はぎ子）

▲我が最愛なる女學世界はます／＼振つて來ましたのね、此れも記者樣のおかげと嬉しく存じます、內藤千代子樣の御作「スヰトホーム」などほんとうに御上手ねえ、とう／＼千代子樣も令夫人になりましたのね、マダム振りが拜見致したいわ、それから築地のたつ子樣、のぶ子樣如何遊ばして、私だれだかあてゝ御覽遊ばせ、（芝原の中よりすみれ）

▲四月一日の本欄に昨年發行の嫁に行く人を御持ちの方は御惠み下さいませんか、御禮には他の婦人雜誌か、みにくいけれど私の寫眞を差上げ升、神奈川足柄上郡川村向原岩田小春とありましたから、早速御送附致したが、一葉の御受取書も參りません。（小樽、千代子）

▲一寸と記者樣初め愛讀者諸姉に御注意申します、先月の本誌に私が交際を望むと出しましたので、一枚の繪ハガキが參りましたの、私は愛讀遊ばす人は女の方とばかり思つてゐましたらね、どうでせう、男の方でしたのよ、私腹が立つて泣きましたのよ、注意遊ばせ、名はね、川又郁としてありました。（韓國釜山西町一丁目具谷揚親子）

▲中京の片ほとりの賤が伏屋にまづしきわざをとり、皆樣方に御言葉交はすも勿體なく、筆取る事も文書くわざも知らぬはしたない童女ですが、何卒御見捨てなく御教導して下さいまし。(尾張、繁子)

▲諸姉樣、よい氣候になりました、私も本誌愛讀者になりましたから、不束者でございますが、御交際を願ひます。(大阪、操子)

▲皆さん、讀者倶樂部の御盛んですことネ、實に御うらやましいワ、はたで指をくはへて見てゐるのもあまりつまらないワネ。ほんとうに氣がきかないワ、私も是れから御仲間に入れて頂戴な、私はつい先頃迄少女世界の愛どく者でしたが、この一月より本誌に移りましたよ、水戸の保科ゆう子樣、平の石川節子樣、奈良の今中多香子樣、茨城の平岡高子樣よ、御消息ございませんのネ、如何遊ばして。(磐城小高町在金谷門馬絹枝)

▲皆樣、私は小學本業したばかりの何も知らない不束な者ですが、誌上でよろしく御交際を、ほんとに女學世界はいつも〳〵面白く拜見してよ、それにかうしてたのしく遠くのお方と言葉を交されますのも、此女學世界があればこそれ、ほんとに私の唯一の友よ。(大和、中西清子)

▲諸姉樣方、ほんとうに可愛想ですわ、田舍に住つてゐるものは流行の髮結び方もしらないのですもの、後生ですからこの田舍少女にローマの結ひ方敎へて下さいませ。(南紀、一少女)

▲鵠沼の千代子姉樣、前號のスヰトホームふるつてゐるわれ、私お姉樣に會ひたいわ、二三十分で鵠沼まで行かれるんですもの、千代子樣どんなにおうつくしい方でせう、私每日々々想像してをりますのよ。(大磯、みどり)

▲五月號は誠にたのしく拜見いたしました、中にも內藤千代子樣、石內富枝子樣の作が殊に面白う御座いました、それから誠に申上かねますが、愛知縣か福岡縣の御方で、共進會の繪はがき御惠み下さいませんか、私已が郵十二枚づゝきのを御禮としてさし上ます。(秋田縣雄勝郡横手町、押切えい子)

▲岐阜のときわ樣、貴女內藤さんを御存じの御樣子れ、そんなに少しづゝ女學世界に出さないでどふせおつしやるんならみんな出して下さいな、さうなら蘇香さんが如何なる方かわかりませう、どうぞおつしやつて下さいな、上原あや子樣、あなたの御文がよろしいのれ、私あんなのが好きよ、それから石內富枝さんのもいやみがなくつて私大好き、澤山だして下さいれ、桃割式部さん、どんなにしてゐらつしやるの、御作が見えませんのれ、四月號で拜見しましたが萩子さまはお氣の毒れ、御同情いたしましてよけれど〳〵決して御失望なさいますなよ、愛の神さまは御見捨てになりません、あなたはクリスト教が御きらひか、又御存じないかしりませんが、どふぞ悲觀なさらず、神に御たより下さい、身を神にさゝげ、御心のまに〳〵すゝむならうれひはありません。(兵庫、白百合女)

▲佐世保つゆ子樣、貴孃の御說は御尤では御座いますが、でも內藤樣は全く女の方よ、しかも妙齡の處女で入らしやるの、記者樣の仰せの通りですよ、水いろかゝつたお召物にお包みをお持ち遊ばしての御仕事通ひ、お丈の高いすらりとした御姿、ツンとすましてお通り遊ばすのをお見受け申した事もあります、御文中評判の鵠沼美人京子樣は、本名をおりゆうちやんと申し、全く御うつくしい方、千代子樣の無二の友で入來つしやいます、

▲讀友諸君の中に文筆に堪能し、兼て交際に趣味を持てる方にて婦人記者として活動せんと望まるゝ方あらば、面談の上月々相當の報酬にて御雇申したいとおもひますから、御希望の方は女學世界部S、Mまで御照會下さい、

▲梅本軒子の君、藤田いさをの君、唯今の御住所を御知らせ下さい、いさをの君は以前小日向とありましたけれど、其後は鄉里に御歸りの樣子現住所をどうぞ至急——記者

新刊紹介

△補參唐詩選講話　清國　何鑄淳著

その聲調の美なる點に於て古今第一と稱し、その人口に膾炙せる點に於て尤も馴染の深きは唐詩選なり、本書は即ち唐詩選中の七言絶句幷に七言律の全部を訓解しこれに講義を加へ、參考として邦人の韓詩幷に和歌を挿入して對照に便にしたる用意頗る行屆きたるものなり、春高樓の宴、秋戰塲の愁、山に、海にも、旅にも、つれ〳〵にも一本を携へて友とせば、吟咏以て我が心を洗ふに足るべし　定價六十錢　中橋梁江堂

△實習新作文　五十嵐力著

從來の作文軌範は概れ或る形式に囚はれたる嫌ありて自然陳腐の感を免かれざるに本書は聊この陳套を破り作文の上に廣き天地のあるを示したるがごとし、書翰文、記事文、論文と三段に別けて例を示したる處はや、舊式の樣なれど、引例として供せし文は皆近時の新手にして蘆花、直文、子規、紅葉、樗牛、逍遙、抱月、愛山、鷗外等の諸家の文也、これに加へし著者の說明も又新らしく、解剖の仕方も又別機軸を出す、著者は早稻田の文科に作文の講師として令名ある人價一圓七十錢早稻田大學校

△少女スケッチ　沼田笠峰著

春の花園に咲く花のいろ〳〵に譬へられたる乙女の氣質は、優美にして氣高く、且つ可憐にして又なよやかなるあり、樣々の特色もてる、少女のスタイル、感情の波は愛らしくして且つ奪きものなり、この愛らしく尊き少女の感情を、同情ある如き著者の麗筆もて描き出したる三十六篇のスケツチは花さま〳〵の姿を現じて讀者の前に踊り舞ふなり、誠に感情敎育の上にこの上なき良書といふべし定價三十五錢博文館

△近作十五篇　田山花袋著

現時の文壇に尤も大なる威力を持てる花袋氏の近作十五篇集めて一卷に裝釘せり、拳銃以下十五篇は概れその量に於ては一呼吸の短篇に過ぎずといへども其質に於ては悉くこれ徹底せる人生の眞意義にして素朴飾らず露骨にして潤色少き文字の中に大なる或者を見出し人をして恐れ且つ懷かしむるものあるは即ち本作者が現時の文界に雄視する所以なるべし價七十五錢博文館

△兒童を謳へる文學　高島平三郎著　竹久夢二畫

兒童の感情を美はしく養ひ、子供趣味をうるはしく發達せしむるを目的として子供に關する和歌、俳句、川柳、俚諺、童謠等を集めこれにおもしろき插畫を加へて文と畫と相對照し其間に自然の智識を習得せしむるやうにつくりたるは近頃珍らしき思付なり價一圓洛陽堂

△婦人の新修養　三津木春影譯

原著者は米國で著名の閨秀作家で、社會敎育家として婦人問題に力を注ぐ人、其の內容は頗る廣く、女子の權利と舊習慣との衝突、慈善運動、新時代の家庭經濟法、その他結婚の用意、良人待遇法、美貌交際の術等を網羅せり、價五拾錢實業之日本社

△夢二畫集　夏の卷

春の卷は情趣の單調なのと、印刷の粗惡なのとで大分破したけれど今度のは情趣も大分復雜した筆意のものを集められたのは大によし、何といつても歡樂に醉ふてる若い男女の胸を躍らせる畫だ、見たまへあの狂熱的に鋭く輝いてる眼こんな畫を畫くものは今の畫界に一人もない天下獨歩といつてよい價五十錢麴町洛陽堂

△奧羽北海道草鞋日記　伊藤銀月著

汽車汽船の便ある今の世の中に草鞋を穿いて六十餘州を旅する物奇は一見甚だ愚なるがごときも實は決して然らざるなり、汽車旅行に日數をいそぎ名所古跡は只申譯の參詣、これでは旅行の趣味といふもの、さつぱりなくして旅はいよ〳〵無味乾燥のものとなり了らん銀月氏の草鞋旅行この單調を破つて俗人社會に一昧の風流を與ふ偉なりといふべし價五十錢中橋梁江堂

△箏曲秋風曲　鈴木鼓村著

天保の頃、京の光崎檢校が、高向山人の長恨歌の和譯を料として末代に貽るべき大曲を作らんと思ひ立ち、神の冥護を得んとて竹生島の社に參籠する事百夜、滿願の夜假夢の間に天女の妙なる奏樂を聽き以つて「秋風の曲」を大成せりといふ、本書は其れに著者が譜を附したるものにして、斯界に於ける近來の好著なり、價五拾錢、日本橋今古堂

△才媛と逸話　梶山彬著

古今東西の婦人百有餘人の奇行逸話を集めたるものなり、讀み來れば、時に睡魔を驅るを得べく、或は抱腹絶倒すべく、又まゝ襟を正さしむるものあり、要するに女畸人傳とも云ふべきものゝ雜然と並べられたる記事の內より寶玉を拾ひ上げて自ら資するは讀む其人の力によるべし、價四拾錢、日本橋明文館

才媛文壇懸賞募集（六月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以內）
▲日　記（二十字詰十五行以內）
▲書簡文（二十字詰十五行以內）
▲いろ〳〵の經驗（十五行以內）
▲和　歌（一人一首）
▲俳　句（一人一句）
▲笑話　▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、いろ〳〵の經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、笑話、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞壹圓五拾錢、地賞壹圓、人賞五拾錢
△和歌△俳句△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢
△いろ〳〵の經驗（賞壹圓以下）

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册
　 增刊四回：一、五、九、十一月價格同一

郵稅　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●綫目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年五月廿六日印刷納本　第拾卷第八號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番
電話番號　三百三番　千十八番

毎卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎卷洋裝菊判美本——紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入　正價毎編參拾五錢　郵稅六錢宛

（第一編）**一般救急法**　醫學博士　三輪德寬君述　全一冊

（第二編）**衛生學大意**　醫學博士　森林太郎君述　全一冊

（第三編）**藥物の大要**　醫學博士　林　春雄君述　全一冊

（第四編）**姙產婦之心得**　醫學博士　緒方正清君述　全一冊

（第五編）**花柳病講話**　醫學博士　筒井八百珠君述　全一冊

（第六編）**耳の衛生**　醫學士　賀古鶴所君述　全一冊

醫學博士　井上善次郎君述

●總論　●腸窒扶斯●赤痢●亞細亞虎列剌●發疹窒扶斯●痲疹●猩紅熱●痘瘡●丹毒●流行性感冒●百日咳●實扶垤里亞●麻拉里亞●破傷風●急性關節僂麻質斯●癩病●「ペスト」●狂犬病

（第七編）**傳染病大意**　正價三十五錢　郵稅六錢

醫學博士　佐藤勤也君述

本書は斯病に精通せらる佐藤醫學博士が婦人一切の諸病を平易に講話せられたるものなり　惟ふに婦人の性質として斯病に罹るも之を口にするを恥ぢ　益々重態に陷るものあり實に痛歎に堪へざる所とす蓋し婦人の健否は甚だ重大なる問題たるを以て常に斯くの如き講話を熟讀し　病理に通じ病源を絶つは唯に婦人一身の幸福のみに止まらざるなり

（第八編）**婦人病講話**　正價三十五錢　郵稅六錢

醫學士　桂　秀馬君述

●身體の一部分の充血及貧血●血塞及栓塞●出血●出血の所置●炎症●么黴生體　●炎症の經過及轉歸●膿傷●消炎法●壞疽●身體の損傷●損傷の所置　●創傷傳染法●動物毒病●切創又打創●刺創●挫傷及挫創●銃創●火傷凍傷並に腐蝕●電傷●骨折●關節の皮下損傷

（第九編）**外科講話**　正價三十五錢　郵稅六錢

★　發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館　★

女（後付の一）

女(後付の二)

女（後付の三）

幼年畫報 第五卷第八號 増刊

六月十五日發行

コイ〳〵緋鯉

石版極彩色十六頁
活版二色刷十六頁
光澤寫眞版：四頁

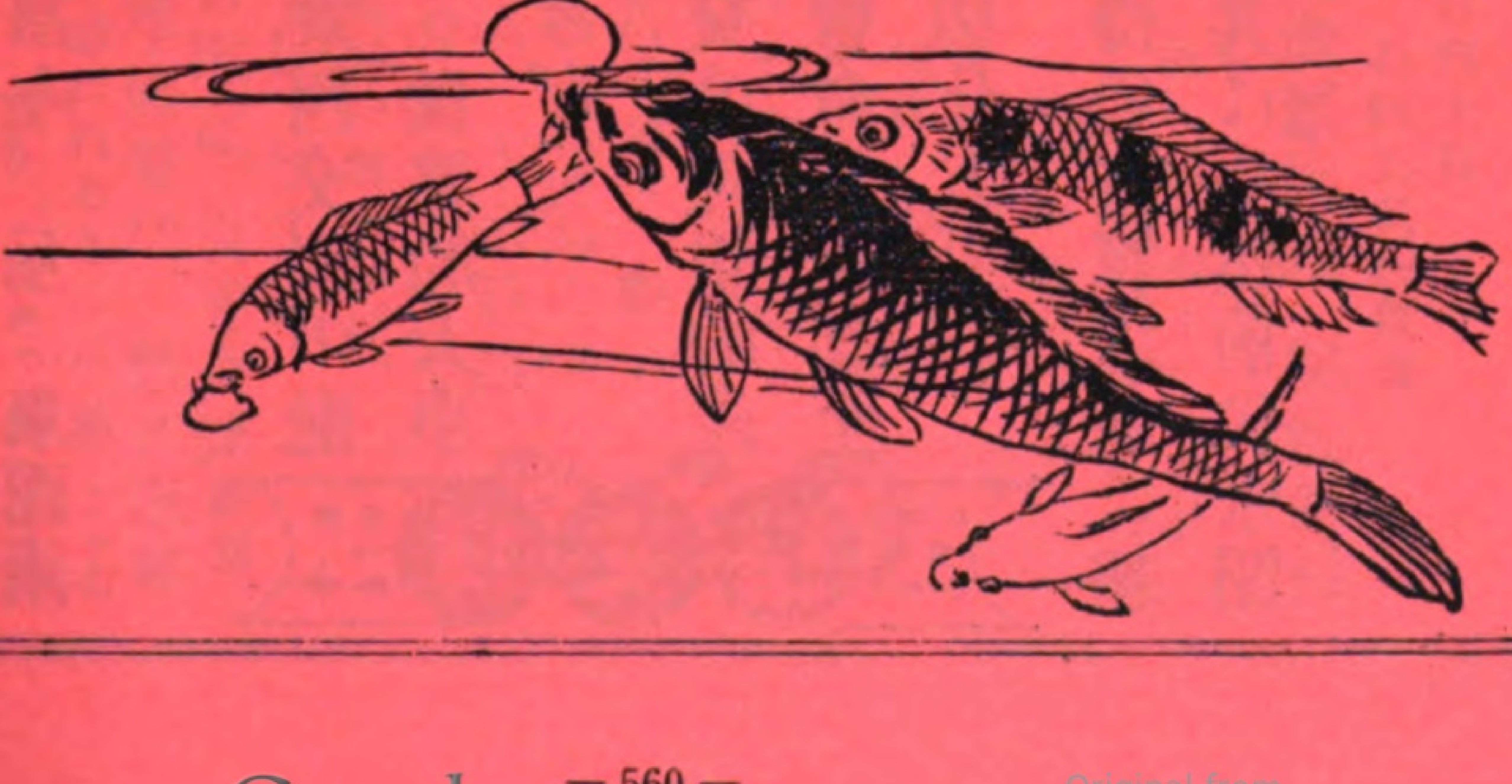
正價拾錢
郵稅五厘

菊判美麗畫本

東京本町 博文館



コイ〳〵緋鯉・緋鯉は赤くて美しい、眞鯉は黒くて見つともない。コイ〳〵緋鯉、お池の緋鯉、眞鯉は來るな、緋鯉は來い。ポンポとたゝく、お手々の音に、緋鯉は麩を食へ、眞鯉は食うな。眞鯉が來るなら、石をやろ、石にぶたれて痛けりや來るな。來た〳〵緋鯉・なせ麩を食はぬ、石が怖いか眞鯉がいやか。眞鯉がいやなら追つてやろ。けれど緋鯉は見向きもせずに、眞鯉を誘つてお池の底え　かくれたまゝで姿を見せぬ。ハテなぜだらう〳〵。



女（後付の四）



數學世界 第四卷第八號 增刊

三角形作圖題の分類と作圖

洋裝菊判紙數
約百三十頁
寫眞版木版入

正價拾五錢
郵稅(本誌に限り)三錢
七月一日發行

幾何學は作圖題があつて初て趣味あるものとなる。處で其の作圖題を研究しやうとするには、先づ三角形の作圖から始めねばならぬ。三角形の作圖法を究めないで置いて總ての作圖題を解かうとするものがあれば、それは加減乘除を知らないで、四則應用の答を出さうとするものと一般で、其の愚や到底お話にならぬ。されば三角形作圖題は、幾何學作圖題全體の鍵とも云ふべきものである。鍵を巧に使ふには其の鍵の形や性質に由つて之を分類して置かねばなるまい。

是に於て我が數學世界は、此の臨時增刊を企てたのであつて世に有觸れたるものでない。必らず諸君の要求するものであらうと思ふ。否、必らず要求せねばならぬ處の書である。爰に廣告して學生諸君にお知らせする。

東京本町
博文館
振替口座東京二四〇番

文學士大町桂月君序
醉夢 西村眞次君著（大好評第廿一版發賣）

作文良材 美辭寶典

全壹冊
洋裝袖珍
正價卅五錢
郵税六錢

思想中に充實するも、文章拙劣にして之れを外に發展すること能はざる者あり而して文章を巧にせんと欲せば美麗なる字句を求めざるべからず、本書は即ちその要求に應じて編纂されたる者、景色、人事、器具、動物、植物、等宇宙間の萬象に關する美辭佳句を集め、以て庬然たる一冊子をなす、殊に每編必ず項を美文、韻文の二部に分ち、詩歌と散文と何れの材料にも適するやう編輯せられたれば、世の青年文章に志ある者は速に一本を机上に備へ、以てその美辭秀句を獲得せらるべし。

作文良材 續美辭寶典

鹽井雨江先生序
西村醉夢先生著
洋裝袖珍 紙數五百餘頁
正價金四十錢郵税六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館 東京神田表神保町 東京堂 賣捌地各書店

（女 後付の七）

節漸く霖雨期に入らんとし、四邊の風物陰鬱を極め、人心また惰氣を生ぜんとするの時に方り、好個の覺醒劑を世に献するものは本誌なり、即ち六月號に於て之を見るを得べし、卷頭には廣津柳浪氏作『房子』を載す、これ文壇の老大家が心血を披瀝したる深刻小説なり、以て巨匠が苦心の空しからざるを見るべし、次に山田旭南氏譯『自殺』薄田斬雲氏作『濱の女』飯田旗軒氏作『死物語』を載す。各作家その特色を發揮せざるはなし。雜錄以下は例に依つて材料豐富なり見逃して悔を貽したまふ可からず。



第十六卷
第八號

文藝倶樂部

東京本町
博文館

六月一日發行

菊判本文三百廿頁
口繪精巧木版數十度刷錦繪
三色版寫眞版
婉麗花の如き者數枚
正價金貳拾五錢
郵稅二錢五厘

女學世界
（毎月一回廿六日印刷納本）
（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）
第拾卷第八號
（明治四十三年五月廿六日印刷納本）



（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㊆
明治43年5月（第10巻第7号）、6月（第10巻第8号）

2010年7月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3854-8　C3321